

## 第2節 遺構

### 1 竪穴住居跡（註1）（第45～47図、第6表、PL3）

竪穴住居跡は、弥生時代中期後半栗林式期の2軒のみで、いずれも基本土層Ⅲb層下部からⅣ層上面で検出している。調査途上でSB03とした竪穴状の遺構は、江戸時代後半から近代にかけての農地整備時の掘込みであることがわかったが、番号を付したまま扱った。また、溝跡（SD05）は竪穴住居跡の周溝の可能性もあるが、柱穴、炉跡等の施設がないことから、溝跡として報告した。

#### SB01（第45・46図、PL3）

位置：I S01・02・06・07グリッド 規模：長軸4.3m×短軸<3.6m> 平面形：円形

主軸方位：N 面積：14.3㎡

検出：表土、およびⅢb層掘削中、ほぼ東西南北の方位に合う十字形の平成22年度中野市教育委員会による範囲確認調査トレンチを検出。その周囲で、ほぼ円形のプランを確認したことから、市教委が途中で調査した竪穴住居跡と判断した。西壁および北側の一部分はトレンチにより破壊され、南東側は範囲確認調査時に床面まで調査されている。Pit1は途中の深さまで、Pit2（炉跡）は南半分がほぼ底面まで掘削されていた。住居の埋土が完全に残存するのは、東西トレンチの北壁際と南側のPit8付近のわずかな部分であった。トレンチ断面で、住居跡の床面および掘方まで観察できた。北側の埋土残存部分は、断面を目安に掘り上げたが固くしまった貼床は明瞭ではなかった。床面を精査しPit2～8を検出した。重複のあるPit8はPit5の掘直しと考えられる。また中野市のトレンチではPit9が検出されている。

重複関係：住居跡北壁がSK319を壊す形で重複する。

構造：西側の壁面は失われているが、南北方向で計測すると径約430cmのほぼ円形となる。壁高は、最深25cmを測る。ほぼ中央に炉跡を持ち、Pit1～Pit9のうち主柱穴はPit1、3、9の3本と考えられる。もう1本は中野市のトレンチで消失した可能性もあり、本来は4本の主柱穴と考えたい。主柱穴は径23～28cmで、深さ42、45、66cmを測る。そのほかの小柱穴は、棟持柱的なもの（Pit4）、補助的な柱となるものであろう。Pit2は、86×78cmの不整円形で深さ20cmを測る炉跡である。北側の壁面が橙色に変色しやや硬化していたが、そのほかの壁面は地山土（Ⅳ層）であり、被熱痕跡はない。東西の壁際には径16cm、深さ5、6cmの小穴がともなう。炉の補助的な柱の痕跡であろうか。埋土は、3層に分層でき、南側壁際のみブロック状に地山を混入する崩落土（2層）がある。貼床と推定した土は、炉の南側、主柱穴間が最も固くなっていた。床下の掘方は、中央部分はほぼ平坦であったが、南側、北側の壁際付近が周溝状に凹み状況であった。

出土遺物：調査済みの部分が多く、出土遺物が集中する状況ではなかった。図化できたものは、南西の地区から出土したものがほとんどで、ほかに第46図に示した遺物が出土している。壺、甕等、栗林1式の様相を示す土器のほか、土製円板、石鏃3点、石鏃未成品等の石器が出土した。剥片類も安山岩の石材を中心に、使用痕跡の残る剥片14点の出土がある。また、炉跡の東側、Pit5・8の周辺に、炭化材が少量まとまって床面やや上より出土。AMS法によるC14年代測定したところPit5北東側の炭化材3（H24分析No.1）、Pit2-2の炭化材（H24分析No.2）は、それぞれ2,210±30yrBP、2,290±30yrBPの測定結果で、弥生時代中期後半栗林式前半期に矛盾しない数値が得られた。

時期：弥生時代中期後半栗林式期を推定。

所見：栗林1式土器が遺物の主体をなし、当該期の間に廃絶した住居であろう。剥片の出土も多く、石器

製作が周辺で行なわれていた可能性も示唆できる。北西5mに長方形の竪穴住居跡(SB02)が存在し、それぞれの住居埋没土の炭化物をC14年代測定した結果、SB01がSB02より古いという値が得られたが、出土遺物の時期に大きな差はない。

### SB02 (第47図、PL3)

**位置:** I N21, I S01 グリッド **規模:** 長軸 3.05m × 短軸 2.58m **平面形:** 長方形

**主軸方位:** N79° E **面積:** 6.0㎡

**検出:** 表土、および皿層除去中に、土器の集中と一辺2～3mほどの方形プランを確認した。東側は削平により壁面は残存せず、床面が直接露出しており、埋土は西側半分が残るのみであった。ただし、東側の壁周溝を検出することはできた。中央部から南壁にかけて炭化物、土器の集中があった。土器、炭化物を取上げ、床面を精査して炉跡、Pit1～3を検出した。貼床を掘下げる途中、西壁際にPit4を検出した。**重複関係:** 他遺構との重複はない。

**構造:** 東側半分の壁面は失われているが、壁周溝を目印に計測すると主軸の東西方向305cm、単軸の南北方向258cmの長方形となる。中央に炉を持ち、Pit1～4のうちで主柱穴はPit2、4の2本と考えられる。Pit2が径18～20cm、深さ42cm、Pit4が径22cm、深さ48cmを測り、直径20cmに近い柱を深く打ち込み、棟持柱として屋根を支えたものであろうか。Pit1は径30～31cm、深さ14cm、Pit3は55×36cm、深さ10cmの楕円形を呈し、断面形もすり鉢状となることから、柱穴ではなく貯蔵穴的な施設の可能性も考えられる。炉跡は中央に位置し、35×33cm、深さ5cmのほぼ円形で、浅いすり鉢状の断面形を呈する。焼土の残存はほとんどないが、床面とは違いやや黒ずんで固くしまっている。北壁、南壁中央から東側にかけては、周溝がみられる。幅28～7cmで、深さは床面から最深8cmを測るが平均4cmほどの深さである。埋土中に、炭化材、焼土が集中する箇所があり廃棄行為の痕跡である可能性が高い。掘方が深く、床下には掘方土が厚く堆積していた。

**出土遺物:** 炭化材とともに、床面近くから粟林式土器がまとまって出土した。主な遺物は、Pit3埋土を中心に出土した壺(6)、甕の大形破片(7)、大形の片口鉢(8)である。さらに、西側埋土中より刃器(14)、敲石(17)などが出土した。また、炭化材が床面直上さらにはPit2内より出土した。そのうちの2点を選びAMS法によるC14年代測定したところ、炭化物集中の炭2(第47図中のC2)(H24分析No.3)、Pit4の炭化物1(同図中のPit4-C1)(H24分析No.4)は、両者とも $2,250 \pm 30$ yrBPの測定結果が算出された。炭化物集中状況図・遺物出土状況図は、それぞれ断面図へ見通し投影図を作成した。

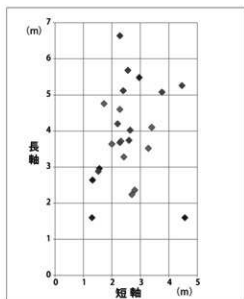
**時期:** 弥生時代中期後半粟林式期を推定。

**所見:** 本住居跡の南東5mに位置する円形の竪穴住居跡(SB01)と比較すると、小形で平面形が異なる。前述したように、C14年代測定の結果はSB01がSB02より古いという値が得られ、併せて本跡からは粟林1式土器の中では、やや後出的な器種のひとつと考えられる赤彩された片口鉢(第47・81図8)の出土がある。ただし、そのほかの出土遺物の時期には大きな差はない。2軒がセットではほぼ同時期に存在したと考え、本跡はSB01とは性格が異なる作業小屋的な施設等の可能性が指摘できるのか。一方、本跡の南東側にあるSK342、343、南西側にあるSK337、338は、2本ずつセットで本跡に接する位置に存在し、住居の上屋構造に関連する柱穴になるかもしれない。

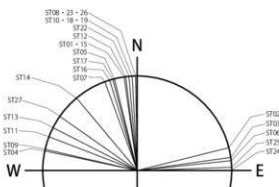
## 2 掘立柱建物跡 (第48～55図、第7表、PL4～7)

今回の調査区では、600基近い柱穴状の落ち込みがある。それらをひとつひとつ調査する過程で、形状や規模、埋土の種類、位置関係などから掘立柱建物跡を想定し調査した事例が25種ある。柱配置は、2間×1間(長軸×短軸)が9棟と最も多く、3間×1間が5棟と続く。短軸1間で平面形が長方形となる建物が7割を占める。その点とも関わり、長軸は3～6m、短軸は2～3mの長さの間に半数近くの建物跡が納まる(第42図)。長軸方向は、ほぼ北方向が5割を占め、それに直交する東西方向と北西方向が残り、それを2分する(第43図)。縄文時代もしくは弥生時代の掘立柱建物跡として報告される例に類似し、いずれかの時期に所属する事例もあると考えられるが、伴出遺物がほとんどなく、時期決定は困難であった。また建物跡として複数の配列が想定される場合もあり、本書では調査経過を重視し、A案やB案などと記述した。ただし整理の過程で、いずれか妥当性の高い配列の組み合わせを選択し、その結論を所見に記した。本節では結論づけられた案の配列を実線で表記し、選択しなかった建物跡の軸線を破線で示してある。

なお、全体図には決定した建物跡の軸線のみを表示し、検討の結果、建物跡ではないと判断し、個別に土坑として扱った遺構(ST20・21)もある。それらは本書中では欠番となる。



第42図 掘立柱建物跡の長軸と短軸の長さ



第43図 掘立柱建物跡の長軸方位

### ST01 (第48図、PL4)

位置: I V20・25 グリッド 規模: 5間(5.48m)×2間(2.96m) 平面形: 長方形

長軸方位: N8°W 面積: (16.2m<sup>2</sup>)

検出: 表土掘削後、IV層上面にて、黒色の落ち込みを複数確認する。平面形が円形状を呈することから柱穴を想定し、そのなかで掘立柱建物跡の軸線が定められそうな落ち込みにPit1～5、8、9、12を符号する。また、建物跡の内側および周囲に近接する落ち込みについても関連する柱穴を予想し、Pit6、7、10、11、13、14を符号し調査した。

重複関係: Pit9がSK01と重複し、断面の観察からSK01が新しいと考えられるが、両遺構からは遺物は出土せず時期は不明である。またSX03が軸線の内側にあるが、柱穴と直接重複しないため前後関係は不明である。

構造: 各柱穴の平面形は、Pit1、3、4、10、11は楕円形、Pit2、7、12は隅丸方形、Pit6、13、14は不整形円形、Pit5、8、9は不整形。断面形は、Pit1～6、8～12、14は皿状、Pit7は深さのあるタライ状、Pit13はお椀状である。柱間は長軸方向80～160cm、短軸方向140～170cm。

**出土遺物:** Pit7の埋土より、弥生時代中期後半粟林1式の壺胴部小破片(20)が出土。

**時期:** 不明。

**所見:** Pit3、6、13、14は、想定した建物の軸線から外れるが、本建物跡に関わる柱穴の可能性のあるものと判断し図示した。

### ST02 (第48図、PL4)

**位置:** I V24・25グリッド **規模:** 3間(4.2m)×2間(2.2m) **平面形:** 長方形

**長軸方位:** N76°E **面積:** 9.2㎡

**検出:** 表土掘削前後、IV層上面にて、黒色の落ち込みを複数確認する。平面形が円形状を呈することから柱穴を想定し、そのなかで掘立柱建物跡の軸線が定められそうな落ち込みに Pit1～11、15～19を符号する。想定した建物跡の軸線は、Pit8、19、18、1～7を組み合わせると考える3間×2間の建物跡をA案、Pit9～11、15～17、3～8、2、1、18、19を組み合わせると考える4間×3間(1面×1面)の廂付側柱建物跡をB案とした。

**重複関係:** 他遺構との重複はない。

**構造:** 各柱穴の平面形は、Pit2、19は円形、Pit6、8、11、15、18は楕円形、Pit1、4は隅丸方形、Pit5、16は不整形楕円形、Pit3、7、9、10は不整形、Pit17は不明。断面形は、Pit1、2、4、6、8～11はクライ状、Pit3はすり鉢状、Pit15、5、7～9、17～19は皿状、Pit16はお碗状である。柱間は、A案が長軸方向112～200cm、短軸方向100～140cm、B案が長軸方向92～200cm、短軸方向100～140cm。

**出土遺物:** なし。

**時期:** 不明。

**所見:** 柱穴の規模、配列の規格性を考えると、Pit9～11、15～17を軸線とするB案はやや妥当性に欠ける。ST01の柱間等の規格性を考慮すれば、Pit9～11、15～17を除く3間×2間の建物跡A案を採用すべきと考え、想定される軸線を図化し、第48図ST02とした。

### ST03 (第48図、PL4)

**位置:** I V18・19・23・24グリッド **規模:** 3間(5.12m)×1間(2.4m) **平面形:** 長方形

**長軸方位:** N82°E **面積:** 12.3㎡

**検出:** 地山礫層(V層)上面にて、黒色の落ち込みを確認する。配列や規模から建物跡を想定できる柱状の落ち込みをまとめ、軸線の定められそうな落ち込みに Pit1～4、6、7、11、14、16を符号してST03と仮称した。また、軸線に明瞭にのらないが建物跡に関連すると考えられる周辺の落ち込みに Pit5、8、9、12、13、18、19を符合し調査した。想定した建物跡の軸線は、Pit11、1～4、6、14、16、20を組み合わせると考える3間×1軒の建物跡をA案、Pit10、11、1～4、6、7、15、14、16、20を組み合わせると考える3間×2間(3間×1面)の廂付側柱建物跡をB案とした。

**重複関係:** 他遺構との重複はない。

**構造:** 各柱穴の平面形は、Pit10、11は円形、Pit1、2、5、12、16、19、20は楕円形、Pit3、6、14は隅丸方形、Pit4、8、9、13は隅丸長方形、Pit7、15、18は不整形。断面形は、やや深さのあるクライ状を呈する。Pit2、4は地山の礫層の礫をのけるように掘削され、礫に囲まれるように柱穴が穿たれている。Pit8、13、19には埋没土内に小礫が目立って混入していた。柱間は、A案が長軸方向140～240cm、短軸方向232～250cm、B案が長軸方向160～240cm、短軸方向160～250cm。

**出土遺物:** Pit15の埋土より粟林1式段階の壺胴部の小破片が出土。

**時期**：不明。

**所見**：柱穴の規模、埋土の違い、配列の規則性を考えると、Pit7、10、15を軸線とするB案はやや不自然な並びとなっており、本跡に含めない方が妥当と考えられる。さらに、Pit5、8、9、12、13、18、19は、想定した建物跡の軸線から外れるため本跡の柱穴にはならない可能性が高い。ST02の柱間等の規格性を考慮すれば3間×1間の建物跡A案を採用すべきと考え、想定される軸線を図面化し、第48図ST03とした。

#### ST04 (第49図、PL4)

**位置**：I V20・25グリッド **規模**：3間(5.26m)×2間(4.46m) **平面形**：長方形

**長軸方位**：N78°W **面積**：23.5㎡

**検出**：表土掘削後、IV層上面にて、黒色の落ち込みを複数確認する。落ち込みの配列から建物跡を想定し調査した。建物跡を想定する中で、ST01のPitと重複する位置に認められる柱穴が3基(ST01のPit1、3、4)あるが、ほぼ同一の位置に設けられた柱穴と考え、あえてどちらかのSTのみを残すことはしなかった。本跡で軸線の定められそうな落ち込みに、新たにPit1～4、7～10、11を符号し、ST01と重複する柱穴にはPit3を本跡のPit6、Pit4をPit7、Pit1をPit9に充てて調査を行なった。

**重複関係**：Pit4がSK33、Pit5がSK32と重複し、断面の観察から本跡の柱穴の方が新しいと考えられるが両遺構から遺物は出土せず、時期は不明である。またSX01(第30図)が軸線の内側に位置するが、柱穴と直接重複しないため前後関係は不明である。

**構造**：各柱穴の平面形は、Pit1、4は円形、Pit2、3、6、7、9、11は楕円形、Pit8、10は隅丸方形、Pit5は不整形。断面形は、Pit1～5、7はすり鉢状、Pit10、11はトラライ状、Pit6、8、9は皿状である。柱間は、長軸方向110～240cm、短軸方向200～240cm。

**出土遺物**：なし。

**時期**：不明。

**所見**：本跡とST01は、今回の調査で唯一重複が想定された建物跡である。柱穴の配列から判断すれば、本跡のほうが、ST01よりも規則性が高いとみられる。

#### ST05 (第49図、PL4)

**位置**：I V14・19グリッド **規模**：2間(3.52m)×2間(3.28m) **平面形**：長方形

**長軸方位**：N14°W **面積**：11.5㎡

**検出**：表土掘削後、IV層上面にて、黒色の落ち込みを複数確認する。落ち込みの配列から建物跡を想定しST05と仮称し調査を行なった。軸線の定められそうな落ち込みにPit1～6、8、9を符号する。建物跡内側にあるSK80は、関連する柱穴と予想して調査したが、本建物跡の柱穴にはならない可能性が高い。

**重複関係**：他遺構との重複はない。

**構造**：各柱穴の平面形は、Pit8は円形、Pit3～6、9は楕円形、Pit2は隅丸方形、Pit1は隅丸長方形。断面形は、Pit1、6、9は深さのあるトラライ状、Pit3、4、5は皿状、Pit2、8はすり鉢状である。柱穴の多くは非常に浅いものが多く、柱間は長軸方向136～230cm、短軸方向100～260cm。長軸方向の柱間は、東側100cm、西側260cmと東側が少し狭く、片寄っている。

**出土遺物**：Pit9の埋土中より弥生土器の小片が2点出土。

**時期**：弥生時代中期の可能性が高いが、時期決定は難しい。

**所見**：短軸の東側にある柱間が狭くなっており、廂付の建物跡も想定される。柱の位置が東側および南側にずれていることから、北あるいは南の妻側、西あるいは東の平間に入口が設けられた建物であろうか。

**ST06** (第49図、PL4)

位置：I V13・14・18・19グリッド 規模：3間(5.08m)×2間(3.76m) 平面形：長方形

長軸方位：N84°E 面積：19.1㎡

**検出：**表土掘削後、IV層上面にて、黒色の落ち込みを複数確認する。落ち込みの配列から建物跡を想定しST06を仮称する。軸線の定められそうな落ち込みにPit1、4、5、6、8、9、10、11を符号する。想定した軸線に明瞭には載らないが、軸線の交点付近にあり柱穴の可能性のある落ち込みに、それぞれPit2、3、7、12、13を符号し調査した。

**重複関係：**Pit1がSK53と重複する。埋土の堆積状況から、本跡のPit1が新しいと思われる。

**構造：**各柱穴の平面形は、Pit3、11、13は円形、Pit1、5、7、10、12は楕円形、Pit2、4、8は隅丸方形、Pit9は隅丸長方形、Pit6不整形円形。断面形は、Pit2、3、4、6、7、10は浅いクライ状、Pit5、9は皿状、Pit11、12、13はすり鉢状、Pit1はお椀状である。Pit8はPit1の様に壁が垂直に立ち上がる形状だが、ほかの柱穴が深さ10cm前後であるのに対し50cmを測る円筒状である。柱間は、長軸方向150～190cm、短軸方向128～240cm。

**出土遺物：**なし。

**時期：**不明。

**所見：**本跡は、長軸方向に3間、短軸方向に2間の規模を持つ。長軸の柱間はほぼ等間隔であるが、短軸は240cmと128cmで北半分の方が長い。その点を考慮すると、本跡は、南側に廂のある3間×2間(3間×1面)の中世的な廂付側柱建物跡の可能性も高いと想定できるが、詳細は不明である。

**ST07** (第50図、PL4)

位置：I R01・06グリッド 規模：1間(2.88m)×1間(1.52m) 平面形：長方形

長軸方位：N20°W 面積：4.4㎡

**検出：**表土掘削後、IV層上面にて、黒色の落ち込みを複数確認する。落ち込みの配列から掘立柱建物跡を想定しST07と仮称する。軸線を想定できるものをまとめて、北西側から時計回りにPit1～4を符号した。また、想定した桁行の南側への延長線上にもいくつかの柱穴らしき落ち込みを確認し、5基を単独の土坑として調査した。想定した建物跡の軸線はPit1～4を組み合わせと考える1間×1間の建物跡をA案、Pit1～3、SK177、180、175、179、178、Pit4を組み合わせと考える3間×1間の建物跡をB案とした。

**重複関係：**他遺構との重複はない。

**構造：**各柱穴の平面形は、Pit4、SK177、179は楕円形、Pit2、SK178は隅丸方形、SK175は隅丸長方形、Pit3は不整形隅丸方形、Pit1、SK180は不整形。断面形は、いずれもすり鉢状であるが、Pit1,3は大形の礫が入っていて歪み形になっている。柱間は、A案が長軸方向280～296cm、短軸方向180cm、B案が長軸方向120～280cm、短軸方向160～180cm。

**出土遺物：**Pit2より、炭化物の付着した薨胴部破片、Pit3より、薨口縁部破片、内外面赤彩のある鉢胴部破片、壺の胴部破片が出土。いずれも小破片であるが、弥生時代中期後半の栗林1式土器である。

**時期：**弥生時代中期後半の栗林式期の可能性が高いが、時期決定は難しい。

**所見：**ST26と同様に長大な建物跡として3間×1間を想定し、南側への延長線上にあるいくつかの柱穴と考えられる遺構も合わせて調査した。配列や位置がやや不規則な点があり、後述するST10の柱穴配置も考慮した結果、1間×1間の建物跡A案を採用すべきと考え、それを選択した。

**ST08** (第51図、PL4)

**位置:** I V15 グリッド **規模:** 3間 (3.68m) × 2間 (2.28m) **平面形:** 長方形

**長軸方位:** N1° W **面積:** 8.4㎡

**検出:** 表土掘削後、IV層上面～V層にて、黒色の落ち込みを複数確認する。落ち込みの規模と配列から掘立柱建物跡を想定しST08と仮称する。本建物跡の大部分は平成23年度調査時に検出、調査を行なったが、東側の一部は平成24年度に調査した。柱穴と想定される落ち込みにそれぞれPit1～43を符号し、掘下げでは想定される軸線に合わせて半截し断面観察を行なった。調査時にはPit12～19を中心とする総柱状の建物跡も予想したため、複数の柱穴状の遺構を合わせて調査したが、その結果、Pit14～18、9～13、19を軸線の組み合わせとする3間×2間の建物跡と判断した。

**重複関係:** 各Pitと直接重複する遺構は確認されなかった。

**構造:** 各柱穴の平面形は、円形、楕円形の整った形状のものが大半を占め、短軸30cm以上を測る規模を持つ。断面形は、掘込み面に含まれる礫により壁面、底面の形状は安定しないが、深さのあるタライ状、お椀状を呈する。柱間は、長軸方向100～132cm、短軸方向80～148cm。

**出土遺物:** Pit14より壺胴部の小破片1片、Pit16から壺口縁部、壺胴部の小破片が出土。いずれも小破片であるが、粟林1式土器である。

**時期:** 粟林式期の建物跡と考えたいが、時期の判断はつかなかった。

**所見:** 本跡は、総柱式の建物を想定した経過から周辺に複数の柱穴がある。それらの性格は不明だが、ST08南側の柱穴Pit26～30、34、40、42は直線的に並び、柵状の施設になる可能性もあるが、詳細は不明である。

**ST09** (第50図、PL5)

**位置:** I V15 グリッド **規模:** 2間 (1.6m) × 2間 (1.3m) **平面形:** 長方形

**長軸方位:** N77° W **面積:** 2.1㎡

**検出:** 表土掘削後、IV層上面にて、黒色の落ち込みを複数確認する。落ち込みの配列から建物跡を想定しST09と仮称する。軸線の定められそうな落ち込みにPit1～9を符号する。また、これらの柱穴列の内側にある大形の落ち込みにPit10を符号する。

**重複関係:** 他遺構との重複はない。

**構造:** 各柱穴の平面形は、Pit1、7は円形、Pit2、3、8は楕円形、Pit4、5、9、10は隅丸長方形、Pit6は不整形。断面形は、Pit4、5、6は皿状、Pit2、7、10はすり鉢状、Pit8は深さのあるタライ状、Pit1、3はお椀状である。柱穴の多くは非常に浅いものが多い。柱間は、長軸方向60～80cm、短軸方向50～90cmと小規模。

**出土遺物:** なし。

**時期:** 不明。

**所見:** 本遺跡で、ほかに類例をみない小形の建物跡になる。Pit10は、本跡に付属する施設の可能性もあるが、埋没土に黒色土、黄褐色土が混在して堆積している状況から、ほかのPitと様相が異なり、本跡とは別の土坑と考えた。

**ST10** (第50図、PL5)

**位置:** I V14 グリッド **規模:** 1間 (2.64m) × 1間 (1.32m) **平面形:** 長方形

**長軸方位:** N3° W **面積:** 3.5㎡

**検出:**表土掘削後、IV層上面にて、黒色の落ち込みを複数確認する。落ち込みの配列から掘立柱建物跡を想定しST10を仮称する。軸線を想定できるものをまとめて、北西角から時計回りにPit1～4を符号した。

**重複関係:**各Pitと直接重複する遺構は確認されなかったが、本跡の想定される範囲がSK185の西側部分と重複する。

**構造:**各柱穴の平面形は、Pit3は楕円形、Pit1、4は不整隅丸方形、Pit2は不整隅丸長方形。断面形は、Pit1、4は浅いタライ状、Pit2、3は皿状である。柱間は、長軸方向256～268cm、短軸方向128～132cm。

**出土遺物:**なし。

**時期:**不明。

**所見:**1間×1間の掘立柱建物跡を想定した。本跡の範囲がSK185と重なり合うが、時期差及び関連性は明確にはできない。

### ST11 (第50図、PL5)

**位置:**I V24、III B04 グリッド **規模:**2間(2.36m)×1間(2.8m) **平面形:**亀甲形

**長軸方位:**N69° W **面積:**6.6㎡

**検出:**表土掘削後、IV層上面にて黒色の落ち込みを複数確認する。その規模と配列から、掘立柱建物跡ST11を想定し、柱穴と想定される落ち込みにそれぞれPit1～16を符号する。Pit1～3、8～10がそれぞれ2間、それらに棟持柱と考えられるPit14、16を加えた建物跡を想定した。Pit11、15は、補助的な柱の可能性もあるが明確ではない。

**重複関係:**Pit8、9は不明遺構のSX05上で検出された。このことから本跡はSX05より新しい時期の遺構と考えられる。また、重複はしないが、南側にある掘立柱建物跡ST13とはほぼ長軸方向を同じくして南北に並ぶことから、両者は併設されていた可能性も指摘できる。

**構造:**各柱穴の平面形は、Pit2、3、9、10、11、15は円形、Pit1、14は楕円形、Pit8は隅丸方形、Pit16は不整隅丸長方形。断面形は、深さ10cm以下のPit1、11、16がすり鉢状、それ以外は深さ16～20cmのお碗状(Pit15のみ深さ32cmを測り円筒状)である。柱間は長軸方向108～132cm 短軸方向280cm。

**出土遺物:**Pit1の埋土より、弥生時代中期後半栗林1式段階の甕胴部の小破片が出土。

**時期:**亀甲形の建物跡で、かつ柱穴から栗林式の土器片が出土していることから、弥生中期栗林式期の可能性が高い。

**所見:**亀甲形で棟持柱をもつ建物跡を想定(註2)。

### ST12 (第52図、PL5)

**位置:**I R06・11 グリッド **規模:**2間(4.6m)×1間(2.28m) **平面形:**長方形

**長軸方位:**N7° W **面積:**10.5㎡

**検出:**表土掘削後、IV層上面にて、黒色の落ち込みを複数確認する。検出した地区は、検出面まで及ぶ後世の削平があり、単独の土坑の検出も極めて少ない。その中で、建物跡の柱配列も想定できる柱穴状の遺構と考え、ST12と仮称し調査した。

**重複関係:**他遺構との重複はない。

**構造:**各柱穴の平面形は、Pit2は円形、Pit4は楕円形、Pit1は不整隅丸方形、Pit3は不整形。断面形は、地山に含まれる礫により不定形であるが、概ね皿状を呈する。掘込みは非常に浅い。柱間は長軸方向(216cm)～240cm 短軸方向228～240cm。

**出土遺物:**Pit3の埋土から、弥生時代中期後半栗林1式の甕の胴部破片が出土。



**時期:** 弥生時代中期の可能性もあるが、時期については判断できない。

**所見:** 本跡は柱穴の数や配列が不規則だが、ST10と同様な2間×1間の掘立柱建物跡を想定したい。

**ST13** (第52図、PL5)

**位置:** III B04・05 グリッド **規模:** 2間 (3.72m) × 1間 (2.32m) **平面形:** 長方形

**長軸方位:** N63° W **面積:** 8.6㎡

**検出:** 表土掘削後、IV層上面にて黒色の落ち込みを複数確認する。規模と配列から、2間×1間の掘立柱建物跡ST13を想定し、Pit1～7を符合し調査した。

**重複関係:** ほかとの重複はないが、北側にある亀甲形の掘立柱建物跡ST11と長軸方向がほぼ同軸で南北に並ぶ。

**構造:** 各柱穴の平面形は、Pit7は円形、Pit1, 2は楕円形、Pit4, 6は隅丸方形、Pit5は隅丸長方形、Pit3は不整形。断面形は、Pit1～4, 7がすり鉢状、Pit5, 6がお椀状である。柱間は長軸方向110～250cm、短軸方向220～248cm。短軸西側の柱間が東側の半分以下になる。

**出土遺物:** Pit6から弥生時代中期後半の壺胴部小破片が出土。

**時期:** 弥生時代中期の可能性が高いが、時期決定は難しい。

**所見:** 北側で検出した亀甲形の建物跡ST11とはほぼ長軸方向を同じくすることから、併設された建物跡を考えた。2棟の用途を追究する術は見当たらないが、今後類例を追跡してゆくべき事例である。

**ST14** (第52図、PL5)

**位置:** III B04 グリッド **規模:** 2間 (3.28m) × 1間 (2.42m) **平面形:** 長方形

**長軸方位:** N40° W **面積:** 7.9㎡

**検出:** 地山礫層上面にて、ほぼ円形で柱状の規模をもつ黒色の落ち込みを確認する。落ち込みは複数箇所に認められ、検出時は土坑(SK)として調査を始めたが、規則的な配列が認められたため、掘立柱建物跡ST14と判断した。土坑番号SK152をPit1、SK154をPit2、SK148をPit3、SK147をPit4、SK189をPit5、SK149をPit6と符号する。

**重複関係:** 他遺構との重複はない。

**構造:** 各柱穴の平面形は、Pit1, 5は円形、Pit2, 6は楕円形、Pit4は隅丸方形、Pit3は隅丸長方形。断面形は、やや深さのあるトライ状を呈するが、Pit2, 4は皿状となる。柱間は長軸方向148～196cm、短軸方向240～242cm。

**出土遺物:** なし。

**時期:** 不明。

**所見:** 2間×1間の掘立柱建物跡を想定した。北東側に並んで位置するST11, 13とはほぼ長軸方向を同じくし、本跡との同時性、関連性を指摘できるか。

**ST15** (第52図、PL5)

**位置:** I L20・25、I M16・21 グリッド **規模:** 1間 (1.6m) × 1間 (4.56m) **平面形:** 長方形

**長軸方位:** N8° W **面積:** 7.3㎡以上

**検出:** 表土掘削後、IV層上面にて、黒色の落ち込みを複数確認する。落ち込みは複数箇所に認められたが、その中で柱穴の配列が組めると思われるものをまとめST15と仮称する。検出時、土坑として調査を進め、調査の過程で掘立柱建物跡を推定した。土坑番号SK172をPit1、SK170をPit2、SK174をPit3と符

号する。

**重複関係**：他遺構との重複はない。

**構造**：各柱穴の平面形は、Pit1、2は楕円形、Pit3は隅丸方形、直径28～36cmである。断面形は、Pit1、3は皿状、Pit2はタライ状で深さはほかのPitより深い14cmを測る。柱間は長軸方向104～160cm、短軸方向456cm。

**出土遺物**：Pit3より敲石（第69図16）が出土。

**時期**：不明。

**所見**：本跡は2間×1間、もしくはそれ以上の長軸を持つ掘立柱建物跡を想定できる。柱穴の多くは調査区北側に伸びていると考えられるか。第52図右下写真のように南側で検出された穴72、76も建物跡に組み入れていたが、明確な掘込みを示すものだけに限定した。

#### ST16（第53図、PL5）

**位置**：I M14・19グリッド **規模**：1間（2.96m）×1間（1.56m） **平面形**：長方形

**長軸方位**：N17° W **面積**：4.6㎡

**検出**：IV層上面まで掘下げ後、柱穴状の黒色の落ち込みを複数検出した。規則的な配列を持つことから掘立柱建物跡を想定し、Pit1～4を符号し調査を行なう。

**重複関係**：他遺構との重複はない。

**構造**：各柱穴の平面形は、正円に近い円形、直径は20～24cm。Pitの深さは、Pit1が15cm、Pit2が20cm、Pit3が17cm、Pit4が5cmで、Pit4のみが浅い。断面形は、壁がほぼ垂直に立ち上がり、円筒状となる。柱間は、長軸方向296cm、短軸方向156cm。

**出土遺物**：Pit3、4の埋土中より栗林1式の甕胴部小片が出土。

**時期**：弥生時代中期後半栗林式期を推定したいが、時期特定は難しい。

**所見**：本跡は、1間×1間の掘立柱建物跡を想定した。北西側に長軸方向をほぼ同じくするST22が位置し、本跡との関連を追究する必要がある。

#### ST17（第53図、PL6）

**位置**：I N16・21グリッド **規模**：2間（4.1m）×1間（3.4m） **平面形**：長方形

**長軸方位**：N15° W **面積**：13.9㎡

**検出**：表土、および皿層除去中に、黒色の落ち込みを複数確認する。埋土、規模がほぼ同じであることから、同一遺構の柱穴であると認定し、その配列から掘立柱建物跡ST17を想定した。

**重複関係**：各Pitと直接重複する遺構は確認されなかった。ただし本跡の想定軸線は、北側でST18の軸線と重なることから、両者の間には時期差があるものと考えられる。

**構造**：各柱穴の平面形は、正円に近い円形、直径は概ね30cm前後である。Pit6は壁面が崩れたためか不整形となる。断面形は、深さのあるタライ状を呈する。西側のPitは上部から削平され浅くなっており、特にPit5が顕著である。柱穴の土層断面には上部の柱痕跡が観察でき、柱は径14cm前後になるのではないかと考えられる。さらに、Pit3を除き、2層底面にはそれぞれ鉄分集積が確認でき、柱が立っていた痕跡と思われる。特に、Pit2は底面中心部分に変色しており、柱の「当たり」にあたる部分であろうか。また、すべてのPitには径10cm程度の柱痕跡とみられる埋土（1層）が認められた。柱間は、長軸方向200～208cm、短軸方向340cm。

**出土遺物**：Pit2柱痕跡上層より壺胴部小片、Pit4柱痕跡上層より壺胴部小片、掘方土中層から壺胴部小片、

Pit5 柱痕跡下層から壺口縁部小片が出土。いずれも栗林1式土器である。

**時期:** 弥生時代中期後半栗林式期を推定。

**所見:** 本跡は、柱穴内に柱痕跡が残り、本遺跡中では良好な掘立柱建物跡のひとつといえる。

#### ST18 (第53図、PL6)

**位置:** I N16 グリッド **規模:** 1間以上 (244m) × — **平面形:** —

**長軸方位:** N3° W **面積:** — m<sup>2</sup>

**検出:** 表土、およびⅢ層除去中に、黒色の落ち込みを複数確認する。埋土、規模がほぼ同じであることから、同一遺構の柱穴であると認定し、掘立柱建物跡 ST18 を想定した。

**重複関係:** 直接重複する遺構は確認されなかったが、想定した建物跡の軸線は、南側で ST17 の軸線と重なる。

**構造:** 柱穴の平面形は、やや不整な円形、直径は 40cm 前後と大きい。断面形は、クライ状を呈し、土層断面には柱痕跡が観察できる。柱は径 14cm 前後になるのではないかと考えられる。柱穴 2 本のみの確認で、多くの柱穴が調査区外に存在するとみられ、全体構造は不明である。柱間は長軸方向 110 ~ 116cm。

**出土遺物:** Pit2 掘方土中層より壺胴部、甕胴部小片が出土。いずれも栗林1式土器である。

**時期:** 弥生時代中期後半栗林式期の可能性が高いが、判断は難しい。

**所見:** 重複関係のある ST17 も出土遺物から弥生時代中期を推定しており、本跡との関係性を追跡する必要があるか。

#### ST19 (第53図、PL6)

**位置:** I N21・22 グリッド **規模:** 2間 (224m) × 1間 (2.7m) **平面形:** 長方形

**長軸方位:** N3° W **面積:** 6.0m<sup>2</sup>

**検出:** 表土、およびⅢ層除去中に、黒色の落ち込みを複数確認する。埋土、規模等がほぼ同じであること、また、その配列から同一遺構の柱穴であると認定し、掘立柱建物跡 ST19 を想定した。

**重複関係:** 他遺構との重複はない。

**構造:** 各柱穴の平面形は、正円に近い円形、直径は 20cm 前後。Pit2、4 は楕円形。断面形は、壁が垂直で円筒形を呈する。Pit4 は、底面が平坦ではなくやや尖る。柱穴には柱痕跡とみられる埋土 (1層) が認められ、斜断面のため明確ではないが、おそらく柱の太さは径 10cm 前後と推定される。さらに、Pit3、5、6 は、2層底面にそれぞれ鉄分の集積が認められた。柱間は、長軸方向 110 ~ 128cm、短軸方向 240 ~ 286cm。

**出土遺物:** Pit2 柱痕跡中層より壺胴部小片が出土。そのほか、器種不明の小片も出土しているが、それぞれ栗林1式土器であろう。

**時期:** 弥生時代中期後半栗林式期を推定。

**所見:** 本跡には 2間 × 1間の掘立柱建物跡を想定した。栗林式の土器片が Pit2 柱痕跡 (1層) から出土している。Pit2 下部出土炭化材 (H24 分析 No.5)、Pit6 1層上面出土炭化物 (H24 分析 No.6) の AMS 法による C14 年代測定では、それぞれ 2230 ± 30yrBP、2180 ± 30yrBP の値が得られ、出土土器との相対年代値に矛盾がない。

#### ST22 (第53図、PL6)

**位置:** I M13・14 グリッド **規模:** 2間 (364m) × 1間 (20m) **平面形:** 長方形

**長軸方位**：N5° W **面積**：7.3㎡

**検出**：IV層上面まで掘下げ後、同層上面に柱穴状の黒色の落ち込みを複数検出した。規則的な配列を持つことから掘立柱建物跡ST22を想定し、Pit1～6を符号し調査を行なう。

**重複関係**：他遺構との重複はない。

**構造**：各柱穴の平面形は、円形か楕円形を呈し、長径12～24cm。柱穴の深さは、Pit3を除きいずれも10cmからそれ以下で非常に浅い。断面状は、お椀状で底部は丸く、壁はほぼ垂直に立ち上がるか、やや開く。柱間は、長軸方向170～200cm、短軸方向180～200cm。

**出土遺物**：なし。

**時期**：不明。

**所見**：本跡には、2間×1間の掘立柱建物跡を想定した。南東側2mに長軸方向をほぼ同じくするST16が位置し、本跡との関連を考えていく必要がある。また、Pit3埋土1層出土炭化物（H24分析No.7）のAMS法によるC14年代測定では、 $3,980 \pm 30$ yrBPと縄文時代後期の年代値が算出された。本遺跡の中でも、縄文時代の掘立柱建物跡の存在も考えていく事例のひとつになるか。

### ST23（第54図、PL6）

**位置**：I M19・24グリッド **規模**：2間（4.76m）×1間（1.72m） **平面形**：長方形

**長軸方位**：N1° W **面積**：8.2㎡

**検出**：IV層上面まで掘下げ後、同層上面に柱穴状の黒色の落ち込みを複数検出した。土杭（SK）として調査を行なったが、調査最終段階にそれらが掘立柱建物跡ST23である可能性を想定し、Pit1～6と符号した。SK232をPit1、SK214をPit2、SK215をPit3、SK245をPit4、SK212をPit5、SK213をPit6とする。

**重複関係**：他遺構との重複はない。

**構造**：各柱穴の平面形は、円形か不整形円形で、長径12～16cm。柱穴の深さは4～8cmで、いずれも非常に浅い。断面形は、お椀状で底部は丸い。柱間は、長軸方向204～270cm、短軸方向156～180cm。

**出土遺物**：なし。

**時期**：不明。

**所見**：本跡には、2間×1間の掘立柱建物跡を想定した。北西側5mに平面形状や長軸方向をほぼ同じくするST22が位置し、本跡と同様な用途を示す建物跡であろうか。

### ST24（第54図、PL6・7）

**位置**：I S16・17グリッド **規模**：3間（3.74m）×1間（2.6m） **平面形**：長方形

**長軸方位**：N90° E **面積**：9.7㎡

**検出**：IV層上面まで掘下げ後、柱穴状の黒色の落ち込みを複数検出した。規則的な配列から掘立柱建物跡を想定し、柱穴Pit1～8を符号して調査した。

**重複関係**：想定される柱穴の配列から、ST25の建物範囲と重複する。互いの柱穴には直接重複関係がないことから、前後関係は不明である（第54図）。

**構造**：各柱穴の平面形は、正円に近い円形で、長径20～32cmである。断面形は、円筒形に近く、底部は平坦、立ち上がりはほぼ垂直である。ただし、Pit2、3、5、7、8は壁面途中の片側に段を持つ。各柱穴の深さは、Pit8の12cmからPit2の48cmまでバラつきがある。柱間は、長軸方向100～140cm、短軸方向260cm。

**出土遺物**：Pit1～6埋土より弥生時代中期後半栗林1式土器の破片（23・24）が出土。Pit2から剥片、Pit5より赤化した礫が出土している。

**時期:** 弥生時代中期後半栗林式期を推定。

**所見:** 本建物跡は、各柱穴出土の土器や、埋土の特徴などから、SB01、02、SD01～03、ST25と同時期の弥生時代中期後半栗林式期の遺構と推定される。3間×1間の建物跡を想定したが、Pit8はほかの柱穴に比べ非常に掘込みが浅く、平面上軸線から少し外れることから、Pit1、Pit8を除外した2間×1間の建物跡の可能性も考えられる。また本跡の柱穴の規模、形状や埋土の特徴がST25と酷似しており、同時代の比較的近い時期に、建て替え等の理由により重複した可能性がある。

#### ST25 (第54図、PL7)

**位置:** I S17 グリッド **規模:** 3間 (4.02m) × 1間 (2.64m) **平面形:** 長方形

**長軸方位:** N88° E **面積:** 10.6㎡

**検出:** IV b層上面まで掘下げ後、柱穴状の黒色の落ち込みを複数検出した。規則的な配列をもつことから掘立柱建物跡を想定し、柱穴 Pit1～8 を符号し調査を行なう。

**重複関係:** ST24の建物範囲と重複する。柱穴が直接重ならないため、前後関係は不明(第54図)。

**構造:** 各柱穴の平面形は、正円に近い円形で長径は20～26cmである。断面形は、いわゆるタライ状であるが、底部は若干丸みを帯びる。各柱穴の深さは、Pit2、7の8cmからPit1、4の16cmまで幅があり、底面標高はPit4と8で20cmの差がある。柱間は、長軸方向130～140cm、短軸方向260～264cm。

**出土遺物:** Pit1～8埋土より弥生時代中期後半栗林1式土器の壺、甕の小破片が15片出土(29)。Pit8からは赤化した礫が出土している。

**時期:** 弥生時代中期後半栗林式期を推定。

**所見:** ST24の所見でも述べたように、本跡は、埋土の特徴などからSB01、02、SD01～03とほぼ同時期の遺構である可能性が高い。3間×1間の本跡は、ST24と重複関係にあり、いずれかからの建て替えと考えられる。Pit3、4埋土出土炭化物(H24分析No8、9)をAMS法によるC14年代測定した結果、 $2,180 \pm 30\text{yrBP}$ 、 $2,210 \pm 30\text{yrBP}$ の値を得た。ST24では炭化物試料が得られなかったため、両者の新旧関係は明確にできないが、SB01埋土のC14年代測定結果に近似し、本跡が弥生時代中期後半の遺構である可能性は高いと判断される。

#### ST26 (第55図、PL7)

**位置:** III C04 グリッド **規模:** 4間 (6.64m) × 1間 (2.28m) **平面形:** 長方形

**長軸方位:** N1° W **面積:** 15.1㎡

**検出:** III層を掘削し地山層(V層)上面にて、形状、規模から柱穴と考えられる黒色の落ち込みを確認する。配列から建物跡を想定しST26と仮称する。柱穴には、当初Pit1～5を符号し3間×1間の掘立柱建物跡を想定したが、南側調査区境界付近を精査した結果、SK536と580が確認され、それらが本跡の軸線上に位置することから、4間×1間の建物跡を想定しなおした。柱穴には北西角から時計回りにPit1～10と符合した。

**重複関係:** 他遺構との重複はない。

**構造:** 各柱穴の平面形は、Pit2は円形、Pit1、3、6、10は楕円形、Pit4、5は隅丸長方形、Pit7は不整形円形、Pit8、9は不整形隅丸方形。断面形は、タライ状と皿状に分けられ、Pit1、4～9がタライ状、Pit2、3、10が皿状になり、南側の柱穴が深くなる傾向にある。特にPit6～8は深さがある。埋土には地山の礫が混入し、礫をのけるように柱穴が掘削されたと考えられる。Pit4、5の底面近くには礎盤石状の石が入っていた。柱間は、長軸方向120～192cm、短軸方向228～240cm。

**出土遺物:** Pit1、5～9埋土より栗林1式の壺、甕小破片が出土。

**時期:**弥生時代中期後半栗林式期を推定したい、炭素年代値から判断すると縄文時代後期の可能性もある。時期決定は難しく、判断はつかない。

**所見:**本跡は上位段丘の東側縁部分に位置し、ほぼ等高線に沿うように長軸方向が真北を向く。ほかのいくつかの掘立柱建物跡にも共通するが、千曲川によって形成された地形に制約される形で建物が増えてきたものと考えられる。また、Pit4埋土出土炭化材(H25分析No.3)のAMS法によるC14年代測定で、3,730±30yrBPの縄文時代後期の年代値が算出された。

### ST27 (第55図、PL7)

**位置:**Ⅲ F25、Ⅲ G21、Ⅲ L01 グリッド **規模:**3間(568m)×1間(256m) **平面形:**長方形

**長軸方位:**N55°W **面積:**14.5㎡

**検出:**Ⅲ層を掘削し地山層(V層)上面にて、複数の黒色の落ち込みを確認する。当初、土坑としてそれぞれを調査したが、規模、配列等から建物跡の柱穴と考え、桁と梁の軸線を想定し、ST27と仮称する。土坑にはそれぞれ、Pit1～8を符合し調査した。

**重複関係:**他遺構との重複はない。

**構造:**各柱穴の平面形は、Pit2は円形、Pit4、5、6は楕円形、Pit1、7は隅丸方形、Pit8は隅丸長方形、Pit3は不整形円形。断面形は、クライ状がPit3、5～7、すり鉢状がPit1、2、4と大半を占め、Pit8は浅く皿状となる。特にPit6は36cmと深い。埋土は、シルトやシルト質砂であり、ボソボソする類似した層となる。柱間は、長軸方向126～308cm、短軸方向256cm。

**出土遺物:**Pit4、6埋土より栗林1式の壺胴部小片が出土している。

**時期:**不明。

**所見:**本跡は、南側の離れた調査区(南区)で検出されており、北側調査区の遺構との関連は明確ではない。

### 3 溝跡(周溝跡を含む)(第56～58図、第8表、PL7～9)

溝跡として、弥生時代中期4基、近世以降1条を調査した。弥生時代の4基は通常の水が流れる溝跡とは異なり、平面形状が円形、馬蹄形となる。これらに平地建物跡等の周溝を想定したいが、周溝にともなう柱穴や炉跡等が確認できず、ここではSD(周溝跡)として報告しておく。近世以降と考えられるSD04は、調査区東端の千曲川縁にて検出された。

### SD01 (第56図、PL7・8)

**位置:**I S23、I X03 グリッド **規模:**<5.84>( <6.2>)m×5.6(6.4)m

**平面形:**円形(円環状) **長軸方位:**N74°W **面積:**25.7㎡ ※ < >は推定値、( )は外徑

**検出:**表土掘削後V層上面にて、黒色の円環状の落ち込みを確認する。全体が近年の掘削により削平されていたものの、落ち込みが円環状であることから、竪穴住居跡、平地建物跡もしくは円形周溝墓の可能性を想定した。しかしながら落ち込みの内外に、遺構の性格を推定できる施設が確認できなかったため、周溝跡(SD)として調査した。本跡は近年の水田造成による重機のキャタピラー痕が遺構検出面にみられるほど、遺構上部がかく乱されていたが、小破片ではあるが出土遺物も確認された。

**重複関係:**SK228が本跡東側の溝と重複する。埋土は本跡の1層と類似するが、断面観察から本跡の溝埋土をSK228が掘込むことが観察された。SK228の方が新しい時期と考えられる。また、周溝の内側に位置するSK231は周溝の埋土と類似するが、本跡との新旧関係は明確ではない。

**構造**：本跡は、溝状の落ち込みが円環状にめぐる形状である。溝の幅は52cm。全体に底部は凹凸があり10～25cmの深さとなる。北東部の一部が60cm幅で落ち込み、深さ33cmを測る（第56図SD01 spEF）。また、南東部に周溝の途切れがあるが、その幅は狭く上部からの削平により周溝の浅い部分が途切れたものと考えられる。全体の規模は周溝の内径で5.6～5.84mを測る。本跡周溝の西半部は、近年の耕作によって削平、かく乱されている。さらに、本跡とその周辺は近年の水田造成の際に平坦面を造るため大幅に削平されており、本跡はV層中で検出した。同時期とみられる他遺構はIV層上部で検出可能であり、検出面の比高差は約20cmある。以上のことから本跡の溝は隣接するSD03と同じく、40cm以上の深さがあったものと考えられる。形状も円形を想定しているが、SD03と同じく一部が途切れる可能性もある。

**出土遺物**：埋土1層より甕小片、鉢底部小片が出土。栗林1式段階に比定される。このほかに、敲石(21)と剝片1点が出土している。

**時期**：弥生時代中期後半栗林式期を推定。

**所見**：本跡は、構築当初SD03と同様に周溝の深さが35cm～50cmであったと推測される。周溝の断面図を縦割りに観察したが、柱穴跡は確認できなかった。ただ、周溝底面は部分的に深くなる箇所がある（写真図版PL8）。周溝内側には柱穴、炉跡がなく、遺構の認定条件に欠けるが、上層の削平も考慮し、弥生時代中期にみられる平地建物跡等の周溝跡であるかもしれない。

#### SD02（第56図、PL7・8）

**位置**：I X02・03・07グリッド **規模**：<5.12>（<5.6>）m × <4.0>（<4.64>）m

**平面形**：馬蹄形 **長軸方位**：N22° E **面積**：17.1㎡ ※ < >は推定値、（ ）は外径

**検出**：西側はIV層掘削後、東側は表土掘削後、V層上面にて黒色の弧状の落ち込み、暗褐～にぶい黄褐色の柱穴状の落ち込みを確認する。東から北側が近年の水田造成による削平、南側が調査区外となる。落ち込みは、検出された部分から馬蹄形状であると推定し、堅穴住居跡、平地建物跡の周溝の可能性を考えた。遺構の性格を推定できる施設が確認できなかったため、周溝跡（SD）として符号し調査を行なう。また、北側で検出された柱穴状の落ち込みは周溝の底面の一部と考えられ、Pit1、2と符号し調査する。

**重複関係**：直接重複する遺構はないが、周溝の内側にSK305が位置する。本跡Pit1埋土と類似する埋土を持ち、SD02内の施設とも考えられるが明確ではない。

**構造**：本跡は、溝状の落ち込みが馬蹄形状にめぐる形状である。溝の幅は32cm。全体に底部は凹凸があり20～25cmの深さとなる。南端部が最も深く38cmを測る（第56図SD02 spEF）。また、北側はかく乱により周溝が途切れるが、底面の深い部分のみが柱穴状に残り、本来の周溝は柱穴状の落ち込みを結ぶ形で調査区外へ続くと考えられる。全体の規模は、推定値で周溝内径4.0～5.12mを測る。

**出土遺物**：周溝南側の3層より壺胴部破片、同じく周溝南側埋土より壺胴部小片が出土。さらに断面spCD1層より甕胴部破片(38)が出土。栗林1式段階に比定されよう。

**時期**：弥生時代中期後半栗林式期。

**所見**：本跡は、SD01、SD03より規模は小さいが、形状等から考えると同様の遺構であった可能性が高い。平地建物跡、円形周溝墓、またそれらとは性格を異にする遺構空間が想定できる。北側周溝内に位置すると考えられるPit1、2に加え、周溝底面が部分的に深くなる箇所もみられ柱を立てた痕跡とも考えられる。また、周溝内側から検出されたSK305は貯蔵穴等の施設の可能性もある。

#### SD03（第57図、PL7・8）

**位置**：I S17・22グリッド **規模**：<6.96>（<8.4>）m × <6.96>（<8.48>）m

**平面形**：馬蹄形 **長軸方位**：N26° E **面積**：38.9㎡ ※ < > は推定値、( ) は外径

**検出**：表土掘削後、IV b層にて黒色の帯状の落ち込みを確認する。一部後世の掘削により削平されていたが、南西側が途切れる円形（馬蹄形）であることが推定でき、SD01同様に平地建物跡もしくは円形周溝墓の可能性を想定したが、炉跡等の確認ができなかったことから周溝跡（SD）として調査した。断面spCDは溝部分で掘込み面下部（IV b～V c層）までトレンチ掘削を行ない、断面の観察を行なったが溝の内側に床面、硬化面などは確認できなかった。

**重複関係**：SK453と重複する。SD03よりも新しいが、時期は不明である。また、SK249・362・455は周溝内側に位置し、SK514は北側に隣接する。

**構造**：本跡は、溝状の落ち込みが馬蹄形状にめぐる形状である。溝の幅は上端を測ると55cm～75cmで、南西側開口部の溝先端は徐々に幅が細くなり深さも浅くなり嘴状を呈する。深さは一定ではなく、西～北西部付近（spJ）が最も深く50cm～55cmを測る。北西～北部（spKL）が最も浅く約10cmを測る。この部分の底面は他所に比べ固くしまっており、一部に鉄分集積が認められた。それ以外の底面も形状は平坦ではなく、所々に凹凸がみられる。本跡は東側の大部分が近年の造成により削平され、全体の規模は正確には把握できないが、長軸（南西～北東）方向の内径は約696cmを測り、それに直交する短軸方向もほぼ同一の計測値が予想される。本跡の西側半分は、第1検出面の遺構の下層にあること、また周溝が深く残存していることから、遺構上面の削平は少ないと予想されるが、周溝内側にSK249以外に、掘込み、被熱、硬化面などの痕跡は確認できなかった。

**出土遺物**：北側・南側周溝埋土1層より、甕胴部破片が出土（41・42）。埋土2層からは壺胴部破片が出土、さらに西側周溝1層より鉢の口縁～体部破片が出土。同一個体と思われる破片が、同じグリッドの上層の遺物包含層から出土している。そのほか、ビエス・エスキューユ、石核と思われる破片がそれぞれ1点、剥片が3点出土した。

**時期**：弥生時代中期後半栗林式期を推定。

**所見**：平地建物跡もしくは円形周溝墓のどちらかの可能性が高いと考えられるが、周溝以外の施設が確認できず、性格の判断はできなかった。SK249は柱穴の可能性はある。周溝内側にはほかに落ち込みを検出していないため、柱穴の掘削時期は不明である。SK362・455は溝が途切れる箇所に位置し、入り口施設である可能性もある。本跡周溝の南西部埋土2層から採取した炭化物（H24分析No.12）のC14年代測定値は、2,250 ± 30yrBP（弥生時代中期後半相当の年代）である。本跡底面の起伏が激しい点については、周溝外側に周堤を造る際の土取りで、柱穴が連なる様な凹凸の底面になるとの指摘がある（註3）。なおトレンチ断面（spJ）の2、3層（H24分析No.2、3）およびSK249埋土（H24分析No.1）の珪藻分析を行なったところ、珪藻化石は全く検出されず、周溝内およびSK249内は常に湛水しているような状態ではなかったと想定される。

#### SD04（第58図、PL8）

**位置**：I S20・25、I X05グリッド **規模**：長さ15.8m × 幅0.76m **平面形**：直線

**流路方位**：N

**検出**：表土掘削後、V層にて南北方向に帯状に延びる黒色の落ち込みを確認する。規模形状から溝跡と認定し、SD04を符合し調査を行なう。本跡は両端が調査区外に延びているため、南・北壁面と検出範囲の中央部にサブトレンチを設定し断面観察をした。また溝跡の堆積の走向（水流の方向）を観察するため、長軸方向に合わせて西側半分を先に掘下げたが、堆積の走向などは確認できなかった。

**重複関係**：なし。



**構造:** 溝の幅は70～90cm、深さ約30cmを測る。断面形状は底面が平らなトライ状を呈し、立ち上がりはほぼ垂直に近い。溝の長さは調査範囲内で約16mを測り、ほぼ直線に延びる。全長は不明。

**出土遺物:** 埋土から弥生中期後半甕胴部破片、平安時代壺口縁部破片が出土したが、埋土に混入したものと思われる。また本跡南端部分で木材片が出土したが、埋土がかく乱されており新しい時期の遺物と判断した。すべての出土遺物は、遺構外として取り扱った。

**時期:** 近世以降。

**所見:** 本跡は、千曲川に沿って作られた溝であり、集落域を区画する溝の可能性を考えたいが、埋土が基本層序Ⅲ a層であり、そこに上層のⅡ層が混入していることを考えると、本跡は近世以降の可能性が高い。水田の排水路等に使用された溝跡であろうか。

#### SD05 (第57図、PL9)

**位置:** I R10・14・15 グリッド **規模:** 2.08 (2.40) m × 0.56 (0.80) m **平面形:** 馬蹄形  
**長軸方位:** N6° W **面積:** — ※ < >は推定値、( )は外径

**検出:** 表土および一部Ⅲ b層を掘削し、Ⅳ b層中に黒色のやや湾曲した帯状の落ち込みを検出。SD01～03に比べ規模は小さいが、南北方向に長く延びる形状からSD05と符号して調査した。

**重複関係:** SK426が本跡北側の埋土を掘込み形で重複する。またSK373は弧状の溝跡の東側に位置する。

**構造:** 南北に延びる溝の先端がそれぞれ東側にやや湾曲し、馬蹄形の片側の形状に類似する。ただし東側に對となる溝跡は検出されなかった。溝跡の内側で長軸方向に2.08m、短軸方向に0.56mを測る。

**出土遺物:** なし。

**時期:** 不明。

**所見:** SD01～03に比べ規模が小さい。規模、形状からみると、堅穴住居跡の周溝の残存部分の可能性がある。

#### 周溝跡(平地建物跡の可能性)について(第44図)

琵琶島遺跡では、周溝跡を4基調査した。形状は、円形、馬蹄形であり、規模は長軸内径で約5～7m、周溝幅約30～75cm、周溝深さ約30～55cmを測る。これまで長野県内でも、中野市栗林遺跡、長野市松原遺跡等で「平地式建物跡」として類似の報告例がある(中野市教育委員会1997、長野県埋蔵文化財センター2000)。ここでは、本遺跡出土の周溝跡について、遺構所属時期である弥生時代中期の北信地方および北陸地方の「平地建物跡」の類似(第44図)との比較を行ない、当該遺構の性格について考えたい。

「平地建物跡」は、堅穴を掘込まず床面が地表面と同一の高さとなる建物跡である。建物の周囲に円形、楕円形、馬蹄形等の周溝が掘込まれる特徴をもつ。周溝内側ないしは外側には、周溝掘削土を盛り上げた周堤がめぐる可能性が考えられている(浜崎1993)。

「平地建物跡」と呼称される遺構が最初に発掘されたのは、1968年の富山県高岡市石塚遺跡の調査である(上坂ほか1968)。その後、「建物」として初めて認識されたのは、1979年の新潟県柏崎市下谷地遺跡の報告においてである(高橋1979)。現在、「平地式建物」「周溝をもつ建物」(岡本2003)などと呼称され、報告されることも増えている。

「平地建物跡」という名称をもつ遺構でも、長野県内(北信地方)と北陸地方では様相が大きく異なる。規模は、北信地方に対して北陸地方の建物跡は2～3倍と大形である。周溝の形状(註4)は、北信地方が周溝式、北陸地方が土坑式となる。富山・石川県例のなかにも、1m以下の細い溝をもち北信地方の遺構に類似する周溝式の様相もみられる。一方、琵琶島遺跡の周溝内には凹凸があり、土坑式的様相もあ



第44図 平地建物跡の比較 (北信と北陸)

る。さらに、内部構造についてみると、北陸地方、松原遺跡で、周溝内側から多数の柱穴がみつかったているが、本遺跡と栗林遺跡例では柱穴が検出されていない。また、北陸地方の建物跡は、同時代の重複関係はほとんどない。琵琶島遺跡の遺構に重複関係はないが、栗林遺跡、松原遺跡では多くの建物跡が重複してみつかったている。

以上、北信地方と北陸地方の平地建物跡の基礎的な要素を比較してみたが、基本的に、それぞれの地域での特徴にまとまりのあることがわかる。そのまとまりが機能的な差を示しているのかは明確ではない。富山・石川県に、北信的な様相をもつ遺構が部分的にみられ、一方で琵琶島遺跡には北陸的な要素が入り込んでいる可能性がある。

「平地建物跡（周溝をもつ建物跡）」の機能面について、新潟県下谷地遺跡の報告のなかで「8本のピットは円形に並び…（中略）…中央には土坑が存在している…（中略）…一般的な堅穴住居跡と同じもの」（高橋 1979：41）と記述し、周溝内側のピット（柱穴）および土坑をもって「平地建物跡」を住居として認定する根拠を提示している。北陸地方の平地建物跡については、多数の柱穴および炉跡を有する遺構が大半を占めている。北信地方の松原遺跡も同様である。それに対して、琵琶島遺跡で内部施設と考えられる柱穴は1基にとどまる。

SD01～03の項でも記述したが、周溝跡が検出された時点から、上部構造を考え周溝内外の検出作業を念入りに行なった。また、周溝は縦断面を取り、溝内部の観察をした。その結果、底面に顕著な凹凸も観察できた。しかしながら、柱穴や炉など通常の住居跡にみられる施設はなく、周溝内の遺物も他遺構に比べて多くはなかった。

上記のことから、本遺跡で「周溝跡」とした遺構は、住居としての条件がそろわず「平地建物跡」とは認定できない。ただ、周溝を掘削した土砂によって柱を固定し、建物跡として機能していたかもしれない。琵琶島遺跡の3基の「周溝跡」は、今回、集落内において何らかの役割を果たしていた遺構として提示するにとどめざるを得ない。今後、同種の遺構例が増加するなかで、周溝跡の機能・用途が想定できることを期待したい。

#### 4 柵跡（第58図、第9表、PL9）

柵跡は、弥生時代中期2基を調査した。下位段丘の東縁で、南北方向に2基並ぶように検出された。2基の間隔は約6.3mある。

##### SA01（第58図、PL9）

位置：I X12・17グリッド 規模：北側132cm×南側132cm 平面形：「く」の字形  
長軸方位：N13°W

検出：Ⅲb層掘削後、Ⅳa層中にて、円形で同規模の黒色の落ち込みを4か所検出する。規則的に等間隔で南北方向に並ぶところから、柵跡SA01 Pit1～4と符号して調査する。調査のなかで、最も北側に位置するPit1を埋土、柱間の違いからSA01から除外しSK472に変更した。

重複関係：なし。

構造：3基の柱穴が東側に向かって、「く」の字状に148°開いて配列する。それぞれの柱穴の平面形状は円形を呈し、長軸でPit2が32cm、Pit3が28cm、Pit4が20cmを測り、Pit4が小さい。断面はPit3が円筒状で34cmと最も深く、残り2つはタライ状で深さ6cmと8cmを測る。中央の柱穴が、壁面が垂直となり最も深い。

出土遺物：なし。

**時期:** 弥生時代中期後半栗林式期。

**所見:** 本跡は、埋土および周辺の遺構の状況から弥生時代中期後半栗林式期の所産であり、本跡南側約6.3mに位置するSA02とは南北方向に並列することから、SA02との組み合わせであると考えたい。その一方で、やや傾斜する東側は削平されたものと想定すると、長軸を東西方向にもつ亀甲形掘立柱建物跡の西側柱穴3基が残存した遺構の可能性も考えられる。亀甲形掘立柱建物跡ST11と比較すると、3本の柱穴の開きが広く、柱穴(中央)が深く2層となる点が異なる。この状況から、建物跡とする判断まではできない。

#### SA02 (第58図、PL9)

**位置:** I X07 グリッド **規模:** 北側144cm×南側152cm **平面形:** 「く」の字形

**長軸方位:** N9° W

**検出:** ⅢB層掘削後、ⅣA層中にて、円形で同規模の黒色の落ち込みを3か所検出する。規則的に等間隔で南北方向に並ぶところから、構跡SA02Pit1～3と符号して調査する。

**重複関係:** なし。

**構造:** 3基の柱穴が東側に向かって、「く」の字状に164°開いて配列する。柱穴の平面形状はPit2が円形、Pit1、3は楕円形を呈し、長軸でPit1が40cm、Pit2が28cm、Pit3が32cmを測る。断面は、Pit1が円筒状で28cmと最も深く、壁面西側に段差を持つ。残り2つはお椀状で深さ14cmと20cmを測る。

**出土遺物:** なし。Pit1の2層上面から検出された炭化物(H24分析No.14)をAMS法によるC14年代測定し、縄文時代中期に相当する古い値4,540 ± 30yrBPが算出された。

**時期:** 弥生時代中期後半栗林式期。

**所見:** 本跡は、埋土および周辺の遺構の状況からSA01と組み合わせで弥生時代中期後半栗林式期の遺構と考える。SA01と同様にST11と比較すると、柱穴の構造は類似するが、3本の柱穴の広さはさらに広がる。

## 5 遺物集中 (第58図、第10表、PL9)

南側調査区で栗林式土器片が円形状にまとまり出土した箇所が確認され、それを遺物集中として調査した。同様に遺物の集中する範囲は、各段丘上、南区西側のⅡJ14・15・19・20グリッド(第33図 弥生土器集中域)、東側ⅢL01・02・06グリッド(第36図 弥生土器集中域)でも確認したが、掘込みなどの認められる遺構としては捉えられなかった。なお、東区上位段丘には、栗林式の壺(第83図71)がほぼ一個体分まとまって出土した箇所があり、単独土器として割付図⑧(第29図)に記録した。

#### SQ01 (第58図、PL9)

**位置:** ⅢF18・23 グリッド **規模:** 長軸328cm×短軸288cm×深さ36cm **平面形:** 円形 **面積:** 7.3㎡

**検出:** Ⅲ層掘削中にV層上面にて、直径3m前後の黒色の広がりを確認するとともに多くの弥生土器片を検出した。周辺の地区から独立した形で遺物が集中して出土したため、遺物集中SQ01と符号して調査した。遺物の取上げに関しては、1mグリッドを設定して実施した(第2、58図)。

**重複関係:** SK573、575、583、586が本跡の底面から検出される。SK573は本跡より古く、ほかの3基は本跡より古いか同時期の遺構と考えられるが、関係性については不明。

**構造:** 円形状にやや窪んだ場所に、弥生時代中期後半の遺物がほぼ水平に堆積して出土した。

**出土遺物:** 栗林1式土器の破片が上層を中心に145片、硬砂岩製の礫器が下層で1点出土。遺構としての遺物集中の性格追究とは別に、本跡から出土した栗林式土器破片(第58図62)に付着した炭化物の成分

分析を行なった。炭素・窒素安定同位体比および総炭素量・総窒素量分析の結果、炭素安定同位体比 $\delta^{13}\text{C}$ が $-26.5\%$ 、窒素安定同位体比 $\delta^{15}\text{N}$ が $9.01\%$ 、炭素・窒素に基づくC/Nモル比は52.4で、デンプンを主成分とするC3植物(註5)に近い値が出ている。

**時期:** 弥生時代中期後半栗林式期を推定。

**所見:** 本跡は、掘込みも明確ではなく住居的な遺構とするよりも、何らかの理由により、土器などが廃棄あるいは遺棄された遺構ではないか。出土土器は、栗林1式土器の範囲に入る資料である。外面に付着した炭化物のAMS法によるC14年代測定の結果、 $2,190 \pm 20\text{yrBP}$ であった。

## 6 土坑 (第59～62図、第13表、PL9～11)

土坑は、576基を検出した。遺構の時期決定は極めて難しく、出土した土器より、縄文時代～平安時代、さらには、それ以降の土坑も含まれる可能性が考えられる。遺構図には、全土坑のうちから、時期がわかる土器が出土したか、または1m以上の規模で特徴のある形等をした土坑を選別して掲載した。さらに、そのなかから、主として各時代の遺存状態が良好な土坑、または、近接する他の遺構と関わりがあると考えられるものについて記述した。記述しない土坑については、第13表にまとめる。また、遺構図については、第12～36図の割付図①～⑳に、すべての土坑を掲載する。

なお、土坑には認定できなかったが、土坑状に埋土が落ち込んだ穴を「準土坑(穴)」として扱い、割付図中には網掛け表記で図示している。

### SK191 (第61図、PL10)

**位置:** I R11・12グリッド **規模:** 長軸290.0cm × 短軸100.0cm × 深さ56.0cm

**平面形:** 隅丸長方形 **長軸方位:** N59° E **面積:** 2.0㎡

**検出:** III b層掘削前後、IV a層上面で隅丸長方形に広がる黒色の落ち込みを検出。東側は市道下に入り込み、平成24年度に調査した。結果的に、2年間で遺構の東西半分ずつを調査する形となった。

**構造:** 断面形状は箱形に近いタライ状を呈し、壁面がほぼ垂直に56cm立ち上がる。堆積土は、2種類のシルトが50%ずつ斑状に混入する人為埋没的な層であった。

**出土遺物:** 遺構底面から浮いた状態で埋土中位に、古墳時代中期の高坏(1～5)、埴形壺(6、7)が破砕して出土した。1か所にまとまるだけでなく離れた場所同士で接合する。器種は高坏、埴形壺のみで、ほかの器種は出土していない。坏中央部にタテハケを強く残す高坏坏部(3)を含む。さらに、高坏は坏部と裾部のみで、筒部は小片が1片出土しているのみである。破砕した高坏の脚柱部のみが除かれて破棄されたと考えられる。また、土器出土層の下層に「ロクログナ」(1)が出土。刃先を土坑の外側(南東方向)に向けている。該期の資料としては長野県初出であり、類例は近畿地方に求められるが希少である(村上ほか2003)。そのほか、弥生時代中期後半栗林式の土器片39片、刃器(PL16 - (1069))、二次加工のある剥片、磨石、打製石鏃などが出土している。玉類等の抽出を目的に下層埋土の筒による水洗選別も行なったが、炭化物と土器片、石器剥片・砕片を検出したのみである。

**所見:** 但馬・丹後の弥生時代の墓でみられる特徴的な儀礼に「墓壙内破砕土器供献」がある(肥後1994a、1994b)。「供献土器には、葬送儀礼時に使用された土器などのけがれを払うために底部穿孔、破砕行為を受けて投棄されたもの」がある(吉田1990:21)。本跡は墓坑の木棺ないしは土盛り上に、破砕された土器と礫が投棄された状況と考えられる。本跡の性格を考える上で、前述例は参考となろう。同時期の古墳周溝内における「供献土器」は東日本でもみられるが、単独の土坑(内)での供献例は管見にない。さらに、同時期の他遺構は本遺跡内では発見されておらず、単独遺構である点も注目しておく必要がある。

**SK205** (第62図、PL11)

位置：I M24 グリッド 規模：長軸 62.0cm × 短軸 48.0cm × 深さ 14.0cm 平面形：楕円形

検出：表土層掘削後、IV b 層上面で楕円形の黒色の落ち込みを検出。

構造：断面形状は皿状を呈し深さは 14cm と浅い。

出土遺物：1 層上部より、外面に「ウ」冠状の墨書がある平安時代後期土師器坏片 (1) が出土し、近く別個体の土師器坏口縁部破片がもう 1 点出土。なお埋土から出土した炭化物 (H24 分析 No.15) を AMS 法による C14 年代測定したが、 $2,150 \pm 30$ yrBP の値を示している。

所見：性格は明確ではないが、炭化物とともに土器が廃棄された遺構であろう。

**SK285** (第59図、PL9)

位置：I X17 グリッド 規模：長軸 34.0cm × 短軸 32.0cm × 深さ 25.0cm 平面形：円形

検出：IV a 層掘削後、V 層上面にて暗褐色の円形の落ち込みを検出。

構造：断面形状は深さのあるトライ状を呈する。

出土遺物：埋土下層より、縄文時代前期前半期の深鉢胴部破片 2 点が出土した。

**SK289** (第60図、PL10)

位置：I X07 グリッド 規模：長軸 34.0cm × 短軸 29.0cm × 深さ 23.0cm 平面形：不整楕円形

検出：III b 層掘削後、IV a 層中にて不整楕円形の黒色の落ち込みを検出。

構造：断面形状が円筒状を呈し、φ 約 13cm の柱状の埋土が認められる。

出土遺物：埋土 1 層上層より弥生時代中期後半栗林 1 式壺胴部小片、先端に敲打痕のある棒状の敲石 (19) が出土している。

**SK291** (第59図、PL9・10)

位置：I X12 グリッド 規模：長軸 100.0cm × 短軸 58.0cm × 深さ 55.0cm 平面形：楕円形

長軸方位：N56° E

検出：III b 層掘削後、IV a 層下部にて楕円形の黒褐色の落ち込みを検出。

構造：長軸方位が等高線に直行する形で北東方向を示す。断面形状は深さのあるトライ状を呈し、長軸方向の北東側下部がややオーバーハングする。土坑底面中央部に逆茂木状の痕跡がみられ、深さ 16cm を測る。西側縁に段差があり、逆茂木の抜き取り痕跡であろうか。

出土遺物：2 層中位より炭化物 (H24 分析 No.17) が出土し、AMS 法による C14 年代測定の結果、 $5,220 \pm 30$ yrBP の値が得られた。

所見：本跡は、形状、規模、逆茂木痕跡、さらに C14 年代測定の結果から、縄文時代前期の落し穴の可能性が考えられる。

**SK305** (第60図)

位置：I X02・03 グリッド 規模：長軸 78.0cm × 短軸 76.0cm × 深さ 11.0cm 平面形：円形

検出：表土掘削後、V 層上面にて円形の暗褐色の落ち込みを検出。

重複関係：SD02 と重複するが新旧関係は不明。

構造：断面形状が浅い皿状を呈する。上層が削平され、実際の深さとは異なる。

所見：本跡は、SD02 の周溝内側北端に位置しており、SD02 の Pit1 埋土とも類似がみられ、SD02 内の施

設である可能性も考えられる。

**SK314** (第60図、PL10)

位置：I X02・07グリッド 規模：長軸188.0cm×短軸40.0cm×深さ6.0cm 平面形：不整形  
長軸方位：N3° E

検出：IV層掘削後、V層上面にて溝状に長い黒褐色の落ち込みを検出。

構造：断面形状は皿状を呈し、東側に隣接するSD02に沿う形で南北に延びる。

出土遺物：埋土より、弥生時代中期後半栗林1式の甕胴部極小破片が1点出土。

所見：本跡はSD02の西側に沿う形で位置し、SD02の付属施設的土坑とも考えられるが明確ではない。

**SK358** (第59図、PL10)

位置：I S06グリッド 規模：長軸148.0cm×短軸76.0cm×深さ67.0cm 平面形：楕円形  
長軸方位：N

検出：III層掘削後、IV層中にて楕円形の黒褐色の落ち込みを検出。

構造：長軸方位が等高線に沿う形で南北方位を示し、断面形状が深さのあるタライ状を呈する。

所見：本跡は、出土遺物がなく時期は明確ではないが、形状および規模からSK291と同様に縄文時代の  
落し穴の可能性がある。

**SK361** (第62図、PL11)

位置：I S16グリッド 規模：長軸91.0cm×短軸41.0cm×深さ32.0cm 平面形：不整形楕円形  
長軸方位：N55° E

検出：表土層掘削後、東側にやや傾斜するIV a層上面で不整形楕円形の黒色の落ち込みを検出。

構造：東側にやや傾斜する斜面に対して長軸方位を北へ35°振って掘削。底面の深さは検出面から南西側  
で22cm、北東側で10cmを測り、断面形状は底面がほぼ水平となるタライ状を呈する。底面には、焼土  
の堆積、被熱は確認できない。

出土遺物：1層下面から2層にかけて、やや大きさのある楕形滓(PL29-1)をはじめ、8点の鉄滓(1~8)  
に番号を付けて取上げた。楕形滓2点、粘土滓5点、金床石1点で、すべて鍛冶に関わる遺物である。そ  
のほか、自然礫の破片が3点出土した。また、埋土の篩による水洗選別により、少量の鉄滓、砂鉄を検出  
した。土器は、大形の壺破片(第83図78)をはじめ、弥生土器片が15片出土している。

時期：平安時代前期。

所見：本跡からは多くの鉄滓が出土したが、他遺構をはじめ今回の調査区からの鉄滓の出土はほかに1点  
も確認されていない。また、本跡出土土器は弥生土器のみであるが、2層出土炭化物(H24分析No.18)の  
AMS法によるC14年代測定の結果、 $1,140 \pm 30$ yrBPの値が得られ、10世紀中頃の平安時代前期を示す。  
東側8mにある第1検出面(III b層上面)出土のSF03の年代測定結果に近似している。本跡は平安時代  
前期の製鉄遺構のひとつである排滓土坑として捉えたいが、SF03はそれに関わる遺構の可能性もあるか  
もしれない。

**SK423** (第60図、PL10)

位置：I R17グリッド 規模：長軸72.0cm×短軸65.0cm×深さ20.0cm 平面形：楕円形

検出：III b層掘削後、IV a層上面にて楕円形の黒色の落ち込みを検出。

**構造:**断面形状はトライ状を呈する。平面形状が明確に確認できなかった部分には想定線を入れた。

**出土遺物:**埋土上層より栗林1式の無文の壺胴下半部(52)破片が集中して出土。そのほか、埋土より52と別個体の壺胴部破片と安山岩製のピエス・エスキューユ、二次加工がある剥片などが出土している。

**所見:**本跡は、遺物の出土状況から、栗林式期の埋没過程で遺物が廃棄された土坑か。

## 7 焼土跡(第62図、第11表、PL11)

焼土跡は、東区の第1検出面で、焼土ブロック、焼土粒、炭化物が集中する箇所を4か所確認した。明確な掘込みは認められないが、焼土粒が混入する範囲を遺構とした。出土層位等により平安時代の遺構と考える。

### S F 01(第62図、PL11)

**位置:**I X07グリッド **規模:**長軸84.0cm×短軸42.0cm×深さ12.0cm **平面形:**不整形

**検出:**Ⅲa層掘削後、Ⅲb層上面で焼土のブロックを複数箇所確認。竪穴住居跡などの別の遺構がみられないことから、単独の焼土跡として調査を行なう。

**構造:**焼土ブロックが不整形に堆積し、底面も凹凸がある。本跡の南西20cmにSF側に被熱痕のある角礫(長さ20cm)が位置する。

**出土遺物:**上層より、弥生時代中期後半栗林式の壺胴部小破片2点出土。

**所見:**焼土ブロックは堆積しているが、落ち込みに明確な被熱痕はみられない。本跡は、被熱痕のある角礫も含め、他所で生成された焼土が廃棄された痕跡を示す遺構であろう。出土遺物は弥生土器であるが、本跡は第1検出面で検出され、平安時代の焼土跡である。

### S F 02(第62図)

**位置:**I S22グリッド **規模:**長軸39.0cm×短軸30.0cm×深さ15.0cm **平面形:**楕円形

**検出:**Ⅲa層掘削後、Ⅲb層上面で焼土のブロックを複数箇所確認。単独の焼土跡として調査を行なう。

**構造:**焼土ブロックが不整形に堆積する。明確な火床、掘込みはない。中央上面にやや焼土の集中する箇所がある。縁に位置する角礫には被熱痕はない。

**所見:**焼土ブロックは堆積しているが、落ち込みに明確な被熱痕がみられない。本跡は第1検出面の遺構であり、出土遺物はないが平安時代の廃棄的な焼土跡であろう。

### S F 03(第62図、PL11)

**位置:**I S22グリッド **規模:**長軸144.0cm×短軸76.0cm×深さ12.0cm **平面形:**不整形

**検出:**Ⅲa層掘削後、Ⅲb層上面で焼土のブロックと2点の炭化材を確認。いずれも長さ40cm前後、幅10cm前後の大形の炭化材である。竪穴住居跡等の遺構が確認できないことから、単独の焼土跡として調査した。

**構造:**炭化材と焼土ブロックの集積遺構である。明確な火床、掘込みなどを確認することはできなかった。

**出土遺物:**炭化材と焼土に伴って黒色土器A塊の坏底部～高台部が出土。そのほか壺胴部破片が出土する。

**時期:**平安時代前期を推定。

**所見:**本跡出土の炭化材C2、C3について、AMS法によるC14年代測定を行ない、C2-1の試料(H24分析No.10)で1,170±30yrBP、C3-1の試料(H24分析No.11)で1,150±30yrBPの値を得た。9世紀中頃の平安時代前期の年代値である。本跡西側8mに位置する鉄滓の出土したSK361は、C14年代測定で50



年ほど新しい年代値が出ている。本跡との直接の関連は明確ではないが、ほぼ同時期の遺構であろう。本跡の掘込みは明確ではなく、斜面上部にあった遺構が削平され、焼土および炭化材が再堆積した可能性も考えられる。本跡が製鉄に関わる遺構であるかは判断できないが、検出面、出土遺物から平安時代前期の焼土跡と考える。

#### S F 04 (第62図)

位置：I S16 グリッド 規模：長軸 68.0cm × 短軸 44.0cm × 深さ 10.0cm 平面形：不整形

検出：Ⅲ a 層掘削後、Ⅲ b 層上面で焼土ブロックを複数箇所確認。単独の焼土跡として調査を行なう。

構造：焼土ブロックが不整形に堆積する。明確な火床、掘込みはない。

時期：平安時代前期。

所見：焼土ブロックは堆積しているが、落ち込みに明確な被熱痕はみられない。本跡は第1検出面の遺構であり、出土遺物はないが平安時代前期の廃棄的な焼土跡と考えられる。

### 8 不明遺構 (第63図、第12表、PL11)

性格不明遺構 (SX) は、西区、東区で8基を調査した。性格、所在時期については明確ではないが、層位、出土遺物等から弥生時代中期後半以前の風倒木痕の可能性が高い。観察記録等は、第12表にまとめる。なお、SX01～08の遺構図は第63図に、SX01、05、08の遺構写真についてはPL11に掲載する。

#### 註

- 1) 竪穴住居跡の名称については、文化庁文化財記念物課発行の「発掘調査の手引き」で、従来「竪穴住居(址、跡)」と呼称していたものについて、「それらが必ずしも居住施設とは限らないこと、掘立柱建物や礎石建物などの建築学用語との整合を図る必要から」、「竪穴建物」とすることが示されている。一方、県埋文センターの「遺跡調査の方針と手順」では「竪穴住居跡」の用語を用いており、住居の機能が確認できない竪穴を「竪穴状遺構」としている。また、学史的に「竪穴住居跡」は学術用語として用いられてきたと理解している。将来的には「竪穴建物跡」の用語に統一すべきであると考えるが、今回調査した遺構は炉跡等から居住施設と推定されることから、本書ではこれらを考慮し、「竪穴住居(跡)」の用語を用いた。
- 2) 本跡は、北陸地方に類例が求められる弥生時代中期後半の亀甲形掘立柱建物跡との関連を追究すべき資料である。「本来はいわゆる平地建物跡の周溝が存在した可能性がある。」(2012.6.28 石川県埋文センター久田正弘主幹の指導)
- 3) 「溝に立板、網代壁を立てて、その外側に土盛りの壁(周堤)を築いたと思われる。」(同上)
- 4) 「周溝は、土坑を巡らす土坑式と周溝式に大別される(周溝式は溝幅100cm前後の広溝式と狭溝式に分類)。」(岡本2003)
- 5) 「…光合成回路に基づいて食用植物を分類すると、イネ、ムギ等の穀物やクリ、クルミ等の木本、ヤマノイモ、ソバなどそのほとんどはC3植物であり…」(赤澤ほか1993:446,447)

#### 引用・参考文献

赤澤 威、米田 稔、吉田邦夫1993「北村縄文人骨の同位体食性分析」『北村遺跡 本文編』長野県埋文センター発掘調査報告書14:445-468

上坂誠次、上野 章1968『高岡市石塚遺跡発掘調査概報』(オジャラ3)

岡本淳一郎1997「『周溝をもつ建物』について」『埋文文化財調査概要-平成8年度 富山県文化振興財団埋文文化財調査事務所

岡本淳一郎2003「『周溝をもつ建物』の基礎的研究」『張気楼』富山大学考古学研究室:123-152

笹澤正志2012「下谷地遺跡の集落構造について」『新潟考古』23:37-54

高橋 保1979「遺構の性格について」『下谷地遺跡』新潟県教育委員会:41-44

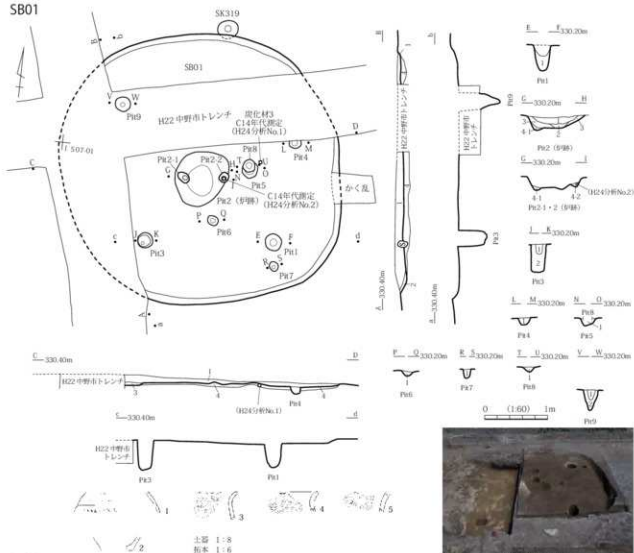
中野市教育委員会1997『栗林遺跡発掘調査報告書』

富山県射水市教育委員会2007『高島A遺跡発掘調査報告-射水市立新湊南部中学校用地造成に伴う埋文文化財発掘調査-』

- 富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2006 『下老子笹川遺跡』富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
- 長瀬 出 2000 「豊島馬場遺跡における「方形周溝墓」の再検討」『法政考古』第26集 法政考古学会：1-26
- 長瀬 出 2003 「南関東地方における「周溝をもつ建物」の検討～東京都北区豊島馬場遺跡の再検討を中心に～」『法政考古』第30集 法政考古学会：205-223
- 長野県埋蔵文化財センター 1998 『篠ノ井遺跡群・石川条里遺跡・築地遺跡・於下遺跡・今里遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 33
- 長野県埋蔵文化財センター 2000 『松原遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 36
- 浜崎悟司 1993 「加賀における集落構成要素・加賀の集落構造の推移」『東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会：105-112
- 肥後弘幸 1994a 「墓壇内破砕土器供献（上）～近畿北部弥生墳墓土器供献の様相～」『みずほ』12：18-23
- 肥後弘幸 1994b 「墓壇内破砕土器供献（下）～近畿北部弥生墳墓土器供献の様相～」『みずほ』13：12-17
- 村上慈通、山村芳貴 2003 「農耕具」『考古学資料大観 第7巻 弥生・古墳時代 鉄・金銅製品』小学館：265-271
- 吉田秀則 1990 「滋賀県下の方形周溝墓の“供献土器”について」『紀要』3 滋賀県文化財保護協会：20-33

## 1 堅穴住居跡

SB01



【説明】

- 1: 黒褐色 (Hae10YR2-2) 粘土質シルト。しまりかなり良く粘性や強い。均一な層であり、出入物少ない。土器片、製片散在。
- 2: 黒褐色 (Hae10YR2-3) 粘土質シルト。しまりやや良く粘性や強いが、1層より灰色。φ5～10mmの地山褐色ブロック25%混入。弊害に由来した土であろう。
- 3: 黒褐色 (Hae10YR2-2) 粘土質シルト。しまりかなり良く粘性強い。1層に類似するが、下層を中心にφ5～10mmの暗褐色シルトブロック10～15%混入。4層の粘床土とはブロックの大きさ、面まで区別される。
- 4: 黒褐色 (Hae10YR2-3) 粘土質シルト。しまりかなり良く粘性強い。上層より砂質は強い。φ20～30mmの暗褐色シルトブロック。しまった状態で30～40%混入。粘床土。

Pit1

1: 黒褐色 (Hae10YR2-3) 粘土質シルト。しまり普通で粘性強い。中野市試掘で上層崩壊。

Pit2 (9層)

1: 黒色 (Hae10YR2-1) 粘土質シルト。しまり普通で粘性強い。5～10mmの炭化材。炭化殻跡が込みむように20～30%混入。φ10～20mmの黄褐色シルト下層中心に10～20%混入。

2: 黒褐色 (Hae10YR3-1) 粘土質シルト。しまり1層より良く、砂質強く粘性や強い。φ10mmの黄褐色シルト20%混入。

3: 黒褐色 (Hae10YR3-2) 粘土質シルト。しまり2層と同じく。粘性やや弱く砂質シルトに近い。φ20～50mmの黄褐色シルト30～40%混入。

4,1-2: 黒褐色 (Hae10YR3-2) 砂質シルト。しまり悪く粘性や弱い。1,2より2が明るい色調。φ5～10mmの炭化材1%混入。

Pit3

1: 黒褐色 (Hae10YR2-2) 粘土質シルト。しまり普通で粘性強い。中央10cm幅で柱痕跡状に厚む。2層との境に黄褐色シルト混入。

2: 暗褐色 (Hae10YR3-3) 粘土質シルト。しまり普通で粘性強い。φ20～30mmの黄褐色シルトブロック30%混入。下層、粘性強くなり、黄色も増す。

Pit4

1: 黒褐色 (Hae10YR2-2) 粘土質シルト。しまり良く粘性強い。黄褐色シルト。しみ込むように10%混入。

Pit5

1: 暗褐色 (Hae10YR3-2) 粘土質シルト。しまり普通で粘性強いが、シルト質強い。地山土 (にぶい黄褐色シルト) 下層中心に30～40%混入。

Pit6

1: 暗褐色 (Hae10YR3-2) 粘土質シルト。しまり普通で粘性強いが、シルト質強い。地山土 (にぶい黄褐色シルト) 下層中心に15～20%混入。

Pit7

1: 暗褐色 (Hae10YR3-2) 粘土質シルト。しまり普通で粘性強いが、シルト質強い。地山土 (にぶい黄褐色シルト) 20%混入。Pit5より黒味を帯びる。

Pit8

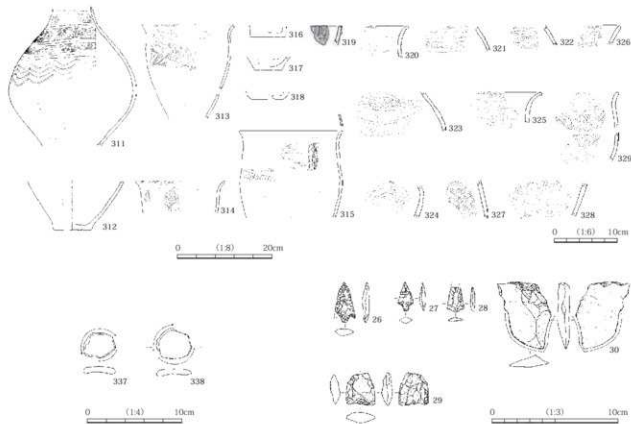
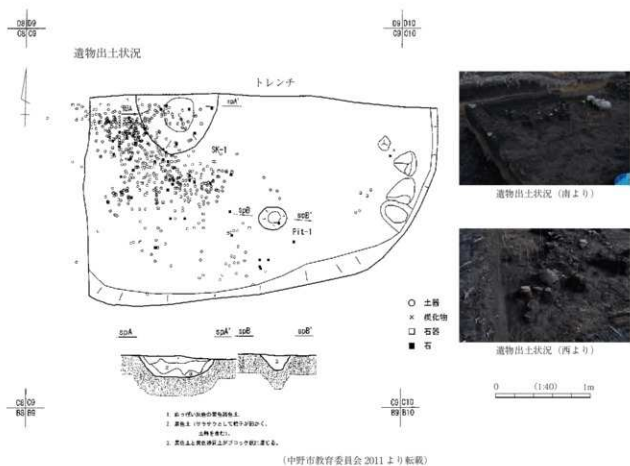
1: 黒褐色 (Hae10YR2-2) 粘土質シルト。しまり普通で粘性強い。底面近く、にぶい黄褐色シルトブロック5%混入。

Pit9

1: 黒褐色 (Hae10YR3-2) 粘土質シルト。しまり普通で粘性強い。にぶい黄褐色シルトブロック10～15%混入。

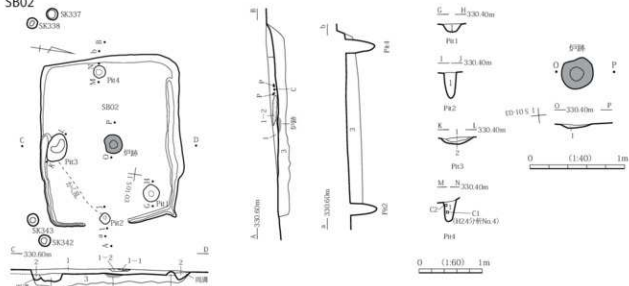
2: 暗褐色 (Hae10YR3-3) 粘土質シルト。しまり普通で粘性強い。にぶい黄褐色シルトブロック30%混入。

第45図 SB01 遺構図



第46図 SBO1 遺構図・出土遺物 (H22 中野市試掘調査分)

SB02



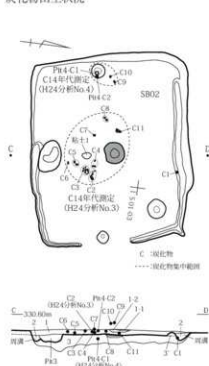
【SB02】

- 1: 黒色 (Hae10YR2/1) 砂質シルト。しまり良く、南側がより良く粘性は弱い。φ 3mm以下の白色砂粒、橙色砂粒5%混入。φ 10 - 20mmの砂礫、南側を中心に5%混入、南西側に炭化材集中。
- 1-1: 焼土。焼～明褐色 (Hae7.5YR6.6 - 5/6) 砂質シルト。
- 1-2: 焼土混入土。黒褐色 (Hae10YR2/2) 粘土質シルトに焼～明褐色 (Hae7.5YR6.6 - 5/6) 砂質シルトが30 - 40%混入。
- 2: 黒褐色 (Hae10YR2/2) 砂質シルト。しまり良く粘性やや強い。φ 5 - 20mmの灰青褐色シルトブロック15%混入。φ 1 - 5mmの炭化物粒2%混入。陶器部。
- 陶器部内側壁: 黒褐色 (Hae10YR2/2) 砂質シルト。しまり良く粘性は強い。灰青褐色シルト30 - 40%混入。
- 3: 1: 黒褐色 (Hae10YR2/2) 砂質シルト。しまりかなり良く粘性やや強い。灰青褐色シルトブロック20 - 25%混入。掘方上。
- 2: 黒褐色 (Hae10YR2/2) シルト。しまりかなり良く粘性やや強い。灰青褐色シルトブロック15 - 20%混入。粘土部の一部であらう。

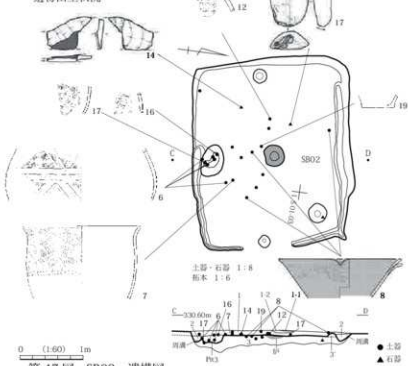
99礫

- Ph1: 黒色 (Hae10YR17/1) 粘土質シルト。しまり普通で粘性は強い。φ 20mmの灰青褐色シルトブロック (陶床土) 20%混入。
- Ph2: 黒褐色 (Hae10YR2/2) 粘土質シルト。しまりやや良く粘性は強い。φ 20mmの灰青褐色シルトブロック下層中心に15%混入。
- Ph3: 黒褐色 (Hae10YR2/2) 粘土質シルト。しまり良く粘性は強い。φ 20mmの灰青褐色シルトブロック腰部中心に20%混入。南側中心に底面から上50mmに炭分集積あり。
- Ph4: 1: 黒褐色 (Hae10YR2/2) 粘土質シルト。しまり良く粘性は強い。φ 1mmの白色砂粒1%、灰青褐色シルトブロック10%混入。
- 2: 黒褐色 (Hae10YR2/2) 粘土質シルト。しまり良く粘性は強い。灰青褐色シルトブロック30 - 40%混入。φ 5mmの炭化物粒1%混入。
- Ph4: 1: 黒褐色 (Hae10YR2/2) 粘土質シルト。しまり良く粘性は強い。50mm厚の層間に5mm厚の薄い灰青褐色シルトを積み互層となる。人為的に堆積した層であらう。下層にφ 20 - 30mmの炭化物 (H) あり。上層東側にも炭化材あり。底面から上層50mmに炭分集積あり。

炭化物出土状況



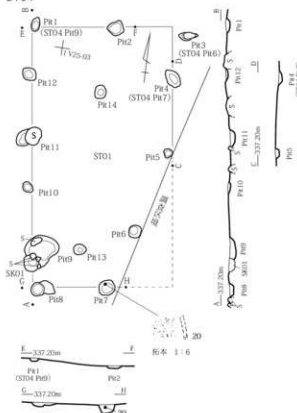
遺物出土状況



第47図 SB02 遺構図

## 2 掘立柱建物跡

## ST01



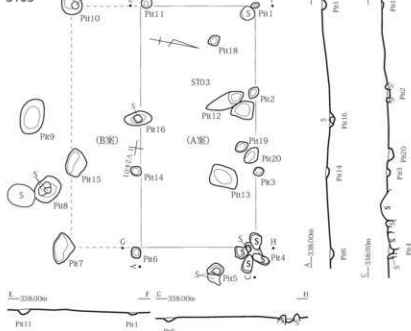
## 【ST01】

Ph1: 黒褐色 (Hae10YR2.2) 砂質シルト。しまりやや良い。黄色・白色スコリアは少ない。  
Ph2: 黒褐色 (Hae10YR2.2) 砂質シルト。φ 1mm 以下の黄色・白色スコリア、黒色粒状物を含む。

Ph4, 5, 8 ~ 12: 黒色 (Hae10YR2.1) シルト。しまりやや良く粘性やや強い。φ 1mm 以下の黄色・白色スコリア、黒色粒状物を含む。

Ph7: 黒色 (Hae10YR2.1) シルト。しまり悪く粘性弱い。スコリア、礫等はほとんど含まない。

## ST03



## 【ST03】

Ph1, 9, 20: 黒色 (Hae10YR2.1) 粘土質シルト。しまりやや良く粘性強い。φ 3 ~ 4mm のマンガン少量混入。

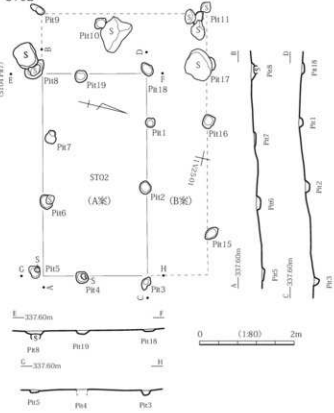
Ph2 ~ 4, 6, 11, 14 ~ 16: 黒色 (Hae10YR2.1) シルト。しまり悪く粘性弱い。スコリア、礫等はほとんど含まない。

Ph7, 10: 黒色 (Hae10YR2.1) シルト。しまりやや良く粘性やや強い。φ 1mm 以下の黄色・白色スコリア、黒色粒状物を含む。



ST03 完掘 (内より)

## ST02



## 【ST02】

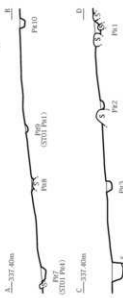
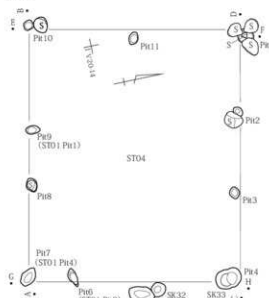
Ph1, 2, 3, 6, 9, 15, 17: 黒色 (Hae10YR2.1) シルト。しまり悪く粘性弱い。スコリア、礫等はほとんど含まない。

Ph4, 5, 8: 黒色 (Hae10YR2.1) シルト。しまりやや良く粘性やや強い。φ 1mm 以下の黄色・白色スコリア、黒色粒状物を含む。

Ph7, 10, 11, 16, 18, 19: 黒褐色 (Hae10YR2.2) 砂質シルト。しまりやや良い。φ 1mm 以下の黄色・白色スコリア、黒色粒状物、長石を含む。

第48図 ST01 ~ 03 遺構図

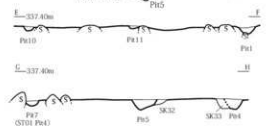
ST04



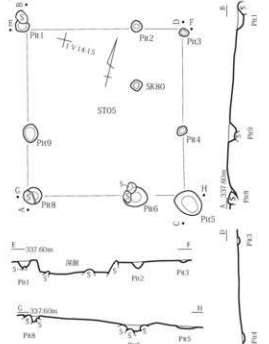
【ST04】  
 Pk1, 3, 4, 5, 8, 10: 黒褐色 (Hae10YR2-2) 砂質シルト。しまりやよい。φ 1mm 以下の黄色・白色スコリア、黒色粘状物、長石を含む。  
 Pk2: 黒色 (Hae10YR2-1) シルト。しまり悪く粘性弱い。スコリア、礫等はほとんど含まない。  
 Pk7, 11: 黒色 (Hae10YR2-1) シルト。しまりやや良く粘性やや強い。φ 1mm 以下の黄色・白色スコリア、黒色粘状物を含む。  
 Pk9: 黒褐色 (Hae10YR2-2) 砂質シルト。しまりややよい。黒土が露状に入る。黄色・白色スコリアは少ない。



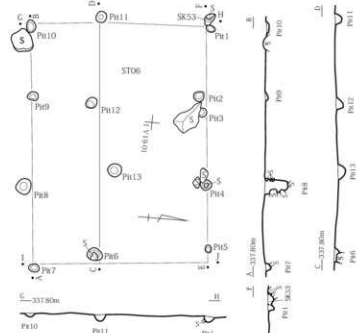
ST04 柱穴完掘 (東より)



ST05



ST06



【ST05】

Pk1, 2, 3, 4, 8: 黒褐色 (Hae10YR2-2) 砂質シルト。しまりややよい。φ 1mm 以下の黄色・白色スコリア、黒色粘状物、長石を含む。  
 Pk5, 6: 黒色 (Hae10YR2-1) シルト。しまり悪く粘性弱い。スコリア、礫等はほとんど含まない。  
 Pk9: 黒色 (Hae10YR2-1) シルト。しまりやや良く粘性やや強い。φ 1mm 以下の黄色・白色スコリア、黒色粘状物を含む。

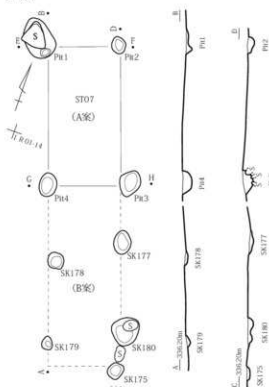
【ST06】

Pk1, 2, 3, 8: 黒色 (Hae10YR2-1) シルト。しまり悪く粘性弱い。スコリア、礫等はほとんど含まない。  
 Pk4, 6, 12, 13: 黒褐色 (Hae10YR2-2) 砂質シルト。しまりややよい。φ 1mm 以下の黄色・白色スコリア、黒色粘状物、長石を含む。  
 Pk5, 7: 黒色 (Hae10YR2-1) シルト。しまりやや良く粘性やや強い。φ 1mm 以下の黄色・白色スコリア、黒色粘状物を含む。  
 Pk9, 10, 11: 黒褐色 (Hae10YR2-2) 砂質シルト。しまりややよい。黄色・白色スコリアは少ない。



第49図 ST04～06 遺構図

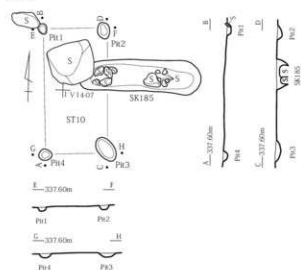
## ST07



## [ST07]

Ph1: 3, 4, SK175, 177-180: 黒褐色 (Hae10YR2-2) 砂質シルト。しまりやや良い。黄色-白色スコリアは少ない。  
Ph2: 黒色 (Hae10YR2-1) シルト。しまり強く粘性強い。スコリア、礫等はほとんど含まない。

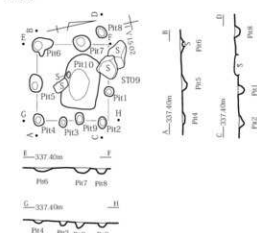
## ST10



## [ST10]

Ph1: 黒色 (Hae10YR2-1) シルト。しまり強く粘性強い。スコリア、礫等を含まない。  
Ph2: 4: 黒褐色 (Hae10YR2-2) 砂質シルト。しまりやや良い。φ1mm以下の黄色-白色スコリア、黒色粒状物、長石を含む。  
Ph3: 黒色 (Hae10YR2-1) シルト。しまりややよく粘性やや強い。φ1mm以下の黄色-白色スコリア、黒色粒状物を含む。

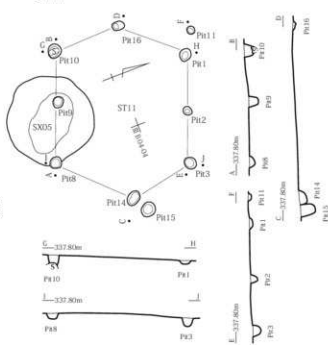
## ST09



## [ST09]

Ph1: 黒色 (Hae10YR2-1) シルト。しまり強く粘性強い。スコリア、礫等はほとんど含まない。  
Ph2: 3, 5, 6, 9: 黒褐色 (Hae10YR2-2) 砂質シルト。しまりやや良い。φ1mm以下の黄色-白色スコリア、黒色粒状物、長石を含む。  
Ph4, 8: 黒褐色 (Hae10YR2-2) 砂質シルト。しまりやや良い。黄色-白色スコリアは少ない。  
Ph7: 黒色 (Hae10YR2-1) シルト。しまりややよく粘性やや強い。φ1mm以下の黄色-白色スコリア、黒色粒状物を含む。

## ST11



## [ST11]

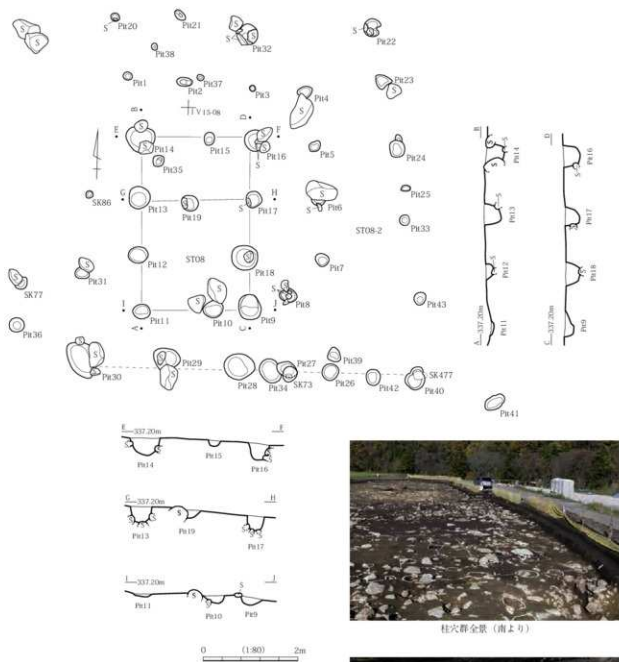
Ph1 - 3, 8-10, 14, 15: 黒色 (Hae10YR2-1) シルト。しまり強く粘性強い。スコリア、礫等はほとんど含まない。  
Ph11: 黒褐色 (Hae10YR2-2) 砂質シルト。φ1mm以下の黄色-白色スコリア、黒色粒状物、長石を含む。  
Ph16: 黒褐色 (Hae10YR2-2) 砂質シルト。しまりやや良い。黄色-白色スコリアは少ない。

0 (180) 2m

第50図 ST07、09～11 遺構図



ST08



柱穴群全景（南より）



柱穴群全景（東より）

【ST08】

Ph9, 10, 12, 17, 18, 40：黒色（Hae10YR2/1）シルト。しまり厚く粘性弱い。スコリア、礫等はほとんど含まない。

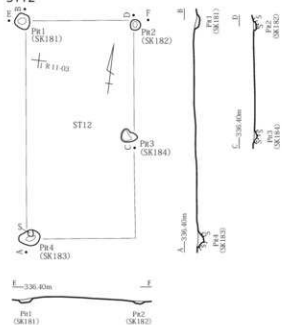
Ph11, 13, 15：黒褐色（Hae10YR2/2）砂質シルト。φ1mm以下の黄色・白色スコリア、黒色粒状物、灰石を含む。

Ph14, 26～30, 31, 42：黒色（Hae10YR2/1）シルト。しまり・粘性やや強い。φ1mm以下の黄色・白色スコリア、黒色粒状物を含む。

Ph16, 19：黒褐色（Hae10YR2/2）砂質シルト。しまりやや強い。黄色・白色スコリアは少ない。

第51図 ST08 遺構図

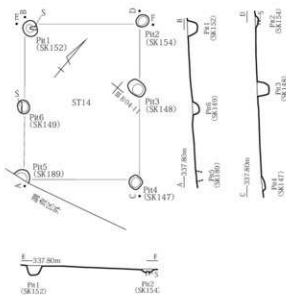
## ST12



## 【ST12】

Pn1～4：黒色 (Hae10YR17/1) 粘土質シルト。しまり強く粘性強い。  
 $\phi$  2mm の黄褐色 (Hae10YR7/6) 微粒子を微量混入。小礫の混入はほとんどなし。

## ST14



## 【ST14】

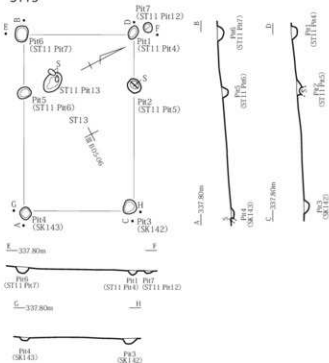
Pn1, 3, 6：黒色 (Hae10YR17/1) シルト。しまり強く粘性強い。スコリア、礫等はほとんど含まない。

Pn2, 4：黒褐色 (Hae10YR2/2) 砂質シルト。しまりやや良い。  
 $\phi$  1mm 以下の黄色・白色スコリア。黒色粒状物、長石を含む。

Pn5：黒色 (Hae10YR17/1) シルト。しまり・粘性やや良い。  
 $\phi$  1mm 以下の黄色・白色スコリア。黒色粒状物を含む。

0 (1:80) 2m

## ST13



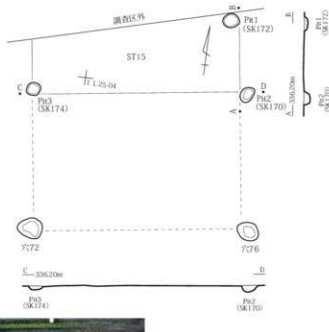
## 【ST13】

Pn1～3, 5, 6 (Hae10YR2/1) シルト。しまり強く粘性強い。スコリア、礫等はほとんど含まない。

Pn4：黒褐色 (Hae10YR2/2) 砂質シルト。しまりやや良い。 $\phi$  1mm 以下の黄色・白色スコリア。黒色粒状物、長石を含む。

Pn7：土層様記なし。

## ST15



## 【ST15】

Pn1, 2：黒色 (Hae10YR17/1) シルト。しまり強く粘性強い。スコリア、礫等はほとんど含まない。

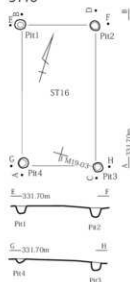
Pn3：黒褐色 (Hae10YR2/2) 砂質シルト。しまりやや良い。 $\phi$  1mm 以下の黄色・白色スコリア。黒色粒状物を含む。

穴72, 76：土層様記なし。

ST15 完掘 (南より)

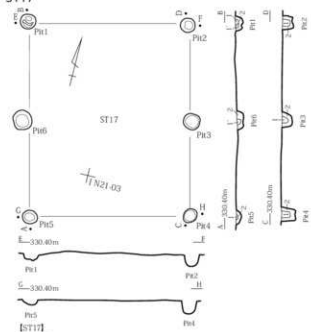
第52図 ST12～15 遺構図

ST16



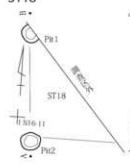
【ST16】  
Ph1：黒色 (Haе10YR1.7/1) 粘土質シルト。Ⅱa層と同じ。  
Ph2：黒色 (Haе2.5Y2/1) 砂質シルト。砂礫含む。Ph3、4と同じものがセライ化。  
Ph3、4：黒色 (Haе10YR2/1) 粘土質シルト。砂礫含む。Ⅱb層上部と同じ。

ST17



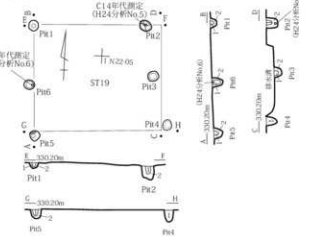
【ST17】  
Ph1～6  
1：黒色 (Haе10YR2/1) 粘土質シルト。しりり普通で粘性や強い。Ph3、4はやや黄色味がかり Ph2よりしりりやよい。Ph1はしりりよく粘性弱い。柱礎跡。  
Ph2：黒色 (Haе10YR2/2) 粘土質シルト。1層より砂質強く、にぶい黄褐色シルト3%混入。  
Ph3：黒色 (Haе10YR2/2) 粘土質シルト。シルト質砂に近い。掘込み面ににぶい黄褐色 (Haе10YR3/2) シルト一面跡。断面を中心にして20～30%混入。Ph6ににぶい黄褐色シルトの混入30～40%に増加。下部に褐色の炭粉の集積あり。

ST18



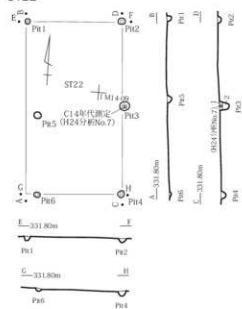
【ST18】  
Ph1  
1：黒褐色 (Haе10YR2/2) 粘土質シルト。しりりよく粘性や強い。φ1mmのにぶい黄褐色シルト2%混入。柱礎跡。  
2：黒褐色 (Haе10YR2/2) 粘土質シルト。砂質シルトに近い。1層より砂質強く、粘性なくなる。下層ににぶい黄褐色シルト混入。  
Ph2  
1：Ph1と同じだが混入物混入粘性強くなる。Ph1より粘着な層。柱礎跡。  
2：Ph1より混入物混入 (20%)。

ST19



【ST19】  
Ph1  
1：黒褐色 (Haе10YR2/2) 砂質シルト。しりりよく粘性強い。φ5mmのにぶい黄褐色シルト3%。やや黄色味を帯びる。柱礎跡。  
2：黒褐色 (Haе10YR2/2) 粘土質シルト。1層より粘性強い。にぶい黄褐色シルト混込みむように20%混入。  
Ph2  
1：黒褐色 (Haе10YR2/2) 粘土質シルト。Ph1よりしりり粘性強い。柱礎跡。  
2：Ph1より粘性強くなる。西・東壁跡。にぶい黄褐色シルトブロックの混入多い (30%)。  
Ph3  
1：黒褐色 (Haе10YR2/2) 粘土質シルト。しりり普通で砂質強いが粘性強い。φ5mmのにぶい黄褐色シルト7%混入。柱礎跡。  
2：にぶい黄褐色に近い。砂質強いが粘性強い。にぶい黄褐色シルト混込みむように3%混入。  
Ph4  
1：黒褐色 (Haе10YR2/2) 粘土質シルト。しりりややよく粘性強い。φ5mmの炭化物粉1%混入。跡の断面のため明確ではないが、中央が13cm幅で意味が強く柱礎跡となろう。周辺は黒褐色 (Haе10YR2/2) とよりV層が混入した層となる。  
Ph5、6  
1：黒褐色 (Haе10YR2/2) 粘土質シルト。しりり普通で粘性や強い。柱礎跡。  
2：黒褐色 (Haе10YR2/2) 粘土質シルト。やや砂質強く、1層よりしりりよい。にぶい黄褐色シルト混込みむように15%混入。底部に炭粉の集積あり。

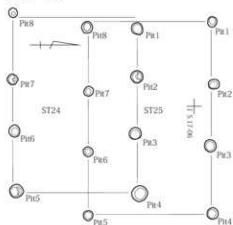
ST22



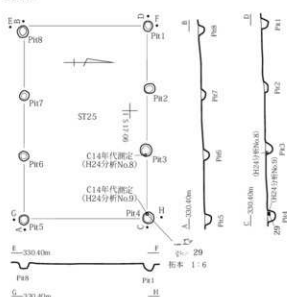
【ST22】  
Ph1、5：黒褐色 (Haе10YR2/2) 砂質シルト。Ⅱa層と同じ。  
Ph2：黒褐色 (Haе10YR3/2) シルト。色調明るい。  
Ph3  
1：Ph1と同じ。  
2：黒色 (Haе10YR2/1) 砂質シルト。Ⅱb層に近い。  
Ph4：Ph1と同じ。若干粘性強い。  
Ph6：Ph1と同じ。掘込み浅く不明確。

第53図 ST16～19、22 遺構図

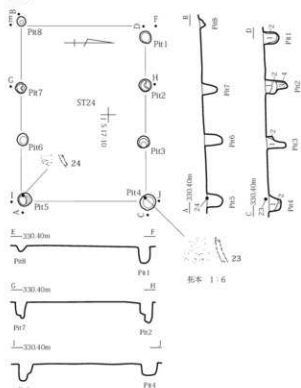
## ST24・25



## ST25



## ST24



## [ST24]

Pit1

1: 黒色 (Hae10YR2/1) 粘土質シルト。目b層と同じ。

2: 黒褐色 (Hae10YR2/2~2/3) シルト。嵐山 (V a層) との境界層。

Pit2

1: 黒褐色 (Hae10YR2/2) 粘土質シルト。目b層主体にV a層 (黄褐色シルト) 混入。Pit1より明るい色調。

2: 1層主体にV a層アロク状に混入。しまり悪い。

3: 黒褐色 (Hae10YR2/2) 粘土質シルト。V c層アロク状に混入 (2層のV a層アロク状より小さい)。2層よりしまり悪い。

4: 褐色 (Hae10YR4/6) シルト質砂。V c層主体に1層 (目b層) 20%混入。境界層。

Pit3

1: Pit1層と同じ。

2: Pit1層と同じ。

Pit4

1: Pit1層と同じ。

2: Pit2層と同じ。

Pit5, 6, 8: Pit2層と同じ。

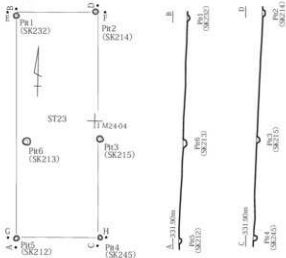
Pit7: Pit1層と同じ。

## [ST25]

Pit1~Pit8

1: 黒褐色 (Hae10YR2/2) シルト。しまり悪い。φ 0.5mm以下の鉱石様の混晶物20%混入。φ 5~1mmの黒色粒状物5%混入。目bと目a層の中間層を主体にV a層(嵐山)土がブロック状に混入。

## ST23



## [ST23]

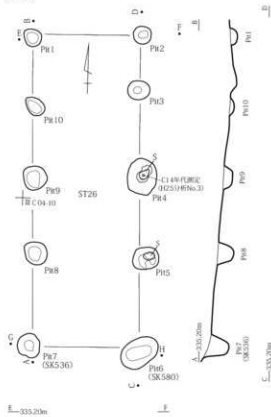
Pit1~6

1: 黒褐色 (Hae10YR2/2) 砂質シルト。しまりやや悪い。φ 1mm以下の黄色・白色スコリア。黒色粒状物を含む。Pit3, 6は境界。

0 (1:80) 2m

第54図 ST23~25 遺構図

ST26



【ST26】

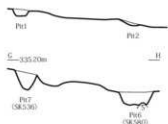
- Ph1, 10: 黒色 (Hae10YR17/1) シルト。しまりやや悪く粘性弱い。粗粒砂少量混入。風化層・白色粒子少量混入。
- Ph2: 地山の礫層。
- Ph3: 礫層。
- Ph4: 黒褐色 (Hae10YR2/3) シルト。細礫(準円礫)多く混入。下部にφ30mm前後の暗褐色(Hae10YR3/4)シルト。細礫20%程度(地山層ブロック)混入。
- Ph5: 黒色 (Hae10YR17/1) シルト。しまりやや悪く粘性弱い。粗粒砂(白)。細礫少量混入。中礫10%程度混入。
- Ph6: 黒色 (Hae10YR2/1) 粘土質シルト。しまり普通で粘性やや強い。φ20mm~70mm礫10%混入。
- Ph7: 黒色 (Hae2.5YR2/1) 粘土質シルト。しまりやや悪く粘性やや強い。φ20~50mm礫5%混入。
- Ph8: Ph1と同じ。φ2~50mmの円礫5%程度混入。
- Ph9: Ph1と同じ。φ3~50mmの円礫10%程度混入。



ST26 完掘 (Ph7-7 除く、南より)



Ph6 完掘 (北より)



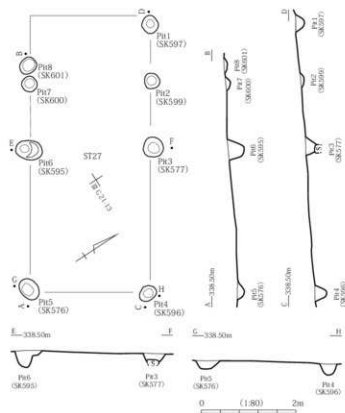
【ST27】

- Ph1: 黒褐色(Hae10YR3/1)シルト質砂。しまりやや悪い。ボツボツしている。
- Ph2: 黒褐色(Hae10YR3/1)シルト。しまり悪く粘性弱い。ボツボツしている。
- Ph3: 黒色 (Hae10YR2/1) シルト。しまり普通で粘性弱い。φ30mmの礫少量混入。
- Ph4: 黒色 (Hae10YR2/1) 砂質シルト。しまりやや悪い。小礫少量含む。ボツボツしている。
- Ph5: 黒褐色 (Hae10YR3/1) 砂質シルト。しまり普通で粘性弱い。
- Ph6: 黒色 (Hae10YR3/1) シルト質砂。しまり悪い。ボツボツしている。
- Ph7: 灰黄褐色 (Hae10YB4/2) シルト質砂。しまり普通で粘性弱い。
- Ph8: 黒褐色 (Hae10YR3/1) シルト質砂。しまりやや悪く粘性弱い。



ST27 完掘 (南東より)

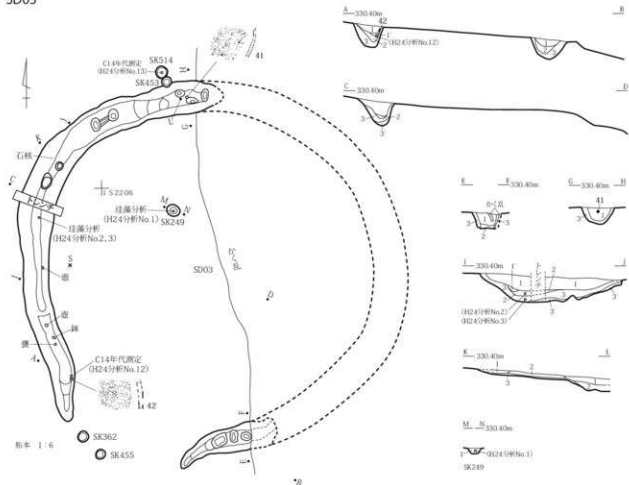
ST27



第55図 ST26、27 遺構図



SD03



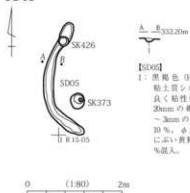
【SD03】

- 1: 黒色 (Hae10YR2-1) 粘土質シルト。しまり非常に悪くボロボロと崩れる。炭石のような微晶体 ( $\phi$  1mm 以下) 10%、粒状物 (黒色・ $\phi$  1mm 以下の磁石) 混入。柱 b 層とはほぼ同じだが、 $\phi$  12 ~ 10cm の等角錐が混入 (3%未満)。  
 F: 1層土主体に、暗褐色 (Hae10YR3-4) 円砂が塊状に混入。  
 2: 黒褐色 (Hae10YR2-2 ~ Hae7.5YR1.7/1) 粘土質シルト。しまり良い。長石様微晶体 ( $\phi$  1mm 以下) 15%、粒状物 (黒色・ $\phi$  1mm 以下の磁石) 15%混入。  
 3: 暗褐色 (Hae10YR3-2) 粘土質シルト。しまり悪い。2層と同様の微晶体・粒状物を混入。埋土と地山層 V a、V b 層 (上層は V b 層混入) の漸移層。  
 3': 暗褐色 (Hae10YR3-3) 砂。漸移層 (V c 層主体に 1 - 2層混入)。

【SK249】

- 1: 黒色 (Hae10YR2-2) 砂質シルト。しまり良く固い。粒状物 (黒色・ $\phi$  1mm 以下の磁石) 5%、(白色・ $\phi$  1mm 以下の砂粒) 3%混入。

SD05



【SD05】

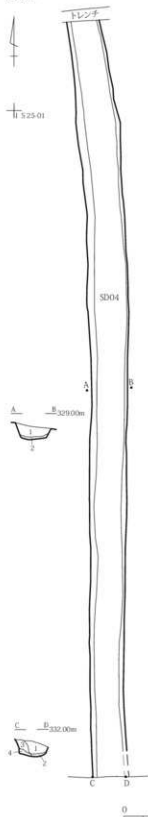
- 1: 黒褐色 (Hae10YR 2/3) 粘土質シルト。しまり良く粘性強い。 $\phi$  5 ~ 20mm の礫 10%、 $\phi$  2 ~ 3mm の白色砂粒 5 ~ 10%、 $\phi$  5 ~ 10mm の白い黄褐色シルト 10%混入。



SD03 検出状況 (西より)

第57図 SD03、05 遺構図

SD04



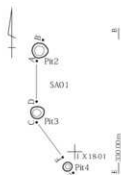
【SD04】

- 1: 黒褐色 (Hae10YR3-2) 砂質シルト。
- 2: 黒褐色 (Hae10YR2-2) 砂質シルト。1層
- 3: 2層に貫ち層が侵入した層。
- 4: 黒色 (Hae10YR2-1) 砂質シルト。しまり悪くもろい。長石種の珪藻類物を含む。

## 4 柵跡

SK472

SA01



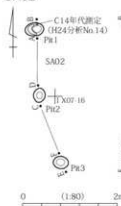
A-B 330.00m C-D 330.00m E-F 330.00m



【SA01】

- 1: 黒色 (Hae10YR2-1) 粘土質シルト。しまり良く粘性強い。φ2mmの白色スコリア5%混入。φ2-10mmの炭化物粒1%混入。
  - 2: 黒褐色 (Hae10YR3-2) 粘土質シルト。しまり良く粘性強い。にぶい黄褐色シルトφ20-30mmで30%混入。
- Profile Pk3:
- 1: 黒褐色 (Hae10YR3-1) 粘土質シルト。しまり良く粘性強い。φ1mm以下の橙・白色のスコリア7%混入。柱状跡。
  - 2: 黒褐色 (Hae10YR3-2) 粘土質シルト。しまり良く粘性強い。灰黄褐色シルトアロク20-30%混入。縦方土。
- Profile Pk4:
- 1: 黒褐色 (Hae10YR3-1) 粘土質シルト。しまり良く粘性やや強い。φ1-5mmの白色のスコリア7%。にぶい黄褐色シルトアロク10%混入。

SA02



A-B 330.00m C-D 330.00m E-F 330.00m

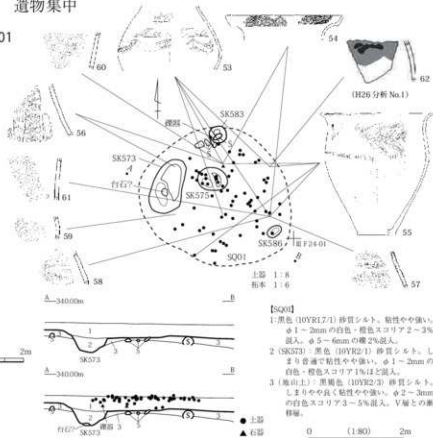


【SA02】

- 1: 黒褐色 (Hae10YR3-1) 粘土質シルト。しまり良く粘性強い。下部にφ1-2mmの炭化物粒1%。壁面にφ2-5mmの灰黄褐色 (Hae10YR4-2) シルトアロク10%混入。
  - 2: 黒褐色 (Hae10YR3-2) 粘土質シルト。しまり良く粘性1層より弱くなる。灰黄褐色シルトアロク20-30%混入。横断面に炭化物あり。
- Profile Pk2:
- 1: Pk1-1に同じ。φ1-2mmの白色・橙褐色スコリア2-3%混入。
  - 2: Pk1-2に同じ。
- Profile Pk3:
- 1: Pk1-1に同じ。φ1-2mmの白色・橙褐色スコリア2%。φ2-5mmの炭化物粒1%混入。
  - 2: Pk1-2に同じ。

## 5 遺物集中

SQ01



【SQ01】

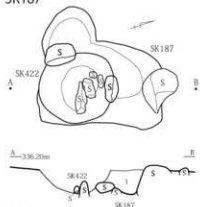
- 1: 黒色 (10YR1.7/1) 砂質シルト。粘性やや強い。φ1-2mmの白色・橙褐色スコリア2-3%混入。φ5-6mmの礫2%混入。
- 2 (SK573): 黒色 (10YR2-1) 砂質シルト。しまり普通で粘性やや強い。φ1-2mmの白色・橙褐色スコリア1%ほど混入。
- 3 (地山土): 黒褐色 (10YR3-2) 砂質シルト。しまりやや良く粘性やや強い。φ2-3mmの白色スコリア3-5%混入。厚層との境界跡。

第58図 SD04、SA01・02、SQ01 遺構図



6 土坑

SK187



【SK187】

1: 黒色 (Hae10YR17/1) シルト。しまり良く粘性強い。  
 φ2mmの黄褐色 (Hae10YR5/6) 粒子少量混入。小石は混入しない。

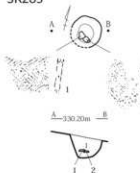
SK293



【SK293】

1: 黒褐色 (Hae10YR3/2) 粘土質シルト。しまりかなり良く粘性強い。灰青層シルト層状に20~30%混入。

SK285



【SK285】

1: 黒褐色 (Hae10YR2/2) 砂質シルト。しまり良く粘性やや強い。砂質やや強い。φ2~3mm以下の白色スコリア10%混入。

縮尺 1:6

SK291



【SK291】

1: 黒褐色 (Hae10YR2/2) 粘土質シルト。しまり良く粘性強い。φ2~3mmの白色スコリア3~10%混入。  
 2: 黒褐色 (Hae10YR2/2) 粘土質シルト。しまりやや強い粘性強い。白色スコリアない。  
 3: 黒褐色 (Hae10YR3/2) 粘土質シルト。しまり良く粘性強い。灰青層シルト。ブロック状に20%混入。  
 4: 黒褐色 (Hae10YR2/2) 砂質シルト。3層に比べしまり悪く粘性弱い。シルト質になる。

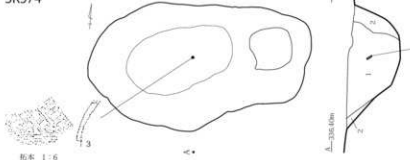
SK358



【SK358】

1: 黒褐色 (Hae7.5YR1/1) シルト質砂。しまり良く非常に固い。黒炭粉・白色粒子30%混入 (白色粒子少ない)。  
 2: 黒色 (Hae7.5YR2/1) 粘土質シルト。しまり良く固い。黒炭粉・白色粒子20~30%混入。北側底面近くに、φ30mmの地山礫7%混入。

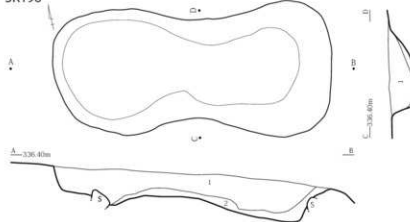
SK574



【SK574】

1: 黒色 (Hae10YR17/1) シルト。しまりやや良く粘性やや強い。φ3mmの白色粒子。φ5~8mmの風化礫少量。φ15~20mmの礫少量混入。  
 2: 黒褐色 (Hae10YR2/2) シルトと中粒砂の混在層。しまり悪く粘性弱い。地山の地層の一端で土が堆積し流入したもの。

SK196



【SK196】

1: 黒色 (Hae10YR17/1) 粘土質シルト。しまり良く粘性強い。φ1~5mmの白色・褐色スコリアア~25%混入。φ30mmの礫1%混入。  
 2: 黒褐色 (Hae10YR2/2) 粘土質シルト。しまり良く粘性強い。φ1~5mmの白色・褐色スコリア10%。φ20~30mmの礫30%混入。地山と1層の断層層。

0 (1.40) 1m

第59図 SK 遺構図(1)

SK69



【SK69】

1: 黒褐色 (Hae10YR2/2) 砂質シルト。φ 1mm 以下の黄色・白色スコリア、黒色粒状物、長石混入。

SK107



【SK107】

1: 黒褐色 (Hae10YR2/2) 砂質シルト。しまりやや良い。黄色・白色スコリア混入。

SK176



【SK176】

1: 黒色 (Hae10YR2/1) シルト。粘性・しまり悪い。スコリア、礫等はほとんど混入しない。

SK180



【SK180】

1: 黒褐色 (Hae10YR2/2) 砂質シルト。しまりやや良い。黄色・白色スコリア混入。

SK256



【SK256】

1: 黒褐色 (Hae10YR2/2) シルト質砂。φ 1mm の長石様の珪石物・砂礫等 10% 程度。褐色・白色スコリア 10% 混入。  
2: 黒褐色 (Hae10YR2/3) シルト質砂。珪石物、粒状物、スコリア等 1層と同様に混入。1層と地山 (B b-V a層) との境界線。  
3: 黒褐色 (Hae10YR2/2, 2/1 に近い) シルト質砂。1, 2, 4層にみられる粒状物はほとんど混入しない。粒礫と並われる。  
4: 黒褐色 (Hae10YR2/2) シルト質砂。珪石物、粒状物は 1層と同様に混入。スコリア (褐色・白色) 5% 混入。

SK289



【SK289】

1: 黒色 (Hae10YR2/1) 粘土質シルト。やや塊状強い。しまりやや良く粘性強い。1mm 以下の白色スコリア 3% 混入。  
2: 黒色 (Hae10YR2/2) 粘土質シルト。しまり良く粘性かなり強い。灰褐色シルト。フロック状に混入。掘方土。

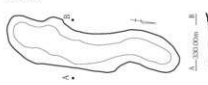
SK305



【SK305】

1: 暗褐色 (Hae10YR3/3) シルト質砂。φ 1mm 以下の長石様の珪石物と粒状物 (黒・白) を混入。

SK314



【SK314】

1: 黒褐色 (Hae10YR3/2) 粘土質シルト。しまりかなり良く粘性強い。灰褐色シルト。現状に 20~30% 混入。暗褐色気味で輪郭不明瞭。底面近く、壁面に近い黄褐色シルト 10%、φ 2~10mm の炭化物粒 1~2% 混入。

SK347



【SK347】

1: 黒褐色 (Hae10YR3/2) 粘土質シルト。しまり良く粘性やや強い。

SK360



【SK360】

1: 黒褐色 (Hae10YR2/2) シルト。しまり良く粘性弱い。黒色粒状物。長石を現状に 10% 混入。

SK373



【SK373】

1: 暗褐色 (Hae10YR2/2) 粘土質シルト。しまり良く粘性強い。φ 5~20mm の礫 10%。φ 2~3mm の白色砂粒 5~10%。近い黄褐色シルト 5~10% 混入。

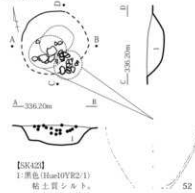
SK396



【SK396】

1: 黒褐色 (Hae10YR2/2) シルト。しまり良く強い。φ 1mm 以下の黄色塵砂 (白色塵砂を含む) 10%。φ 1mm 以下の長石様の珪石物 10%、B b-V 層土 (地山) が現状に混入。

SK423



【SK423】

1: 黒色 (Hae10YR2/1) 粘土質シルト。しまり良く粘性強い。φ 20mm の礫 5% 混入。

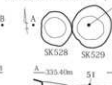
SK465



【SK465】

1: 黒色 (Hae10YR2/1) シルト。しまり悪く粘性弱い。φ 1mm 以下の砂礫 3%。φ 10~20mm 礫同層 5% 混入。

SK528・SK529



【SK528】

1: 黒褐色 (Hae10YR3/1) シルト。しまり悪く普通で粘性弱い。φ 30mm の礫 3% 混入。

SK560

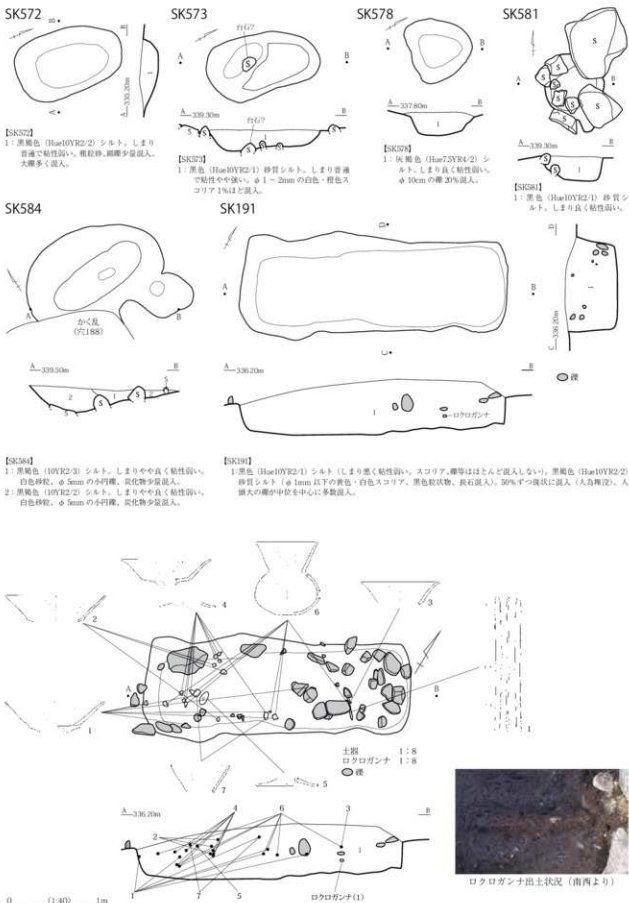


【SK560】

1: 黒色 (Hae10YR2/1) シルト。塵砂多量。礫礫少量混入。下手に φ 50mm の地山起源の黄褐色顆粒砂アロックス。中礫少量混入。

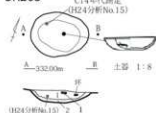
0 (1:40) 1m

第60図 SK 遺構図(2)



第61図 SK 遺構図 (3)

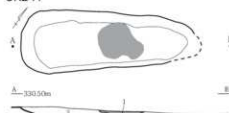
SK205



【SK205】

- 1: 黒色 (Hae10YR2/1) シルト。しまりやや良く粘性やや強い。φ 1mm 以下の黄褐色・白色スコリア。黒色粒状物混入。  
2: 黒色 (Hae10YR2/1) シルト。しまりやや良く粘性やや強い。φ 1mm 以下の黄褐色・白色スコリア。黒色粒状物混入。地山 (B b層) 混入 (濃緑層)。

SK241



【SK241】

- 1: に近い黄褐色 (Hae10YR4/2) 粘土質シルト。しまり普通。焼土の跡が広みにより変色。  
2: 黒色 (Hae10YR2/1) 粘土質シルト。しまり普通。西側には黒色 (Hae10YR1/1) の粘土質シルト混入。シムとなる。地山に比べ混入物等フロック状となる。

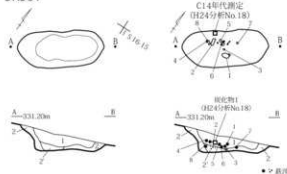
SK318



【SK318】

- 1: 黒色 (Hae10YR1/1) 粘土質シルト。しまり悪く粘性強い。φ 5mm の橙色・白色スコリア5%。φ 5~20mm の礫2%混入。  
2: 黄褐色 (Hae10YR2/2) 粘土質シルト。1層よりしまり良く粘性強い。φ 5mm の礫2%混入。地山との混合土。濃緑層。

SK361



【SK361】

- 1: 原色 (Hae10YR 1/1) 粘土質シルト (B a層) を主体に、暗褐色 (Hae10YR 3/3) 砂質シルトがフロック状に混入。  
2: 暗褐色 (Hae10YR3/3) 砂質シルト主体に、原色 (Hae10YR 1/1) 粘土質シルト (B a層)、地山 (B b層) が30%ずつ混入。  
2: 2層に比べB a層の割合多い。φ 10mm の円礫・鉄屑を多く混入。

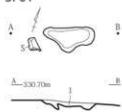
0 (1:40) 1m



SK361 遺物出土状況 (南東より)

## 7 焼土跡

SF01



【SF01】

- 1: 黒色 (Hae10YR1/1) 粘土質シルト。B a層に、にぶい黄褐色 (Hae10YR7/3) 焼土フロック30%混入。



SF02 断面 (西より)

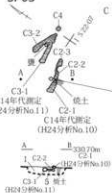
SF02



【SF02】

- 1: 黒色 (Hae10YR1/1) 粘土質シルト。B a層に、にぶい黄褐色 (Hae10YR7/3) 焼土フロック20%混入。

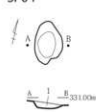
SF03



【SF03】

- 1: 黒色 (Hae10YR1/1) 粘土質シルト。B a層に、にぶい黄褐色 (Hae10YR7/3) 焼土フロック5%混入。

SF04



【SF04】

- 1: 黒色 (Hae10YR1/1) 粘土質シルト。B a層に、にぶい黄褐色 (Hae10YR7/3) 焼土フロック20%混入。

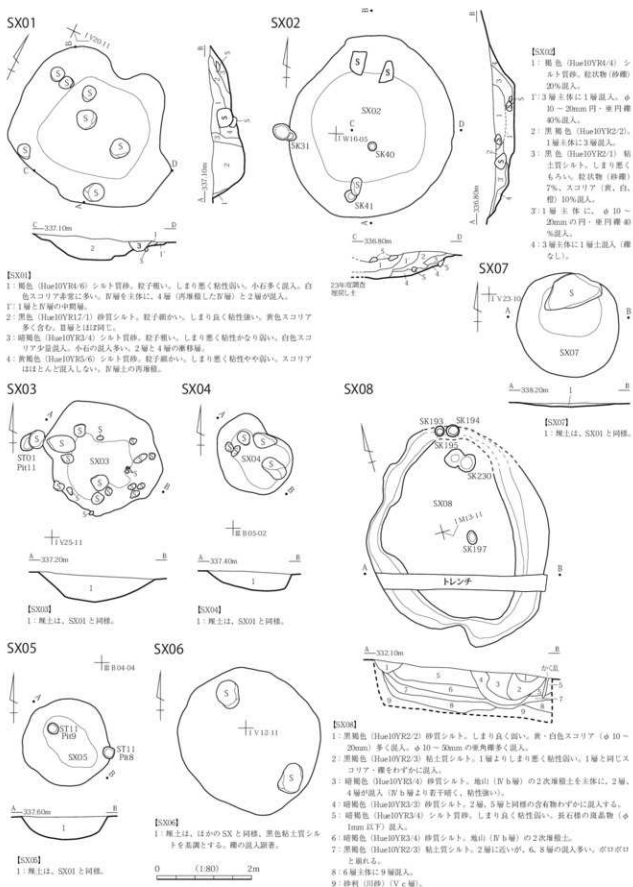
0 (1:60) 1m



SF04 検出状況 (東より)

第62図 SK、SF01～04 遺構図

8 不明遺構



第63図 SX01～08 遺構図

第6表 竪穴住居跡一覧

遺構名	位置	形状	長軸 cm	短軸 cm	深さ cm	壁土 の 厚さ mm	面積 ㎡	主軸 方位	Ptの規模 長軸×短軸×深さ	伊の規模 長軸×短軸×深さ cm	時期	重複関係	出土遺物	備考
S001 第15-15- 46区	I S01・ 02-06-07	円形	430	<300>	25	3層	14.3	N	Pt1:28×26×42 Pt2:86×78×20 Pt3:24×24×45 Pt4:20×(14)×10 Pt5:25×24×12 Pt6:18×16×8 Pt7:17×14×14 Pt8:20×(20)×8 Pt9:24×23×66	Pt2=伊 86×78×20	弥生中期 後半	重複 (SK319古)	弥生土器、 土製円板、 石皿、 炭化種子、 炭化種子、 粘土塊	C140124分析№1,2)
S002 第13-47区	I N21、 I S01	長方形	305	258	29	2層	6.0	N77° E	Pt1:31×30×14 Pt2:20×18×42 Pt3:55×36×16 Pt4:22×22×48	35×33×5	弥生中期 後半	なし	弥生土器、 石皿、 炭化種子、 炭化種子	C140124分析№3,4)

第7表 掘立柱建物跡一覧

遺構名	地区 (グリッド)	時代	柱配置 長軸(m)×短軸(m)	長軸柱間寸法m	短軸柱間寸法m	面積㎡	遺構 平面形	長軸方位
ST01 第30・48区	I V20-25	不明	5間(5.48)×2間(2.96)	0.8~1.6	1.4~1.7	(16.2)	長方形	N8° W
Pt 番号	Pt 長軸cm	Pt 短軸cm	Pt 深さcm	Pt 平面形	Pt 底面標高m	出土遺物	備考	
Pt1	30	18	8	楕円形	337.00			
Pt2	30	28	4	隅丸方形	336.86			
Pt4	44	28	6	楕円形	336.70			
Pt5	18	18	8	不整形	336.76			
Pt7	34	32	20	隅丸方形	336.80	弥生土器		
Pt8	48	28	8	不整形	336.92			
Pt9	72	66	12	不整形	336.88		重複(SK01新)	
Pt10	24	20	4	楕円形	337.00			
Pt11	(36)	30	10	楕円形	336.90			
Pt12	28	26	4	隅丸方形	337.05			
Pt3	40	16	4	楕円形	336.76		ST01のピットとしない	
Pt6	28	26	14	不整形	336.84		ST01のピットとしない	
Pt13	26	24	14	不整形	336.83		ST01のピットとしない	
Pt14	28	24	8	不整形	336.86		ST01のピットとしない	
遺構名	地区 (グリッド)	時代	柱配置 長軸(m)×短軸(m)	長軸柱間寸法m	短軸柱間寸法m	面積㎡	遺構 平面形	長軸方位
ST02 第28・48区	I V24-25	不明	A:3間(4.2)×2間(2.2) B:4間(5.5)×3間(3.3)	A:1.12~2.0 B:0.92~2.0	A:1.0~1.4 B:1.0~1.4	A:9.2 B:18.2	A:長方形 B:長方形	N76° E
Pt 番号	Pt 長軸cm	Pt 短軸cm	Pt 深さcm	Pt 平面形	Pt 底面標高m	出土遺物	備考	
Pt18	32	22	6	楕円形	337.32			
Pt1	24	20	8	隅丸方形	337.34			
Pt2	24	24	8	円形	337.20			
Pt3	28	20	10	不整形	337.00			
Pt4	24	24	—	隅丸方形	—			
Pt5	28	22	5	不整形	337.04			
Pt6	32	(24)	8	楕円形	337.10			
Pt7	28	24	4	不整形	337.22			
Pt8	50	32	8	楕円形	337.26			
Pt19	26	24	8	円形	337.28			
Pt9	32	16	8	不整形	337.40			
Pt10	24	20	—	不整形	337.35			
Pt11	32	20	—	楕円形	337.40			
Pt15	30	20	—	楕円形	337.14			
Pt16	30	26	—	不整形	337.16			
Pt17	—	—	—	不明	—			
遺構名	地区 (グリッド)	時代	柱配置 長軸(m)×短軸(m)	長軸柱間寸法m	短軸柱間寸法m	面積㎡	遺構 平面形	長軸方位
ST03 第28・48区	I V18-19-23- 24	不明	A:3間(5.12)×1間(2.4) B:3間(5.12)×2間(3.9)	A:1.4~2.4 B:1.6~2.4	A:2.32~2.5 B:1.6~2.5	A:12.3 B:20.0	A:長方形 B:長方形	N82° E
Pt 番号	Pt 長軸cm	Pt 短軸cm	Pt 深さcm	Pt 平面形	Pt 底面標高m	出土遺物	備考	
Pt1	20	12	8	楕円形	337.66			
Pt2	28	20	8	楕円形	337.52			
Pt3	20	20	8	隅丸方形	337.52			
Pt4	(32)	30	12	隅丸長方形	337.44			
Pt6	22	20	10	隅丸方形	337.50			
Pt14	22	20	8	隅丸方形	337.62			
Pt16	60	30	10	楕円形	337.50			

Pit 番号	Pit 長軸cm	Pit 短軸cm	Pit 深さcm	Pit 平面形	Pit 底面標高m	出土遺物	備考
Pit11	24	24	12	円形	337.66		
Pit20	40	28	12	楕円形	337.44		
Pit7	68	48	16	不整形	337.40		
Pit10	44	44	20	円形	337.64		
Pit15	56	44	12	不整形	337.44	弥生土器	
Pit13	60	44	18	隅丸長方形	337.42		ST03のピットとしない
Pit5	36	(24)	10	楕円形	337.52		ST03のピットとしない
Pit8	60	46	16	隅丸長方形	337.48		ST03のピットとしない
Pit9	72	48	28	隅丸長方形	337.44		ST03のピットとしない
Pit12	84	32	12	楕円形	337.68		ST03のピットとしない
Pit18	24	22	8	不整形	337.08		ST03のピットとしない
Pit19	30	22	8	楕円形	337.48		ST03のピットとしない

遺構名	地区 (グリッド)	時代	柱配置 長軸(m)×短軸(m)	長軸柱間寸法m	短軸柱間寸法m	面積㎡	遺構 平面形	長軸方位
ST04 第30・49回	I V20・25	不明	3間(5.26)×2間(4.06)	1.1~2.4	2.0~2.4	23.5	長方形	N78° W

Pit 番号	Pit 長軸cm	Pit 短軸cm	Pit 深さcm	Pit 平面形	Pit 底面標高m	出土遺物	備考
Pit10	20	20	12	隅丸方形	337.12		
Pit11	28	20	6	楕円形	337.14		
Pit1	32	(28)	12	円形	337.04		
Pit2	24	(16)	8	楕円形	336.96		
Pit3	24	22	12	楕円形	336.80		
Pit4	40	(32)	24	円形	336.56		重複(SK33古)
Pit5	52	36	20	不整形	336.60		重複(SK32古)
Pit7(ST01Pit4)	42	26	12	楕円形	336.60		
Pit8	24	24	(6)	隅丸方形	(336.92)		
Pit9(ST01Pit1)	32	16	6	楕円形	337.04		
Pit6(ST01Pit3)	40	16	4	楕円形	336.76		ST04のピットとしない

遺構名	地区 (グリッド)	時代	柱配置 長軸(m)×短軸(m)	長軸柱間寸法m	短軸柱間寸法m	面積㎡	遺構 平面形	長軸方位
ST05 第28・49回	I V14・19	弥生中期 後半	2間(3.52)×2間(3.28)	1.36~2.3	1.0~2.6	11.5	長方形	N14° W

Pit 番号	Pit 長軸cm	Pit 短軸cm	Pit 深さcm	Pit 平面形	Pit 底面標高m	出土遺物	備考
Pit1	28	(20)	12	隅丸長方形	337.24		
Pit2	24	24	12	隅丸長方形	337.20		
Pit3	20	18	5	楕円形	337.30		
Pit4	24	18	4	楕円形	337.22		
Pit5	58	48	12	楕円形	337.24		
Pit6	(48)	44	12	楕円形	337.22		
Pit8	38	34	12	円形	337.20		
Pit9	40	30	36	楕円形	337.18	弥生土器	

遺構名	地区 (グリッド)	時代	柱配置 長軸(m)×短軸(m)	長軸柱間寸法m	短軸柱間寸法m	面積㎡	遺構 平面形	長軸方位
ST06 第28・49回	I V13・14・18・ 19	不明	3間(5.08)×2間(3.76)	1.5~1.9	1.28~2.4	19.1	長方形	N84° E

Pit 番号	Pit 長軸cm	Pit 短軸cm	Pit 深さcm	Pit 平面形	Pit 底面標高m	出土遺物	備考
Pit1	20	14	12	楕円形	337.34		重複(SK35古)
Pit2	22	20	8	隅丸長方形	337.40		
Pit3	20	(16)	6	円形	337.42		
Pit4	22	(20)	8	隅丸長方形	337.30		
Pit5	16	10	6	楕円形	337.32		
Pit6	32	28	(10)	不整形楕円形	(337.40)		
Pit7	32	18	12	楕円形	337.42		
Pit8	34	30	50	隅丸長方形	337.06		
Pit9	22	20	4	隅丸長方形	337.48		
Pit10	28	20	6	楕円形	337.46		
Pit11	24	22	16	円形	337.38		
Pit12	24	22	14	楕円形	337.34		
Pit13	28	28	16	円形	337.32		

遺構名	地区 (グラッド)	時代	柱配置 長軸(m)×短軸(m)	長軸柱間寸法m	短軸柱間寸法m	面積㎡	遺構 平面形	長軸方位
ST07 第21・50図	I R01・06	弥生中期 後半等	A:1間(2.88)×1間(1.52) B:3間(6.72)×1間(1.52)	A:2.8~2.96 B:1.2~2.8	A:1.8 B:1.6~1.8	A:4.4 B:10.2	A:長方形 B:長方形	N20° W
Pit 番号	Pit 長軸cm	Pit 短軸cm	Pit 深さcm	Pit 平面形	Pit 底面標高m	出土遺物	備考	
Ph1	90	60	10	不整形	335.92			
Ph2	32	30	12	隅丸方形	335.96	弥生土器		
Ph3	48	44	20	不整隅丸方形	335.90	弥生土器		
Ph4	52	36	20	楕円形	335.92			
SK177	50	36	8	楕円形	335.90			
SK180	60	56	10	不整形	335.90	弥生土器		
SK175	32	28	6	隅丸長方形	335.98			
SK179	(26)	32	6	楕円形	335.98			
SK178	34	32	6	隅丸方形	336.04			

遺構名	地区 (グラッド)	時代	柱配置 長軸(m)×短軸(m)	長軸柱間寸法m	短軸柱間寸法m	面積㎡	遺構 平面形	長軸方位
ST08 第29・51図	I V15	不明	3間(3.68)×2間(2.28)	1.0~1.32	0.8~1.48	8.4	長方形	N1° W
Pit 番号	Pit 長軸cm	Pit 短軸cm	Pit 深さcm	Pit 平面形	Pit 底面標高m	出土遺物	備考	
Ph14	60	52	36	円形	336.70	弥生土器		
Ph15	28	20	12	楕円形	336.88			
Ph16	48	40	36	円形	336.58	弥生土器		
Ph17	36	32	32	円形	336.60			
Ph18	56	52	30	隅丸方形	336.60	銅片		
Ph19	52	46	20	隅丸方形	336.72			
Ph10	44	36	16	楕円形	336.76			
Ph11	36	32	6	楕円形	336.88			
Ph12	40	38	16	楕円形	336.90			
Ph13	48	44	36	円形	336.76			
Ph19	34	32	16	円形	336.85			
Ph1	32	24	24	不整形	336.60		ST08のピットとしない	
Ph23	30	28	8	不整形	336.60		ST08のピットとしない	
Ph24	48	32	18	不整形	336.50		ST08のピットとしない	
Ph25	20	12	12	楕円形	336.56		ST08のピットとしない	
Ph33	22	(22)	20	円形	336.50		ST08のピットとしない	
Ph43	28	24	10	円形	336.55		ST08のピットとしない	
Ph39	32	26	16	不整形	336.58		ST08のピットとしない	
Ph7	30	26	20	不整形	336.60		ST08のピットとしない	
Ph6	30	(12)	(16)	不整形	336.70		ST08のピットとしない	
Ph5	24	20	6	隅丸方形	336.78		ST08のピットとしない	
Ph26	36	34	18	円形	336.60		ST08のピットとしない	
Ph1	20	18	6	円形	337.02		ST08のピットとしない	
Ph2	32	20	14	楕円形	336.86		ST08のピットとしない	
Ph3	14	14	6	円形	336.86		ST08のピットとしない	
Ph8	40	28	10	楕円形	336.74	弥生土器		
Ph20	20	20	12	円形	336.92		ST08のピットとしない	
Ph21	30	18	6	楕円形	336.86		ST08のピットとしない	
Ph22	40	36	8	不整形	336.58		ST08のピットとしない	
Ph27	(46)	32	26	楕円形	336.56		ST08のピットとしない 重複(SK73新)	
Ph28	64	52	16	楕円形	336.76		ST08のピットとしない	
Ph29	60	(48)	12	不整形	336.88		ST08のピットとしない	
Ph30	84	(48)	22	楕円形	336.88		ST08のピットとしない	
Ph31	30	(24)	12	不整形	337.00		ST08のピットとしない	
Ph32	44	44	(28)	円形	(336.56)		ST08のピットとしない	
Ph34	52	(44)	6	楕円形	336.78		ST08のピットとしない	
Ph35	26	24	6	円形	337.04		ST08のピットとしない	
Ph36	32	32	22	円形	336.96	弥生土器	ST08のピットとしない	
Ph37	16	14	8	円形	336.88	弥生土器	ST08のピットとしない	
Ph38	16	14	10	円形	336.86		ST08のピットとしない	
Ph40	52	42	16	不整形	336.48		ST08のピットとしない 重複(SK477古)	
Ph41	44	28	10	楕円形	336.32		ST08のピットとしない	
Ph42	32	28	12	楕円形	336.58		ST08のピットとしない	



遺構名	地区 (グリッド)	時代	柱配置 長軸(m)×短軸(m)	長軸柱間寸法m	短軸柱間寸法m	面積㎡	遺構 平面形	長軸方位
ST09 第29・50区	IV15	不明	2間(1.6)×2間(1.3)	0.6~0.8	0.5~0.9	2.1	長方形	N77° W
Pit 番号	Pit 長軸cm	Pit 短軸cm	Pit 深さcm	Pit 平面形	Pit 底面標高m	出土遺物	備考	
Pit8	26	20	12	楕円形	337.04			
Pit1	30	20	12	円形	339.96			
Pit2	24	18	10	楕円形	339.96			
Pit9	24	18	12	隅丸長方形	336.96			
Pit4	26	20	4	隅丸長方形	337.06			
Pit5	36	26	10	隅丸長方形	337.02			
Pit3	22	16	10	楕円形	337.00			
Pit6	44	40	(8)	不整形	(337.08)			
Pit7	34	34	12	円形	337.04			
Pit10	116	72	40	隅丸長方形	336.70		ST09のピットとしない	

遺構名	地区 (グリッド)	時代	柱配置 長軸(m)×短軸(m)	長軸柱間寸法m	短軸柱間寸法m	面積㎡	遺構 平面形	長軸方位
ST10 第28・50区	IV14	不明	1間(2.64)×1間(1.32)	2.56~2.68	1.28~1.32	3.5	長方形	N3° W
Pit 番号	Pit 長軸cm	Pit 短軸cm	Pit 深さcm	Pit 平面形	Pit 底面標高m	出土遺物	備考	
Pit1	20	18	6	不整隅丸方形	337.16			
Pit2	34	26	10	不整隅丸長方形	337.16			
Pit3	56	34	12	楕円形	337.20			
Pit4	26	24	8	不整隅丸方形	337.24			

遺構名	地区 (グリッド)	時代	柱配置 長軸(m)×短軸(m)	長軸柱間寸法m	短軸柱間寸法m	面積㎡	遺構 平面形	長軸方位
ST11 第32・50区	IV2・III04	弥生中期 後半	2間(2.36)×1間(2.8)	1.08~1.32	2.8	6.6	魚形	N69° W
Pit 番号	Pit 長軸cm	Pit 短軸cm	Pit 深さcm	Pit 平面形	Pit 底面標高m	出土遺物	備考	
Pit1	28	24	8	楕円形	337.46	弥生土器		
Pit2	18	16	16	円形	337.30			
Pit3	28	24	18	円形	337.24			
Pit8	24	24	16	隅丸方形	337.40		重複(SX05古)	
Pit9	24	22	20	円形	337.32		重複(SX05古)	
Pit10	30	28	(18)	円形	(337.44)			
Pit11	16	16	6	円形	337.48			
Pit4	34	24	16	楕円形	337.28			
Pit5	28	28	32	円形	337.10			
Pit16	26	18	4	不整隅丸長方形	337.52			

遺構名	地区 (グリッド)	時代	柱配置 長軸(m)×短軸(m)	長軸柱間寸法m	短軸柱間寸法m	面積㎡	遺構 平面形	長軸方位
ST12 第22・52区	IR06・11	不明	2間(4.6)×1間(2.28)	(2.16)~2.4	2.28~2.4	10.5	長方形	N7° W
Pit 番号	Pit 長軸cm	Pit 短軸cm	Pit 深さcm	Pit 平面形	Pit 底面標高m	出土遺物	備考	
Pit1(SK181)	32	30	8	不整隅丸方形	336.08			
Pit2(SK182)	22	20	(4)	円形	(336.04)			
Pit3(SK184)	34	28	4	不整形	336.03	弥生土器		
Pit4(SK183)	46	32	12	楕円形	335.98			

遺構名	地区 (グリッド)	時代	柱配置 長軸(m)×短軸(m)	長軸柱間寸法m	短軸柱間寸法m	面積㎡	遺構 平面形	長軸方位
ST13 第32・52区	III04・05	弥生中期 後半	2間(3.72)×1間(2.32)	1.1~2.5	2.2~2.48	8.6	長方形	N63° W
Pit 番号	Pit 長軸cm	Pit 短軸cm	Pit 深さcm	Pit 平面形	Pit 底面標高m	出土遺物	備考	
Pit6(ST11Pit7)	32	28	14	隅丸方形	337.30		弥生土器	
Pit1(ST11Pit4)	28	20	12	楕円形	337.28			
Pit2(ST11Pit5)	30	28	(12)	楕円形	337.18			
Pit3(SK142)	30	28	12	不整形	337.02			
Pit4(SK143)	24	24	8	隅丸方形	337.10			
Pit5(ST11Pit6)	28	22	12	隅丸長方形	337.22			
Pit7(ST11Pit12)	32	20	4	円形	337.32			
ST11Pit13	50	32	23	楕円形	337.16		ST13のピットとしない	

遺構名	地区 (グリッド)	時代	柱配置 長軸(m)×短軸(m)	長軸柱間寸法m	短軸柱間寸法m	面積㎡	遺構 平面形	長軸方位
ST14 第32・52区	III B04	不明	2間(3.28)×1間(2.42)	1.48~1.96	2.4~2.42	7.9	長方形	N40° W
Pt 番号	Pt 長軸cm	Pt 短軸cm	Pt 深さcm	Pt 平面形	Pt 底面標高m	出土遺物	備考	
Ph1(SK152)	34	28	20	円形	337.52			
Ph2(SK154)	28	24	6	楕円形	337.56			
Ph3(SK148)	40	28	24	隅丸長方形	337.32			
Ph4(SK147)	28	26	4	隅丸方形	337.42			
Ph5(SK189)	—	—	—	円形?	—			
Ph6(SK149)	28	24	16	楕円形	337.46			
遺構名	地区 (グリッド)	時代	柱配置 長軸(m)×短軸(m)	長軸柱間寸法m	短軸柱間寸法m	面積㎡	遺構 平面形	長軸方位
ST15 第21・52区	I 120・25, I M16・21	不明	1間(1.60)×1間(4.56)	1.04以上~1.6	4.56	7.3以上	長方形	N8° W
Pt 番号	Pt 長軸cm	Pt 短軸cm	Pt 深さcm	Pt 平面形	Pt 底面標高m	出土遺物	備考	
Ph1(SK172)	36	28	4	楕円形	335.86			
Ph2(SK170)	34	26	14	楕円形	335.80			
Ph3(SK174)	28	28	4	隅丸方形	335.90	石器		
遺構名	地区 (グリッド)	時代	柱配置 長軸(m)×短軸(m)	長軸柱間寸法m	短軸柱間寸法m	面積㎡	遺構 平面形	長軸方位
ST16 第12・53区	I M14・19	不明	1間(2.96)×1間(1.56)	2.96	1.56	4.6	長方形	N17° W
Pt 番号	Pt 長軸cm	Pt 短軸cm	Pt 深さcm	Pt 平面形	Pt 底面標高m	出土遺物	備考	
Ph1	22	20	15	円形	331.34			
Ph2	24	20	20	円形	331.16			
Ph3	20	20	17	円形	331.22	弥生土器		
Ph4	20	20	5	円形	331.44	弥生土器		
遺構名	地区 (グリッド)	時代	柱配置 長軸(m)×短軸(m)	長軸柱間寸法m	短軸柱間寸法m	面積㎡	遺構 平面形	長軸方位
ST17 第13・53区	I N16・21	弥生中期 後半?	2間(4.1)×1間(3.4)	2.0~2.08	3.4	13.9	長方形	N15° W
Pt 番号	Pt 長軸cm	Pt 短軸cm	Pt 深さcm	Pt 平面形	Pt 底面標高m	出土遺物	備考	
Ph1	32	32	14	円形	330.02			
Ph2	32	30	24	円形	329.90	弥生土器		
Ph3	34	32	22	円形	329.93	弥生土器		
Ph4	32	28	30	円形	329.86	弥生土器		
Ph5	32	28	10	円形	330.05	弥生土器		
Ph6	42	38	16	不整隅丸方形	329.99			
遺構名	地区 (グリッド)	時代	柱配置 長軸(m)×短軸(m)	長軸柱間寸法m	短軸柱間寸法m	面積㎡	遺構 平面形	長軸方位
ST18 第13・53区	I N16	弥生中期 後半?	1間(2.44)以上×—	1.1~1.16	—	—	—	N3° W
Pt 番号	Pt 長軸cm	Pt 短軸cm	Pt 深さcm	Pt 平面形	Pt 底面標高m	出土遺物	備考	
Ph1	40	(24)	8	円形	330.02			
Ph2	42	36	20	円形	329.96	弥生土器		
遺構名	地区 (グリッド)	時代	柱配置 長軸(m)×短軸(m)	長軸柱間寸法m	短軸柱間寸法m	面積㎡	遺構 平面形	長軸方位
ST19 第13・53区	I N21・22	弥生中期 後半?	2間(2.24)×1間(2.7)	1.1~1.28	2.4~2.86	6.0	長方形	N3° W
Pt 番号	Pt 長軸cm	Pt 短軸cm	Pt 深さcm	Pt 平面形	Pt 底面標高m	出土遺物	備考	
Ph1	20	20	12	円形	330.02			
Ph2	28	24	28	楕円形	329.78	弥生土器 炭化材	C14(H24分析No.5)	
Ph3	24	20	16	円形	329.70			
Ph4 (22)	(18)	20	20	楕円形	329.86			
Ph5	24	20	24	円形	329.80			
Ph6	22	18	24	円形	329.86	炭化物	C14(H24分析No.6)	

遺構名	地区 (グリッド)	時代	柱配置 長軸(m)×短軸(m)	長軸柱間寸法m	短軸柱間寸法m	面積㎡	遺構 平面形	長軸方位
ST22 第12・53図	I M13・14	不明	2間(3.64)×1間(2.0)	1.7~2.0	1.8~2.0	7.3	長方形	N5° W
Pit 番号	Pit 長軸cm	Pit 短軸cm	Pit 深さcm	Pit 平面形	Pit 底面標高m	出土遺物	備考	
Pt1	12	12	10	円形	331.45			
Pt2	16	24	8	楕円形	331.36			
Pt3	22	18	20	楕円形	331.20	炭化物	C140t24分析№7)	
Pt4	16	14	10	円形	331.26			
Pt6	14	12	2	楕円形	331.50			
Pt5	16	14	8	円形	331.48			

遺構名	地区 (グリッド)	時代	柱配置 長軸(m)×短軸(m)	長軸柱間寸法m	短軸柱間寸法m	面積㎡	遺構 平面形	長軸方位
ST23 第12・54図	I M10・24	不明	2間(4.76)×1間(1.72)	2.04~2.7	1.56~1.8	8.2	長方形	N1° W
Pit 番号	Pit 長軸cm	Pit 短軸cm	Pit 深さcm	Pit 平面形	Pit 底面標高m	出土遺物	備考	
Pt1(SK232)	12	12	4	円形	331.54	炭化物		
Pt2(SK214)	12	12	4	円形	331.50			
Pt3(SK215)	14	14	6	不整円形	331.62			
Pt4(SK245)	12	10	8	不整円形	331.66			
Pt5(SK212)	12	12	4	円形	331.72			
Pt6(SK213)	16	16	8	円形	331.60			

遺構名	地区 (グリッド)	時代	柱配置 長軸(m)×短軸(m)	長軸柱間寸法m	短軸柱間寸法m	面積㎡	遺構 平面形	長軸方位
ST24 第16・54図	I S16・17	弥生中期 後半?	3間(3.74)×1間(2.6)	1.0~1.4	2.6	9.7	長方形	N90° E
Pit 番号	Pit 長軸cm	Pit 短軸cm	Pit 深さcm	Pit 平面形	Pit 底面標高m	出土遺物	備考	
Pt8	20	18	12	円形	330.08			
Pt1	28	24	28	円形	329.86	弥生土器 弥生土器 割片		
Pt2	28	28	48	円形	329.68			
Pt3	26	24	40	円形	329.70	弥生土器		
Pt4	32	32	28	円形	329.80	弥生土器		
Pt5	30	28	30	円形	329.70	弥生土器 割片		
Pt6	28	24	36	円形	329.72	弥生土器		
Pt7	24	22	28	円形	329.82	弥生土器		

遺構名	地区 (グリッド)	時代	柱配置 長軸(m)×短軸(m)	長軸柱間寸法m	短軸柱間寸法m	面積㎡	遺構 平面形	長軸方位
ST25 第16・54図	I S17	弥生中期 後半?	3間(4.02)×1間(2.64)	1.3~1.4	2.6~2.64	10.6	長方形	N88° E
Pit 番号	Pit 長軸cm	Pit 短軸cm	Pit 深さcm	Pit 平面形	Pit 底面標高m	出土遺物	備考	
Pt8	26	24	12	円形	330.08	弥生土器 割片		
Pt1	22	18	16	円形	330.02	弥生土器		
Pt2	24	20	8	円形	330.04	弥生土器		
Pt3	26	24	14	円形	329.96	弥生土器 炭化物	C140t24分析№8)	
Pt4	24	24	16	円形	329.88	弥生土器 炭化物	C140t24分析№9)	
Pt5	22	22	14	円形	329.92	弥生土器		
Pt6	22	20	12	円形	329.96	弥生土器		
Pt7	20	20	8	円形	330.04	弥生土器		

遺構名	地区 (グリッド)	時代	柱配置 長軸(m)×短軸(m)	長軸柱間寸法m	短軸柱間寸法m	面積㎡	遺構 平面形	長軸方位
ST26 第26・55図	III C04	不明	4間(6.64)×1間(2.28)	1.2~1.92	2.28~2.4	15.1	長方形	N1° W
Pit 番号	Pit 長軸cm	Pit 短軸cm	Pit 深さcm	Pit 平面形	Pit 底面標高m	出土遺物	備考	
Pt1	40	36	16	楕円形	334.58	弥生土器		
Pt2	38	38	6	円形	334.18			
Pt3	48	40	6	楕円形	334.22			
Pt4	75	64	24	隅丸長方形	334.16	炭化物、炭	C140t25分析№3)	
Pt5	56	48	24	隅丸長方形	334.32	弥生土器、 炭		
Pt6(SK580)	86	60	32	楕円形	334.28	弥生土器		
Pt7(SK536)	52	48	46	不整円形	334.56	弥生土器		
Pt8	50	48	36	不整隅丸方形	334.46	弥生土器		
Pt9	52	48	20	不整隅丸方形	334.48	弥生土器		
Pt10	48	36	8	楕円形	334.46	弥生土器		

遺構名	地区 (グリッド)	時代	柱配置 長軸(m)×短軸(m)	長軸柱間寸法m	短軸柱間寸法m	面積㎡	遺構 平面形	長軸方位
ST27 第36・55区	ⅡF25,ⅢC21, ⅢI.01	不明	3間(5.68)×1間(2.56)	1.26~3.08	2.56	14.5	長方形	N55° W
序 番号	Pt 長軸cm	Pt 短軸cm	Pt 深さcm	Pt 平面形	Pt 底面積高m	出土遺物	備考	
Pt1(SK597)	36	32	18	隅丸方形	338.16			
Pt2(SK599)	34	34	6	円形	338.16			
Pt3(SK577)	44	44	(22)	不整形円形	(337.92)			
Pt4(SK596)	40	32	24	楕円形	337.68	弥生土器		
Pt5(SK576)	48	36	18	楕円形	337.80			
Pt6(SK595)	58	42	36	楕円形	337.80	弥生土器		
Pt7(SK600)	32	32	10	隅丸方形	338.10			
Pt8(SK601)	38	32	8	隅丸長方形	338.18			

第8表 周溝跡・溝跡一覧

掲載区 No.	遺構名	位置	形状	長軸m	短軸m	幅cm	深さcm	埋土の 厚積 m	長軸 方位	時期	重複関係	出土遺物	備考
第17-56区	SD01	I S23 I X03	円形	<5.84>	5.6	32	33	4層	25.7° N74° W	弥生中期 後半	重複 (SK228新, SK231 新古不明)	縄文土器, 弥 生土器, 石 器, 銅治滓	
第17-56区	SD02	I 302-03 07	馬蹄形	<5.12>	<4.0>	32	38	5層	17.1° S22° E	弥生中期 後半	重複 (SK305新古不明)	弥生土器 石器	
第17-57区	SD03	I S17-22	馬蹄形	<6.90>	<6.90>	75	55	5層	38.9° S26° E	弥生中期 後半	重複 (SK453新, SK209・SK362・ SK455新古不明)	縄文土器, 弥生土器, 石器, 炭化物	C14(1424分析No.12) 炭素・花粉(1424分析 No.2, 3)
第13-57区	SD05	I R19- 14-15	馬蹄形	2.08	0.56	16	8	1層	—° N6° W	不明	重複(SK428新, SK373新古不明)	なし	短穴住居跡の周溝の 可能性が大きい。 弥生中期後半の可能性

\* 長軸, 短軸は内径径, &lt; &gt;は測定値 ( )は残存値

掲載区 No.	遺構名	位置	長さ m	幅 cm	深さ cm	埋土の 厚積 m	流路の 方向	時期	重複関係	出土遺物	備考
第18-58区	SD04	I S20・25, I X05	15.8	76	34	4層	南北	近世以降	なし	弥生土器 平安時代土器	

第9表 柵跡一覧

掲載区 No.	遺構名	位置	柱間寸法 北側×南側cm	Ptの規模 長軸×短軸×深さcm	長軸 方位	時期	重複関係	出土遺物	備考
第19-56区	SA01	I X12-17	132×132	Pt2: 32×30×6 Pt3: 28×28×34 Pt4: 20×18×8	N13° W	弥生中期後半	なし	なし	
第19-56区	SA02	I X07	144×152	Pt1: 40×28×28 Pt2: 28×24×14 Pt3: 32×26×20	N9° W	弥生中期後半	なし	炭化物	C14(1424分析No.14)

第10表 遺物集中一覧

掲載区 No.	遺構名	位置	長軸cm	短軸cm	深さcm	面積㎡	時期	重複関係	出土遺物	備考
第35-98区	SG01	ⅢF18-23	328	288	36	7.3	弥生中期後半	重複(SK573・575・983・986古)	弥生土器, 石器	C14(1426分析No.1)

第11表 焼土跡一覧

掲載区 No.	遺構名	位置	長軸cm	短軸cm	深さcm	時期	重複関係	出土遺物	備考
第19-62区	SF01	I X07	84	42	12	平安	なし	弥生土器	
第16-62区	SF02	I S22	39	30	15	平安	なし	なし	
第16-62区	SF03	I S22	144	76	12	平安	なし	平安時代土器, 炭化物	C14(1424分析No.10, 11)
第16-62区	SF04	I S16	68	44	10	平安	なし	なし	

第12表 不明遺構一覧

掲載区 No.	遺構名	位置	長軸cm	短軸cm	深さcm	時期	重複関係	出土遺物	備考
第30-63区	SX01	I V20	360	324	68	不明			
第30-63区	SX02	I V20, I W11-16	392	344	48	不明	重複 (SK31・SK40・SK41新)	弥生土器	
第30-63区	SX03	I V25	248	224	55	不明			
第32-63区	SX04	I V25	176	132	38	不明			
第32-63区	SX05	ⅢB04	188	184	47	不明	重複(ST11新)		
第27-63区	SX06	I V12	312	296	—	不明			
第31-63区	SX07	I V23	232	218	8	不明			
第12-63区	SX08	I M13	472	388	92	不明	重複 (SK193・SK194・195・230・197新)	平安時代土器	

第13表 土坑一覧

調査No.	遺構	時期	グリップ	平面形状	断面形状	長軸m	短軸m	深さm	土質構成	出土遺物	備考欄
第2800	SK001	不明	V25	不整形	皿状	35.0	32.0	14.0	336.88		重複(S2019内古)
第2800	SK002	不明	V25	不整形	すり鉢状	30.0	20.0	6.0	337.14		
第2800	SK003	不明	V24	不整形	皿状	46.0	38.0	17.0	337.12		
第2800	SK004	不明	V13	不明	すり鉢状	42.0以上	35.0以上	10.0	337.21		本跡は列状に並ぶ土坑群の延長にあるため遺構とした。 弥生中期後半の可能性
第2800	SK005	不明	V20	楕円形	皿状	58.0	30.0	12.0	336.90	弥生土層	弥生中期後半の可能性
第2800	SK006	不明	V24	楕丸長方形	皿状	42.0	36.0	14.0	337.24		
第2800	SK007	不明	V24	不整形楕丸長方形	皿状	24.0	22.0	6.0	337.49		
第2800	SK008	不明	V24	不整形楕円形	皿状	28.0	18.0	8.0	337.46		
第2800	SK009	不明	V19	不整形円形	皿状	50.0	40.0	10.0	337.42		
第2800	SK010	不明	V20	楕円形	すり鉢状	44.0	23.0以上	8.0	337.12		
第2800	SK011	不明	V19	不整形	皿状	36.0	33.0	10.0	337.40		
第2800	SK012	不明	V19	不整形	皿状?	14.0	14.0	—	—	柱穴状	
第2800	SK013	不明	V24	不整形	タライ状	50.0	42.0	18.0	337.44	穴状	
第2800	SK014	不明	V24	不整形	皿状?	44.0	28.0	12.0	337.43	穴状	
第2800	SK015	不明	V18	不整形円形	すり鉢状	40.0	30.0	11.0	337.45	柱穴状	
第2800	SK016	不明	V18	楕円形	皿状	26.0	18.0	6.0	337.62		
第2800	SK017	不明	V18	円形	お椀状	24.0	22.0	9.0	337.65		
第2800	SK018	不明	V18	不整形楕丸方形	不整形	26.0	25.0	11.0	337.52		
第2800	SK019	不明	V20	楕円形	皿状	28.0	19.0	5.0	337.22	弥生土層	弥生中期後半の可能性
第2800	SK020	不明	V20	円形	皿状	20.0	20.0	8.0	337.22		
第2800	SK021	不明	V20	不整形	お椀状	42.0	24.0	10.0	337.02		
第2800	SK022	不明	V15	不整形	お椀状	20.0	18.0以上	8.0	337.10		
第2800	SK023	不明	V20	円形	皿状	28.0以上	18.0以上	7.0	337.10	遺構(S2427内「穴6跡」)	
第2800	SK024	不明	V20	円形	皿状	76.0	36.0	7.0	337.72	遺構(S2325内「穴6跡古不明」)	
第2800	SK025	不明	V20	不整形楕丸方形	すり鉢状	18.0	18.0	4.0	337.18	弥生土層	弥生中期後半の可能性
第2800	SK026	不明	V20	不整形楕円形	皿状	38.0	28.0	7.0	337.17	弥生土層	弥生中期後半の可能性
第2800	SK027	不明	V20	楕円形	お椀状	26.0	23.0	4.0	337.08		
第2800	SK028	不明	V09	楕丸方形	皿状	34.0	32.0	12.0	337.10		
第2800	SK029	不明	V20	円形	皿状	24.0	24.0	10.0	336.37		
第2800	SK030	不明	V15	円形	皿状	35.0	25.0	8.0	337.65		
第2800	SK031	不明	V20	楕円形	タライ状	22.0以上	22.0	15.0	336.65	遺構(S2022)	
第2800	SK032	不明	V20	円形	皿状?	32.0	30.0	6.0	336.70	遺構(S204内5跡)	
第2800	SK033	不明	V20	不明	タライ状?	40.0	30.0以上	22.0	336.58	遺構(S204内4跡)	
第2800	SK034	不明	V20	楕円形	不整形	33.0	28.0	12.0	337.10		
第2800	SK035	不明	V16	不明	お椀状	46.0以上	16.0以上	23.0	337.49		
第2800	SK036	不明	V17	楕円形	皿状?	32.0以上	30.0	8.0	337.47		
第2800	SK037	不明	V17	不整形楕円形	皿状	30.0	18.0	8.0	337.48		
第2800	SK038	不明	V17	不整形	不整形	162.0	54.0	10.0	337.60	遺構(SK39古)	
第2800	SK039	不明	V17	不整形	不整形	65.0以上	53.0	19.0	337.51	遺構(SK38古)	
第2800	SK040	不明	V16	円形	タライ状	20.0	20.0	10.0	336.64	遺構(S2022)	
第2800	SK041	不明	V16	楕丸方形?	円筒状?	24.0	20.0以上	36.0	336.36	遺構(S2022)	
第2800	SK042	不明	V20	円形	皿状	30.0	16.0	7.0	336.94	遺構(S2022)	
第2800	SK043	不明	V20	楕円形	皿状	22.0以上	28.0	7.0	336.82		
第2800	SK044	不明	V20	円形	円筒状	21.0	21.0	14.0	336.78		
第2800	SK045	不明	V20	不整形	円筒状	56.0	30.0	23.0	336.95		
第2800	SK046	不明	V19	不整形	皿状	44.0	34.0	8.0	337.32		
第2800	SK047	不明	V19	不整形	皿状?	42.0	36.0	8.0	337.32		
第2800	SK048	不明	V19	不整形	すり鉢状	32.0	32.0	17.0	337.30		
第2800	SK049	不明	V19	不整形楕円形	タライ状?	64.0	46.0	20.0	337.24		
第2800	SK050	不明	V19	不整形楕円形	タライ状?	32.0	24.0	16.0	337.26		
第2800	SK051	不明	V18	楕円形	不整形	28.0	24.0	7.0	337.45		
第2800	SK052	不明	V19	円形	お椀状	23.0	22.0	10.0	337.39		
第2800	SK053	不明	V13	不整形	不整形	30.0	18.0	13.0	337.37		
第2800	SK054	不明	V13	不明	タライ状?	44.0以上	44.0	72.0	337.20		
第2800	SK055	不明	V19	不整形楕円形	不整形	38.0	28.0	14.0	337.45		
第2800	SK056	不明	V19	楕円形	皿状	22.0	14.0	4.0	337.54		
第2800	SK057	不明	V14	楕丸方形	お椀状	23.0	23.0	6.0	337.39		
第2800	SK058	不明	V14	不整形	タライ状	53.0	36.0	14.0	337.16		
第2800	SK059	不明	V14	楕円形	お椀状	26.0	21.0	11.0	337.33		
第2800	SK060	不明	V14	不整形楕丸長方形	お椀状	28.0	25.0	12.0	337.38		
第2800	SK061	不明	V19	不整形	お椀状?	32.0以上	16.0	14.0	337.30		
第2800	SK062	不明	V19	不整形	皿状	36.0	20.0	6.0	337.43		
第2800	SK063	不明	V19	不整形楕円形	皿状	23.0	16.0	6.0	337.33		
第2800	SK064	不明	V06	楕円形	すり鉢状	26.0	18.0	11.0	336.46		
第2800	SK065	不明	V10	不整形	不整形	74.0	42.0	18.0	336.64	弥生土層	弥生中期後半の可能性
第2800	SK066	不明	V10	不整形	不明	34.0	24.0	—	—	弥生土層	遺構(SK067新古不明) 弥生中期後半の可能性 弥生中期後半の可能性
第2800	SK067	不明	V10*	不整形	不明	63.0	58.0	—	—	弥生土層	
第2800	SK068	不明	V10	不整形円形	タライ状?	60.0	58.0	(20.0)	336.78		
第29-60期	SK069	不明	V10	不整形	すり鉢状	26.0	26.0	7.0	336.73	弥生土層、 縄文土層	弥生中期後半の可能性 縄文
第2800	SK070	不明	V15	楕円形	皿状	36.0	27.0	8.0	337.12		
第2800	SK071	不明	V15	楕円形	皿状	40.0	26.0	8.0	337.22		
第2800	SK072	不明	V08	楕円形	すり鉢状	32.0	27.0	29.0	337.72		
第2800	SK073	不明	V11	不整形円形	不明	32.0	—	10.0	336.68	遺構(S208内27古)	
第2800	SK074	不明	V14	不整形楕円形	すり鉢状	36.0	26.0	14.0	337.18		
第2800	SK075	不明	V14	円形	お椀状	20.0	20.0	8.0	337.28		
第2800	SK076	不明	V15	楕円形	皿状	32.0	20.0	5.0	337.18		
第2800	SK077	不明	V15	楕円形	お椀状	30.0	20.0以上	10.0	337.10		
第2800	SK078	不明	V14*	楕円形	すり鉢状	36.0	28.0	9.0	337.22		
第2800	SK079	不明	V14	楕円形	お椀状	28.0	20.0	10.0	337.22		
第2800	SK080	不明	V14	楕丸方形	すり鉢状	22.0	22.0	9.0	337.28		
第2800	SK081	不明	V10	不整形	不整形	28.0	24.0	12.0	336.63		

調査号	遺構	時期	グリップ	平面形状	断面形状	長軸m	短軸m	深さm	基礎深さm	出土遺物	備考欄
第2800	SK082	不明	LV15	円形	すり鉢状	15.0	14.0	5.0	337.04		
第2800	SK083	不明	LV15	円形	お椀状	20.0	18.0	10.0	337.06		
第2800	SK084	不明	LV15	不整形円形	不整形	36.0	38.0	20.0	337.01		
第2800	SK085	不明	LV15	円形?	皿状	20.0	19.0	4.0	337.15		
第2800	SK086	不明	LV15	円形	皿状	16.0	16.0	4.0	337.10		
第2799	SK087	不明	LV14	円形	皿状	39.0	23.0	8.0	336.74		
第2800	SK088	不明	LV14	円形	皿状?	22.0	22.0	5.0	337.32		
第2800	SK089	不明	LV14	楕円形	皿状	30.0	22.0	6.0	337.34		
第2800	SK090	不明	LV10	不整形円形	不整形	62.0	52.0	26.0	336.74		
第2800	SK091	不明	LV13	不整形丸方形	タライ状	30.0	28.0	13.0	337.34		
第2800	SK092	不明	LV13	円形?	皿状	26.0	24.0	6.0	337.26		
第2710	SK093	不明	LV13	不整形	不整形	56.0	46.0	12.0	337.08		
第2710	SK094	不明	LV13	不整形円形	皿状	54.0	52.0	10.0	337.10		
第2710	SK095	不明	LV12	不明	すり鉢状	62.0以上	58.0以上	12.0	337.06		重複(SK164古)
第2700	SK096	不明	LV07- LV12	楕円形	タライ状	52.0	44.0	12.0	337.04		
第2800	SK097	不明	LV15	楕円形	すり鉢状	36.0	30.0	9.0	337.20		
第2800	SK098	不明	LV15	不整形円形	皿状	30.0	26.0	4.0	337.24		
第2800	SK099	不明	LV14- LV15	円形?	不明	26.0	22.0以上	36.0	30.00		
第2800	SK100	不明	LV14	隅丸方形?	すり鉢状	30.0	28.0以上	8.0	337.34		本跡は、地山の直径1m前後の礎の間にあり、礎が動いた時の歪みの可能性がある。
第2800	SK101	不明	LV09- LV10	隅丸方形	すり鉢状?	38.0	38.0	18.0	336.78		
第2800	SK102	不明	LV15	不整形	皿状	50.0	38.0	9.0	337.11		
第2800	SK103	不明	LV15	楕円形	すり鉢状	24.0	20.0	5.0	337.19		
第2700	SK104	不明	LV07	楕円形	不明	36.0	32.0	12.0	336.95		
第2800	SK105	不明	LV20	不整形円形	皿状	32.0	28.0	4.0	337.06		
第2800	SK106	不明	LV14	隅丸長方形	お椀状	48.0	32.0	16.0	337.18		
第28-6000	SK107	不明	LV19	不整形	不整形	168.0	160.0	42.0	337.06		発生中期後半の可能性
第2800	SK108	不明	LV10	円形	円筒状	22.0	22.0	14.0	337.01		
第2800	SK109	不明	LV14	円形	お椀状	18.0	18.0	10.0	337.20		
第2800	SK110	不明	LV14	楕円形	お椀状	26.0	20.0	12.0	337.18		
第2800	SK111	不明	LV14	楕円形	すり鉢状	23.0	20.0	6.0	337.18		
第2800	SK112	不明	LV20	楕円形	お椀状	22.0	14.0	6.0	337.18		
第2800	SK113	不明	LV19	楕円形	不整形	42.0	29.0	8.0	337.34		
第2800	SK114	不明	LV19	不整形隅丸長方形	タライ状	32.0	36.0	10.0	337.28		
第2800	SK115	不明	LV20	不整形	お椀状?	21.0	16.0以上	8.0	337.02		重複(SK116古)(穴43新)
第2800	SK116	不明	LV20	円形?	すり鉢状	16.0以上	7.0	337.03			重複(SK115新)
第2800	SK117	不明	LV15	楕円形	すり鉢状	20.0	14.0	13.0	337.10		
第2800	SK118	不明	LV09	隅丸方形	お椀状	18.0	17.0	6.0	337.11		
第2800	SK119	不明	LV14	隅丸方形	皿状	23.0	22.0	6.0	337.18		
第2800	SK120	不明	LV06	不整形円形	お椀状	18.0	16.0	6.0	336.38		
第2800	SK121	不明	LV15	隅丸方形	すり鉢状	23.0	22.0	10.0	337.10		
第2800	SK122	不明	LV14- LV15	不整形隅丸方形	すり鉢状	36.0	36.0	14.0	337.12		
第2800	SK123	不明	LV15	不整形	すり鉢状	38.0	22.0	10.0	337.16		
第2800	SK124	不明	LV14	楕円形	お椀状	36.0	30.0	14.0	337.12		
第2800	SK125	不明	LV06	不整形円形?	不整形	36.0	22.0	18.0	336.46		
第2800	SK126	不明	LV06	楕円形	不整形	38.0	30.0	28.0	336.48		
第2800	SK127	不明	LV06	不整形円形	すり鉢状	53.0	38.0	17.0	336.55		
第2800	SK128	不明	LV10	円形?	不整形	44.0	44.0	10.0	336.68		
第2800	SK129	不明	LV15	円形	すり鉢状	20.0	18.0	10.0	337.12		
第2800	SK130	不明	LV15	楕円形	皿状	28.0	22.0	4.0	337.08		
第2800	SK131	不明	LV06	不整形隅丸長方形	不整形	32.0	24.0	25.0	336.44		
第2800	SK132	不明	LV06	不整形隅丸長方形	皿状	28.0	24.0	6.0	336.64		
第2800	SK133	不明	LV06	不整形隅丸方形	すり鉢状	23.0	22.0	24.0	336.36		
第2800	SK134	不明	LV06	不整形隅丸方形	タライ状	26.0	24.0	10.0	336.38		
第2800	SK135	不明	LV06	不整形隅丸長方形	お椀状	22.0	16.0	10.0	336.46		
第2800	SK136	不明	LV10	不整形円形	すり鉢状	29.0	24.0	8.0	336.84		
第2800	SK137	不明	LV05	楕円形	タライ状	53.0	46.0	17.0	336.40		
第2800	SK138	不明	LV13- LV14	隅丸長方形	皿状	245.0	120.0	30.0	336.98		発生中期後半の可能性
第2300	SK139	不明	II005	楕円形	円筒状?	43.0	30.0	27.0	336.94		発生土器 重複(SK140古) 発生中期後半の可能性
第2320	SK140	不明	II005	不整形円形	不明	25.0	21.0	11.0	337.08		重複(SK139新)
第2320	SK141	不明	II005	楕円形	皿状	46.0	30.0	11.0	337.08		
第2320	SK142	不明	II005	不整形円形	お椀状	30.0	28.0	13.0	337.01		ST149aに付する
第2320	SK143	不明	II005	隅丸方形	お椀状	24.0	24.0	8.0	337.10		ST149bに付する
第2320	SK144	不明	II005	不整形円形	不整形	28.0	22.0	11.0	337.10		
第2320	SK145	不明	II005	楕円形	皿状	30.0	16.0	6.0	337.34		
第2320	SK146	不明	II004	円形	すり鉢状	24.0	24.0	10.0	337.32		重複(SK151新)
第2320	SK147	不明	II004	隅丸方形	皿状	28.0	26.0	8.0	337.41		
第2320	SK148	不明	II004	隅丸長方形	タライ状	40.0	28.0	24.0	337.32		ST149cに付する
第2320	SK149	不明	II004	楕円形	円筒状	28.0	24.0	14.0	337.46		ST149dに付する
第3100	SK150	不明	II004	円形	お椀状	24.0	24.0	12.0	337.56		
第3200	SK151	不明	II004	円形	すり鉢状?	29.0	27.0	20.0	337.22		重複(SK146古)
第3100	SK152	不明	II004	楕円形	円筒状	34.0	28.0	22.0	337.50		ST149eに付する
第3200	SK153	不明	II004	不整形円形	不整形	46.0	34.0	30.0	337.38		
第3200	SK154	不明	II004	楕円形	お椀状	29.0	24.0	8.0	337.44		ST149fに付する
第3100	SK155	不明	II004	不整形円形	すり鉢状	24.0	22.0	5.0	337.70		
第3100	SK156	不明	II003	不整形	お椀状	30.0	26.0	16.0	337.68		
第3100	SK157	不明	II003	楕円形	不整形	38.0	26.0	10.0	337.02		
第3100	SK158	不明	II003	楕円形	タライ状	50.0	44.0	28.0	337.90		
第3100	SK159	不明	II003	不整形	皿状	34.0	22.0	5.0	337.01		
第3100	SK160	不明	II003	楕円形	円筒状	44.0	34.0	27.0	337.66		
第3100	SK161	不明	LV23	楕円形	不整形	32.0	25.0	12.0	337.80		
第3100	SK162	不明	LV23	楕円形	不整形	36.0	28.0	24.0	337.68		

## 第3章 琵琶島遺跡の調査

図面No	遺構	時期	グッド	平面形状	断面形状	長軸m	短軸m	深さm	面積㎡	出土遺物	備考欄
第211図	SK163	不明	I V23	円形	タライ状	22.0	20.0	12.0	337.26		
第272図	SK164	不明	I V07・ I V08	不整形	不整形	476.0以上	282.0	49.0	336.85		自然の落ち込みの可能性が高い 重層(SK095新)
第280図	SK165	不明	I V14	隅丸長方形	タライ状	40.0	37.0	12.0	337.16		
第282図	SK166	不明	I V14	楕円形	すり鉢状	52.0	38.0	12.0	337.08		
第290図	SK167	不明	I V10	不整形隅丸方形	お粥状?	25.0	34.0	12.0	336.80		柱穴状
第291図	SK168	不明	I W06	円形	すり鉢状?	19.0	16.0	8.0	336.69		柱穴状
第290図	SK169	不明	I W06	円形	タライ状?	50.0	50.0	22.0	336.50		
第211図	SK170	不明	I M16	楕円形	お粥状?	36.0	24.0	16.0	335.80		ST109と2号
第211図	SK171	不明	I M21	隅丸方形	皿状?	42.0	41.0	8.0	335.94		
第211図	SK172	不明	I M16	隅丸方形	皿状?	32.0	30.0	6.0	335.86		ST109と1号
第211図	SK173	不明	I R01	楕円形	皿状?	28.0	18.0	3.0	335.90		
第211図	SK174	不明	I L25	不整形隅丸方形	皿状?	30.0	28.0	6.0	335.90	礎石	ST109と2号 古墳時代の可能性
第211図	SK175	不明	I R06	隅丸長方形	不整形	34.0	30.0	5.0	335.97		ST07の柱穴の可能性
第211-60図	SK176	不明	I R01	不整形楕円形	すり鉢状	37.0	30.0	10.0	335.78	赤生土層	赤生中期後半の可能性
第211図	SK177	不明	I R01	楕円形	不整形	52.0	38.0	8.0	335.91		ST07の柱穴の可能性
第211図	SK178	不明	I R06	不整形円形	皿状?	34.0	34.0	7.0	337.01		ST07の柱穴の可能性
第211図	SK179	不明	I R06	楕円形?	不整形	28.0以上	24.0	7.0	336.00		
第211-60図	SK180	不明	I R06	不整形	不整形	60.0	60.0	12.0	335.90	赤生土層	ST07の柱穴の可能性 赤生中期後半の可能性
第222図	SK181	不明	I R06	不整形	皿状?	33.0	30.0	13.0	336.05		柱穴状・ST12号
第222図	SK182	不明	I R06	円形	皿状?	22.0	22.0	6.0	336.04		柱穴状・ST12号
第222図	SK183	不明	I R11	楕円形	すり鉢状	46.0	32.0	12.0	335.98		柱穴状・ST12号
第222図	SK184	不明	I R11	不整形	すり鉢状	34.0	28.0	4.0	336.03	赤生土層	柱穴状・ST12号 赤生中期後半の可能性
第280図	SK185	不明	I V14	長楕円形	タライ状	254.0以上	74.0	30.0	337.00		重層(ST10古)
第280図	SK186	不明	I V24	不整形	不整形	210以上	98.0	50.0	337.08		
第222-50図	SK187	不明	I R16	不整形	タライ状	134.0	125.0	24.0	335.78	縄文土層	明確な土坑、重層(SK422新) 縄文中期前半の可能性
第222図	SK188	不明	I W11	円形	皿状?	44.0	44.0	10.0	336.70		
第222図	SK189	不明	群H04	円形?	—						
第212図	SK190	不明	I M13	円形	円筒状	24.0	23.0	22.0	331.78		ST149と5号
第22-611図	SK191	不明	I R11・ I R12	隅丸長方形	タライ状	290.0	100.0	56.0	335.55	赤生土層、 古墳時代 土器、ロク ロガシ、 礫石、刀 鏝、打痕 鏝、2次加 工のある割 片、割片	H23-24調査古墳時代中期の可 能性
第122図	SK192	不明	I M13	円形	お粥状	20.0	19.0	10.0	331.84		
第122図	SK193	不明	I M13	円形	お粥状	22.0	20.0	9.0	331.59		重層(SK08古)
第122図	SK194	不明	I M13	円形	皿状?	26.0	26.0	8.0	331.59		重層(SK08古)
第122図	SK195	不明	I M13	隅丸方形?	すり鉢状?	40.0	32.0以上	14.0	331.54		重層(SK20古, SK08古)
第29-50図	SK196	不明	I W06・ I W11・ I W12	不整形	不整形	300.0	143.0	58.0	335.70	縄文土層	縄文後期前半の可能性
第122図	SK197	不明	I M13	楕円形	お粥状	30.0	20.0	14.0	331.64		重層(SK08古)
第122図	SK198	不明	I M14	円形	円筒状	20.0	20.0	35.0	331.20		
第122図	SK199	不明	I M13	楕円形	円筒状	18.0	24.0	18.0	331.24	赤生土層	赤生中期後半の可能性
第122図	SK200	不明	I M14	不整形円形	すり鉢状	36.0	24.0	13.0	331.26	赤生土層	赤生中期後半の可能性
第122図	SK201	不明	I M14	楕円形	皿状?	30.0	22.0	4.0	331.44		
第122図	SK202	不明	I M13	不整形円形	すり鉢状	40.0	36.0	26.0	331.68		
第122図	SK203	不明	I M18	不整形円形	円筒状?	21.0	12.0	20.0	330.68		
第122図	SK204	不明	I M23	不整形円形	すり鉢状	19.0	14.0	8.0	331.62		
第12-62図	SK205	不明	I M24	楕円形	皿状?	62.0	48.0	14.0	331.84	平安時代土 器、炭化土	C140124分析No.15) 平安時代の可能性
第122図	SK206	不明	I M19	楕円形	不整形	24.0	18.0	15.0	332.40		
第122図	SK207	不明	I M19	不整形円形	お粥状	16.0	16.0	8.0	332.45		
第122図	SK208	不明	I M14	不整形円形	タライ状	18.0	16.0	8.0	331.38		
第122図	SK209	不明	I M18	楕円形	お粥状	16.0	12.0	9.0	331.45		
第122図	SK210	不明	I M14	円形	お粥状	14.0	14.0	6.0	331.49		
第122図	SK211	不明	I M13	楕円形	すり鉢状	20.0	16.0	7.0	331.47		
第122図	SK212	不明	I M24	円形	お粥状	12.0	12.0	5.0	331.73		ST239と5号
第122図	SK213	不明	I M24	円形	お粥状	16.0	16.0	4.0	331.73		ST239と6号
第122図	SK214	不明	I M19	円形	お粥状	12.0	12.0	5.0	332.49		ST239と2号
第122図	SK215	不明	I M24	不整形円形	円筒状	14.0	14.0	6.0	331.60		ST239と3号
第122図	SK216	不明	I M19	不整形隅丸方形	お粥状	16.0	15.0	6.0	332.46		
第122図	SK217	不明	I N16	円形	皿状?	18.0	16.0	10.0	330.08		
第122図	SK218	不明	I N16	不整形円形	皿状?	32.0	30.0	3.0	330.12		
第122図	SK219	不明	I N16	円形	お粥状	16.0	16.0	11.0	330.08		
第122図	SK220	不明	I N16	不整形円形	すり鉢状	32.0	28.0	19.0	329.95		
第122図	SK221	不明	I N16	円形	皿状?	16.0	15.0	3.0	330.10		
第122図	SK222	不明	I N16	不整形円形	すり鉢状	24.0	22.0	15.0	330.04		
第122図	SK223	不明	I N16	不整形円形	円筒状	18.0	16.0	14.0	330.04		
第122図	SK224	不明	I N16	楕円形	皿状?	14.0	2.0	330.14			
第122図	SK225	不明	I N22	楕円形	皿状?	24.0	20.0	4.0	330.06		
第122図	SK226	不明	I N22	円形?	お粥状	22.0	21.0	8.0	330.00		
第122図	SK227	不明	I N22	隅丸方形	皿状?	30.0	30.0	6.0	330.04		
第122図	SK228	不明	I N03	楕円形	皿状?	16.0	13.0	4.0	329.43		重層(SD01古)
第122図	SK229	不明	I N16	楕円形	すり鉢状	24.0	20.0	13.0	330.63		
第122図	SK230	不明	I M13	楕円形?	不整形	39.0	30.0以上	9.0	331.58		重層(SK196古)
第122図	SK231	不明	I X03	円形	円筒状	19.0	18.0	24.0	329.26		重層(SD01新古不明)
第122図	SK232	不明	I M19	円形	タライ状	12.0	12.0	4.0	331.54	炭化物	ST239と1号、赤生中期後半
第122図	SK233	不明	I N16	不整形円形	円筒状	20.0	18.0	18.0	329.92		
第122図	SK234	不明	I N16	不整形円形	円筒状	20.0	17.0	24.0	329.89	土器	

図録No.	遺構	時期	グリッド	平面形状	断面形状	長軸m	短軸m	深さm	面積㎡	出土遺物	備考欄
第1304	SK235	不明	X16	構内形	円筒状	21.0	18.0	30.0	329.86	縄文土器	縄文前期前半の可能性
第1304	SK236	不明	X16	不整形	円筒状	18.0	17.0	20.0	329.92		
第16-17期	SK237	不明	X02	円形	皿状	50.0	46.0	12.0	330.40	弥生土器、炭化物、骨片	C1相(約4分層%16) 平安時代以降の可能性
第16-17期	SK238	不明	X22	不整形	不整形	32.0	31.0	17.0	330.27	弥生土器	平安時代以降の可能性
第16-17期	SK239	不明	X02	円形	お椀状	22.0	22.0	10.0	330.30	縄文土器、平安土器	平安時代の可能性
第16-17期	SK240	不明	X02	円形	お椀状	22.0	22.0	13.0	330.20	縄文土器	平安時代以降の可能性
第16-17期	SK241	不明	X02	不整形丸長方形	皿状	(190.0)	68.0	16.0	330.19	縄文土器、弥生土器	平安時代の可能性
第1904	SK242	不明	X07	構内形	お椀状	23.0	20.0	7.0	330.60		平安時代以降の可能性
第1904	SK243	不明	X07	構内形	タライ状	28.0	20.0	14.0	330.35		平安時代以降の可能性
第1904	SK244	不明	X07	構内形	お椀状	27.0	22.0	17.0	330.31		平安時代以降の可能性
第1904	SK245	不明	M24	不整形	お椀状	12.0	10.0	6.0	331.73		ST230に付する
第1904	SK246	不明	M24	円形	お椀状	13.0	12.0	4.0	331.70		
第1904	SK247	不明	M14	不整形円形	お椀状	21.0	18.0	12.0	331.40		
第1904	SK248	不明	M14	円形	お椀状	20.0	18.0	7.0	331.41		
第16-17期	SK249	不明	X22	構内形	お椀状	28.0	24.0	12.0	329.86	銅片	重複(SD03新古不明) 弥生中期後半の可能性 瓦葺・花野(約4分層%)
第1304	SK250	不明	X21	不整形	すり鉢状	20.0	16.0	8.0	330.00		
第1904	SK251	不明	X06	不整形	円筒状	31.0	25.0	28.0	330.27	弥生土器	弥生中期後半の可能性
第2004	SK252	不明	X16	円形	お椀状	18.0	16.0	10.0	331.06	弥生土器	弥生中期後半の可能性
第2004	SK253	不明	X16	不整形丸長方形	円筒状	20.0	19.0	20.0	331.08	弥生土器	弥生中期後半の可能性
第2004	SK254	不明	X16	円形	円筒状	16.0	16.0	331.14			
第2004	SK255	不明	X16	円形	お椀状	14.0	14.0	6.0	331.20		
第2004	SK256	不明	X16	不整形丸長方形	円筒状	32.0	15.0	35.0	331.01	縄文土器、弥生土器	弥生中期後半の可能性
第1904	SK257	不明	X16	構内形	円筒状	20.0	16.0	26.0	331.00	弥生土器	弥生中期後半の可能性
第1904	SK258	不明	X16	円形	円筒状	14.0	12.0	8.0	331.20		
第1904	SK259	不明	X16	構内形	すり鉢状	27.0	21.0	13.0	331.12		
第1904	SK260	不明	X11	円形	すり鉢状	20.0	20.0	13.0	331.20	弥生土器	弥生中期後半の可能性
第1904	SK261	不明	X11	円形	お椀状	14.0	14.0	12.0	331.20		
第1904	SK262	不明	X06	構内形	円筒状	27.0	16.0	28.0	331.10		
第1904	SK263	不明	X06	不整形円形	お椀状	12.0	12.0	8.0	331.30		
第1904	SK264	不明	X06	円形	お椀状	18.0	18.0	6.0	331.30		
第1904	SK265	不明	X06	円形	不整形	16.0	15.0	6.0	331.27		
第1904	SK266	不明	X06	円形	円筒状	8.0	8.0	10.0	331.22		
第1904	SK267	不明	X06	構内形	円筒状	20.0	16.0	17.0	331.16		
第1904	SK268	不明	X06	円形	お椀状	16.0	14.0	10.0	331.26		
第1904	SK269	不明	X06	円形	お椀状	20.0	18.0	12.0	331.22	弥生土器	弥生中期後半の可能性
第1904	SK270	不明	X06	不整形	すり鉢状	19.0	18.0	9.0	331.25		
第1904	SK271	不明	X06	円形	不整形	20.0	18.0	10.0	331.28		
第1904	SK272	不明	X17	円形	お椀状	16.0	15.0	5.0	330.87		
第1904	SK273	不明	X16+X17	構内形	タライ状	65.0	37.0	37.0	330.73		
第1904	SK274	不明	X11	円形	円筒状	12.0	12.0	10.0	330.98		
第1904	SK275	不明	X11	不整形	お椀状	16.0	14.0	8.0	330.95		
第1904	SK276	不明	X11	構内形	タライ状	24.0	18.0	14.0	330.90		
第1904	SK277	不明	X11	円形	すり鉢状	18.0	18.0	16.0	331.18		
第1904	SK278	不明	X11	円形	お椀状	16.0	16.0	7.0	331.27		
第1904	SK279	不明	X06	円形	円筒状	18.0	17.0	15.0	331.05		
第1904	SK280	不明	X06	構内形	すり鉢状	22.0	14.0	13.0	331.03		
第1904	SK281	不明	X11	円形	お椀状	13.0	12.0	8.0	330.82		
第1904	SK282	不明	X17	不整形丸長方形	お椀状	20.0	17.0	12.0	330.87		
第1904	SK283	不明	X17	構内形	すり鉢状	21.0	16.0	6.0	330.06		
第1904	SK284	不明	X17	構内形	すり鉢状	16.0	14.0	33.0	329.99		
第19-50期	SK285	不明	X17	円形	深さのあるタライ状	34.0	32.0	25.0	329.78	縄文土器	縄文前期前半の可能性
第1904	SK286	不明	X12	円形	円筒状	23.0	22.0	17.0	329.86		
第1904	SK287	不明	X12	円形	不整形	19.0	18.0	7.0	330.09		
第1904	SK288	不明	X12	不整形	円筒状	24.0	22.0	36.0	330.07		
第19-60期	SK289	不明	X07	不整形円形	円筒状	34.0	29.0	23.0	330.11	弥生土器、炭石、鏡破	弥生中期後半の可能性
第1904	SK290	不明	X07	構内形	お椀状	19.0	17.0	10.0	330.21		
第19-50期	SK291	不明	X12	構内形	深さのあるタライ状	100.0	68.0	55.0	329.18	炭化物	C1相(約4分層%17) 高土、縄文前期前半の可能性
第1604	SK292	不明	X06	構内形	円筒状	25.0	22.0	40.0	330.66		
第19-50期	SK293	不明	X12	不整形	皿状	52.0	45.0	16.0	329.67	縄文土器	縄文早期前半の可能性
第1604	SK294	不明	X01	円形	円筒状	20.0	18.0	20.0	330.88	弥生土器	弥生中期後半の可能性
第1904	SK295	不明	X07	円形	すり鉢状	30.0	30.0	16.0	329.80		
第1604	SK296	不明	X01	円形	円筒状	18.0	16.0	20.0	330.76	弥生土器	弥生中期後半の可能性
第1904	SK297	不明	X08	円形	お椀状	21.0	20.0	8.0	329.42		
第1904	SK298	不明	X08	円形	皿状	30.0	18.0	5.0	329.47		
第2004	SK299	不明	X17	円形	円筒状	12.0	10.0	34.0	330.22		
第1904	SK300	不明	X17	円形	タライ状	26.0	26.0	22.0	329.61		
第1604	SK301	不明	X01	構内形	不整形	18.0	15.0	6.0	330.90		
第1604	SK302	不明	X16	不整形円形	不整形	23.0	18.0	10.0	330.44		平安時代以降の可能性
第1604	SK303	不明	X16	円形	円筒状	15.0	13.0	12.0	330.44		平安時代以降の可能性
第15-16期	SK304	不明	X04	不整形	円筒状	23.0	22.0	30.0	330.86		弥生中期後半の可能性
第17-60期	SK305	不明	X03	円形	皿状	78.0	76.0	11.0	329.44		重複(SD03新古不明) 弥生中期後半の可能性
第17期	SK306	不明	X03	構内形?	皿状?	82.0	30.0以上	28.0	329.33		
第16-17期	SK307	不明	X02	円形	円筒状	24.0	24.0	17.0	329.63		
第17期	SK308	不明	X18	構内形	円筒状	16.0	14.0	52.0	328.94		



## 第3章 琵琶島遺跡の調査

図版No.	遺構	時期	グリッド	平面形状	断面形状	長軸m	短軸m	深さm	断面積㎡	出土遺物	備考欄
第171図	SK309	不明	I S18	横円形	すり鉢状	27.0	20.0	6.0	329.48		
第172図	SK310	不明	I S23	不整形円形	不整形	22.0	21.0	18.0	329.20		
第173図	SK311	不明	I S18	円形	不整形	25.0	23.0	16.0	329.36	炭化物	
第174図	SK312	不明	I S18	円形	タライ状	23.0	22.0	10.0	329.44		
第180図	SK313	不明	I S24	不整形円形	円筒状	20.0	18.0	22.0	329.84		
第17-60図	SK314	不明	I N02・ I N07	不整形円形	皿状	188.0	40.0	6.0	329.80	赤生土器	赤生中期後半の可能性
第140図	SK315	不明	I B04	円形	円筒状	23.0	22.0	20.0	332.00	赤生土器	赤生中期後半の可能性
第141図	SK316	不明	I B04	横円形	お椀状	24.0	20.0	13.0	332.08		平安時代以降の可能性
第142図	SK317	不明	I B04	不整形	不整形	67.0	55.0	33.0	331.98	赤生土器	平安時代以降の可能性
第14-62図	SK318	不明	I B04	横円形	タライ状	116.0	94.0	28.0	331.80	赤生土器、 縄文土器、 平安時代土器	平安時代の可能性
第150図	SK319	不明	I S02	円形	すり鉢状	34.0	30.0	16.0	329.96	赤生土器	重覆(SB01新)
第151図	SK320	不明	I S02	横円形	円筒状	28.0	20.0	18.0	329.82		
第152図	SK321	不明	I S02	不整形	すり鉢状	36.0	31.0	32.0	329.78	赤生土器	赤生中期後半の可能性
第130図	SK322	不明	I N22・ I S02	不整形横円形	皿状	72.0	39.0	18.0	330.00		
第130図	SK323	不明	I N22	横円形	すり鉢状	34.0	30.0	20.0	329.98		
第130図	SK324	不明	I N22	円形	不整形	30.0	30.0	28.0	329.84		
第130図	SK325	不明	I N22	横円形	不整形	50.0	42.0	27.0	329.88	縄文土器、 赤生土器	赤生中期後半の可能性
第130図	SK326	不明	I N21・ I N22	不整形円形	円筒状	37.0	35.0	28.0	329.90		
第130図	SK327	不明	I N21	不整形円形	円筒状	22.0	20.0	19.0	330.02		
第130図	SK328	不明	I N21	円形	円筒状	32.0	30.0	18.0	330.10		
第130図	SK329	不明	I N21	不整形円形	不整形	30.0	28.0	31.0	329.93		
第130図	SK330	不明	I N21	円形	円筒状	30.0	28.0	39.0	329.83		
第130図	SK331	不明	I N21	縦丸方形	タライ状	24.0	24.0	12.0	330.15		
第130図	SK332	不明	I N21	円形	円筒状	18.0	18.0	30.0	330.05		
第130図	SK333	不明	I N21	円形	円筒状	23.0	23.0	28.0	330.12		
第130図	SK334	不明	I N21	円形	タライ状	40.0	36.0	17.0	330.25		赤生中期後半の可能性
第130図	SK335	不明	I N21	円形	お椀状	26.0	25.0	10.0	330.46		赤生中期後半の可能性
第130図	SK336	不明	I N21	不整形円形	すり鉢状	32.0	28.0	20.0	330.38		
第130図	SK337	不明	I S01	円形	円筒状	30.0	30.0	16.0	330.59		
第130図	SK338	不明	I S01	円形	円筒状	19.0	19.0	14.0	330.26		
第130図	SK339	不明	I N21・ I N22	横円形	タライ状	27.0	24.0	12.0	330.06		
第130図	SK340	不明	I S01・I S02	円形	円筒状	21.0	21.0	15.0	330.05		
第130図	SK341	不明	I S01・I S02	横円形	すり鉢状	24.0	20.0	15.0	330.04		重覆(SK446新田不明)
第130図	SK342	不明	I S01	円形	お椀状	20.0	20.0	11.0	330.07		
第130図	SK343	不明	I S01	円形	円筒状	22.0	20.0	33.0	329.87		
第130図	SK344	不明	I S01	円形	円筒状	22.0	20.0	28.0	329.90	赤生土器	赤生中期後半の可能性
第130図	SK345	不明	I S01	円形	円筒状	25.0	24.0	24.0	329.94	赤生土器	赤生中期後半の可能性
第130図	SK346	不明	I S01・I S02	円形	円筒状	28.0	26.0	35.0	329.82		
第13-60図	SK347	不明	I S02	横円形	タライ状	35.0	28.0	16.0	330.00	赤生土器	赤生中期後半の可能性
第130図	SK348	不明	I S02	不整形	円筒状	60.0	38.0	30.0	329.84	赤生土器	重覆(SK349新古不明)
第130図	SK349	不明	I S02	不整形	円筒状	38.0	(35)	50.0	329.65	赤生土器	赤生中期後半の可能性
第150図	SK350	不明	I S11	円形	円筒状	20.0	20.0	18.0	330.40		重覆(SK348新古不明)
第150図	SK351	不明	I S11	横円形	タライ状	34.0	28.0	15.0	330.52	赤生土器	平安時代の可能性
第150図	SK352	不明	I S16	円形	不整形	29.0	28.0	18.0	330.54	赤生土器	平安時代の可能性
第15-160図	SK353	不明	I S16	横円形	タライ状	23.0	16.0	12.0	330.66		
第160図	SK354	不明	I S16	不整形円形	タライ状	25.0	22.0	19.0	330.73		
第130図	SK355	不明	I S02	円形	すり鉢状	32.0	30.0	18.0	329.96		
第130図	SK356	不明	I S02	横円形	タライ状	32.0	26.0	24.0	329.90	赤生土器、 炭化物	赤生中期後半の可能性
第130図	SK357	不明	I S01	横円形	タライ状	28.0	23.0	12.0	330.10		
第15-590図	SK358	不明	I S06	横円形	深さのあるタライ状	148.0	76.0	67.0	330.09		深さ、縄文時代の可能性
第15-160図	SK359	不明	I S16	円形	円筒状	26.0	24.0	38.0	330.68	赤生土器、 平安時代土器	平安時代の可能性
第16-60図	SK360	不明	I S21	円形	円筒状	20.0	20.0	23.0	331.69	赤生土器	赤生中期後半の可能性
第16-62図	SK361	平安	I S16	不整形横円形	タライ状	91.0	41.0	32.0	330.86	赤生土器、 縄文土器、 炭化物、 漆、 漆、 炭化物	C14024分析No.18)
第16-170図	SK362	不明	I S22	円形	タライ状	23.0	23.0	11.0	330.01		重覆(SD03新古不明)
第290図	SK363	不明	I W11	円形	皿状	26.0	26.0	9.0	330.07		
第150図	SK364	不明	I W14	不整形横円形	すり鉢状	39.0	30.0	13.0	330.11		
第150図	SK365	不明	I S06	縦丸方形	皿状	30.0	29.0	6.0	330.48		
第150図	SK366	不明	I S06	横円形	皿状	30.0	26.0	10.0	331.02		
第150図	SK367	不明	I R10	不整形円形	円筒状	33.0	32.0	32.0	331.20	赤生土器	
第140図	SK368	不明	I R15	円形	円筒状	24.0	22.0	15.0	331.78	赤生土器	赤生中期後半の可能性
第140図	SK369	不明	I R14	不整形縦丸方形	タライ状	23.0	22.0	18.0	331.85		
第140図	SK370	不明	I R14	不整形横円形	すり鉢状	29.0	25.0	18.0	331.84		
第140図	SK371	不明	I R14	不整形横円形	円筒状	28.0	24.0	32.0	331.88		
第140図	SK372	不明	I R14	不整形円形	円筒状	25.0	23.0	52.0	331.60		
第14-600図	SK373	不明	I R15	不整形円形	円筒状	33.0	30.0	45.0	331.56	赤生土器	重覆(SD05新古不明)
第140図	SK374	不明	I R15	横円形	お椀状	46.0	21.0	10.0	331.84	赤生土器	赤生中期後半の可能性
第140図	SK375	不明	I R10	横円形	お椀状	28.0	22.0	10.0	331.82		
第140図	SK376	不明	I R10	横円形	深さのあるタライ状	28.0	20.0	24.0	331.66		

図面No.	遺構	時期	グッド	平面形状	断面形状	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	直面積(m <sup>2</sup> )	出土遺物	備考
第1400	SK377	不明	I R09- I R14	不整形	不整形	28.0	18.0	29.0	331.76		
第1400	SK378	不明	I R09- I R14	円形	不整形	56.0	56.0	39.0	331.66		
第1400	SK379	不明	I R09	円形	不整形	25.0	24.0	17.0	331.86		
第1400	SK380	不明	I R10	楕円形	円筒状	39.0	19.0	12.0	331.68		
第1400	SK381	不明	I R09	楕円形	不整形	23.0	14.0	9.0	331.75	赤土土器	弥生中期後半の可能性
第1400	SK382	不明	I R09	楕円形	すり鉢状	41.0	36.0	22.0	331.64		
第1400	SK383	不明	I R09	円形	円筒状	18.0	18.0	36.0	331.54		
第1400	SK384	不明	I R09	楕円形	お椀状	22.0	14.0	10.0	331.92		
第1400	SK385	不明	I R09	円形	タライ状	22.0	20.0	10.0	331.92		
第1400	SK386	不明	I R09	楕円形	蓋状	55.0	21.0	4.0	331.95	平安時代土器	平安時代の可能性
第1400	SK387	不明	I R10	楕円形	円筒状	70.0	26.0	15.0	331.64		
第1400	SK388	不明	I R10	楕円形	タライ状	122.0	35.0	25.0	331.45		
第1400	SK389	不明	I R04	隅丸方形	円筒状	25.0	25.0	35.0	331.51		
第1400	SK390	不明	I R04	楕円形	円筒状	36.0	31.0	34.0	331.52		
第1400	SK391	不明	I R04	円形	お椀状	17.0	16.0	8.0	331.80		
第1400	SK392	不明	I R04	楕円形	お椀状	51.0	10.0	4.0	331.80		
第1400	SK393	不明	I R05	楕円形	すり鉢状	32.0	26.0	12.0	331.52		
第1400	SK394	不明	I R05	楕円形	タライ状	80.0	35.0	24.0	331.49		
第1400	SK395	不明	I R05	楕円形	タライ状	80.0	31.0	31.0	331.44	赤土土器	弥生中期後半の可能性
第14-6000	SK396	不明	I R05	不整形楕円形	タライ状	66.0	32.0	23.0	331.41	赤土土器	弥生中期後半の可能性
第1400	SK397	不明	M25	不整形	蓋状	73.0	58.0	3.0	331.39	赤土土器	弥生中期後半の可能性
第1400	SK398	不明	M25	不整形楕円形	タライ状	60.0	22.0	18.0	331.46		
第1400	SK399	不明	I R04	楕円形	蓋状	36.0	32.0	4.0	331.58		
第1400	SK400	不明	I R04	円形	タライ状	24.0	24.0	16.0	331.46		
第1400	SK401	不明	I R04	不整形	不整形	25.0	24.0	24.0	331.54		
第1400	SK402	不明	M24	円形	タライ状	31.0	30.0	16.0	331.26		
第1400	SK403	不明	M25	不整形楕円形	蓋状	36.0	18.0	7.0	331.58		
第1400	SK404	不明	M25	楕円形	タライ状	37.0	17.0	10.0	331.54		
第15-1600	SK405	不明	I S16	楕円形	タライ状	22.0	16.0	7.0	330.22		
第1500	SK406	不明	I S12	円形	すり鉢状	25.0	24.0	20.0	329.88		
第1500	SK407	不明	I S12	円形	円筒状	40.0	23.0	22.0	329.86	赤土土器	弥生中期後半の可能性
第1500	SK408	不明	I S12	円形	円筒状	26.0	24.0	26.0	329.86		
第1500	SK409	不明	I S12	円形	円筒状	24.0	24.0	37.0	329.78		
第1500	SK410	不明	I S12	円形	タライ状	34.0	32.0	10.0	329.60		
第1500	SK411	不明	I S12	円形	すり鉢状	36.0	35.0	31.0	329.79		
第1500	SK412	不明	I S12	楕円形	すり鉢状	40.0	35.0	22.0	329.96		
第1500	SK413	不明	I S12	楕円形	不整形	45.0	33.0	11.0	330.03		
第1500	SK414	不明	I R14	円形	タライ状	34.0	32.0	14.0	332.31		
第2000	SK415	不明	I W16	不整形	お椀状	31.0	25.0	12.0	336.28		
第1500	SK416	不明	I S12	楕円形	円筒状	39.0	28.0	18.0	329.82		
第1500	SK417	不明	I S12	隅丸方形	タライ状	36.0	36.0	13.0	329.99		
第2000	SK418	不明	I W16	不整形隅丸方形	お椀状	26.0	26.0	11.0	336.26		
第2200	SK419	不明	I R12- I R17	不整形楕円形	お椀状	42.0	32.0	27.0	335.72	赤土土器、炭化物	C14024分析No.19) 弥生中期後半の可能性
第2200	SK420	不明	I R17	不整形	木製	43.0	39.0	18.0	335.82		
第2200	SK421	不明	I R17	不整形	お椀状	24.0	22.0	14.0	335.45	u.FI, 銅片	弥生中期後半の可能性
第2200	SK422	不明	I R16	不整形	お椀状	78.0	77.0	26.0	335.78	重箱(SK187古)	
第22-6000	SK423	不明	I R17	楕円形	タライ状	72.0	65.0	20.0	335.80	赤土土器、PEQ、ce.FI、銅片	弥生中期後半の可能性
第2200	SK424	不明	I R17	不整形楕円形	円筒状	38.0	24.0	40.0	335.60		
第1500	SK425	不明	I S12	楕円形	不整形	45.0	32.0	20.0	329.95		
第1400	SK426	不明	I R09- I R10- I R15	円形	円筒状	22.0	21.0	24.0	331.77	赤土土器	重箱(SD05古) 弥生中期後半の可能性
第1500	SK427	不明	I S17	円形	お椀状	24.0	22.0	12.0	329.85		
第15-1600	SK428	不明	I S17	円形	円筒状	21.0	20.0	20.0	329.88		
第1600	SK429	不明	I S17	円形	お椀状	26.0	26.0	12.0	329.96		
第15-1600	SK430	不明	I S17	円形	お椀状	33.0	32.0	16.0	329.80		
第15-1600	SK431	不明	I S17	円形	お椀状	21.0	20.0	12.0	329.92		
第15-1600	SK432	不明	I S17	楕円形	蓋状	26.0	19.0	8.0	330.04		
第15-1600	SK433	不明	I S17	円形	不整形	18.0	17.0	34.0	329.76		
第15-1600	SK434	不明	I S17	円形	円筒状	25.0	24.0	26.0	329.82		
第15-1600	SK435	不明	I S17	円形	円筒状	24.0	23.0	19.0	329.86		
第15-1600	SK436	不明	I S17	円形	お椀状	24.0	24.0	23.0	329.84		
第1500	SK437	不明	I S17	楕円形	お椀状	20.0	16.0	9.0	329.98		
第1500	SK438	不明	I S12	楕円形	円筒状	32.0	26.0	25.0	329.92		
第1500	SK439	不明	I S12-1 S17	楕円形	円筒状	30.0	26.0	25.0	329.83		
第1500	SK440	不明	I S12	円形	お椀状	24.0	22.0	17.0	329.88		
第1500	SK441	不明	I S12	円形	お椀状	28.0	27.0	14.0	329.92	縄文土器 赤土土器	弥生中期後半の可能性
第1500	SK442	不明	I S12	円形	円筒状	23.0	22.0	28.0	329.78		
第1500	SK443	不明	I S12	円形	円筒状	20.0	17.0	15.0	329.94		
第1500	SK444	不明	I S11	円形	お椀状	27.0	24.0	15.0	329.94		
第1500	SK445	不明	I S12	楕円形	タライ状	34.0	29.0	21.0	329.95		
第1300	SK446	不明	I S01	不整形	お椀状	17.0	15.0	13.0	329.83		重箱(SK341新古不明)
第1300	SK447	不明	I X22	円形	お椀状	16.0	16.0	14.0	329.72		
第1300	SK448	不明	I S01	不整形楕円形	タライ状	28.0	24.0	10.0	329.90		
第1300	SK449	不明	I S01	楕円形	タライ状	30.0	23.0	17.0	329.83		
第1300	SK450	不明	I S01	楕円形	すり鉢状	17.0	14.0	10.0	329.90		
第1300	SK451	不明	I S12	円形	円筒状	18.0	17.0	10.0	329.98		
第1300	SK452	不明	I S11	不整形	お椀状	40.0	37.0	12.0	330.04		
第16-1700	SK453	不明	I S17	円形	お椀状	20.0	20.0	7.0	329.67		重箱(SD03古、SK514新古不明)

第3章 琵琶島遺跡の調査

図面No.	遺構	時期	グリッド	平面形状	断面形状	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	直線距離(m)	出土遺物	備考欄
第290図	SK434	不明	I W06+ I W11	楕円形	お碗状	38.0	28.0	14.0	336.38		
第170図	SK455	不明	I S22	円形	お碗状	20.0	20.0	14.0	329.68		重覆(SD93新吉不明)
第210図	SK456	不明	I R02	円形	お碗状	34.0	32.0	20.0	335.36		
第211図	SK457	不明	I R02	不整形	不整形	38.0	36.0	18.0	335.37		
第218図	SK458	不明	I R01	不整形	不整形	50.0	42.0	18.0	335.70		
第219図	SK459	不明	I R01	不整形	お碗状	39.0	26.0	18.0	335.72	赤土土器	赤土中期後半の可能性
第220図	SK460	不明	I R07	不整形	すり鉢状	42.0	30.0	20.0	335.60		
第222図	SK461	不明	I R12	楕円形	お碗状	38.0	32.0	17.0	335.65		
第223図	SK462	不明	I R12	楕円形	タライ状	39.0	30.0	15.0	335.86		
第290図	SK463	不明	I W06+ I W11	楕円形	すり鉢状	32.0	20.0	8.0	336.42		
第224図	SK464	不明	I R12	不整形	すり鉢状	34.0	24.0	21.0	335.25	赤土土器	赤土中期後半の可能性
第224-60図	SK465	不明	I R12	楕円形	すり鉢状	41.0	32.0	22.0	335.56	赤土土器	赤土中期後半の可能性
第224図	SK466	不明	I R12	楕円形	不整形	46.0	23.0	23.0	335.57	赤土土器	赤土中期後半の可能性
第224図	SK467	不明	I R17+ I R22	楕円形	お碗状	24.0	21.0	12.0	335.87	赤土土器 炭化物	赤土中期後半の可能性
第225図	SK468	不明	I R12	円形	お碗状	26.0	28.0	15.0	335.35		
第226図	SK469	不明	I X22	楕圓長方形	不整形	92.0	70.0	21.0	339.66		
第226図	SK470	不明	I X22	円形	すり鉢状	24.0	23.0	11.0	330.35		
第226図	SK471	不明	I X22	円形	お碗状	18.0	17.0	10.0	330.36		
第190図	SK472	不明	I X12+ I X13	円形	蓋状	24.0	22.0	4.0	332.58		SA01P01-SK472
第226図	SK473	不明	I X17	円形	すり鉢状	21.0	21.0	14.0	330.54		
第226図	SK474	不明	I X17	円形	すり鉢状	24.0	24.0	22.0	330.68	赤土土器	赤土中期後半の可能性
第226図	SK475	不明	I X17	不整形	お碗状	22.0	20.0	12.0	330.12	赤土土器	赤土中期後半の可能性
第226図	SK476	不明	I X17	不整形	お碗状	18.0	16.0	9.0	330.19		
第226図	SK477	不明	I W11	不整形	不整形	50.0	41.0	6.0	336.57		重覆(SD08P1600層)
第290図	SK478	不明	I W07	不整形	不整形	29.0	28.0	10.0	335.94		
第230図	SK479	不明	I W02	不整形	(40.0) 30.0以上	14.0	335.86	赤土土器	赤土中期後半の可能性		
第230図	SK480	不明	I W02	不整形	楕圓長方形	69.0	48.0	21.0	335.77		
第230図	SK481	不明	I W07	円形	お碗状	30.0	28.0	19.0	335.80		
第230図	SK482	不明	I W02	不整形	楕圓長方形	73.0	44.0	22.0	335.88		
第230図	SK483	不明	I W07	不整形	楕円形	35.0	33.0	20.0	335.80		
第230図	SK484	不明	I W02	不整形	楕圓長方形	80.0	62.0	23.0	335.83	赤土土器	赤土中期後半の可能性
第290図	SK485	不明	I W02	不整形	楕圓長方形	48.0	32.0	24.0	335.88		
第230図	SK486	不明	I R22	楕圓長方形	円筒状	44.0	36.0	23.0	335.68		
第222図	SK487	不明	I R22	楕圓長方形	不整形	39.0	28.0	19.0	335.64		
第222図	SK488	不明	I R22	楕円形	すり鉢状	37.0	25.0	18.0	335.87		
第222図	SK489	不明	I W03	不整形	お碗状	52.0	42.0	16.0	334.62		
第222図	SK490	不明	ⅢC06	不整形	楕圓形	30.0	24.0	6.0	336.20		
第222図	SK491	不明	ⅢC06	不整形	楕圓形	32.0	25.0	12.0	336.14		
第222図	SK492	不明	ⅢC06	楕円形	円筒状	28.0	22.0	17.0	336.12		
第222図	SK493	不明	ⅢC07	不整形	お碗状	42.0	38.0	30.0	335.68	赤土土器	赤土中期後半の可能性
第222図	SK494	不明	ⅢC07	不整形	楕圓長方形	60.0	40.0	25.0	335.75		
第222図	SK495	不明	ⅢC07	不整形	楕圓長方形	48.0	44.0	34.0	335.63	赤土土器 炭化物	赤土中期後半の可能性
第222図	SK496	不明	ⅢC07	不整形	楕圓形	51.0	23.0	23.0	335.74	赤土土器	赤土中期後半の可能性
第222図	SK497	不明	ⅢC07	不整形	円筒状	30.0	29.0	24.0	335.74	新片	
第222図	SK498	不明	ⅢC07	不整形	楕圓長方形	34.0	28.0	32.0	335.70		
第222図	SK499	不明	ⅢC07	不整形	楕圓長方形	52.0	40.0	32.0	335.72		
第222図	SK500	不明	ⅢC07	不整形	楕圓形	32.0	32.0	18.0	335.78		
第223図	SK501	不明	I W03+ I W08	不整形	楕圓長方形	45.0	40.0	16.0	334.96	赤土土器	赤土中期後半の可能性
第223図	SK502	不明	I W02	楕圓長方形	円筒状	22.0	22.0	13.0	335.20		
第223図	SK503	不明	I W02+ I W03	楕円形	タライ状	44.0	37.0	18.0	334.98	銅片	
第223図	SK504	不明	I W07	不整形	楕圓長方形	19.0	18.0	8.0	335.12		
第223図	SK505	不明	I W08	不整形	楕圓長方形	36.0	34.0	13.0	335.01		
第223図	SK506	不明	I W08	不整形	楕圓長方形	22.0	22.0	5.0	335.06		
第223図	SK507	不明	I W08	楕円形	タライ状	47.0	38.0	17.0	334.36	赤土土器	赤土中期後半の可能性
第223図	SK508	不明	I W03	不整形	不整形	46.0	42.0	17.0	335.02	赤土土器	赤土中期後半の可能性
第223図	SK509	不明	I W08+ I W13	不整形	楕圓形	55.0	44.0	29.0	334.46		
第223図	SK510	不明	I W13+ I W14	不整形	楕圓形	21.0	18.0	7.0	334.48		
第223図	SK511	不明	I W13	楕円形	円筒状	30.0	27.0	16.0	334.72		
第130図	SK512	不明	I N21	円形	円筒状	26.0	25.0	20.0	329.96		
第130図	SK513	不明	I N21	不整形	円筒状	25.0	18.0	30.0	329.80		
第16+17図	SK514	不明	I S17	円形	すり鉢状	26.0	26.0	30.0	329.66	炭化物	重覆(SK453新吉不明)、平安時代の可能性、C14024分析No.32
第222図	SK515	不明	ⅢC06	楕円形	不整形	30.0	25.0	9.0	336.25		
第222図	SK516	不明	ⅢC07	楕円形	すり鉢状	37.0	26.0	18.0	336.08		
第222図	SK517	不明	ⅢC07	不整形	蓋状	38.0	28.0	7.0	336.07		
第222図	SK518	不明	ⅢC07	不整形	すり鉢状	42.0	33.0	14.0	335.88		
第222図	SK519	不明	ⅢC02	不整形	お碗状	36.0	29.0	12.0	335.95		
第222図	SK520	不明	ⅢC03	不整形	すり鉢状	42.0	42.0	25.0	335.00		
第222図	SK521	不明	ⅢC02	不整形	すり鉢状	49.0	42.0	20.0	335.65		
第222図	SK522	不明	ⅢC02	楕円形	タライ状	36.0	28.0	12.0	335.71		
第222図	SK523	不明	ⅢC02	不整形	すり鉢状	48.0	40.0	20.0	335.25		
第222図	SK524	不明	ⅢC07	不整形	すり鉢状	28.0	28.0	14.0	335.71		
第222図	SK525	不明	ⅢC07	不整形	円筒状	37.0	31.0	31.0	335.53		
第226図	SK526	不明	ⅢC03	円形	不整形	32.0	30.0	21.0	334.93	赤土土器	赤土中期後半の可能性
第226図	SK527	不明	ⅢC03	不整形	楕圓長方形	45.0	41.0	20.0	335.05		
第225-60図	SK528	不明	ⅢC03	不整形	楕圓形	36.0	32.0	36.0	334.92		重覆(SK529新吉不明) 赤土中期後半の可能性
第225-60図	SK529	不明	ⅢC03	不整形	タライ状	44.0	42.0	20.0	335.07	赤土土器	赤土中期後半の可能性
第226図	SK530	不明	ⅢC03	円形	円筒状	32.0	32.0	36.0	334.99	赤土土器	赤土中期後半の可能性

図番	遺構	時期	グリッド	平面形状	断面形状	長軸m	短軸m	深さm	面積㎡	出土遺物	備考
第258号	SK531	不明	ⅢC03	不整形	不整形	47.0	38.0	15.0	335.00		
第260号	SK532	不明	ⅢC03	円形	すり鉢状	32.0	30.0	24.0	334.90		
第260号	SK533	不明	ⅢC03	不整形円形	タライ状	42.0	40.0	18.0	335.01	赤生土層	赤生中期後半の可能性
第259号	SK534	不明	ⅢC03	不整形円形	お桶状	22.0	20.0	10.0	335.10		重複(SK535新古不明)
第259号	SK535	不明	ⅢC03	不整形円形	円筒状	26.0	26.0	26.0	334.90		重複(SK534新古不明)
第259号	SK536	不明									穴墓
第259号	SK537	不明	ⅢC02	楕円形	円筒状	28.0	24.0	23.0	335.93		
第259号	SK538	不明	ⅢC02	不整形円形	円筒状	30.0	29.0	23.0	335.91		
第259号	SK539	不明	ⅢC02	不整形円形	すり鉢状	30.0	28.0	22.0	335.62		
第259号	SK540	不明	ⅢC02	楕円形	お桶状	40.0	26.0	15.0	335.43		
第259号	SK541	不明	ⅢC03	楕円形	お桶状	53.0	40.0	20.0	334.94		
第259号	SK542	不明	ⅢC03	楕円形	すり鉢状	23.0	18.0	10.0	334.84		
第259号	SK543	不明	ⅢC03	不整形円形	すり鉢状	26.0	20.0	14.0	334.76		
第259号	SK544	不明	I W21	不整形丸方形	皿状	42.0	40.0	8.0	335.80		
第259号	SK545	不明	I W21	楕円形	お桶状	38.0	32.0	15.0	335.65		
第259号	SK546	不明	I W22	楕円形	すり鉢状	30.0	20.0	12.0	335.72		
第259号	SK547	不明	I W22	不整形	皿状	50.0	42.0	12.0	335.50		
第259号	SK548	不明	I W22	円形	すり鉢状	22.0	21.0	12.0	335.40		
第259号	SK549	不明	I W23	円形	お桶状	22.0	20.0	10.0	335.60		
第259号	SK550	不明	I W22	不整形	すり鉢状	23.0	18.0	6.0	335.32		
第259号	SK551	不明	I W23	不整形丸長方形	不整形	32.0	25.0	14.0	334.98		
第260号	SK552	不明	I W24	楕円形	タライ状	26.0	19.0	10.0	334.60		
第260号	SK553	不明	I W24	不整形	不整形	43.0	42.0	25.0	334.33	赤生土層、 銅片	赤生中期後半の可能性
第260号	SK554	不明	I W24	不整形円形	不整形	28.0	26.0	8.0	334.42		
第260号	SK555	不明	I W24	楕円形	すり鉢状	28.0	20.0	8.0	334.50	土器	赤生中期後半の可能性
第240号	SK556	不明	I W18	不整形	皿状	38.0	34.0	6.0	335.05		基本土層に対応しない、 かぶりの可能性
第260号	SK557	不明	I W24	不整形	不整形	28.0	25.0	8.0	334.43		石の抜け跡の可能性
第260号	SK558	不明	I W24	不整形	お桶状	36.0	32.0	14.0	333.96	赤生土層	赤生中期後半の可能性
第259号	SK559	不明	I W24	楕円形	すり鉢状	28.0	18.0	8.0	334.16		
第259号	SK560	不明	I W23	不整形	不整形	78.0	64.0	32.0	334.88	赤生土層	赤生中期後半の可能性
第240号	SK561	不明	I W18	円形	お桶状	20.0	18.0	12.0	334.94		堆山のシジの可能性
第240号	SK562	不明	I W18	不整形円形	不整形	30.0	10.0	10.0	335.02		堆山のシジの可能性
第240号	SK563	不明	I W18	不整形	皿状	28.0	14.0	7.0	334.87		堆山のシジの可能性
第240号	SK564	不明	I W19	楕円形	皿状	36.0	30.0	8.0	334.28		石の技術の可能性
第240号	SK565	不明	I W18	楕円形	すり鉢状	30.0	14.0	10.0	334.88		
第240号	SK566	不明	I W18	楕円形	タライ状	36.0	27.0	16.0	334.92		
第240号	SK567	不明	I W18	不整形円形	お桶状	18.0	14.0	11.0	334.86		
第240号	SK568	不明	I W18	楕円形	お桶状	18.0	14.0	4.0	334.90		
第240号	SK569	不明	I W18	不整形円形	すり鉢状	18.0	18.0	8.0	334.82		重複(SK570新古不明)
第240号	SK570	不明	I W18	楕円形	すり鉢状	22.0	14.0	12.0	334.76		重複(SK569新古不明)
第240号	SK571	不明	I W19	円形	すり鉢状	22.0	20.0	18.0	334.28		
第240号	SK572	不明	I W17	楕円形	不整形	113.0	66.0	21.0	334.88		赤生中期後半の可能性
第35-61段	SK573	不明	ⅢF18	不整形	皿状	130.0	65.0	22.0	338.92	縄文土層、 台石?	縄文土層
第25-59段	SK574	不明	ⅢC01	不整形	不整形	340.0	133.0	54.0	335.68	縄文土層	縄文土層
第350号	SK575	不明	ⅢF18	楕円形	不整形	62.0	48.0	17.0	338.95		重複(SQ01新)
第360号	SK576	不明	ⅢL01	楕円形	タライ状	48.0	36.0	18.0	337.80		ST27P6とする
第360号	SK577	不明	ⅢF25- ⅢG21	不整形円形	不整形	44.0	44.0	(22.0)	337.92		ST27P6とする
第360号	SK578	不明	ⅢL01	不整形	不整形	68.0	66.0	20.0	337.50		赤生中期後半の可能性
第360号	SK579	不明	ⅢL02	楕円形	すり鉢状	36.0	32.0	19.0	337.17		赤生中期後半の可能性
第35-61段	SK581	不明	ⅢF18	不整形	タライ状	87.0	63.0	32.0	338.88		穴墓
第350号	SK582	不明	ⅢF18	楕丸長方形	すり鉢状	40.0	33.0	23.0	338.97		赤生中期後半の可能性
第350号	SK583	不明	ⅢF18	円形	タライ状	37.0	36.0	20.0	338.90		重複(SQ01新)
第35-61段	SK584	不明	ⅢF18	不整形	不整形	152.0	97.0	16.0	338.14		重複(六188新)
第350号	SK585	不明	ⅢF17	不整形	円筒状	22.0	14.0	14.0	339.10		赤生中期後半の可能性
第350号	SK586	不明	ⅢF18	楕円形	お桶状	32.0	21.0	17.0	338.85		
第350号	SK587	不明	ⅢF17	楕円形	お桶状	30.0	26.0	12.0	339.18		重複(SQ01新)
第350号	SK588	不明	ⅢF17	楕円形	すり鉢状	52.0	32.0	14.0	339.07		
第350号	SK589	不明	ⅢJ14	不整形	タライ状	70.0	60.0	15.0	340.35		
第350号	SK590	不明	ⅢJ14	不整形	不整形	66.0	32.0	22.0	340.39		
第340号	SK591	不明	ⅢF11	円形	皿状	26.0	26.0	8.0	339.62	炭化材	C14025分析No.4
第340号	SK592	不明	ⅢF11	円形	タライ状	37.0	36.0	14.0	339.60		赤生中期後半の可能性
第340号	SK593	不明	ⅢJ15	円形	すり鉢状	20.0	19.0	6.0	339.48		
第340号	SK594	不明	ⅢF11	楕円形	タライ状	26.0	22.0	10.0	339.34		
第360号	SK595	不明	ⅢF25	楕円形	円筒状	58.0	42.0	36.0	337.82		ST27P6とする
第360号	SK596	不明	ⅢG21	楕円形	すり鉢状	40.0	32.0	24.0	337.68		赤生中期後半の可能性
第360号	SK597	不明	ⅢF25	楕丸方形	すり鉢状	36.0	32.0	18.0	338.16		赤生中期後半の可能性
第360号	SK598	不明									穴墓
第360号	SK599	不明	ⅢF25	円形	お桶状	34.0	34.0	6.0	338.16		ST27P6とする
第360号	SK600	不明	ⅢF25	楕丸方形	タライ状	32.0	32.0	10.0	338.10		赤生中期後半の可能性
第360号	SK601	不明	ⅢF25	楕丸長方形	皿状	38.0	32.0	10.0	338.10		ST27P6とする
第360号	SK602	不明	ⅢF25	楕円形	タライ状	35.0	28.0	10.0	338.32		赤生中期後半の可能性
第360号	SK603	不明	ⅢL02	楕円形	円筒状	32.0	27.0	32.0	337.00	赤生土層	赤生中期後半の可能性
第360号	SK604	不明	ⅢL02	不整形	すり鉢状	42.0	30.0	14.0	337.20	赤生土層	赤生中期後半の可能性
第360号	SK605	不明	ⅢL02	楕円形	不整形	31.0	26.0	21.0	337.15	赤生土層	赤生中期後半の可能性

## 第3節 遺物

出土遺物については、遺構外出土の遺物が多くを占める。そこで、遺物の主体である土器について、時代・時期ごとにグリッド別分布図を作成し、出土状況の傾向を捉えた。さらに、それぞれの時代ごとに項を設け、出土遺物の特徴を材質別に説明する(註1)。なお、遺物1点1点の詳細については第7章のあとに掲載した「遺物観察表」を参照されたい。

### 1 縄文時代

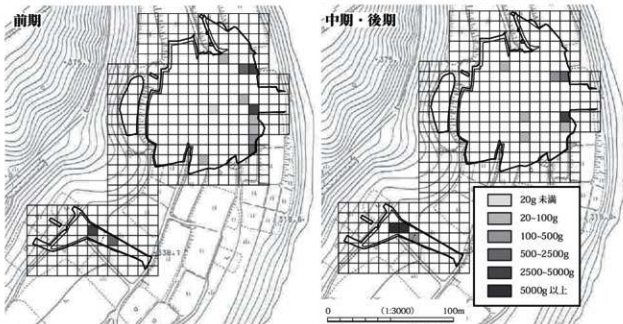
#### (1) 土器 (第65図1～第67図106、PL12～14)

出土土器のすべてが破片資料ではあるが、草創期の爪形文土器から後期前半の堀之内式土器まで、途中間隔の空く時期もあるが、少量ずつそれぞれの時期の土器が出土している。また、形式は深鉢形土器(以下「深鉢」という。)がすべてを占めると考えられる。

その出土土器の時期は、以下のようである。

- 草創期：爪形文系土器
- 早期前半：撚糸文系土器、押型文系土器
- 前期前半：羽状縄文系土器
- 前期後半：諸磯式土器
- 中期前半：五領ヶ台式土器、阿玉台式土器
- 中期後半：加曾利E式土器
- 後期前半：称名寺式土器、三十稲場式土器、堀之内式土器

土器分布図を3時期にまとめて表示した(第64図)。それぞれの時期ごとに遺物の出土量には差があるが、どの時期も、千曲川に近い下位段丘から



第64図 縄文時代グリッド別土器分布図(遺構出土土器除く)

の出土が多い傾向は共通する。また、南区からも前期以降の土器が出土する。

つぎに、それぞれの時期の土器について概観する。

#### ①草創期の土器 (第65図9・10、PL12)

爪形文系土器深鉢胴部破片2点が、西区中央の東区境界近くで検出された。薄手で焼成も良く、9は人爪により右から左へ横位に連続刺突し、10は細い篋状工具により左から右へ押し引き施文している。双方とも、「斜位横列多段構成」の土器である。

#### ②早期前半の土器 (第65図11～23、PL12)

捺糸文系土器は2点出土し1点を図示(11)、深鉢口縁部付近に外面縦位・内面横位施文の表裏捺糸文が施される。早期初めの古い段階の捺糸文系土器と考えられる。Lr横縦文の12・13は同一個体で、それと時期を同じくする資料の可能性がある。

押型文系土器は、楕円文16点、山形文2点、楕円文+山形文6点の計24点が出土。密接施文の楕円文(16・18)、山形文+楕円文(21～23)は、それぞれ同一個体の可能性がある。山形文が先行するとも考えられるが、資料はすべて押型文系土器様式中段階の細久保式に位置づくであろう。なお、19にはやや粗大な楕円押型文がみられ、後続する高山寺式の様相が現れている可能性がある。繊維が混入した土器は4点(内1点是非掲載遺物)で、押型文系土器の6分の1の割合となる。

#### ③前期前半の土器 (第65図1・2・24～29、PL12)

羽状縄文を施文し、繊維が混入した土器群を分類した。9点のうち8点を図示した。矢羽状(1・29)、菱形状(2)を呈する文様を含む。25～27は同一個体で、25～28は「縄の閉端の環」の文様(ループ文)をもつ。また、1は羽状縄文の文様の変換点で原体を引きずった痕跡がみえる。塚田式・仲道式(花積下層式並行)の範疇に入る段階の土器群であろう。

#### ④前期後半の土器 (第65図3・30～42、第66図43～65・76、PL12・13)

羽状縄文ないしは単節縄文を施文し、繊維が混入しない土器群を分類した。口縁部に半載竹管による格子目文を施文した土器(3)、前期末葉の半載竹管よる沈線文を施した土器(65)を含む。16個体を図示したが、ほかに15点の同時期とも考えられる単節縄文の土器がある。33・34・36～42・43～47・49～51・52～58・60・61・62～64はそれぞれ同一個体の可能性が高く、そのうち36～47は羽状縄文で、特に36～42は施文方向を変えて菱形のモチーフを描出する。そのほか、口縁部破片の32は縦の羽状縄文、48は横の羽状縄文で、それ以外の破片には単節の縄文が施される(LR多い)。76はその底部破片である。65以外の個体は諸磯b式に並行する土器群と考えられ、そのなかでも、3は新潟県地方で命名された刈羽式の格子目文土器で、平行沈線のみで文様が構成される(寺崎1991、2011)。さらに、半載竹管で胴部に横位区画・斜行沈線文を施した65は、諸磯c式の所産であろう。

#### ⑤中期前半の土器 (第65図4、第66図66～70、PL12・13)

66は半載竹管による文様構成をもつ深鉢の波状口縁部分であり、初頭の五領ヶ台式に位置づけられる。南区中央から出土した67～70は指頭圧痕文がある同一個体で、阿玉台式初頭の所産であろう。また、SK187埋土出土の4は、LR縄文に半載竹管の懸垂文が施された小形深鉢の胴部破片であり、当該期の資料である可能性がある。

#### ⑥中期後半の土器 (第66図71・72、PL13)

71は深鉢胴部に縦位に沈線区画し縦の縄巻縄文を充填した土器で、加曾利E3式の時期の所産であろう。72は内面赤ウルシ・外面黒ウルシ塗りの鉢形土器の小破片であるが、胎土等の状況から縄文中期として資料提示する。

## ⑦後期前半の土器（第65図5～8、第66図73～75、第67図77～106、PL12～14）

縄文土器のなかで後期前半の土器が59点と最も多く出土しており、初頭の称名寺式（6・7）は遺構内、三十稲場式（77～83）は東区南側下位段丘上からほとんどが出土。堀之内式は1式の時期に比定され、遺構内および東区中央下位段丘上、特に南区北西側からの出土が目立つ。73・74・85～87・90・91・95～97は、それぞれ同一個体の可能性が高い。

称名寺式は3点で、2点は波状の口縁部破片（6・89）、1点は胴部破片（7）であり、「J」字状モチーフの断片が残る。称名寺式前半期の所産であろう。

三十稲場式は、8点中4点を図示した。77は貼付による横走隆帯文を持つ頸部～胴部破片、79～82は同一個体で、79・80は胴部上半、81・82は胴部下半である。胴部下半の83も含め、棒状工具による連続刺突文を施した個体は、三十稲場式古段階に位置づけられる。

堀之内式土器は、1式でも前半期に入り、「の」字状（巖手文）および円形のモチーフをもつ90～98・101は、波状口縁の深鉢となる。沈線による大柄のモチーフ（5・73～75・84～88）、縦の条線文（8・98・99）、篋状工具による細い円弧状の沈線文および刻みをもつ胴部破片（100）、無文の深鉢口縁部（102）、底部（103～106）も当該期の資料と考えられる。

## (2) 石器（第68～71図、PL14～16）（註2）

石器は、形式的に草創期に所属すると思われる有茎尖頭器、早期の特殊磨石、前期の石匙など、出土土器の時期に相応する特徴的な石器が出土した。そのほか、石鏃、石鏃未成品などの剥片石器、礫器、敲石、磨石などの礫石器がみついている。大半が縄文時代の石器と判断したが、遺構の所属時期を考えると、弥生時代に属する可能性が高いと考えるべきかもしれない（註3）。

以下、石器を器種別に概観するが、個別の計測値等の観察結果は、第7章のあとに掲載した「遺物観察表」に示し、そのほかの非掲載石器、剥片観察表は添付DVDに収録した。

## ①有茎尖頭器（第68図1、PL14・15）

南区東端のグリッドから1点出土。珪質頁岩製で先端半分を中心に丁寧な交互押し刺離がみられる。先端・基部とも欠損。出土している爪形文系土器の時期に伴うものであろう。

## ②石鏃（第68図2、第71図26～28、PL14～16）

打製石鏃が4点出土。石材は黒曜石1点（2）、流紋岩1点（26）、無斑晶質安山岩2点（27・28）の3種類である。すべて有茎石鏃で、縄文時代の石器の可能性は高いが、出土遺構はSB01と遺構外（SK191）で弥生時代中期後半以降の時期である。

## ③石鏃未成品（第68図3・4、第71図29、PL14～16、14・16・(1091)）

6点出土。2点はSB01、4点は東区遺構外からみづかり、石材は鉄石英1点のほか、無斑晶質安山岩および安山岩である。長さが幅より長い未成品と幅が長さを上回る未成品が同数ある。

## ④石匙（第68図5、PL14・15）

南区中央の縄文時代遺物包含層から1点出土。安山岩製で、縄文時代前期の石器の可能性がある。使用最終段階のものか、幅が3.3cmと小さい。

## ⑤微細な剝離痕がある剥片（遺物観察表ではuFlと表示）（第68図6、第71図30、PL14～16）

20点確認、SB01から15点出土している。石材は、無斑晶質安山岩および安山岩が14点、チャート3点、珪質頁岩1点、輝緑岩1点、砂岩1点である。図示したものは2点で、南区中央出土の縦長剥片の6は両側縁および先端の一部に剝離痕がある。SB01出土の30も縦長で尖った先端部に微細な剝離痕がある。

## ⑥二次加工がある剝片（遺物観察表では re.FI と表示）（PL15-（1045））

12点確認、SB01をはじめ東区からほとんどが出土。石材は、無斑晶質安山岩および安山岩が9点、頁岩2点、鉄石英1点である。写真を掲載した（1045）は、表裏面に剝離痕が観察され不整な半月形を呈する。

## ⑦石核（第68図7・8、第69図9・10、PL15）

9点のうち6点が東区から出土。石材は、安山岩および無斑晶質安山岩4点、チャート2点、石英1点、鉄石英1点、不明1点である。7・9は同質の安山岩で、7は様々な角度から素材を剝がし、9は横長の素材を残している。10も横長の安山岩の素材。異なる方向からの打点がある。チャートの8は小形の石器の素材であろう。

## ⑧打製石斧（第69図11、PL15）

東区南端より1点出土。頁岩製で、基部が欠損し、表面左側刃部先端およびその裏面に縦位に摩耗している。使用痕の可能性あり。

## ⑨磨製石斧（第69図13、PL15）

東区北側より安山岩製の1点出土。敲打により成形し研磨しているが、風化が著しい。基部が欠損し、表面刃部先端が剝離し右側が縦位に摩耗している。使用痕の可能性あり。

## ⑩磔器（第69図15、PL14・16）

2点出土。東区中央出土の15は硬砂岩製で、楕円形磔の側縁が剝離され刃部を作りだしている。幅9.5cm、長さ8cmと、手持ちに丁度よいサイズである。

## ⑪凹石（第70図18、PL14・16、14・16-（1021））

3点出土。凝灰岩製の18、輝石安山岩製の（1021）は、表裏面に敲打によるわずかな凹部が形成される。

## ⑫敲石（第70図20、PL14・16）

13点出土。20は硬砂岩製で重量は229g。平坦な片面側にアバタ状の敲打痕がみられる。

## ⑬磨石（第70図22・23、PL14・16）

6点出土。22・23ともに輝石安山岩製で、表裏面より両側面を主に使用している。22の両側面は特に摩耗が顕著で、丸い縁が削れて平らになっている。部分的に被熱し赤化する。23は側面の摩耗度が高く、本来の石の形状が変形する。表面にはアバタ状の敲打痕もみられるが、その形状は2本の筋状を呈する。

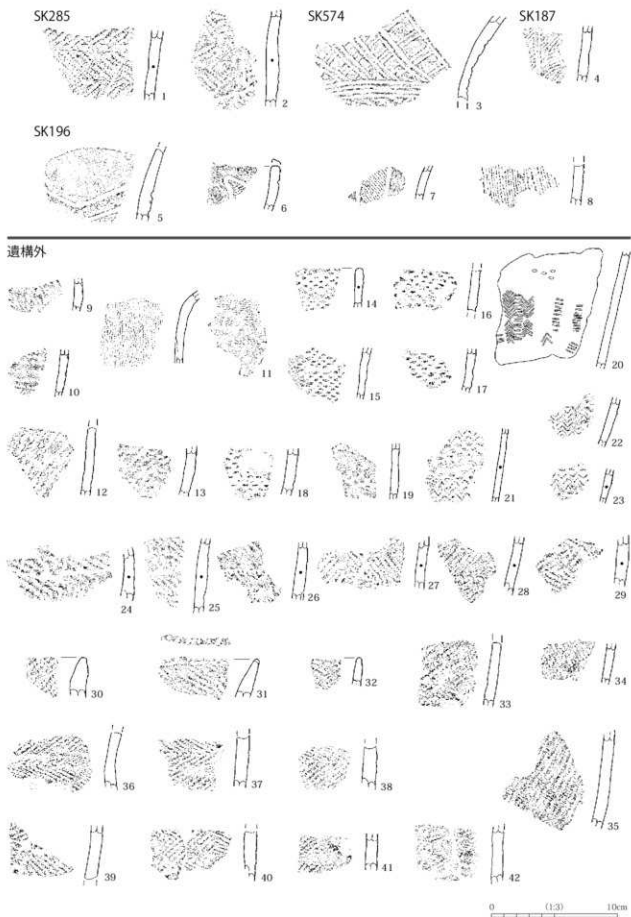
## ⑭特殊磨石（第70図24、PL14・16）

東区南端より1点出土。硬砂岩製。磔の長軸方向の1側面を、形状が変形するほど平らに使用していることから、特殊磨石と考えられる。

## ⑮台石（第70図25、PL16、PL16-（1026）・（1027））

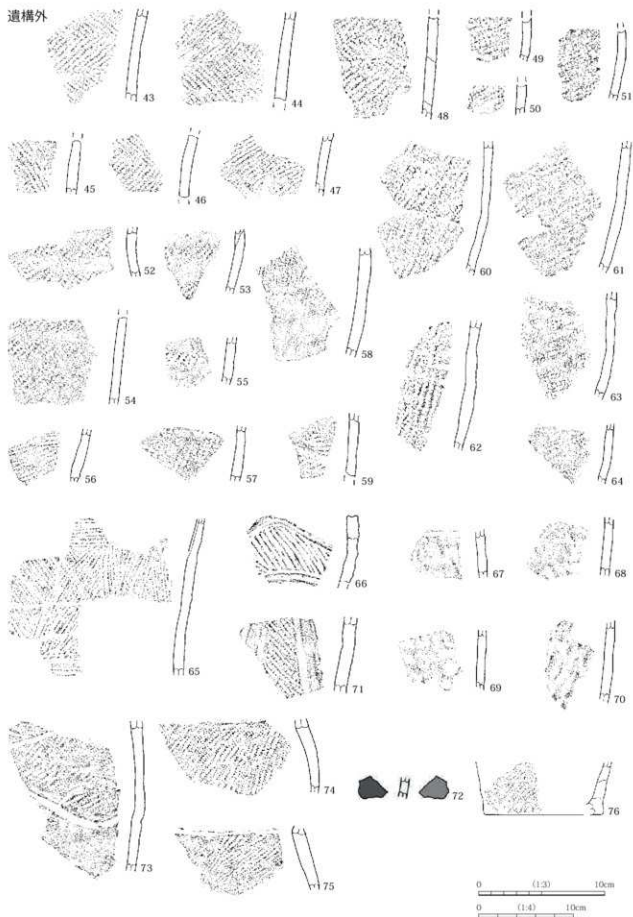
11点出土（石皿と思われる2点含む）。25は輝石安山岩製で重量4.8kg。扁平な川原石を用い、主に片面を使用する。使用面は全体的に摩耗している。（1026）・（1027）は安山岩製で、6.3kg・23.1kgとさらに大形である。





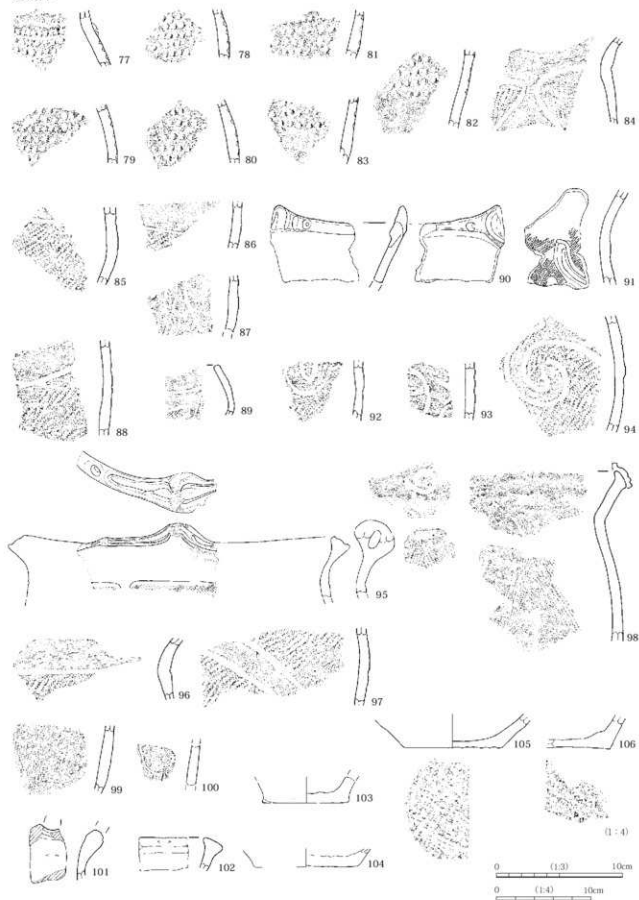
第65図 縄文時代SK、遺構外出土土器

遺構外

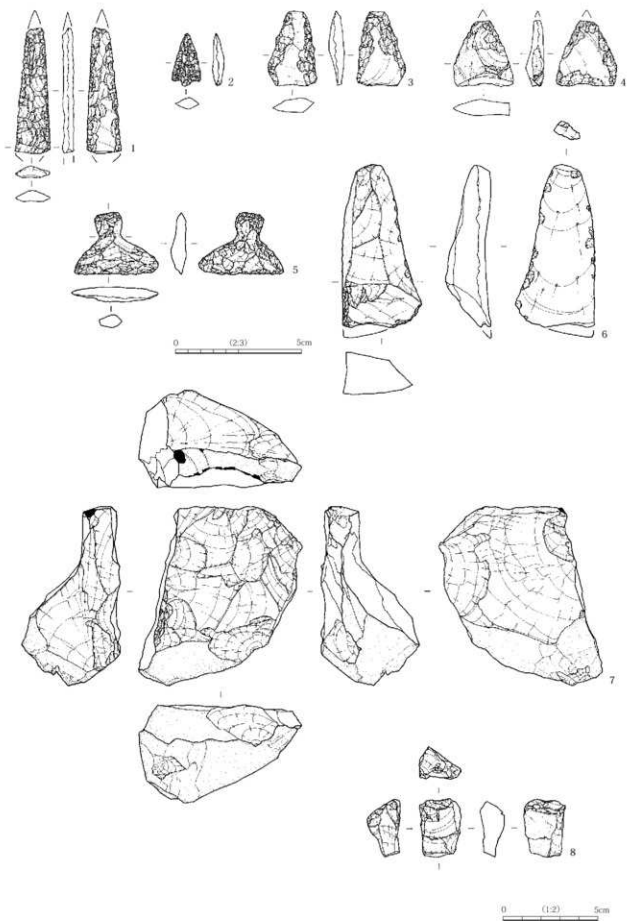


第66圖 縄文時代遺構外出土土器(1)

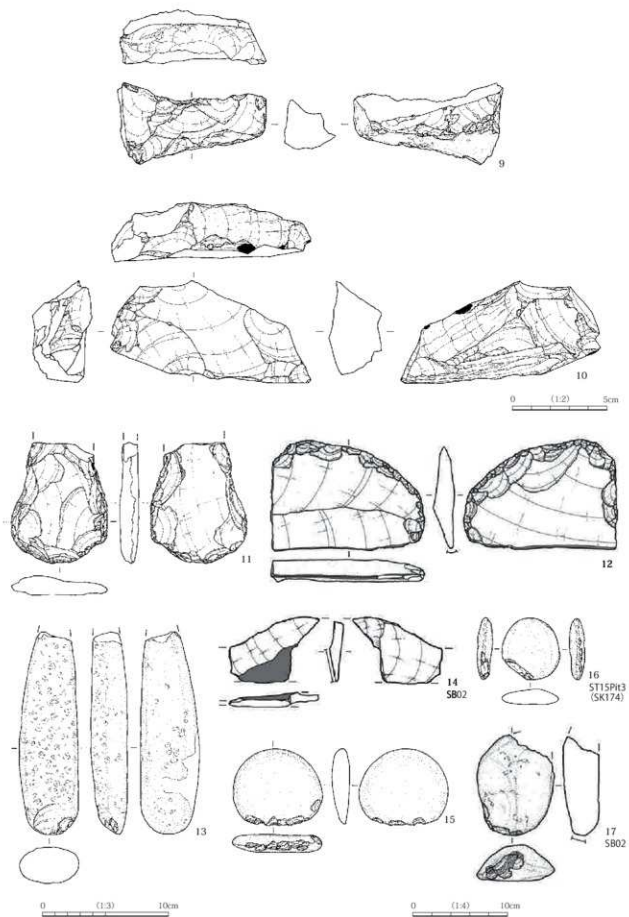
遺構外



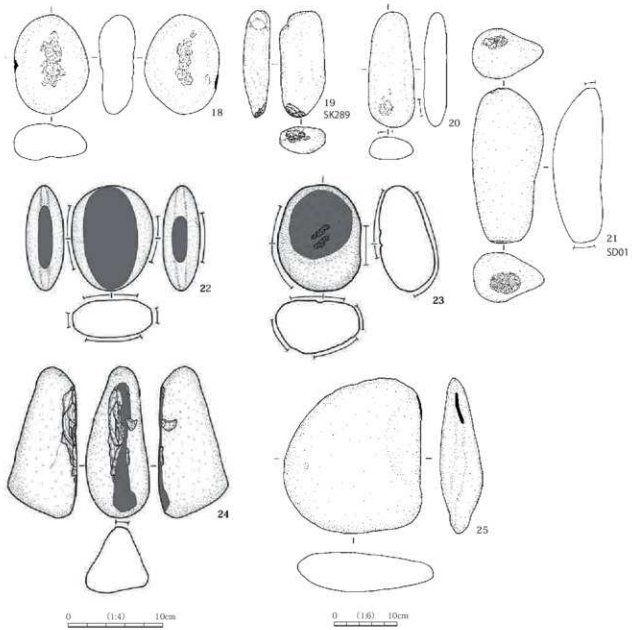
第 67 図 縄文時代遺構外出土土器 (2)



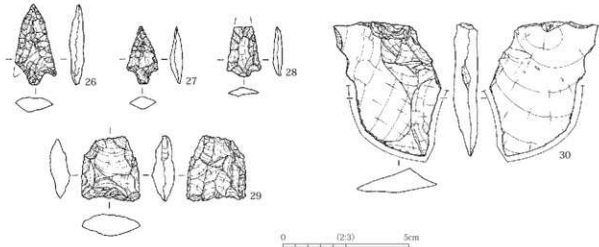
第68圖 縄文時代石器



第69図 縄文時代、弥生時代石器(1)



第70図 縄文時代、弥生時代石器(2)



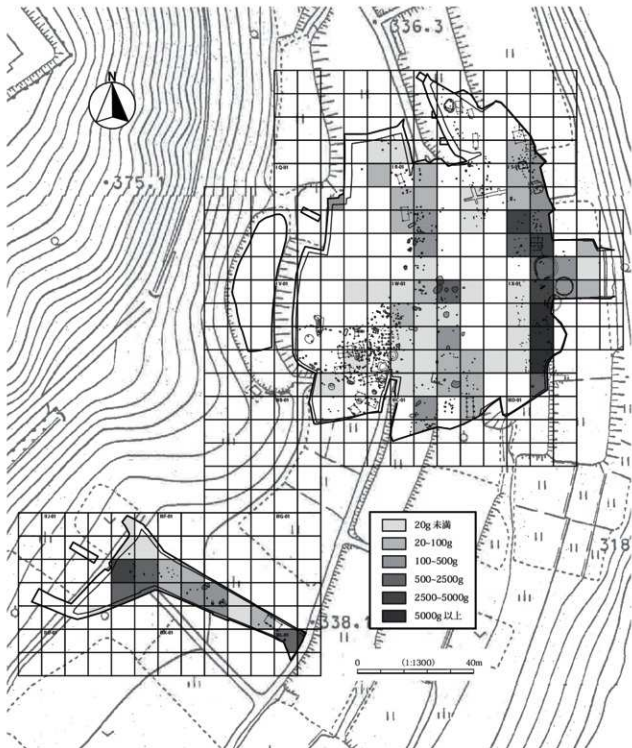
第71図 中野市試掘資料(SB01出土石器)

## 2 弥生時代

### (1) 土器 (81～92図、PL17～26)

#### ①概要

出土した弥生時代の土器は、すべて中期後半の栗林式土器である。第2節でも報告したように遺構出土土器は少量であり、遺構外出土土器が大半を占める。時期的には、栗林式土器成立期（栗林1式）（註4）の範疇に入ると考えられる。破片資料がほとんどであり、全体がわかる資料は少量である。土器分布図（第72図）をみると、ほかの時代と同じように千曲川に近い下位段丘上からの出土が多く、遺構の分布と一致



第72図 弥生時代グリッド別土器分布図（遺構出土土器除く）

する状況もある。また、近年の水田造成による削平で、面的に空白となっている箇所もある。さらに、南区にも遺構の所在とは別に2か所の遺物集積が存在する。また、東区上位段丘上で、第83図71の壺形土器の破片が1か所からまとまって出土し、単独土器（第29図）として記録した。

土器図版は、基本的に調査時に認定した遺構ごとに提示した（第81・82・92図）。そのなかで新しい時期の遺構に混入したと考えられる土器については「遺構外」（第82～91図）として報告した。

掲載土器の観察結果は、第7章のあとに掲載した「遺物観察表」に記載した。本文および遺物観察表の記載は、以下の器種分類と文様の呼称を用いた。

## ② 器種分類と文様

### (ア) 器種分類

栗林式土器の器種は、壺形土器、甕形土器、鉢形土器が基本構成となり、本遺跡では甌形土器、蓋形土器がそれに加わる（以下、本文中では「形土器」を省略して呼称する）。器種分類ができた栗林式土器は3469点、うち壺2257点、甕1115点、鉢88点（片口鉢6点含む）、甌7点、蓋2点の内訳となり、壺の比率が高い（註5）。また、器種の部位の呼称については長野市松原遺跡の報告（長野県埋蔵文化財センター2000）に用いられた弥生土器の記述に従った。さらに、鉢については、口縁部形態および文様構造の違いにより、A～Cに細分した（註6）。

### (イ) 文様と器面調整の分類

文様の呼称と施文方法については、松原遺跡の弥生土器分類に準拠した（第73図）。栗林式土器に表現される文様は沈線文、櫛描文、縄文などによって構成される。

**a 沈線文**：施文原体はφ3～5mmほどの1本の棒状工具で、横方向に1本ずつ描くことを基本とする。φ1mmほどの棒状工具が使用されることもあり、施文された形・モチーフ、施文原体の差異によって細分される（註7）。琵琶島遺跡では、コの字重ね文はなく、懸垂文（本稿の遺物観察表では「垂下文a」と表現）がSQ01（第82図56）をはじめ数点みられるのみである。

**b 櫛描文**：施文原体は細い棒状のヒゴを束ねたものが想定され、徳永哲秀が「廉状工具」と命名した（徳永1995）。廉状工具はφ1～2mmの棒が横位に編み込まれて結束したもので、櫛描文はその端部を器面にあて移動させることによって文様を描く（註8）。松原遺跡では定義されていないが、本遺跡には甕胴部に施文された格子目文の一群がある（第88図197～199、第90図249～252）。

**c 縄文**：本遺跡では、約7:1の割合で「LR横縄文」が「RL横縄文」の数を上回る（註9）。壺胴部に1点のみ、RLR横縄文が確認された（第84図89）。オオバコの穂の回転によると考えられる擬縄文が施文された破片も1点のみ出土している（第90図237）。

**d 「刻み」〔刺突文〕**（註10）：笠状・板状の木口面または植物等を、器面に対して直交する形ないしはやや斜位にして、直線的に連続して刻む（押し付ける）文様。棒状工具を斜位にあて押し引きする「押し引点文」とは異なる。本遺跡では、甕の口唇部、甕・壺の頸部・胴部、鉢の口唇部・胴部文様に用いられる。「刻み」は施文具の違いによって6類に分類した（註11）。

- 1類：笠状工具による刻み
- 2類：ハンノキ属雄花序の冬芽による刻み
- 3類：軸に紐を右回転で巻きつけた工具による刻み
- 4類：軸に紐を左回転で巻きつけた工具による刻み
- 5類：板状工具（先端を平らに加工した木口）による刻み
- 6類：廉状工具による刻み

赤彩については摩耗等によって剥がれ器面の一部に残存している例が多く、実測図では面的な赤彩が想



定される場合には、赤彩の剥がれた部分も推定して網掛けで表示した。

文様の施文順序等の詳細について観察できたものは、「遺物観察表」に記載した。

器面調整にともなう痕跡は、ナデ、ヨコナデ、ハケ、ミガキ、ヨコミガキ、ケズリ、オサエ、ユビオサエがある。松原遺跡の記述では、オサエ、ユビオサエは、甕口縁端部文様帯として分類されているが、本報告書では「器形の補正行為から器面の微調整、施文のための基礎作業」（長野県埋蔵文化財センター2000：11）として捉え、器面調整に含めて考えた。なお「オサエ」については、今回、甕、壺等の内面調整の際、ナデ調整の一環として指等で器面の内側を押す行為も同じ表現をしている。基本的に、前述の松原遺跡の記述（前出：11・12）に準拠するが、ミガキについては細分をせず、図示するとともに詳細が観察できるものについては遺物観察表に程度を記載した。さらに、それぞれの調整について方向がわかるものはできるかぎり表記した。

### ③ 時期区分

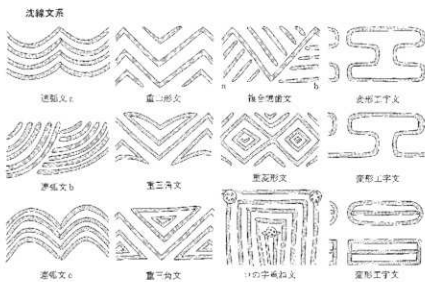
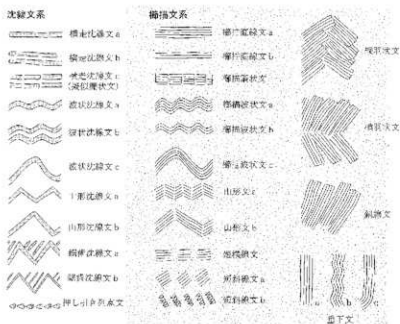
本報告書で記述する栗林式土器の時期区分に関しては、石川日出志（石川2002）の見解に準拠し、型式の呼称、装飾帯（文様帯）の呼称については石川の区分（註12）を用いた。

#### ① 遺構出土土器（第81・82・92図、PL17・18・26）

#### SB01（第81・92図、PL17・26）

県埋文センターが発掘し図化した資料は、ほとんどがSB南西地区からの出土で、櫛描直線文a・短斜線文の構成による2+4の装飾帯を持つ壺(1)、壺底部(2)、太めの櫛描横羽状文の甕(3～5)がある。

さらに、第92図に示した平成22年中野市試掘調査分に主要な遺物がある。櫛描直線文a・LR横縄文・連弧文aの構成による2+4の装飾帯を持つ壺(311)、各種櫛描文(313・326は櫛描横羽状文、314・329は櫛描縦羽状文に刻み1類、315は櫛描直線文aに櫛描垂下文aと刻み1類、327は櫛描横羽状文の下部に押し引列点文を施した文様)をもつ甕である。



〔松原遺跡 弥生中期-土器本文〕2000：13より転載〕

第73図 栗林式土器文様呼称法

そのほか、319は一对の縦長豆粒状貼付文をもつ壺口縁部で、内外面が赤彩されており鉢Aである可能性もある。320・325は口唇部にLR横縄文がある壺、321は横走沈線文aに押引列点文をもつ壺、322はやや波状を呈する櫛描直線文aをもつ壺であり、323は横走沈線文aにLR横縄文の壺、324は連弧文aの壺、328は刻み1類が施文された甕である。312・317は無文の壺底部、316は甕底部、318は甕底部である。

#### SB02 (第81図、PL17)

Pit3埋土を中心に出土した、太い沈線による重山形文の壺(6)、太い櫛描縦羽状文に刻み1類を施文した甕の大形破片(7)、内外面赤彩の口径約25.8cmを測る大形の片口鉢(8)である。そのほか、口唇部にLR横縄文がある壺(9)、頸部に刻み1類がある壺(10)、3条の太い横走沈線文aが施文された壺(11)、櫛描直線文aの壺(12・13)、櫛描横羽状文の甕(14・16～18)が出土している。8の口縁部破片1片の内側には、横方向の磨痕が残り、磨痕をもつ土器片(第93図330～332、PL27)等と同様に、土器片再利用の痕跡の可能性が高い。15は甕胴部破片で、刻み4類が施文される。また、16・17は同一個体である。無文の甕底部(19)も出土している。

#### ST01 (第81図、PL17)

Pit7埋土出土の甕胴部小破片(20)。胴上部からの櫛描横羽状文に加え、胴部最大径には刻み1類がめぐる。内面は丁寧にミガキ調整し、外面は明確にヨコハケを残す。

#### ST08 (第81図、PL17)

西側のPit36出土の21は、横走沈線文の区画に押引列点文2行と櫛描直線文aを充填する壺胴部破片。Pit16出土の壺口縁部破片22は、大きく外反し口唇部に三角形の小突起を貼付しLR横縄文を施文。

#### ST24 (第81図、PL17)

23は、Pit4の検出面より出土の2+4装飾帯で、横走沈線文aの区画内に櫛描直線文aとLR横縄文が施文された壺胴部破片。24は、Pit5出土で、横走沈線文a、押引列点文に刻み6類が施文された壺頸部小片である。Pit6出土の25は胴部の横走沈線文a区画に櫛描直線文a、その下部に押引列点文が施文された壺小片、26は口唇部にLR横縄文、胴部に櫛描横羽状文が施文された甕小片である。Pit1出土の27は、櫛描横羽状文が施文された甕胴部小片となる。

#### ST25 (第81図、PL17)

Pit7出土の28は、重三角文に押引列点文とLR横縄文を充填した壺胴部破片。29・30は、Pit4・2出土の壺底部破片であり、29にはLR横縄文が施文されている。

#### ST26 (第81図、PL17)

Pit7埋土出土の31は、太い櫛描横羽状文が施文された甕胴部破片である。内面が磨かれ、外面には炭化物が付着している。

#### SD01 (第81図、PL17)

32・33は同一個体で、埋土1層より出土した、口唇部にRL横縄文、胴部に櫛描波状文aを施文した甕小片。34は櫛描横羽状文の甕胴部小片、35は内外面が赤彩された細分は不明な鉢底部小片である。

#### SD02 (第81図、PL17)

周溝南側3層出土の36は、横走沈線文aの上下にLR横縄文と押引列点文を施した壺胴部破片。同じく周溝南側埋土出土の37は、横走沈線文aの下部にLR横縄文を充填した壺胴部小片である。さらに、38は土層断面spCD1層出土の篋状工具による刻みを持つ櫛描横羽状文の甕胴部破片である。

#### SD03 (第81図、PL17)

埋土2層出土の39は、横走沈線文aにLR横縄文と押引列点文が施文された壺胴部破片、同じく40は連弧文aにLR横縄文を充填した壺胴部破片である。双方とも表面がミガキ調整される。北側・南側周溝

埋土1層出土の甕胴部破片、北側のものは栴描波状文 a (41)、南側のものは栴描縦羽状文 (42) の文様を持つ。43は西側周溝1層出土の、LR横縄文に直線的な連弧文 a を7条施した鉢 A の口縁～体部破片。同一個体と思われる破片が、同じグリッドの上層の遺物包含層から出土し、並べて図示した。壺の口縁部との見方もあり、新潟方面から搬入された土器の可能性が考えられる。

**SK176** (第82図、PL17)

44は検出面出土、横走沈線文 a (2条) に LR 横縄文 (2種) と押し列点文を施文した壺胴部小片。

**SK180** (第82図、PL17)

45は埋土出土、横走沈線文 a の区画に栴描沈線文 a と押し列点文 (2行) を充填した壺胴部破片。

**SK347** (第82図、PL17)

46は埋土中央上層出土、内外面がミガキ調整された無文の片口鉢と考えられる口縁部～体部破片。

**SK360** (第82図、PL17)

47は埋土出土、LR横縄文に刻み4類、その下部に変形工字文を施文した壺小破片。

**SK373** (第82図、PL17)

51は埋土上層出土、内外面がミガキ調整された甕胴部下半～底部破片。

**SK396** (第82図、PL17)

48は埋土出土、横走沈線文 a (3条) に重山形文と押し列点文、短斜線文 b (2行) の壺胴部破片。

**SK423** (第82図、PL18)

52は外面が丁寧にヨコミガキされた無文の壺であり、胴部下半のみが残存する。内面にヨコハケを残し、外面には赤彩がわずかに残る。

**SK465** (第82図、PL17)

49は埋土出土、横走沈線文 a (3条) の間に LR 横縄文 (3段) と短横線文を充填した壺胴部破片。

**SK529** (第82図、PL17)

50は埋土出土、口唇部に刻み3類、胴部上位に栴描垂下文 a (4列) と栴描直線文 a が施文された甕口縁部～胴部破片。

**SQ01** (第82図、PL18)

複合鋸歯文を受け口の口縁部に帯状に施した壺 (54)、無文帯がある横走沈線文 a に連弧文 a が付く壺胴部破片 (53)、そのほか垂下文 a に棒状工具による連続刺突文 (56)、栴描直線文 a に短斜線文 b (57)、重三角文を栴描直線文 a 等で充填する (58) 壺胴部破片を図示した。甕は、口唇部に LR 横縄文を施し胴部上半に栴描横羽状文、胴部最大径部分に刻み3類を持つ個体 (55)、栴描横羽状文 (59・60)、栴描縦羽状文 (61・62) の破片がある。62は、胴部上半に多量の炭化物が付着しており、炭素・窒素安定同位体比および総炭素量・総窒素量分析を行なった。

⑤ 遺構外出土土器 (第82～91、PL18～25) (註14)

壺 (第82図63～66、第83図67～78、第84図79～90、第85図91～94・96～133、第86図134～169、第87図170～184、PL18～22)

1619点出土。使用されている施文具が確認できたものは、沈線文系と栴描文系を比べると、沈線文系が多数を占める。

以下、胴部にみられる文様を中心に主要モチーフによる分類を行ない、壺の様相を示す。なお、無頸壺、長頸壺と呼ばれる小形土器についても併せて記述する。

壺には、篋状および棒状工具による沈線文で主要モチーフを描く土器と、篋状工具を用いて栴描文を描く土器がある (第75図)。沈線文で変形工字文を描く例として 63・67・68・118～121・123～125・127～

129・133・136・179があり、同じく沈線文で連弧文を描く例としては71・81・126・130・131・137・150・154～156・164・165・177がある。重三角文のモチーフをもつ例として130・131・134・172～176、重山形文のモチーフをもつ例として122・167・178がある。重菱形文のモチーフをもつ例は87のみである。

2 + 4の装飾帯に施文された、沈線による重畳区画で構成する文様帯モチーフを特徴とする土器をみると、均一性のある区画のものが73～75・89～92、幅広の均等区画となったものが79・84・88・135・139～145・170～172・180・181、無文帯の貫入はあるが有文帯とほぼ同じ幅の横帯が多いものが80・112である。さらに、無文帯(帯)を広くもつ例として、76・78がある。

特徴的な文様として、頸部の貼付凸帯に刻みを施す例として63・64・74・110・115・116があり、縄文のみを施す例は65・66・71である。また、頸部の押出凸帯に刻みを施す例として73・111・117がある。さらに、凸帯がなく刻みのみが施される70・96・98がある。99は、押引列点文のみが頸部に施文されている。複合鋸歯文を受口の広口壺の口縁部に帯状に施文された例として90がある。

さらに、頸部から延びる縦位区画(懸垂舌状文)が付加されるものとして138・162・170・182がある。そのほか、小破片で全体の文様構成が不明なものに、頸部に波状沈線文aをもつが下部文様は不明な86、櫛描文による波状の半円文が施文された151、口縁部に貼付突起をもち縄文のみが施文される108、横走沈線文に縦位の短い沈線刻みが施される132がある。また、148は横走沈線文に櫛描波状文a、152・153は押引列点文、158は刻み1類、166は短横線文が施文される。櫛描波状文cをモチーフとしてもつものに138・146・147・149がある。184は、縦位貼付文がみられる以外は不明である。

口縁部が無文で下部の文様が不明なものとして69・94、横走沈線文のみがみられ全体の様相が不明なものは97・157・159・160・161・163・168・169である。

無文の土器として72・77・85・103・106・183があり、183の外面には初圧痕が付く。

文様の判断できない底部破片が、82・83・100～102・104・105である。105は底部に初圧痕がみられる。

以上の土器のなかで、133・140・151は文様、胎土が異なり北陸地方などの他地域から搬入された土器の可能性はある。

壺のなかには、無頸壺(113・114)もみられ、113は口縁部に蓋受けの無文帯があり、その下部にLR横縄文を施した凸帯を配する。114は小形で緻密なLR横縄文を胴部に施し、口縁部に薄い筒状工具による沈線と刻みをもつ凸帯がある。また、長頸壺と仮称した土器(93・107)も出土し、93は口縁部に4単位の縦長貼付凸帯に振幅の小さい連弧文aが施文される。107はLR横縄文と櫛描沈線文aが施文される。

竈(第88図185～199、第89図200～234、第90図235～272、PL22～25)

718点出土。胴部文様をみると、櫛描横羽状文260点、櫛描縦羽状文46点で、櫛描横羽状文が6倍以上の数となる。また、櫛描波状文28点、櫛描格子目文7点であった。

以下、胴部上半にみられる文様の主要モチーフによる分類を行ない、壺の様相の概要を示す。

籠状工具による櫛描横羽状文をもつ例は186・191～195・209～212・215～219・222～227・231～233・235～248・259であり、櫛描縦羽状文は185・196・255～258・260・263～265である。前述したが、237はオオバコ(穂)の回転によると考えられる擬縄文が施文された例である。さらに、245・246は文様構成がやや異なり、265は緻密な施文具・胎土等の違いから、北陸地方などから搬入された土器の可能性もある。

また、櫛描波状文を主要モチーフとして施文する土器は187・200・202・203・213・262・268～272であり、202が垂下文bとの組み合わせ、270～272が単独の波状文となる以外は、すべて垂下文aとの組み合わせとなる。さらに、櫛描直線文と垂下文aの組み合わせ文様をもつ土器は253・266・267である。櫛描格子目文が施文された土器は197～199・249～252であり、197～199は胴部最大径部に刻み1類をもつ。縄文を主文様とする例として190・214・234がある。254は無文となる。

土器のなかには、器面に段をもつ例があり、193は口縁部直下、185・219・222・268は胴部中位に段をつくる。そのうち、185・219・222は胴部の段にさらに刻みを加えている。また、口唇部への縄文・刻みの施文、ユビオサエ（指頭押捺）は、ほとんどの土器で観察される。さらに、220・221・228～230は、胴部の刻みだけが確認された。228～230は、同一個体である。

201は受口の甕で、内外面丁寧ミガキ調整・赤彩され、特殊甕として報告した。

188・189・204～208は、無文の底部破片となる。

**鉢**（第85図95、第91図273～275・282～310、PL20・25）

70点出土。鉢A 10点、鉢B 5点、鉢C 13点の器種細分の内訳となる（なお、総数は非掲載資料も含む）。縦長豆粒状貼付文をもつ95は、図版上では甕の分類に含まれているが、口径等を考慮し鉢Aに変更した。以下、胴部上半にみられる文様の主要モチーフによる分類を行ない、鉢の細分別に様相の概要を示す。

**鉢A**（275・288～293・295）は、LR横縄文が口唇～口縁部に施文された例として、288～290・293がある。291は、LR横縄文に複合鋸歯文を施文している。292は、連弧文を主文様とし、内面上半の一部に赤色顔料付着。295は、口縁部に3条の横走沈線文aがめぐり穿孔がある。そのほか、無文の小形鉢275がある。

**鉢B**（296・307・308）は、内外面丁寧ミガキ調整・赤彩を施した一群である。296は、外面からの2孔の穿孔あり。

**鉢C**（273・274・282～286・294・297～306・310）は、重山形文を主文様とした一群として273・同一個体である299～304がある。274は、4～5単位の変形工字文が施され、282・285・297・298・310は連弧文が主文様となった土器である。297と298は同一個体とした。また、283・284は、横走沈線文による区画に筒状工具の刻みを充填した文様をもつ例である。さらに、口縁部に穿孔がある286、折返し口縁をもつ294・305、細い筒状工具の刻みをもつ306がある。

そのほか、横走・縦走の沈線文を施した287、底部のみの破片309がある。

#### 片口鉢

4点出土。遺構出土の2点以外は、図示できる遺物はない。

**甕**（第91図278～281、PL25）

6点出土。278～281は東区から出土し、SB01出土の318以外は遺構外遺物である。すべて焼成前穿孔で、279を除いて両面からの穿孔である。

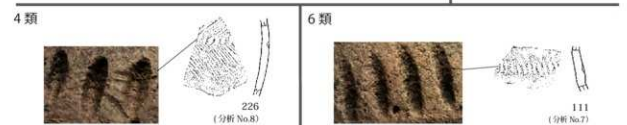
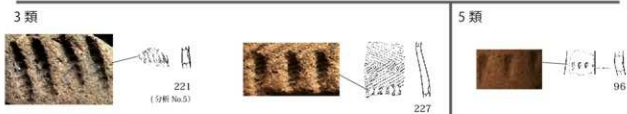
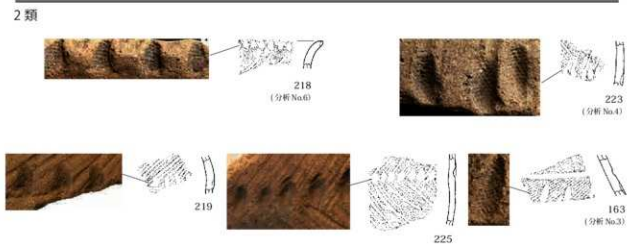
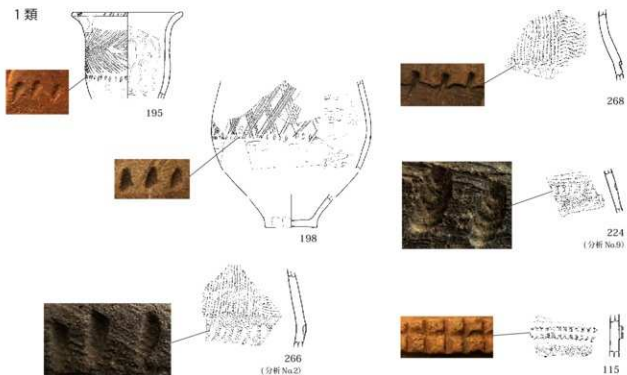
**蓋**（第91図276・277、PL25）

2点出土。放射状の沈線区画に押し引点文を充填した装飾的な276、つまみを持ち無文の277の2種がある。西区、東区からそれぞれ1点ずつ出土している。双方とも肩部縁際近くに、1ないしは2孔の穿孔がみられ無頸甕に対応するためのものであろう。

#### ⑥「刻み」文様の特徴（第74・75図）

栗林1式土器に特徴的にみられる「刻み」文様について、図化した全資料の詳細な観察を行なった。以下、各類の代表例を取上げ具体的に説明する。第74図の土器番号は、遺物図版の掲載図番号と同一である。併せて、業務委託の分析番号も記した。さらに、本文に取り上げなかった主な資料については、写真をDVDに収録した。

**1類**：筒状工具による文様。195は甕胴部に先端円形の工具を右から左方向に施文。198は甕胴部に先端の細い工具を右から左方向に施文。266は甕胴部にハケ調整に使用した工具と同一の工具を右から左方向へ施文。板状工具にも類似する（分析No2）。268は甕胴部に先端が細く鋭い工具を右から左方向へ施文。224は甕胴部に先端が細い工具を下から上へ押し引したものを左から右方向へ施文（分析No9）。115は壺頸部に横走沈線文を引き、その上に左から右方向へ施文。



第74図 栗林1式土器にみられる「刻み」文様の種類

**2類**：ハンノキ属雄花序の冬芽による文様。218は甕口縁部に右から左方向へ施文（分析No.6）。223は甕胴部に左から右方向へ施文（分析No.4）。219・225は甕胴部に右から左方向へ施文。163は壺胴部に右から左方向へ施文（分析No.3）。

**3類**：軸に紐を右回転で巻きつけた工具による文様。221は甕胴部に左から右方向へ施文（分析No.5）。227は甕胴部に右から左方向へ施文（分析No.1）。

**4類**：軸に紐を左回転で巻きつけた工具による文様。226は甕胴部に左から右方向へ施文（分析No.8）。

**5類**：板状工具（先端を平らに加工した木口）による文様。96は壺頸部に右から左方向へ施文。篋状工具に類似するが、より直線的な文様となる。

**6類**：簾状工具による文様。111は壺頸部に右から左方向へ施文（分析No.7）。分析では、軸に紐を右回転で巻きつけた工具による文様とされたが、肉眼で再確認した結果、丸紐状の膨らみはなく簾状の痕跡が観察されたことから簾状工具による文様に再分類した。

「刻み」文様は、いままでの弥生土器研究において、一様に「篋状工具による刺突文」等として報告されることが多かった。本報告での観察によって、その文様も数種に細分される可能性が指摘できた。そのうち、従来から篋状工具とは異なる施文による文様として考えられ、「平織の圧痕」（檀原1988）、「網状の圧痕」（鶴田2012）として報告されていた文様が、本報告で2類に分類した「ハンノキ属雄花序の冬芽」という遺跡周辺に繁茂していたと考えられる植物（註15）の圧痕である可能性が高いことが判明した。ハンノキ属には様々な樹種があり、また同種でも成長段階で圧痕の形、大きさが変わってくることから、どの種の花序を使用したのかを特定することは難しい（註16）。

本遺跡では、栗林2式以降に散見されるオオバコが施文されたと考えられる文様は1点のみ（第90図237）であり、ハンノキ属を用いたと思われる文様5点に比べると少数となる。この出土頻度の差は、栗林式土器のなかでも時期によって施文に使用する植物の選択がなされていた可能性を示唆しているのかもしれない（註17）。しかし、わずかな出土量であり、今後の同種資料の増加に期待するところが多い。

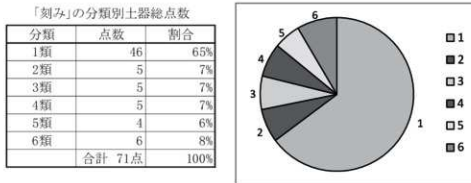
第75図は、統計的に「刻み」文様についてまとめたデータである。やはり、従来の弥生土器研究のどおり「篋状工具」を施文とする文様が最も多い。今回、「刻み」文様として細分を行なってみたが、3・4類に分類した「軸に紐を巻き付けた工具」による文様等、今後再考してしていく必要があると考える。

## (2) 土製品（第81・92・93図、PL17・26・27）

弥生時代中期後半の土製品には、土器片を再利用した製品と不明な製品がある。今回、土器片を再利用した土製品のなかに、土製円板とともに、「磨痕をもつ土器片」4点を抽出した。

### ①「磨痕をもつ土器片」（第81図8・第93図330～332、PL17・27）

栗林式の壺胴部および片口鉢口縁部破片の一面面に磨痕が残る資料である。330・331は本来の壺胴部



第75図 「刻み」文様の種類集計

破片の上下からすると左側面に横方向の磨痕が残り、332は上部に横方向の磨痕が残る。前者2点は壺の内面、後者は外面に磨痕が顕著に残存する。331・332は反対面にも磨痕がみられる。さらに、332については壺胴部破片の上部に磨痕があることから、擬口縁の可能性もある。もう1つの8は、ほかの資料と異なり、片口鉢口縁部の内面に横方向の磨痕がみられ、左・右・下の破片と接合し大破片となる。

管見の限り、同時期に類似する出土例はないが、他時期の類似する例として、長野市篠ノ井遺跡群の弥生時代後期箱清水式期の「土器片製半円板」がある（西山1997）。箱清水式土器の土器片を使用し、半円板形に整形される。断面に擦痕を残し、直線部分が弧状になる場合もある。大きさ的には本遺跡例より大きなものもあり、452点と出土点数が多い。さらに、ほとんどの資料が土器本来の上下に合わせて直線部分を作り出している。また、篠ノ井遺跡群と同時期で堅穴住居跡からまとまって出土した例として、大町市借馬遺跡45号住居址がある（荒井1981）。

本資料4点は、指で摘まむのに適当な大きさであること、横方向の磨痕が残存すること、磨痕面がやや湾曲して土器の器面の湾曲に合うという共通の特徴が確認できる。破片を工具として仮定した場合、土器の器面を粗く磨き、平滑にする等の調整に使われた可能性を想定することができる（写真）。本資料例は、他遺跡に類例がなく比較検討ができなかった。今後、各地で土器片の詳細な観察が進み、資料が増加することを期待したい。

#### ②土製円板（第93図333～335、第92図337・338、PL26・27）

土製円板として確認した遺物は、中野市試掘資料分も合わせて5点である。333のみが、壺胴部破片を隅丸方形に整形し、中央に両面から穿孔する。紡錘車としての用途が想定される。そのほかの4点（334・335・337・338）は、壺胴部破片の再利用品である。周辺に磨痕があり、不整形を呈する。335は333に形状が類似し、上下部が平坦となる。



仮称「土器器面調整具（330）」使用方法想定写真

#### ③不明土製品（第93図336、PL27）

土器の口縁部に類似するが、中央が隆起し眼鏡状の楕円形貼付が左右対称的に2か所に付く。人面を表現した可能性もある。

### （3）石器、石製品、ガラス製品（第69・70・93図、PL14～16・27）

石器類は、太型蛤刃石斧などの磨製石器のほか、スリキリ具、刃器、敲石などの加工具類が出土したが、出土量は少ない。図版については縄文時代の項にまとめて掲載したが、縄文時代の石器として記述した資料のなかにも、当該期の資料が含まれる可能性が高い。なお、出土遺構が明確なものについては、遺構名を実測図の右下に記した。そのほか、弥生時代の遺物包含層より、碧玉製の管玉、コバルトブルーのガラス小玉の玉類も出土しており、あわせて記述する。

以下、弥生時代に属すると考えられる石器、石製品、ガラス製品について、器種ごとに概観する。個別の計測値等の観察結果は、第7章のあとに掲載した「遺物観察表」に示し、そのほかの非掲載石器、剥片観察表は添付DVDに掲載した。

#### ①太型蛤刃石斧（PL15-(1054)・(1084)）

2点とも、東区の表面採集資料である。(1054)は刃部破片で、刃は極めて鋭利である。(1084)は基部に敲打痕が残り刃部の一部が欠損する完形品であり、敲石としての使用の可能性もある。2点とも輝緑岩製の小形品である。なお、(1084)の実測図はDVDに収録した。



## ② 刃器 (第69図14、PL16、PL16-(1069)・(1112))

5点出土。すべて輝石安山岩製。14はSB02より出土した、扁平な大形礫表面の破片。表面はツルツルに摩耗しており、原形は砥石または台石であったと考えられる。破損した破片を刃器として再利用したものと思われる。刃部は極めて鋭利で、わずかに摩耗したようにみえる。(1069)は板状の剥片素材を利用したもので、刃部とみられる部分の一部に残し破損している。刃部使用痕は顕微鏡観察ではないが、わずかに摩耗している。被熱し変色する。(1112)は(1069)と同様な刃器の小破片。

## ③ スリキリ具 (第69図12、PL16)

2点が、東区上位段丘南端の弥生時代の遺構検出面より出土。12は横長剥片を素材とし、刃部と反対側を丁寧な刃つぶり加工で弧状に仕上げている。断面V字状の刃部は、やや内湾するほど摩耗したスリキリ痕を明瞭に残す。ほぼ完形品。なお、刃部のみ残存する片岩製の(1067)は、実測図をDVDに収録した。

## ④ 礫石 (第69図16・17、第70図19・21、PL14・16)

13点出土。ST15Pit3出土の16は砂岩製の扁平で円形の川原石を素材とし、縁辺部を使用している。重量は90gと軽量だが、加撃による破損がみられる。17はSB02出土、こぶし大の川原石(註18)を利用し、端部を加撃し使用している。19は石英閃緑岩製(註19)で、重量は241gを量る。長軸の先端片側部に加撃による剥離痕がみられる。SD01出土の21は、輝石安山岩製で重量は856g。長軸の両端部に加撃痕がある。ことに下方の端部は加撃に加え摩耗の痕跡がみられる。

## ⑤ 管玉 (第93図1、PL27)

東区中央下位段丘のⅢA層から、1点出土。緑色凝灰岩製(註20)で、長さ195mm、幅6.7mm、両面穿孔でφ2～3mmを測る。

## ⑥ ガラス小玉 (第93図2、PL27)

東区南側下位段丘のⅢA層から1点出土。コバルトブルーで長さ58mm、幅4.5mm、穿孔φ1～2mmを測る。筒形をしており、その中央部分に切り込み状の溝がある。2つに分割し、ビーズ玉状の製品2個に仕上げる予定のものなのか、詳細は不明。

## 3 古墳時代

## (1) 土器 (第94図1～7、第95図8～12、PL27・28)

壺、高坏、埴形壺などがみつかっているが、その大部分は古墳時代中期SK191の出土であり、すべて接合部で切り離された(破砕された)状態の破片であった。

## ① 壺 (第95図10・11、PL28)

すべてが遺構外からの出土である。10は南区東端出土の折返し口縁の壺で、口縁部破片のみが出土している。折返し部はやや雑な作りであるが、内面は良好にナデ、部分的にミガキ整形される。11は東区下位段丘南側出土の微小な破片。口縁部の破片とみられ、形状から瓢形の壺口縁部破片を推定した。内面は良好にナデ整形され、外面は一本沈線がめぐりミガキ整形される。弥生時代終末から古墳時代前期初頭頃の所産であろう。

## ② 埴形壺 (第94図6・7、PL27)

2点ともSK191から出土している。6は口縁部が直口し、胴部は球胴状であるが、下半部がやや屈曲をみせる。外面はハケ調整の後、丁寧にミガキ調整される。7は6と同形の口縁部破片、頸部の接合部で切り離されたものと考えられる。

## ③ 甕 (第95図12、PL28)

12は東区下位段丘中央付近出土の甕で、同一個体と考えられる破片17点がある。接合できる大形破片を復元実測した。口縁は緩やかに外反し、胴部は球胴状となる。内外面とも細かなハケ状工具で調整される。

## ④高坏 (第94図1～5、第95図8・9、PL27・28)

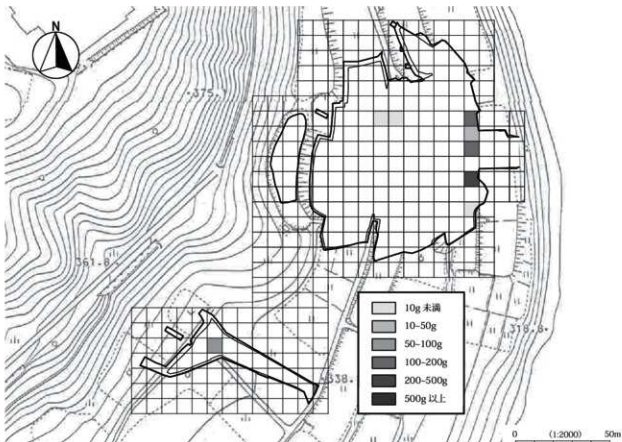
第95図8・9の2点は、いずれも東区下位段丘中央付近で出土し、弥生時代終末から古墳時代前期初頭に位置づけられるか。8は内外面とも赤彩され、丁寧にミガキ調整されている。口縁部はラッパ状に開き、口唇端部はやや外削ぎ状に作られている。脚の大半は欠失し、円形の穿孔が2か所(3か所の可能性もあり)に確認される。9は口唇端部外面を横方向に強くナデ成形し、薄く積み上げ状に仕上げられている。鉢の口縁部破片の可能性もあるか。

第94図1～5は、SK191から出土した古墳時代中期初頭の高坏。4点の坏部破片と2点の裾部破片がある。特筆すべきは土坑内上層からの出土で、すべて坏部・裾部と筒部との接合部付近から切り離され(破砕され)、筒部のみが抜けている。4の上下や2と5がそれぞれ同一個体の可能性が高い。いずれも内外面ともに良好にミガキ調整される。

## (2) 鉄製品 (第94図1、PL28)

SK191から、「ロクロガンナ」(註21)と考えられる鉄製品が、1点出土している。全長285mmを測る完存品とみられる。錆化が激しく、先端部の残存状況はレントゲン撮影でもやや不鮮明である(第94図)。肉眼観察の限り、先端部はやや丸みのある四角形状、刃部は横断面が凸レンズ状をした両刃で、14mmを測る。基部の横断面は扁平な四角形状を呈する。SK191は形状から、古墳時代中期の墓坑と捉えており、この「ロクロガンナ」は坑底面近くから出土したことから、副葬品と考えたい。

弥生時代中期後半の鳥取県青谷上寺地遺跡、古墳時代前期(4世紀)の京都府長岡京市長法寺南原古墳等から、類似する遺物が出土し、呼称的には「棒状品」「特殊な棒状鉄器」として報告されている(村上ほか2003:217.342)。当該時期の資料としては、県内初出である。



第76図 古墳時代グリッド別土器分布図(遺構出土土器除く)

## 4 平安時代

### (1) 土器 (第96図、PL29)

土坑、焼土跡の遺構が集中する東区の下位段丘中央に遺物も集中する。特に、SF02～04、鉄滓が出土したSK361が所在する周辺に多く出土した。

#### ① 坏 (第96図1・6～10・14、PL29)

1は「ウ」冠状の墨書、14は「ノ」状の墨書のある土師器坏片で、1はSK205から出土している。7は灯明痕と底部糸切りの失敗痕跡を残す例で、浅く小ぶりである。10世紀末～11世紀の平安時代後期の所産であろうか。

#### ② 黒色土器A (註22) (第96図5・11～13、PL29)

11は坏で、5及び12は内面に放射状の暗文がある埴である。13のミガキは明確ではない。いずれもSF03周辺から出土している。9世紀代の年代を推定する。

#### ③ 盤 (第96図2、PL29)

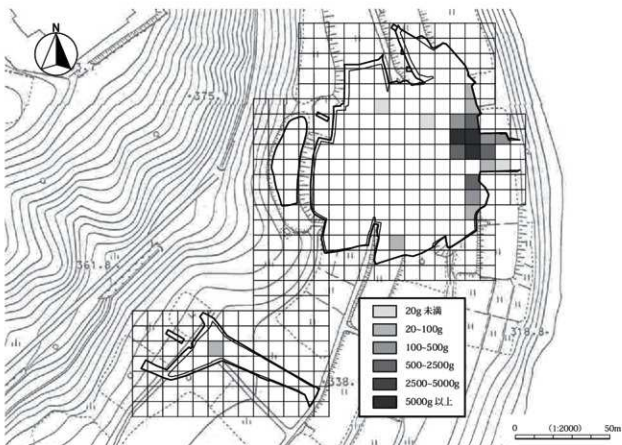
坏よりも口径が大きく深い器形であることから盤(鉢)とした。10世紀代に位置づけられるか。

#### ④ 甕 (第96図3・4・15・16・18・19、PL29)

4はタタキ目を残す胴部破片であり、3は口縁部の破片。ともにSK318から出土している。10世紀代と考えられる。また遺構外から出土した4点は、その器形から11世紀代に入る可能性が高い。

#### ⑤ 羽釜 (第96図17・20～22、PL29)

17は回転ナデ調整で、ハケ目が強く残る口縁部破片、同一個体と考えられる胴部～底部破片3点(20～22)が出土している。11世紀代の可能性が高いか。



第77図 平安時代グリッド別土器分布図(遺構出土土器除く)

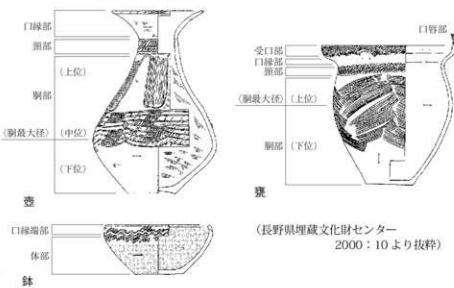
## (2) 鉄滓 (金床石小片を含む) (PL29-1~8)

遺物の大半が、SK361 から出土した。さらに篩による水洗選別で、少量ではあるが粒状滓を含む鍛冶滓、砂鉄を抽出した。子どもの拳大ほどの塊形滓2点 (PL29-1・2) 以外は小片である。粘土が付着した鍛冶滓片5点 (PL29-3~6・8)、鍛冶滓が付着した金床石小片1点 (7) も出土した。すべての遺物が、鍛冶に関連する一括廃棄遺物である可能性が高い。

## 註

- 1) 土器について、複数の破片が接合した資料で器形復元が困難なものは、すべての拓本を示さず、その土器の特徴を示す破片を選び、1~数片のみを土器図版で提示したものもある。
- 2) 写真図版 (PL14~16) 中の ( ) 付きで表記した数字は石器の管理番号を示し、遺物図版に実測図を掲載していないものであることを示す。なお、( ) がない数字は遺物図版の掲載図番号を示す。
- 3) 弥生時代以降の遺構および遺物包含層には、縄文土器が混入しており当該期の石器も多く混在している可能性がある。すべての石器について明確に時期を区分することはできないが、形態的に縄文時代の石器が多くを占める可能性があることから、石器図版は縄文時代の項にまとめて掲載することとした。また、石器の概要記載については基本的に縄文時代の項で行なうが、遺構出土遺物や弥生時代にのみ頻例がみられる器種は、弥生時代の項で記述した。なお、敲石については、弥生時代の遺構からの出土遺物は弥生時代の項で記述したが、出土数は縄文時代と弥生時代の総数となっている。
- 4) 葉林式土器の変遷過程等を理解するために、文様帯概念 (山内1964) を弥生土器に応用した分類基準 (石川2002) を基本として、時期区分をした。
- 5) 数量の単位として「点」を使用した。すべての破片について接合関係、同一個体である確認ができたわけではなく、あくまでも概数であり目安とする値である。

- 6) 葉林式土器について、器種の部位の呼称 (第78図)、鉢形土器の細分 (第79図) については、次図のとおり、松原遺跡の報告 (長野県埋蔵文化財センター2000) に従う。



第78図 器種の部位呼称法

- 7) 松原遺跡の沈線文系には、横走沈線文 a・b・c (bは2本セットで描かれ、cは連続した途切れ部をもつ)、波状沈線文 a・b・c (bは2本セットで描かれ、cは波状の振幅が大きい)、山形沈線文 a・b (bは山形の振幅が大きい)、鋸歯沈線文 a・b (bは施文原体が細く山形が強調されない)、押し列点文、連文 a, b, c (bは波紋状の文様が横方向に重なる、cはa文様が上下に反転した形)、重山形文、重三角文 (三角形の底辺が内湾するものと直線的な2種がある)、複合鋸歯文、重要形文、コの字重ね文、変形工字文 (工字状を呈し閉口・開口するもの、隅丸) 長方形、楕円形のモチーフなどバラエティに富む) などがある。

- 8) 松原遺跡の櫛描文系には、櫛描直線文 a・b (bはヒゴが3本前後と少数のもの)、櫛描扇状文、櫛描波状文 a・b・c (bはヒゴが3本前後と少数のもの、cは波状の振幅が大きい)、山形文 a・b (bは山形の振幅が大きい)、短横線文、短斜線文 a・b (bは刺突状に施文)、縦羽状文、横羽状文、斜線文、垂下文 a・b・c (aは直線文、bは波状文、cは先端が弧状となる)、などがある。

9) 本稿では、LRの単節縄文を横方向に施した文様を「LR横縄文」、縦方向に施した文様を「LR縦縄文」と呼称する。なお、LR、RL、RLR等の縄文に関する熟りの呼称は、山内清男の縄文土器の研究成果による(山内1979)。千曲川上流の南大原遺跡では、栗林2式新段階が主体だが、やはりLR横縄文が大半を占めると報告されている(鶴田2016)。

10) 本稿では、土器器面の境界(区切り)部分に連続して印をつける意味合いを重視して、「刻み」という用語を用いた。棒状工具により、単独および区画文様内に充填する目的で突いた文様については、従来の「刺突文」を用いたが、点数は数点のみだった。

11) (株)パレオ・ラボの「レプリカ法による土器の施文具圧痕の推定」で、想定された施文具(現生標本含む)を粘土板に押し当てる施文の再現実験・比較検討を行なった分析結果での分類基準に準拠し、加筆した。

12) 山内清男の文様帯概念(山内1964)を応用した松原遺跡出土土器の分析(上田1995、長野県埋蔵文化財センター2000)、石川日出志の論考(石川2002)に基づく。裝飾帯の呼称については右図(第80図)のとおりである。

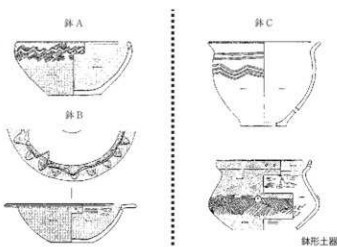
13) 0~5のアラビア数字は、第80図の裝飾帯を示し、文様がある裝飾帯を[ ]内に表示した。[2+4]は、2~4裝飾帯の連続した文様(横帯が重畳)、[3]は懸垂舌状文を主とする単位文様、[0]は無文を表現する(石川2002:55.56)。

14) 第86図145については、写真撮影後に同一個体であることが判明したため、写真図版には掲載していない。

15) 第6章科学分析に掲載した、平成25(2013)年の(株)古環境研究所による花粉分析で、Ⅱ層(弥生~古代?)よりハンノキ属の花粉が検出されている。

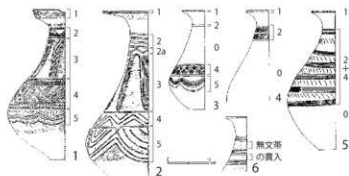
16) (馬場2009)によると、ハンノキ属には、ヒメヤシャブシ、ハンノキ、ミヤマハンノキ、ケヤマハンノキ、カワラハンノキ等がある。さらに、類似する花序を持つ植物に、カバノキ属のシラカンバ、ミズメ、ハシバミ属のハシバミ、アサダ等もある。また、東北大学植物園鈴木三男先生から「ハンノキ、カバノキ、ハシバミの『雄花穂』ということは絶対になく、雄花穂がいずれも候補になる。ハシバミは毛がいっぱい生えているので圧痕には向かない。ということで、カバノキ属かハンノキ属の雄花序、栗穂という事になる。」(2015.12.20)という指導を受けた。

17) 管見によると、ハンノキ属雄花序の冬芽を施した文様は、本遺跡以外で千曲川下流域の飯山市小泉遺跡(飯山市教育委員会1995:156) 中野市栗林遺跡(檀原1988:24-42)、南大原遺跡(長野県埋蔵文化財センター2016報告書刊行予定)、長野市南曾根遺跡(鶴田2012:110-125)、千曲川下流域の長野市塩崎遺跡群(現在発掘調査中)で抽出できた。それに対してオオバコ文は、千曲川下流域の中野市南大原遺跡、七瀬遺跡(後期)(長野県埋蔵文化財センター1994:489)、中流域の長野市松原遺跡(長野県埋蔵文化財センター2000:111-150)、上流域の佐久市北西の久保遺跡(小山1987:99)、森平遺跡(水澤2014:171-175)、西近津遺跡群(後期)(長野県埋蔵文化財センター2015:341.357)、中・南信地域の間谷市橋原遺跡(後期)(間谷市教育委員会1981:138)、箕輪町箕輪遺跡(長野県埋蔵文化財センター2005:217)と広範囲で見つっている。さらに、



(長野県埋蔵文化財センター2000:15より抜粋)

第79図 鉢形土器の細分



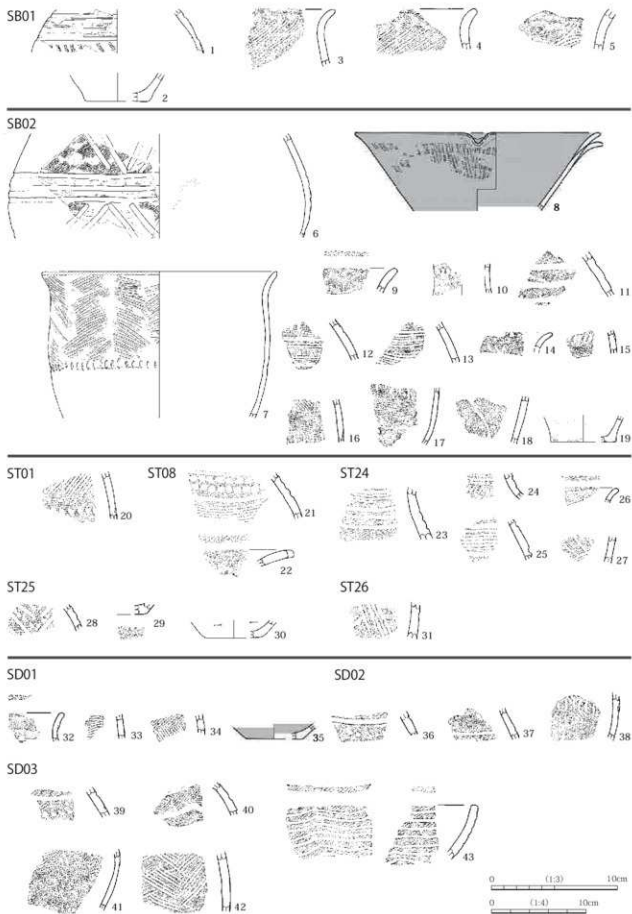
(石川2002:56より抜粋)

第80図 裝飾帯の呼称と構成

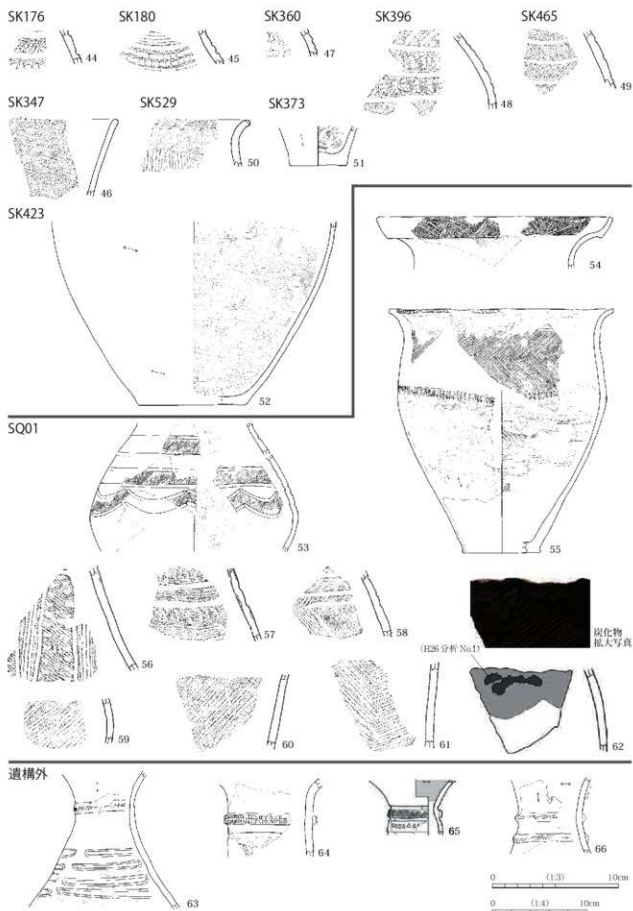
- 県外での出土例も千葉県をはじめとして、関東地方一円にみられる（大沼 2008：1013）。
- 18)「山ノ内町方面起源の石英閃緑岩と考えられる。」(2015.1.16 明治大学中村由克客員教授指導)
- 19)「早川上流北アルプス方面起源と考えられる。」(2015.1.16 同上)
- 20)「旧丸子町鳥羽山内村層起源と考えられる。」(2015.1.16 同上)
- 21)「先端の形が小さく、柄(身)のつくりからも「ロクロガナ」の可能性が高い。柄(身)の部分の厚みは薄い、人力で回すロクロなのでこのぐらいでも良い。木の柄を装着した可能性もある。おそらく使用最終段階の状態であろう。古墳時代中期には確実にロクロは存在するが、工具の出土例はほとんどない。大変珍しい、良い資料である。」(2014.3.23 工業普通先生指導)
- 22) ロクロの回転力を利用した土師器の内面をヘラミガキし、黒色処理したものを「黒色土器A」とする(長野県埋蔵文化財センター 1989：115)。

## 引用・参考文献

- 荒井和比古 1981「45号住居址」『長野県大町市借馬遺跡緊急発掘調査報告書 借馬遺跡Ⅱ』：25-28
- 飯山市教育委員会 1995『小泉弥生時代遺跡 飯山市埋蔵文化財調査報告書第42集』：156
- 石川日出志 2002『栗林式土器の形成過程』『長野県考古学会誌』99・100：54-80
- 上田典男 1995『栗林式土器研究の一視点—松原遺跡の整理作業から—』『長野県埋蔵文化財センター紀要』4：37-44
- 大沼忠春 2008『特殊な施文具—魚骨文とオオバコ文—』『総覧縄文土器』小林達雄編、アム・プロモーション：1011-1014
- 岡谷市教育委員会 1981『橋原遺跡』郷土の文化財 12：138
- 棚原 健 1963『栗林式土器の再検討』『考古学雑誌』49-3：19-34
- 小山岳夫 1987『北西の久保』佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書第8集：99
- 榎原長則 1988『遺物』『栗林Ⅶ 浜津ヶ池』中野市埋蔵文化財緊急発掘調査報告書：24-42
- 鶴田典昭 2012『弥生時代』『南曾峯遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 93：110-125
- 鶴田典昭 2016『南大原遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 111
- 寺島孝典・飯島哲也ほか 1993『松原遺跡Ⅲ』長野市の文化財第58集
- 寺崎裕助 1991『縄文時代前期後半の格子目土器について』『新潟県考古学談話会報』8：35-47
- 寺崎裕助 2011『越後の縄文前期後半土器研究の展望—刈羽式を中心に—』『第24回縄文セミナー 縄文前期土器研究の現状と課題』：45-73
- 徳永哲秀 1995『箱清水式土器の施文具および施文法について』『長野県考古学会誌』75：43-49
- 長野県埋蔵文化財センター 1989『遺物』『吉田川西遺跡 本文編』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 3：114-119
- 長野県埋蔵文化財センター 1994『栗林遺跡 七瀬遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 19：489
- 長野県埋蔵文化財センター 2000『松原遺跡 弥生・総論 3 弥生中期・土器本文』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 36：111-150
- 長野県埋蔵文化財センター 2005『箕輪遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 71：217
- 長野県埋蔵文化財センター 2015『西近津遺跡群』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 104：341, 357
- 西山克巳 1997『土器片製品』『篠ノ井遺跡群 成果と課題編』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 22：83-85
- 馬場多久男 2009『花実でわかる樹木』信濃毎日新聞社：117-126
- 水澤孝子 2014『小結』『森平遺跡 寄塚遺跡群 今井西原遺跡 今井宮の前遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 107：171-175
- 村上恭通、山村芳貴 2003『農耕具』『考古資料大観 第7巻 弥生・古墳時代 鉄・金銅製品』小学館：265-271
- 山内清男 1964『文様帯系統論』『日本原始美術 1』講談社：157-158
- 山内清男 1979『日本先史土器の縄紋』先史考古学会



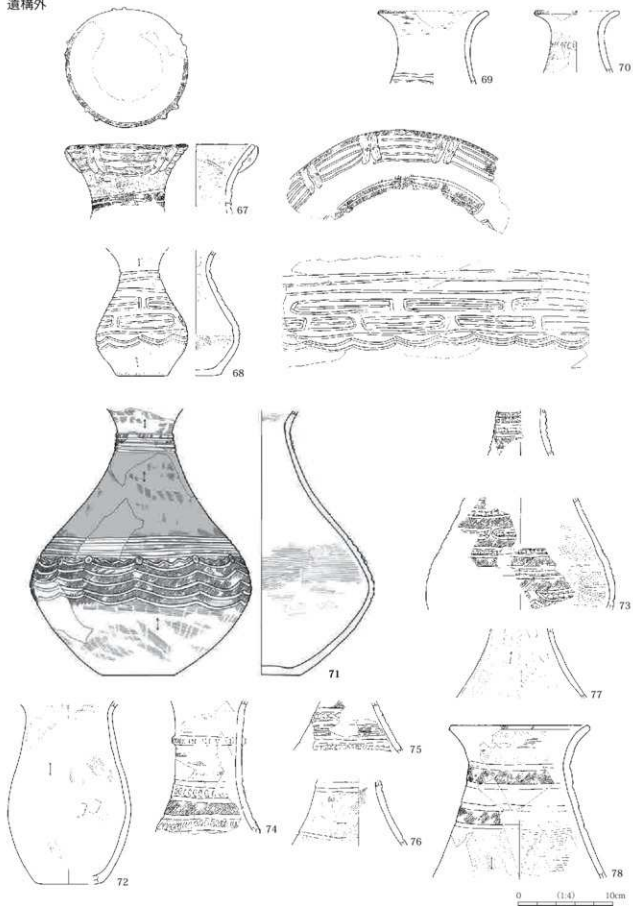
第81図 弥生時代SB、ST、SD出土土器



第82図 弥生時代SK、SQ、遺構外出土土器

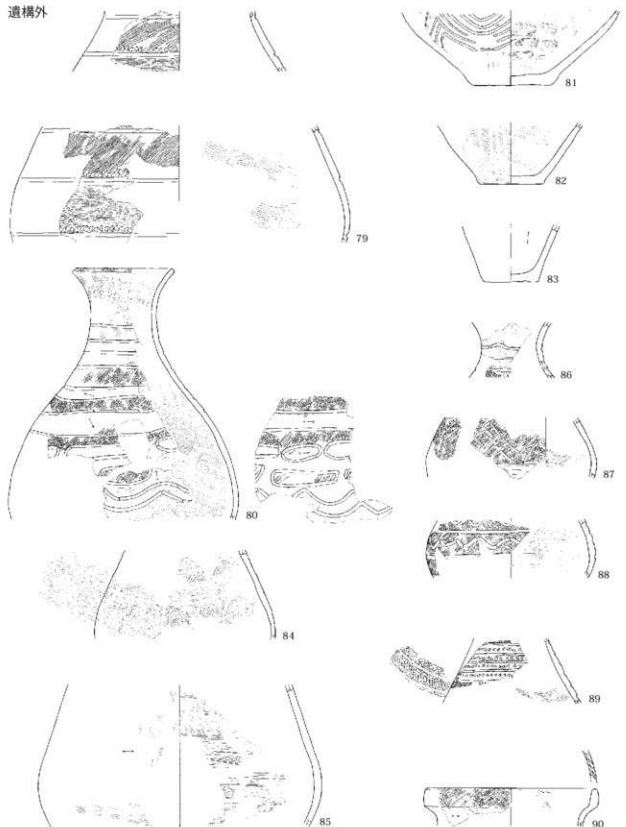


遺構外



第83図 弥生時代遺構外出土土器(1)

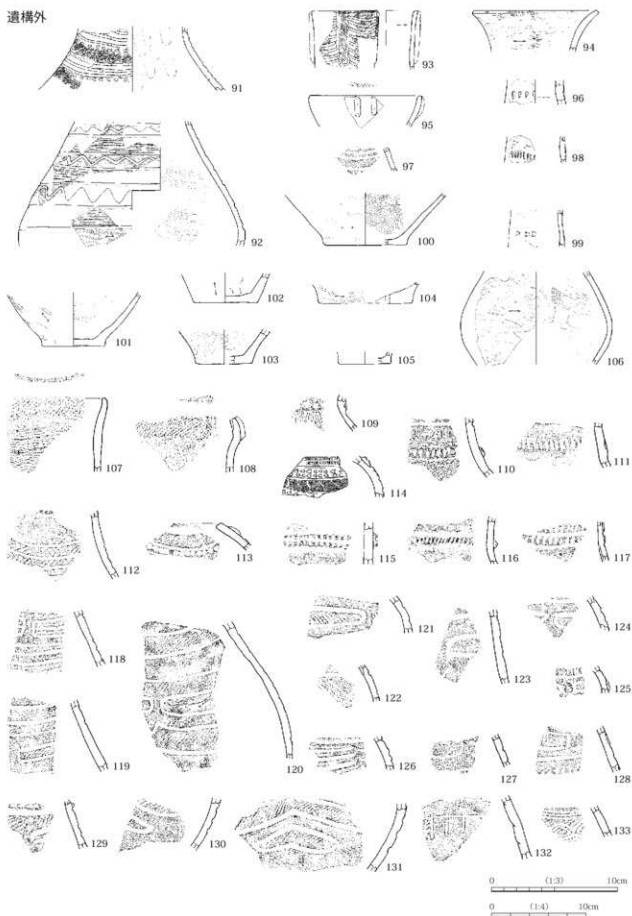
遺構外



第84圖 弥生時代遺構外出土土器(2)

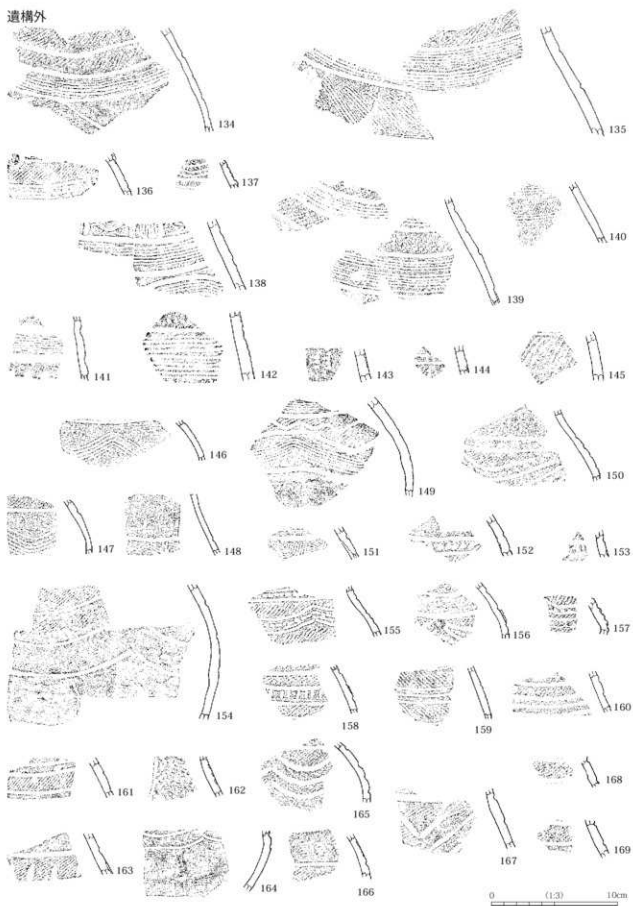
0 1.0 10cm

遺構外



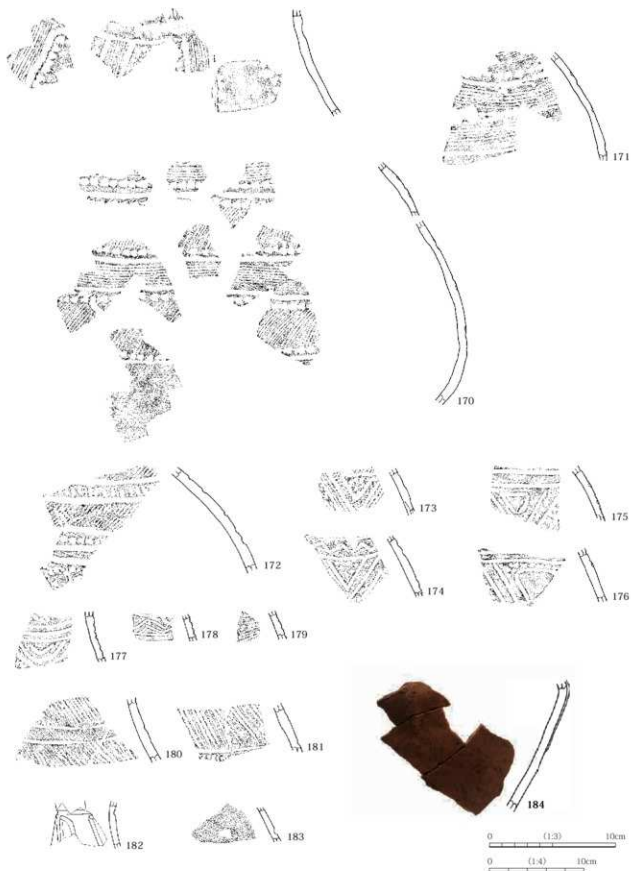
第85図 弥生時代遺構外出土土器(3)

## 遺構外



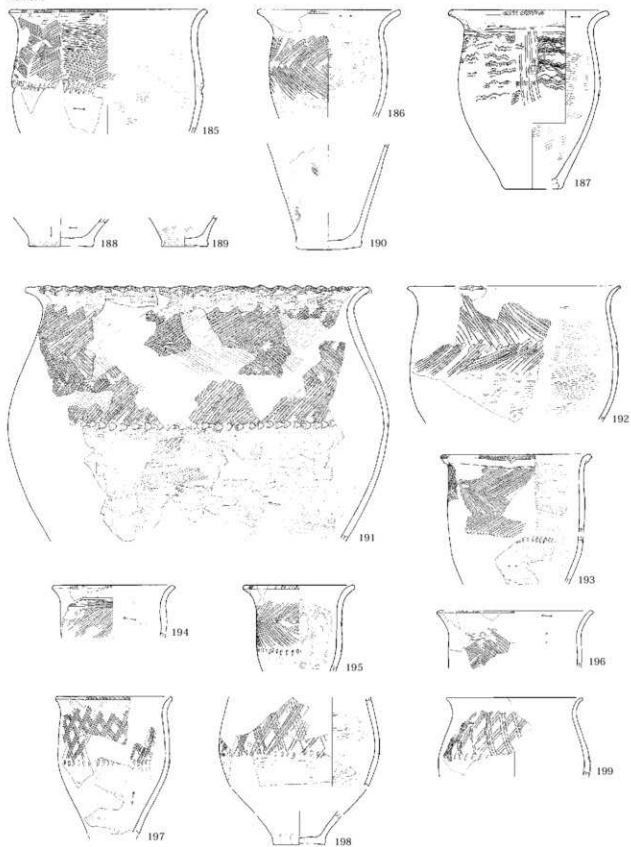
第86圖 弥生時代遺構外出土土器(4)

遺構外



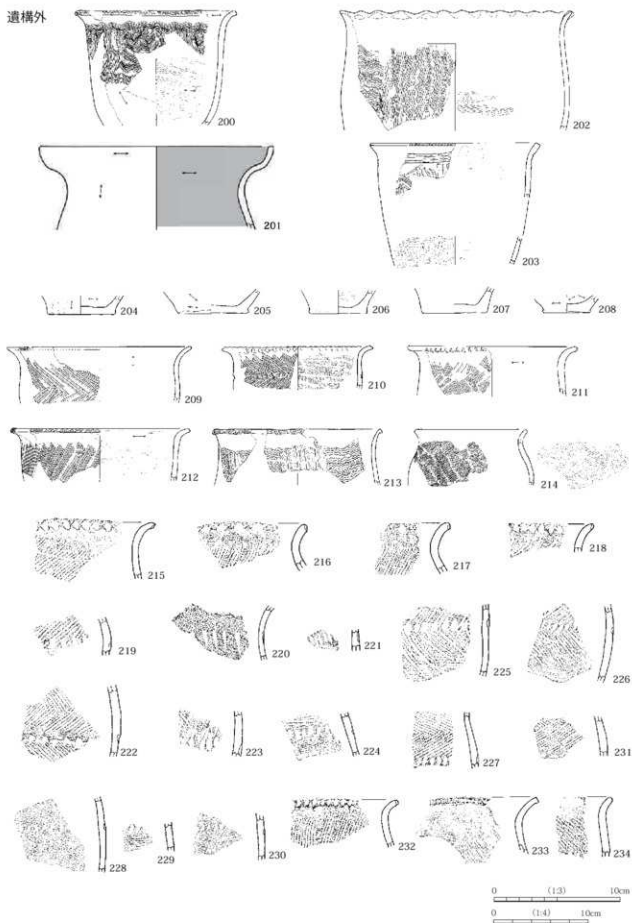
第 87 図 弥生時代遺構外出土土器 (5)

遺構外



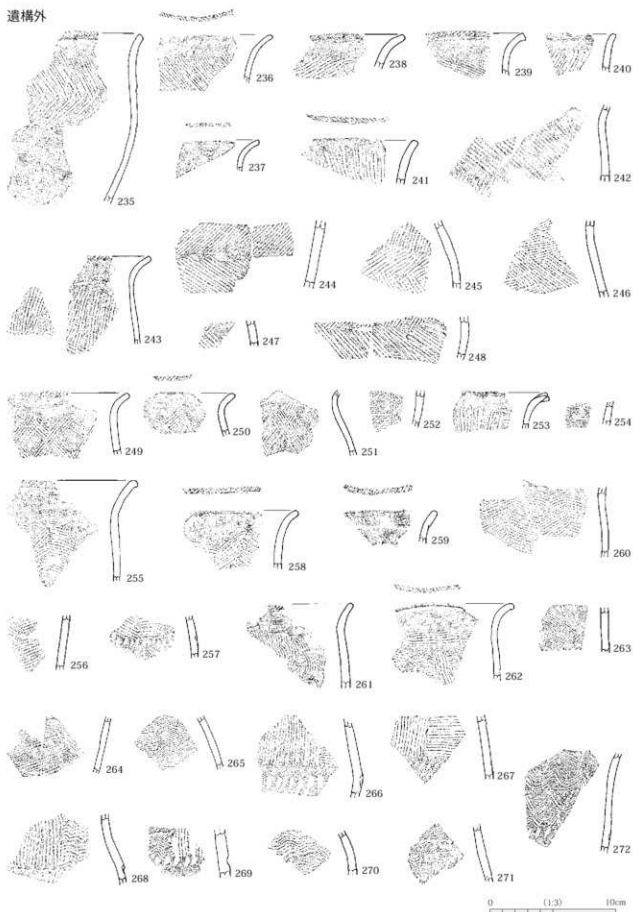
第 88 図 弥生時代遺構外出土土器 (6)

遺構外



第89図 弥生時代遺構外出土土器(7)

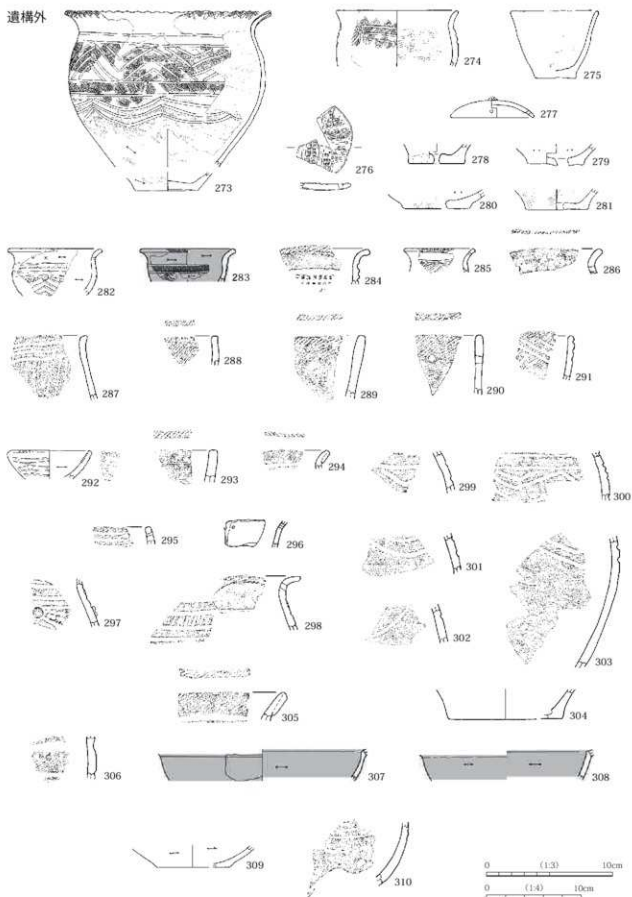
## 遺構外



第90圖 弥生時代遺構外出土土器(8)



遺構外



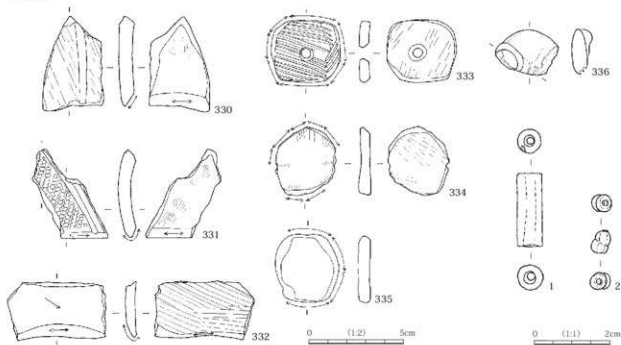
第91図 弥生時代遺構外出土土器(9)

SB01

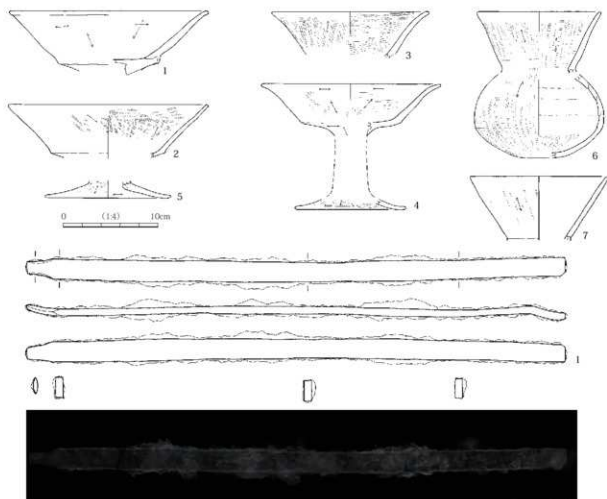


第92図 中野市試掘資料 (SB01 出土土器、土製品)

土製品

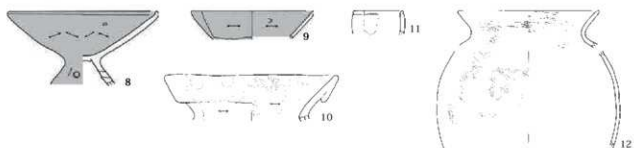


第93図 弥生時代土製品、石製品、ガラス製品

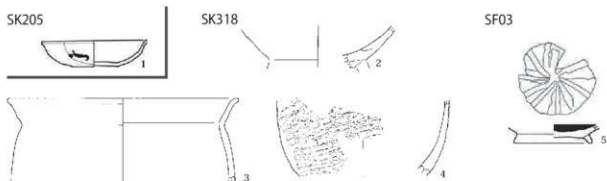


第94図 古墳時代SK191出土土器、鉄製品

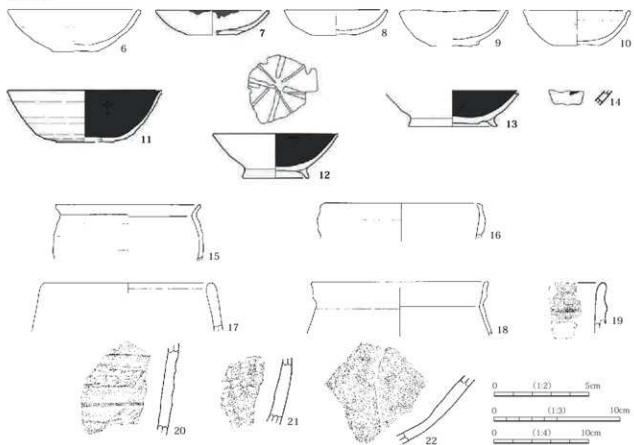
遺構外



第95図 古墳時代遺構外出土土器



遺構外



第96図 平安時代SK、SF、遺構外出土土器



## 第4章 壁田城跡の調査

### 第1節 遺跡の範囲と沿革・概要

#### 1 遺跡の範囲

壁田城跡は、千曲川右岸の長丘丘陵北部に立地する。「武田信玄朱印状」(『諸家古案集』)により、川中島合戦時、武田軍の最前線として重要な拠点であったと推定されている。遺跡範囲は、『長野県中野市遺跡詳細分布図(改訂版)』(以下『分布図(改訂版)』という。)(中野市教育委員会2014)によると、城の主郭が位置する中央部分(本丸)と、北側、南側に飛び地で広がる範囲とからなる(第97図)。今回の調査区は、主郭から南へ約650m離れた長丘丘陵頂部および東側斜面部～山裾部・低地部(南側の飛び地)にあたる。

#### 2 城跡の沿革・概要

当地を「へきだ」と呼称したのは、元徳元年(1329)の「諏訪上社五月会・花会・御射山頭役結番」(『守矢家文書』)に「部木田(へきだ)」と記載されたのが史料上の初見であるという。一方、長丘丘陵の最高所に古代朝廷による信越国境の蝦夷対策に関わる烽火台が設置されたという伝承から、金井汲次は、烽火台に関わる「官給田の火置田から壁田に転訛したという説」を紹介している(金井1981)。

壁田城については、永禄9年(1561)の「武田信玄朱印状」によると、武田信玄が国人山田飛騨守らに対して宛行っていることから、この頃までに「高梨時代の城を武田方が拡張・修復した」(湯本1981)という見方や、永禄11年(1568)の信玄による長沼城再建に伴って整備したという考えがある(酒井2013)。一方、現地に残る畝状堅堀群を天文・永禄期の越後城郭の特色と捉え、上杉方によって築城されたという意見もあり(伊藤1987)。築城もしくは修復、廃城に関わる定説はない。

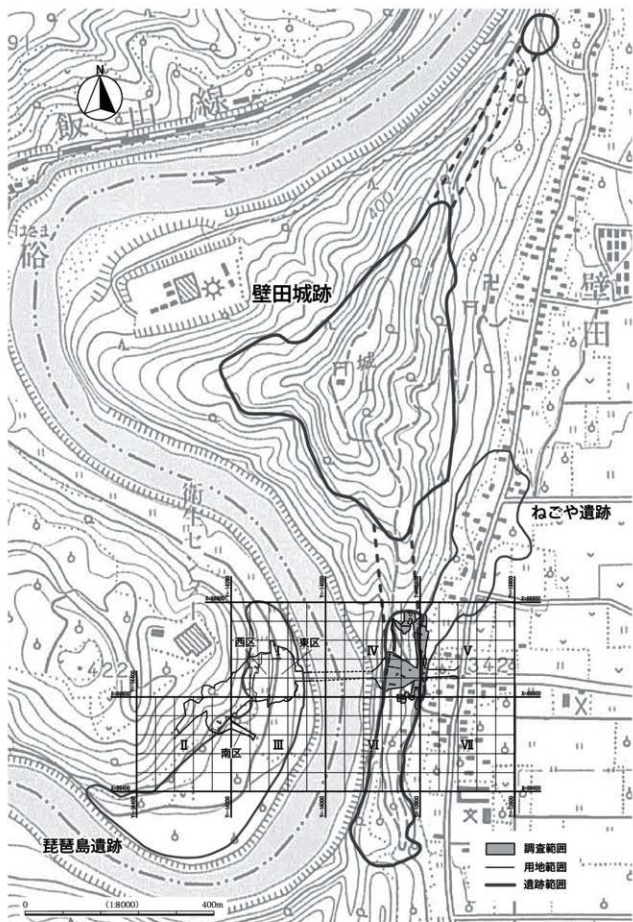
壁田城は、中野扇状地と千曲川によって削られた急崖に挟まれた長丘丘陵上にあり、最高所に楕円形の主郭を築いている。北・南・西方の尾根は、堀切や土塁で区切った平坦部を造り出し、主郭と最低所の平坦部との比高は150mあるという。主郭の東側に3本、北側平坦部の東側にも7本の堅堀があり、また、南東の竈池辺りにも小規模な平坦面が認められる。こうした遺構の特徴から、伊藤氏は前述のとおり上杉方の築城とみるが、放射状堀切群との類似性から武田方の築城とする見方もある(馬場1996)。いずれにせよ、遺構に対する所見は今後の詳細な調査と分析が必要である。

なお、南東麓には「郭清水(くるわしみず)」や「根小屋(ねごや)」の地名が残り、大壘や焼土、古銭等が出土しているという。「根小屋」は居館のあった所と推定され、市教委が2006年に登録した「ねごや遺跡」(中野市教育委員会2006)に含まれる場所である。

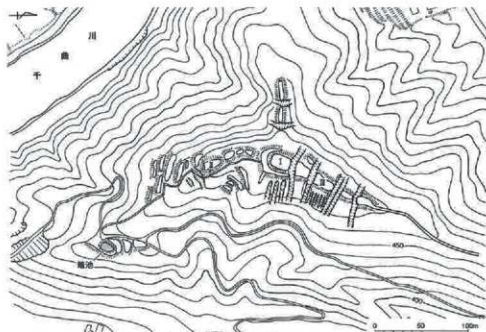
### 第2節 調査の方法と調査成果

#### 1 調査の方法

確認調査は、はじめに千曲川に向かって断崖を形成する西側丘陵頂部から東側山裾部(低地部を含む)を踏査し、地表面観察を行なった。その結果、平場(平坦面)等の地形を考慮して決定した19本のトレ



第97図 遺跡範囲と調査範囲



第98図 壁田城跡概要図(酒井2013:33より転載)

ンチを入れて、遺構・遺物確認、土層観察を実施した(第99図)。次年度に予定される本格調査の遺構等内容理解のため、調査可能な斜面・平坦面にトレンチを入れた。一部、正確な遺構確認のためトレンチを面的に広げた箇所もある(T11、T18、a地点)。

## 2 調査の成果

壁田城跡の調査成果は、大きく4か所に分けて説明できる。長丘丘陵の丘陵頂部(北側尾根部を含む)、斜面部、山裾部、低地部である。調査区全体の土層を大別すると、I層群:表土層(耕作土層、盛土層)、II層群:自然崩落土層(掘削土の堆積層を含む)、III層群・IV層群:地山層となる。また、トレンチ(T)、テストピット(P)は、共通する地形ごとに区分した6地区にまとめた(第100図)。

### (1) 丘陵頂部、北側尾根部 (T3、P1~3、T12) (第101図、PL30)

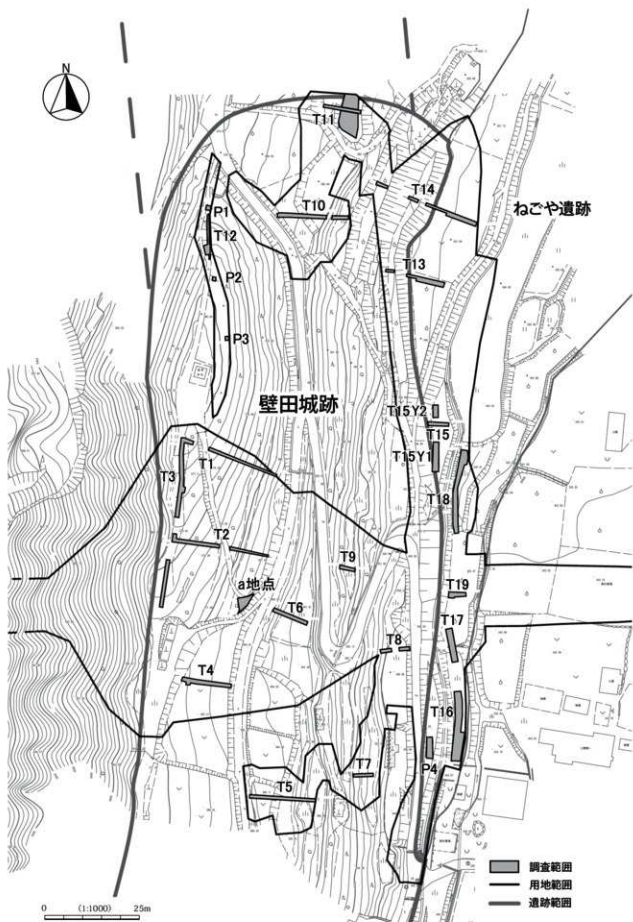
丘陵頂部をほぼ南北に走るT3では、固いIII層群の上にI層群が堆積する。同様に、北側尾根部に設定されたP1~3は、II層群を挟む部分もあるが、基本的に水性堆積の固いIII層群とI層群のみで構成される(ピット(P)の土層は共通することから、P2断面のみを掲載)。さらに、P1~3が設定された北側尾根部のT12からは、自然礫の集積も確認されている。丘陵頂部から北側尾根部にかけては、人工的な掘削等の痕跡は認められず、中世城郭に関わる施設もない。

### (2) 斜面部中央 (T1・2・4・6・8・9、a地点) (第101~103図、PL30・31)

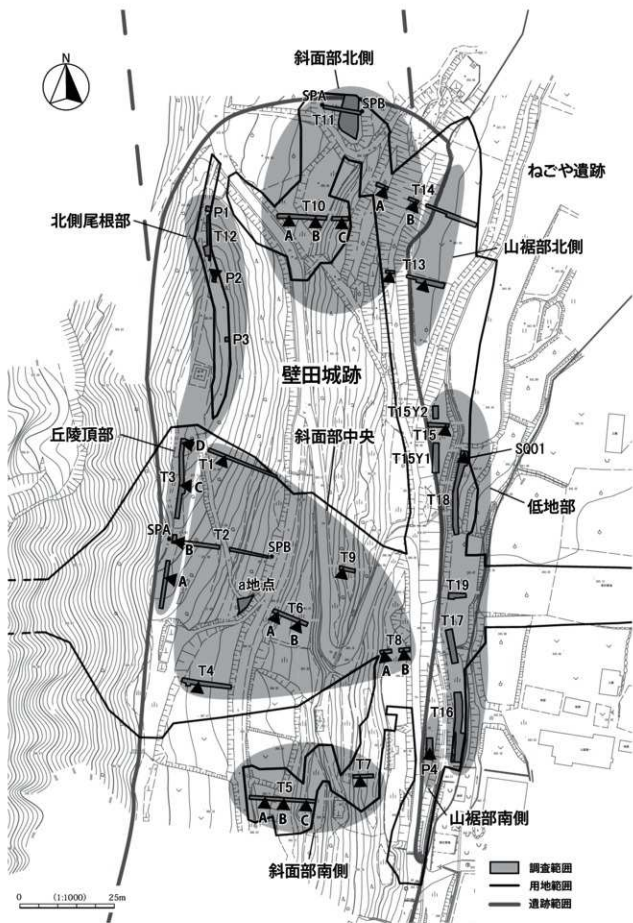
丘陵頂部から丘陵東側斜面部にかけて設定されたT1は、III層群を掘削した面に堆積したII層群を平らにして、幅2m前後の平坦面を6~7段造り出している。出土遺物はなく平坦面造成の時期は明確ではないが、現在の斜面の利用状況を考えると、おそらく近・現代に桑畑等の造成が行なわれた痕跡であろう。

T2は、斜面上部で5段の平坦面、下部に広い平坦面を持つ。上部では、II層群を削り平坦面を造り出している。下部では、最上位に1段の狭い平坦面を残すものの、下位は当初の平坦面を再度掘削し平坦面を広げている可能性がある。出土遺物はなく平坦面造成の時期は明確ではないが、現地形の階段状の平坦面は果樹等の畑に利用されている場所が残存するため、畑地とするための造成であると考えられる。なお、現地地形造成が中世までさかのぼる痕跡は土層観察では認められない。近・現代以降の畑地造成と考えると、丘陵頂部に中世城郭に関わる施設が確認できなかったことと整合する。斜面中央では、中世城郭に関わる





第99図 壁田城跡全体図



第100図 壁田城跡トレンチ、ピット区分図

施設は認められない。

T4は、Ⅱ層（Ⅱ層群）（西端はⅢ層群）を掘削した面にⅠ層群が堆積する。遺構・遺物はなく、風倒木痕が1か所確認されたのみである。造成の時期は不明であるが、T1～T3の状況から判断して、近・現代以降の掘削と推定する。なお、T2とのほぼ中間ある調査区a地点も同様の状況を示す（図省略）。

T6の土層観察から、Ⅲa・b層（Ⅲ層群）ないしはⅡ層（Ⅱ層群）が削平され幅約8mの平坦面を形成し、上層にはⅠ層群が堆積していることが確認された。削平（造成）の時期は不明であるが、南側のT5上段と一連の平坦面であり、遺物・遺構は認められないことから、近・現代以降の畑地造成のための平坦面と考える。

T8の箇所は、現在樹齢10年前後の雑木林となる。明確な掘削面は認められないが、Ⅰc層（Ⅰ層群）上部にはⅠd層（Ⅰ層群）に似る黒色土が混じる部分が認められ、斜面上方のⅠc・Ⅰd層を削り斜面下方に盛土し平坦面を造成したと考えられる。ただし、Ⅰc層の上下で明確な分層はできない。出土遺物はなく、他地点の平坦面造成の状況から、近・現代以降に造成された平坦面と判断した。

T9のⅡ層（Ⅱ層群）とⅢ層（Ⅲ層群）との層界は明確で、Ⅱ層がⅢ層の傾斜面に堆積した後、掘削されて平坦面が形成されたと考えられる。遺物もなく、Ⅰ層群にしまりがなくことから、近・現代以降の平坦面と判断した。

### (3) 斜面部南側（T5・7）（第104図、PL31）

T5の上段・中段は、Ⅰc1層（Ⅰ層群）からビニールが出土していることから、近・現代以降の造成（畑地）である可能性が高い。下段の造成土Ⅰc3層（Ⅰ層群）もⅠc1層（Ⅰ層群）と一連の盛土と観察されることから、近・現代以降の掘削面（平坦面）と考えられる。上段の平坦面は、斜面部中央T6の平坦面につながる一連のものであろう。出土遺物はない。

T7の平坦面は、造成が2回行われている。西端で上方約1.7mの斜面があり、他地点の平坦面の段差に比べ高低差が大きい。Ⅰa層（Ⅰ層群）とⅠb層（Ⅰ層群）は、土色およびⅠb層の落ち込みから異なる時期の盛土と判断した。時期は不明だが、他地区の状況から判断して、1回目の造成も近・現代以降と推定した。

### (4) 斜面部北側（T10・11・13上段・14上段・14中段）（第104～106図、PL31）

T10は、もともと緩斜面であったところを造成し、3段の平坦面を造り畑地としたものと推定される。上・中段はⅢ層群上に、下段の平坦面はⅢb層（Ⅲ層群）を掘削した面にⅠa・Ⅰb層（Ⅰ層群）が堆積している。Ⅰa・Ⅰb層は類似し、しまりが悪く、城郭に関わる造成面とは想定できない。近・現代以降の畑地のための平坦面造成と推定される。

T11の平坦面は、上段がⅡ層（Ⅱ層群）を掘削し、下段がⅢ層群を掘削して造られている。上面にはⅠ層群が堆積する。下段の平坦面はⅠa層（Ⅰ層群）の厚さが10cm以下の箇所もあり、斜面地形平坦面での土壌の堆積厚を考慮すると削平後数百年を経過したとは考えられない。上・下段の平坦面は、地権者からの聞き取りにより、現代の果樹等の栽培のために畑地造成が行われた際の平坦面であることが判明した。さらに、平坦面の性格の確実な把握のため、下段部分の平坦面を面的に調査したが、出土遺物もなく、中世山城に関わる施設は確認されなかった。

T13上段は、岩石化したⅣ層（Ⅳ層群）上にⅡ層群とⅠ層群が堆積して、幅2mほどの平坦面を形成している。現在もリング等の果樹栽培が行われており、近・現代に畑地造成された平坦面であろう。

T14上段・中段は、砂層が岩石化したⅣ層群を掘削して、幅約2mの平坦面を造り出している。堆積土はⅠ層群がほとんどを占め、現在もブラム等の果樹が栽培されていること、他地区の状況も考え合わせると、近・現代以降の造成と判断する。出土遺物はなく、中世城郭に関わる施設等は確認されない。

**(5) 山裾部** (T13 下段・14 下段、P4) (第107図、PL31)

土層を見ると、I 層群は斜面部と共通するがII層群は異なる。P4は近接する斜面中央 T8とは共通する部分をもつ。北側の T13 下段 I d 層 (I 層群) より、平安時代の須恵器および土師器片が出土し、下層の II 層群からは縄文時代早期押型文土器の口縁部破片が1片出土した。南側の P4は、黒褐色土の II a 層 (II 層群) 中に平安時代の土師器壺の口縁部破片が包含していた。なお、T14 下段は T13 下段とほぼ同様の状況を示す (図省略)。

**(6) 低地部** (T15・15Y1・15Y2・16・17・18・19) (第107図、PL32・33)

調査区東縁は平坦な低地部となり、斜面部とは様相が異なる。土層的には山裾部に類似する部分もあるが、トレンチごとに様相が異なる。南側の山裾部との境界付近 (T16) には、溝状の落ち込み (SD01) があり、弥生時代後期の赤彩高坏破片が出土した。北側の T18 の北端部分には、平安時代の土師器、須恵器の破片が13片出土し、遺物集中 SQ01として確認した。遺物包含層は、黒色土の III a ②層であり、同層の状態から水田の可能性が考えられプラント・オパール分析を行なった。イネの植物珪酸体 (機動細胞由来の化石) は、安定した水田耕作の可能性がある試料 1g 当り 5,000 個以上までは達せず (1,700 個/g)、明確な結果は得られなかった。ただ、古代の遺物分布の広がりには北側方向に続くと推定された。なお、土層およびトレンチの詳細な状況については第5章を参照のこと。

## 第3節 小 結

次年度に予定されていた壁田城跡の発掘調査方法を見極める目的で、また壁田城跡の遺跡の広がりを確認するためにトレンチ調査 (一部面的調査) を行なったが、中世および近世の山城に関わる遺構・遺物は検出されなかった。当初、中世山城の平場・段差と考えた平坦面は、近・現代 (明治以降) に桑や果樹を栽培するために造成された畑地の平坦面であることが確認された。

壁田城跡の遺跡範囲は、主郭のある場所 (本丸) から飛び地状に北側と南側に延びており、今回の調査で南側の一部分を調査したが、中世城郭に関わる施設は確認されなかった。調査結果から、壁田城跡において、本丸南側の飛び地でみられる平坦地には中世城郭に関する施設は存在しない可能性が高くなった。壁田城の城域は、本丸のある中心部から北側に限られることがわかってきた。

一方、山裾部、低地部からは、他時期の遺構・遺物が出土し、壁田城跡とは別の遺跡となることが県教委と市教委との間で協議、確認された。山裾部と低地部の一部は、壁田城跡東南麓にある「ねごや遺跡」に編入されることとなった。ねごや遺跡の調査内容は、次章の第5章で紹介する。

## 引用・参考文献

- 伊藤正一 1987 「壁田城」『図説中世城郭辞典 第二巻』新人物往来社：139  
 金井汲次 1981 「古代の中野」『中野市誌 歴史編 (前編)』：195-196  
 酒井健次 2013 「壁田城」『長野の山城ベスト 50 を歩く』サンライズ出版：30-33  
 中野市教育委員会 2006 「長野県中野市遺跡詳細分布図」  
 中野市教育委員会 2014 「長野県中野市遺跡詳細分布図 (改訂版)」  
 長野県埋蔵文化財センター 2015 「長野県埋蔵文化財センター年報」31  
 馬場廣幸 1996 「壁田城」『定本・北信濃の城』郷土出版社：70-71  
 湯本軍一編 1980 「壁田城」『日本城郭大系 第8巻 長野・山梨』新人物往来社：66-67  
 湯本軍一 1981 「中世の中野」『中野市誌 歴史編 (前編)』：334-336

(1) 丘陵頂部、北側尾根部 (T3、P1～3、T12)

T3 西壁

[T1, T3]

1 解釋：表土層。

I a：腐植土層。

I b：赤褐色土 (Hae10Y23/4)。しまり強く粘性強い。礫を含む。

II 解釋：自然崩落土層 (面平土の薄層を含む)。

II b：褐色土 (Hae10YR4/6)。自然崩落土層 (II a層の崩落土)。しまり強く粘性強い。

III 解釋：水成の地山層。

III a：褐色土 (Hae10YR4/4)。しまり強く粘性強い。かなり深い層。

III b：III b層 (T2 注目部分) に類似するが、φ5～10mmの礫からい礫を含む。III b層とIII b層は異なる層の可能性あり。

III c：粘褐色土 (Hae7.5Y25/6)。しまり強く粘性強い。かなり深い層。

III d：褐色土 (Hae10YR4/6)。灰白色粘土をブロック状に含む。しまり強く粘性強い。

III d'：ふい青褐色土 (Hae10YR5/4)。しまり強く粘性強い。III e層の灰白色粘土が混入。

III e：灰白色～ふい青褐色土 (Hae10YR7/1～7/2) 粘土。(乾くとカチカチになり、濡れると滑る)

※III e層の下に灰白色 (Hae10YR8/2) シルト層がある。



P2 南壁

—379.50m



[P1]

1 解釋：表土層。

1：ふい青褐色土 (Hae10YR4/3)。表土。根で破れかかっている。

II 解釋：水成の地山層。

2：暗灰色細砂土 (Hae2.5Y5/2)。カチカチに固くなる。乾くと灰白色 (Hae2.5Y7/1) になる。

3：暗灰色細砂土 (Hae2.5Y5/2)。カチカチに固くなる。2層より粒径が大きくなりがちがられる。

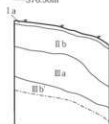
4：黄灰色砂質土 (Hae2.5Y5/1)。乾くと灰白色 (Hae2.5Y7/1) になる。

※1層は2層が根により固くなり腐植土と混じってできた層 (T1) の1層層に対応。2～4層は水成層の地山 (T1, II層層) に対応。人為的削平は確認できない。

(2) 斜面部中央 (T1)

T1 北壁

—376.50m



T12 自然礫の集積

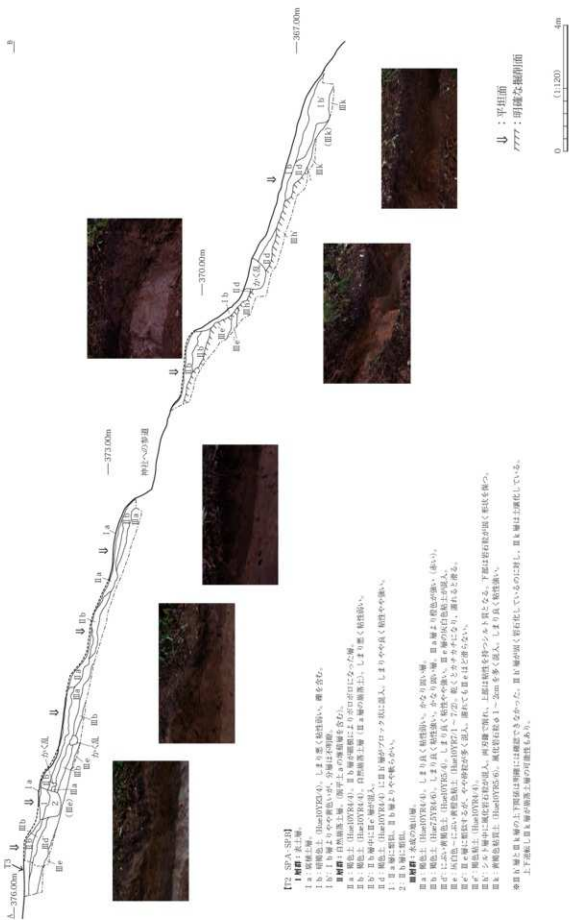


北西より

0 (1:40) 1m

第101図 丘陵頂部、北側尾根部、斜面部中央 1土層図

## (2) 斜面部中央 (T2) T2 北壁



第 102 図 斜面部中央 2 土層図

### T2 SPa, SPb

#### 1 掘削土壌

Ⅰa: 暗褐色土 (Hum0107204)。しまり強く粘性強い。腐葉を含む。

Ⅰb: Ⅰa層よりやや黄色いが、分層は不明。

Ⅱa: Ⅰa層よりやや黄色い。腐葉を含む。

Ⅱb: Ⅱa層よりやや黄色い。腐葉を含む。

Ⅲa: 暗褐色土 (Hum0107444)。自然落下層 (Ⅱa層の黒色土)。しまり強く粘性強い。

Ⅲb: 暗褐色土 (Hum0107444)。Ⅱa層が7割程度に混入。しまりやや強く粘性やや強い。

2: Ⅱb層に類似。

#### 掘削土壌の地山層

Ⅲa: 暗褐色土 (Hum0107444)。しまり強く粘性強い。やや強い腐。

Ⅲb: Ⅲa層よりやや黄色い。腐葉を含む。Ⅲa層より粘性が強い。(強い)

Ⅲc: Ⅲa層よりやや黄色い。腐葉を含む。Ⅲa層より粘性が強い。(強い)

Ⅲd: Ⅲa層よりやや黄色い。腐葉を含む。Ⅲa層より粘性が強い。(強い)

Ⅲe: Ⅲa層よりやや黄色い。腐葉を含む。Ⅲa層より粘性が強い。(強い)

Ⅲf: Ⅲa層よりやや黄色い。腐葉を含む。Ⅲa層より粘性が強い。(強い)

Ⅲg: Ⅲa層よりやや黄色い。腐葉を含む。Ⅲa層より粘性が強い。(強い)

Ⅲh: Ⅲa層よりやや黄色い。腐葉を含む。Ⅲa層より粘性が強い。(強い)

Ⅲi: Ⅲa層よりやや黄色い。腐葉を含む。Ⅲa層より粘性が強い。(強い)

Ⅲj: Ⅲa層よりやや黄色い。腐葉を含む。Ⅲa層より粘性が強い。(強い)

Ⅲk: Ⅲa層よりやや黄色い。腐葉を含む。Ⅲa層より粘性が強い。(強い)

Ⅲl: Ⅲa層よりやや黄色い。腐葉を含む。Ⅲa層より粘性が強い。(強い)

Ⅲm: Ⅲa層よりやや黄色い。腐葉を含む。Ⅲa層より粘性が強い。(強い)

Ⅲn: Ⅲa層よりやや黄色い。腐葉を含む。Ⅲa層より粘性が強い。(強い)

Ⅲo: Ⅲa層よりやや黄色い。腐葉を含む。Ⅲa層より粘性が強い。(強い)

Ⅲp: Ⅲa層よりやや黄色い。腐葉を含む。Ⅲa層より粘性が強い。(強い)

Ⅲq: Ⅲa層よりやや黄色い。腐葉を含む。Ⅲa層より粘性が強い。(強い)

Ⅲr: Ⅲa層よりやや黄色い。腐葉を含む。Ⅲa層より粘性が強い。(強い)

Ⅲs: Ⅲa層よりやや黄色い。腐葉を含む。Ⅲa層より粘性が強い。(強い)

Ⅲt: Ⅲa層よりやや黄色い。腐葉を含む。Ⅲa層より粘性が強い。(強い)

Ⅲu: Ⅲa層よりやや黄色い。腐葉を含む。Ⅲa層より粘性が強い。(強い)

Ⅲv: Ⅲa層よりやや黄色い。腐葉を含む。Ⅲa層より粘性が強い。(強い)

Ⅲw: Ⅲa層よりやや黄色い。腐葉を含む。Ⅲa層より粘性が強い。(強い)

Ⅲx: Ⅲa層よりやや黄色い。腐葉を含む。Ⅲa層より粘性が強い。(強い)

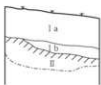
Ⅲy: Ⅲa層よりやや黄色い。腐葉を含む。Ⅲa層より粘性が強い。(強い)

Ⅲz: Ⅲa層よりやや黄色い。腐葉を含む。Ⅲa層より粘性が強い。(強い)

## (2) 斜面部中央 (T4・6・8・9)

## T4 北壁

—368.00m



【T4】

Ⅰ 解釋：表土層。

Ⅰ a：にぶい黄褐色土 (Hae10YR3/3)。耕作土。しまり悪い。  
Ⅰ b：暗褐色土 (Hae10YR3/3)。粘土。即表土。Ⅱ層の粘土が  
ロックや石を混入。

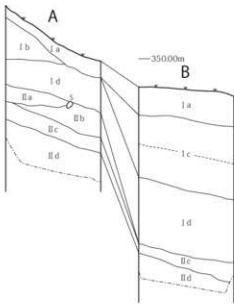
Ⅱ 解釋：自然崩落土層 (崩平土の堆積層を含む)。

Ⅱ：棕色土 (Hae10YR3/4)。灰白色粘土ブロック、礫を多く混入。  
自然崩落土層。

※各土層細分名は T1～T3 とは対応しない。

## T8 北壁

—351.00m



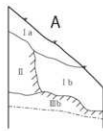
【T8】

Ⅰ 解釋：表土層。

Ⅰ a：暗褐色土 (Hae10YR3/3)。表土 (耕  
作土)。しまり悪く粘性弱い。Ⅰ b：暗褐色土。黄褐色粘土。礫などが  
混じった粘土。コンクリート道路を  
通った時の粘土。Ⅰ c：黒褐色土 (Hae10YR2/2)。しまり  
悪く粘性弱い。Ⅰ b 層との境界は漸  
移的。Ⅰ c 層中位 (点線部) が即表  
土 (=造成前の表土)。Ⅰ d：黒色土 (Hae10YR1/2)。しまり  
悪く粘性弱い。Ⅰ a 層との境界は明  
確 (Ⅰ c、Ⅰ d 層を合わせた層が、  
両体部のはかのトレンチで即表土と  
した層に対応)。Ⅱ 解釋：自然崩落土層 (崩平土の堆積  
層を含む)。Ⅱ a：黒褐色土 (Hae10YR2/2)。しまり  
良く粘性弱い。φ 10mm 前後の岩石  
を混入 (崩落層で割れる)。山体風  
化岩石の礫たもの。φ 5～10cm  
の礫を少量混入。Ⅱ b：暗褐色土 (Hae10YR2/3)。しまり  
良く粘性弱い。φ 1cm 前後の岩石  
を多量に混入。φ 5～10cm の礫を  
少量混入。Ⅱ c：にぶい黄褐色土 (Hae10YR3/3)。し  
まり良く粘性弱い。φ 1cm 前後の  
岩石を混入。Ⅱ d 層とⅠ d・Ⅱ b  
層との境界層。Ⅱ d：黄褐色土 (Hae10YR5/6)。しまり  
良く粘性弱い。φ 1cm 以下の岩石  
を混入。礫を少量混入。

## T6 北壁

—364.00m



【T6】

Ⅰ 解釋：表土層。

Ⅰ a：Ⅰ d とⅡ層の混成層。

Ⅰ b：暗褐色土 (Hae10YR3/3)。しまり悪く粘性弱い。

Ⅰ d：黄褐色土 (Hae10YR2/2)。即表土。

Ⅱ 解釋：自然崩落土層 (崩平土の堆積層を含む)。

Ⅱ：棕色土 (Hae10YR3/4)。しまり良く下半部はかなり  
しまっている。上半部は自然崩落土層? (地山層)。  
φ 5cm の礫を少量含む。

Ⅲ 解釋：水成の地山層。

Ⅲ a：にぶい黄褐色土 (Hae10YR5/4)。しまり良くカナカ  
ナにしまっている。粘性強く粘土質である。Ⅲ b：にぶい黄褐色土 (Hae10YR5/4)。しまり良くカナカ  
ナにしまっている。粘性強く粘土質である。ヤンクワ  
ック (乾燥によるひび割れ) が認められる。

【T9】

Ⅰ 解釋：表土層。

Ⅰ a：暗褐色土 (Hae10YR3/3)。しまり悪く粘性弱い。

Ⅰ b：暗褐色土 (Hae10YR3/4)。しまり悪く粘性弱い。礫層が  
φ 5cm 程度のブロック状で多く混入。

Ⅰ c：暗褐色土 (Hae10YR3/3)。しまり悪く粘性弱い。

Ⅱ 解釋：自然崩落土層 (崩平土の堆積層を含む)。

Ⅱ：暗褐色土 (Hae10YR3/3)。しまり良く粘性弱い。下部 (Ⅱ  
層との境界付近) に φ 1cm 前後 (2cm 以下) の礫層が少  
量混入。

Ⅲ 解釋：水成の地山層。

Ⅲ：にぶい黄褐色シルト (Hae10YR5/3)。φ 1～5mm の岩石  
殻を多く混入。カナカナに割れ層 (両刃層で割れる程度)。  
φ 50cm の礫を混入。Ⅳ：礫層と同だが、崩平の礫層だが、礫によりかなり混ざり  
Ⅰ c 層が少量混入している。

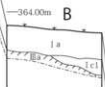
〰〰〰：明確な掘削面

0 (1:40) 1m

第 103 図 斜面部中央 3 土層図

## (3) 斜面部南側 (T5・7)

## T5 北壁



## 【T5】

## Ⅰ層群：表土層。

I a：暗褐色土 (Hae10YR3/3)。耕作土。しまり悪く粘性弱い。  
I a'：暗褐色土 (Hae10YR3/3)。I a層よりやや硬く、しまり高い。

I c1：暗褐色土 (Ⅰ層群) と褐色土 (Ⅱ層群) の混土層。同一型の混土層。

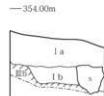
I c3：暗褐色土 (Hae10YR3/3)。しまり悪く粘性弱い。Ⅱb層をブロック状に混入。

## Ⅱ層群：水成の地山層。

Ⅱa：暗褐色土 (Hae7.5YR3/4)。しまり高く粘性強い。粘土質で、礫含まない。

Ⅱb：褐色土 (Hae10YR4/4)。しまり高く粘性強い。灰白色粘土をブロック状に混入し、礫は含まない。

## T7 北壁



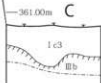
## 【T7】

## Ⅰ層群：表土層。

I a：暗褐色土 (Hae10YR3/4)。しまり高く (上部10cm程度はしまり悪い) 粘性弱い。Ⅱa層をブロック状に混入。

I b：暗褐色土 (Hae10YR2/3)。しまり高く粘性弱い。

Ⅱ層群：水成の地山層。  
Ⅱb：灰黄褐色シルト層 (砂質) (Hae10YR7/2)。カチカチに固い。大粒大の角礫を混入。



## (4) 斜面部北側 (T13上段)

## T13 上段北壁

—353.00m



## 【T13上段】

## Ⅰ層群：表土層。

I a：暗褐色土 (Hae10YR3/3)。しまり悪く粘性弱い。上部は耕作土だが下部と分層不連続。

## Ⅱ層群：自然崩落土層 (原平土の薄粘層を含む)。

Ⅱa：黄褐色土 (Hae10YR2/2)。山体の自然崩落土層。Ⅱ層群をブロック状に混入。しまり悪く粘性弱い。T10 I a層に対応する可能性あり。

Ⅱb：Ⅱa層とⅡ層崩落土層の混土層。

## Ⅳ層群：山体の地山層。

Ⅳ：上部-9白土土 (Hae10YR8/1)、下部-灰黄褐色土 (Hae10YR6/2-6/1)。砂とシルトが互層に厚積し、岩石化したもの。山体地山層。カチカチに固い。



/////：明確な掘削面

0 (1.40) 1m

第104図 斜面部南側・北側1土層図

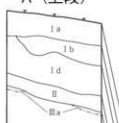


(4) 斜面部北側 (T10・14上段・14中段)

T10 北壁

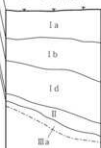
—368.00m

A (上段)



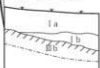
—366.00m

B (中段)



—363.00m

C (下段)



【T10】

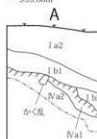
- I 解釋：表土層。
- I a：暗褐色土 (Hae10YR3/3)。耕作土層。しまり悪く粘性弱い。
- I b：暗褐色土 (Hae10YR3/3)。I a層よりややしまり良い。I d層を混入する。浅黄褐色の風化岩粘土を混入。I a層よりやや明るいが、I a層と明確に区分できないところもある。
- I d：黒褐色土 (Hae10YR2/2)。畑表土層。しまりやや悪く粘性弱い。
- II 解釋：自然崩落土層 (崩平土の堆積層を含む)。
- II：暗褐色土 (Hae10YR3/3)。しまりやや悪く粘性弱い。I a層よりやや明るく、若 a層がφ1～2cmのプロット状に混入し、φ1～2cmの礫混入。II層の漸移層。
- III 解釋：水成土層。
- III a：褐色土 (Hae10YR4/4)。かなり固くしまった層 (カチカチにしまる) で、粘性強い。φ1cm～拳大 (10～15cm) の礫を混入。
- III b：褐色土 (Hae10YR4/6)。かなり固くしまった層 (カチカチにしまる) で、粘性やや強い。φ1cm～人頭大 (20cm) の礫を混入。小さな礫は風化して両旁縁で散れる。灰白色～浅黄褐色の粘土プロットを混入。

※ I層群とII層群は T1～T3の断面層名とは対応しない。



T14 上段北壁

—359.00m



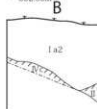
【T14上段】

- I 解釋：表土層。
- I a2：暗褐色土 (Hae10YR3/3)。しまり悪く粘性弱い。
- I b1：I a2層とIV a1層の混土層。
- I b2：I a2層とIV a1層の混土層。IV a1層が多く混入。
- IV 解釋：山体の地山層。
- IV a1：黄褐色砂 (Hae10YR5/4) (少量)。しまる砂層。
- IV a2：褐色砂層 (Hae2.5YR4/6)。固くしまる砂層。



T14 中段北壁

—352.00m



【T14中段】

- I 解釋：表土層。
- I a2：暗褐色土 (Hae10YR3/3)。しまり悪く粘性弱い。
- II 解釋：自然崩落土層 (崩平土の堆積層を含む)。
- II a：褐色土 (Hae10YR4/4)。しまり良く粘性やや弱い。白色岩粒を混入。
- IV 解釋：山体の地山層。
- IV c：黄褐色砂 (Hae10Y5/2)。礫が粗粒化してカチカチになった層。両方縁で散れる。



7777：明確な掘削面

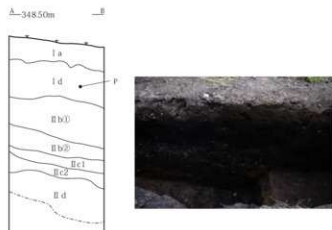


第 105 図 斜面部北側 2 土層図



## (5) 山裾部 (T13・P4)

## T13 下段北壁



## 【T13 下段】

## I 層群：表土層。

I a：上段のI a層と同じ。

I d：黒色土 (Hae10YR2/2)。山体の田表土としてI d層に対応。

## II 層群：自然崩落土層。

II b①：黒色土 (Hae10YR2/1)。II b2層との境界は不明瞭。I b層より黒くφ1~5cmの礫を少量混入。

II b②：黒褐色土 (Hae10YR2/2)。しまり良く粘性弱い。II層群の崩れた岩粒φ5cm前後の礫(積層)を混入。①(上層)と②(下層)に分解されるが、②の方がやや明るい。

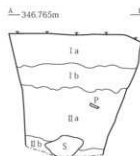
II c1：暗褐色土 (Hae7.5YR2/3)。しまり良く粘性強い。やや砂質。積層礫(φ5cm以下)と、岩石粒を少量混入。

II c2：暗褐色土 (Hae10YR3/2)。しまり良く粘性強い。やや砂質。積層礫(φ5cm以下)と、岩石粒を少量混入。

II c層はやや赤みと灰色をおびた層。(水成層の山裾の末端部か?)

II d：黒褐色土 (Hae10YR2/2)。しまり良く粘性強い。表層の下部の方が粘性が強く粘土質。

## P4 北壁



## 【P4】

## I 層群：表土層。

I a：黒褐色土 (Hae10YR3/2)。しまり悪く粘性弱い。

I b：暗褐色土 (Hae10YR3/2)。II a層をブロック状に少量含む。しまりはI a層より良く粘性弱い。

## II 層群：自然崩落土層(面平土の堆積層を含む)。

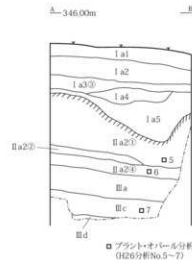
II a：黒褐色土 (Hae10YR2/2)。しまり良い(重機で掘るにも強い層)。φ1cm前後の赤褐色～白色風化礫(両方層で掘れる)を混入。粘性弱い。下部の方が礫が多い。遺物(土器)は含まれる?

II b：黒色土 (Hae10YR1/1)。II a層と同じくしまり良い。φ10cm前後の風化礫を多量に混入。人頭以上の大型礫(両方層では掘れない)も混入。

II b層群は人為的な埋戻し土。II層群は自然崩落による堆積土。

## (6) 低地部 (T15・18)

## T15 下段北壁



## 【T15】

※ T15, T15V1, T15V2

## I 層群：表土層。

I a1：暗褐色土 (Hae10YR3/2)。

I a2：黒色土 (Hae10YR1/4)。にびい・黄褐色粘土等をブロック状に混じる。

I a3①：暗褐色土 (Hae10YR3/2)。しまりあり。粘性弱い。

I a4：I a3層とI a5層の混土層。

I a5：黄褐色粘土 (Hae10YR5/6)。灰黄色 (Hae10YR8/2) 粘土と混じりになる。

## II 層群：自然崩落土層。

II a2①：黒褐色～黒色土 (Hae10YR2/2-2/1)。下部ほど濃い。

II a2②：黒褐色～暗褐色土 (Hae10YR2/2-2/3)。しまりあり。粘性あり。φ5~10cm大の礫を多く含む。

II a3①：黒色土 (Hae10YR1/1)。II a①層と類似。II a②との境界は不明瞭。

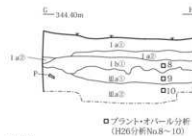
II a②：礫層。φ3~10cm 程度の礫が多い。灰褐色と黄褐色の粘土が混じった中に礫が多量に含まれる礫層。

II c①：黒色土 (Hae10YR1/1)。

II d①：灰黄色粘土 (Hae10YR6/1)。織造状の質を含む。

□ プラント・オーバー分析 (H26分析No.5~7)

## T18 北壁



□ プラント・オーバー分析 (H26分析No.8~10)

## 【T18】

I a①：暗褐色土 (Hae10YR3/2)。しまり悪く粘性弱い。礫付土。

I a②：灰黄色粘土 (Hae10YR4/2)。褐色のマンゴンの沈着あり。表土層付。

I b①①：I b②層に黒色粘土を混じる。山体からの岩粒や礫層(φ3cm前後)を混入。マンゴンの沈着あり。

II a①①：黒色土 (Hae10YR2/1)。山体からの岩粒や礫(φ1~10cm)を少量混入。

II a②①：黒色粘土 (Hae10YR1/1)。礫を含まない。

※ SQ01 は II a①層下部から II a②(上部)にかけて含まれていると思われる。型穴状態の可能性もあり。

P：土器

/////：明確な掘削面

0 (1.40) 1m

第107図 山裾部、低地部土層図

## 第5章 ねごや遺跡の調査

### 第1節 調査の概要

#### 1 調査の経緯と概要

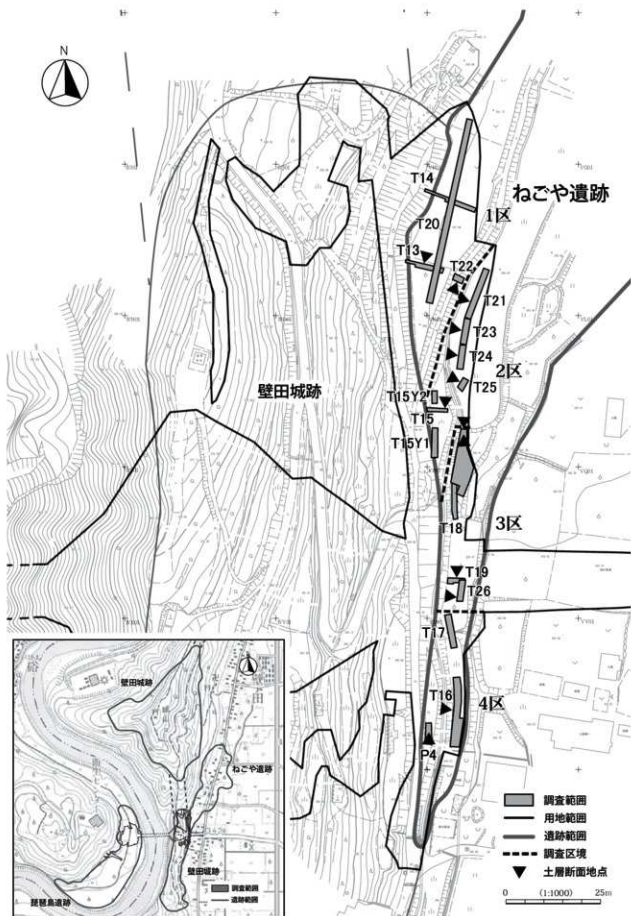
平成26・27年度の2か年にわたり発掘調査を実施した。平成26年度の調査では、壁田城跡として確認調査を実施し、山裾部と低地部から縄文時代、弥生時代、平安時代の土器が出土した。県教委と市教委との協議により、山裾部と低地部をねごや遺跡とし、従来のねごや遺跡の範囲を拡張することとなった(第108図)。調査地点は、ねごや遺跡の南端部にあたり、新田と呼ばれている地区である。近世以降に分村された地区であるとの地元住民の方から御教示いただいた。平成27年度は対象範囲を1～4区に分けて調査を実施した(第108図)。その結果、平安時代の土坑2基と遺物集中1か所を検出した。

調査はまず、トレンチで遺構・遺物の確認調査を行ない、遺構・遺物が確認された箇所を面的に広げることとした。なお、トレンチ番号は、平成26年度の壁田城跡からの通し番号とした。T13～19、P4が平成26年度、T20～26が平成27年度に調査したトレンチである。T15は人力で掘り下げ、他は重機により掘削して遺構・遺物の有無を確認した。

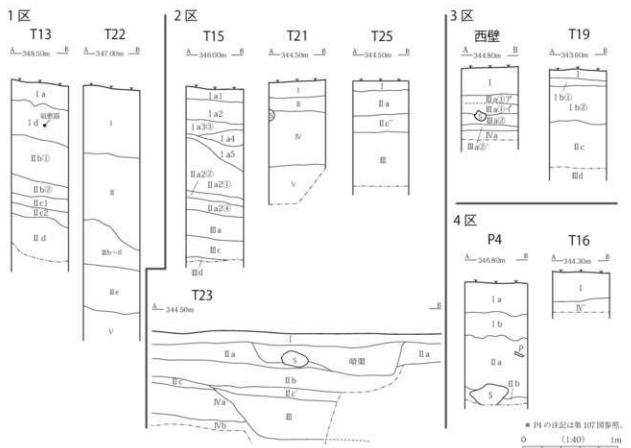
1区は山裾の平坦部で、T13の調査で縄文時代早期押型文土器1点と土師器破片が出土した。遺構の存在が予想されたため、平成27年度にT13に直交するT20の調査を行ない、土師器破片2点と内耳鍋と思われる小破片1点が出土したが、遺構は確認されなかった。平坦部に竅穴住居跡や、掘立柱建物跡などの遺構はないと判断し、1区の調査を終了した。

2区は低地部で、T21・23～25の5回に分けてトレンチ調査を行なった。表土から須恵器蓋の小破片が1点出土したのみで、遺構は確認できなかったため、調査を終了した。なお、現在は平坦であるが、地山は北側が高く、南に向かって低くなる。多量の自然木を含んだ粘土質の土で埋め立てられており、木材がほとんど腐植していないことから、2区の低地部は近代以降に埋め立てられたと判断した。平成26年度調査のT15では、摩耗した土師器破片が出土した。

3区は山裾部から低地部にかかる地区で、T18の北端部から須恵器と土師器の破片がまとめて出土したため、この箇所の約65㎡について面的調査を実施した。土坑2基(SK01-02)と遺物集中が1か所(SQ01)を調査したほか、自然流路1条(SD02)、暗渠と思われる溝5条(SD03～07)を確認した。SD03～07からの出土遺物は、SD03から土師器甕3点、近世の磁器1点、SD06から須恵器壺1点で、詳細な時期は不明である。調査区が地元住民の口伝のとおり近世以降に開かれた水田であるならば、それに関わる暗渠であると判断できる。いずれの溝跡も表土である1層が埋土であることから时期的に整合する。3区の地山は、南東側が段差をもって低くなっており、T18の南端部とT19では自然流路跡である砂礫層が堆積しており、かつては丘陵際に河川が流れていたことが確認できる。4区では丘陵際に流路跡が確認できないことから、河川は蛇行していたことが想定される。蛇行した河川が3区で丘陵に接し、東に流路を変え丘陵から離れる様子が想定できる。砂礫層から奈良・平安時代の須恵器が1点出土している。なお、T18の北壁の土壌をサンプルし、プラント・オパール分析を行なった。平安時代の遺物が出土したⅢ層からイネの植物珪酸体は検出されたが、安定した水田耕作を示すほどの数ではなく、水田が存在することを実証



第108図 ねごや遺跡全体図



## 【T13】

- I a : 暗褐色土 (Hae10YR3/3)。しまり悪く粘性弱い。耕作土。  
 I b : 黒色土 (Hae10YR2/2)。しまり悪く粘性弱い。  
 I d : ①: 黒色土 (Hae10YR2/1)。I d層より黒く、φ1~5cmの礫を少量含む。II b層との層相は不明瞭。  
 II b ①: 黒褐色土 (Hae10YR2/2)。地山の崩れた岩粒。φ5cm前後の積層層を含む。しまり良く粘性強い。正層に比べ2層の方がやや明るい。  
 II c1 : 暗砂褐色土 (Hae7.5YR2/3)。しまり良く粘性強い。やや砂質。φ5cm以下の積層層と岩石粒少量含む。  
 II c2 : 暗褐色土 (Hae10YR3/3)。しまり良く粘性強い。やや砂質。φ5cm以下の積層層と岩石粒少量含む。II c層はやや赤味と灰色をおくた水成層の0層の層部か？  
 II d : 黒褐色土 (Hae10YR2/2)。しまり良く粘性強い。表層の下部が粘性強く粘土質。

## 【T22】

- I : 黒褐色～暗褐色土 (Hae10YR3/3～3/2)。表土。  
 II a : 黒褐色土 (Hae10YR2/2)。しまり良く粘性強い。黄褐色岩粒を多く含む。φ5~10cm大の円礫を少量含む。  
 II b ~ d : 黒色土 (Hae10YR1/1)。T13のII層 (II b ~ II d層) に対応。  
 III a : 黒褐色土 (Hae10YR3/3～3/2)。黄褐色シルトブロックφ5cm大の円礫を含む。しまり良く下部は粘性強い。※ T21のIV層と同じ。  
 V : 黄褐色粘土 (Hae2.5Y4/1)。水成層。※ T23のIV層に対比される可能性あり。

## 【T15】

- I a1 : 暗褐色土 (Hae10YR3/3)。  
 I a2 : 黒色土 (Hae10YR4/4)。I a1より黄褐色粘土等をブロック状に混じる。  
 I a3 ① : 暗褐色土 (Hae10YR3/3)。しまり良く粘性強い。  
 I a4 : I a3層とI a5層の境界層。  
 I a5 : 黄褐色粘土 (Hae10YR3/6)。灰黄褐色 (Hae10YR3/2) 粘土と混雑になる。  
 II a2 ① : 黒褐色～黒色土 (Hae10YR2/2～2/1)。下部ほど黒い。  
 II a2 ② : 黒褐色～暗褐色土 (Hae10YR2/2～2/3)。しまり良く粘性強い。φ5~10cm大の礫を多く含む。  
 II a2 ③ : 黒色土 (Hae10YR2/1)。II a層と類似。II a層との層相は不明瞭。  
 III a : 礫層。φ3~10cm程度の円礫が多い。灰褐色と黄褐色の粘土が混じった中に礫が多量に含まれる礫層。  
 III c : 黒色粘土 (Hae10YR1/1)。  
 III d : 黄褐色粘土 (Hae10YR3/1)。繊維状の炭屑を含む。

## 【T21】

- I : 灰褐色土 (Hae7.5YR4/2)。耕作土。  
 II : 暗褐色土 (Hae7.5YR3/1)。しまり良く粘性やや強い。粒細かい。炭屑器出土。  
 IV : 暗灰色粘土層 (Hae7.5YR4/4)。砂～2cm大の礫を含む粘土層。所々大きな礫。層より白っぽい。黄褐色シルト。黄褐色粘土をブロック状に多量に含む粘土層で礫高土か？  
 V : 黒褐色土 (Hae10YR2/2)。円礫 (φ3cm大) を少量含む。灰色。黄褐色粘土層 (φ1cm) を少量含む (上部のみ)。下部は黄褐色粘土層 (φ1cm) を含む。水成層。

## 【T23】

- I : 灰褐色土 (Hae7.5YR4/2)。耕作土。  
 II a : 黒褐色シルト (Hae10YR3/1)。黄褐色・白色岩粒 (φ5mm以下) を含む。しまり良く粘性強い。  
 II b : 黒色シルト (Hae10YR2/1)。黄褐色・白色岩粒 (φ5mm以下) を含む。しまり良く粘性強い。  
 II c : I a1より黄褐色砂質シルト (Hae10YR3/3)。粘性強い。  
 II d : 褐色砂質シルト (Hae10YR2/2)。土質はII c層と層相が混じった状態であるが色は異なる。II c層との層相関係が不明瞭。  
 III : 黒色粘土 (Hae10YR1/1)。  
 IV a : T21のIV層と同じがT21の層部からT23にかけて粘性が強くなる。  
 IV b : 黒褐色土 (Hae10YR3/1)。IV a層と類似するがやや灰色～黒色が強く、粘性強い。

## 【T25】

- I : 灰褐色土 (Hae7.5YR4/2)。耕作土。  
 II a : 黒褐色シルト (Hae10YR3/1)。黄褐色・白色岩粒 (φ5mm以下) を含む。しまり良く粘性強い。  
 II c : 暗灰色砂質シルト。φ1cm大の岩粒 (褐色と灰色) を混じる。  
 III : 上部10cm程度は、黒褐色粘土層 (Hae10YR1/1)。下部は砂礫を含む。

## 【区西壁】

- I : 暗褐色土 (Hae10YR3/3)。しまり悪く粘性弱い。耕作土。  
 II a ① a : 黄色色粘土 (Hae10YR2/1)。φ1cm以下の礫・岩粒・シルト粒を含む。  
 II a ① a : 黒褐色粘土 (Hae10YR3/1)。IV a層類似の粘土・シルト粒を混じる。部分的に大きなIV a層ブロックを混じる。  
 II a ② : 黄褐色粘土 (Hae2.5Y3/1)。IV a層とII a ① a層 (黒色粘土) が混じる層。  
 II a ② : 黄褐色粘土 (Hae10YR2/1)。下表面がII a ② a層とIV a層が混じった。ブロック状は、II a ② a層より強い。  
 IV a : 黄褐色粘土～シルト (Hae2.5Y3/1)。

## 【T16】

- I : 暗褐色土 (Hae10YR3/3)。  
 II : 灰褐色細砂 (Hae2.5Y6/2) に礫や明褐色土ブロックが混じった山形の自然露出層。

## 【T19】

- I : 暗褐色土 (Hae10YR3/3)。しまり悪く粘性やや強い。耕作土。  
 I b ① : 暗灰色シルト (Hae10YR4/1)。  
 I b ② : 灰黄色シルト (Hae10YR4/2)。マンガン土沈着が著しい。  
 II c : 暗褐色砂質土 (Hae10YR3/3) と人跡大の礫が混じる礫層。礫層・砂層がブロック状に混じる。  
 III d : 褐色の礫層。

第109図 ねごと遺跡土層断面図

できなかつた。

4区はT16の西壁に平行して溝跡(SD01)を1条検出した。T16の東側現地形が段をなして下がっており、用地境の東側は、水成層が堆積する低地となっていることが想定される(第108図)。



調査対象区遠景(南東より)

## 2 基本土層(第108・109図)

1～4区の土層は異なっており、地区ごとに基本層序を定め、調査を行なった。ただし、全地区の層位を対応させるために、便宜的に以下のI層～V層に区分した。詳細は第108・109図参照。

I層：耕作土。表土。

II層：中世から近代の堆積層。2区では水成堆積層。

III層：縄文時代～平安時代の堆積層。2・3区では水成堆積層。

IV層：縄文時代より古い堆積層。無遺物層。2～4区では水成堆積層。

V層：丘陵部、山裾部の地山。または、低地部の粘土、シルト層の下の礫層。

## 第2節 遺構と遺物

### 1 遺構(第110・111図、PL32・33)

溝1条(SD01)、土坑2基(SK01・02)、遺物集中1か所(SQ01)が検出された。このほか、自然流路1条(SD02)と暗渠と思われる溝5条を確認した(SD03～SD07)。

#### SD01(第111図、PL32)

4区山裾部(T16)で、等高線に平行して確認された長さ8m、幅30～80cm、深さ1～21cmの溝跡で、V層上面で検出した。南側は調査区外に伸びており、北側は徐々に浅くなり途切れるが、さらに北側に伸びていたものと想定する。埋土から弥生時代後期の壺の口縁(第112図管理番号17)が2片出土した。2片は接合したが、小破片で器形復元はできない。遺構の時期は不明である。

#### SD02(第110図)

SQ01の調査終了後、3区北端部のIV層上面で検出した。等高線に直交する方向に延び、幅130～160cm、深さ3～14cm程度で、丘陵側が狭く、低地側が広い不整形な形状であることから自然流路と判断した。出土遺物はなく、自然木が出土した。基本土層III a層が埋土となる。

#### SD03～SD07(第110図)

3区のIII層上面で確認した。SD03の埋土は暗褐色土(I層)で、陶磁器が2点出土している。他の溝跡も類似した埋土であることから近世以降の溝跡であると判断した。SD04は扁平な楕円礫を溝の両側縁に配している。他の溝跡には特別な構造物はない。

#### SQ01(第111図、PL33)

3区のIII a層中で検出した遺物集中である。土師器と須恵器の破片325点(総重量約3.1kg)が出土した(第112図1～5、7～9)。点数は多いが、1～2cm角程度の小破片も100点前後含まれている。12m×3mの範囲に遺物が分布し、密度が高いところが2か所にみられるため、北側をSQ01a、南側をSQ01bとし

た。SQ01aは須恵器坏・壺、土師器坏、甕、小形甕などととも、弥生後期土器の小破片が1点出土した。SQ01bは土師器甕が主体で、地形が落ちこむ斜面にそって高低差をもって出土した。SQ01aとSQ01bの間での接合関係は確認できなかった。

遺物はⅢ a ①層上面からⅢ b ②層下部にかけて出土した。比較的残存率の高い黒色土器 A 坏 (第112図1) がⅢ a ②層下部で出土しており、本来、遺物はⅢ b ②層に包含されていたものが巻き上げられて、高低差をもって出土したと想定できる。1点の弥生時代後期の土器片を除き、そのほかはいずれも平安時代前半の9世紀代のものと考えられ、SQ01aとSQ01bは同時期のものと判断した。

Ⅲ a ②層は粘土層で下面是部分的に耕作痕のような乱れが確認されている (第110図断面写真)。イネ属のプラント・オパールが検出されているが検出量が少なく、水田であることを立証するには至らなかったが、調査区の東側の低地に平安時代の水田跡が存在する可能性がある。プラント・オパールの分析結果の詳細は添付DVDに分析報告書を収録したので参照されたい。

#### SK01・02 (第111図)

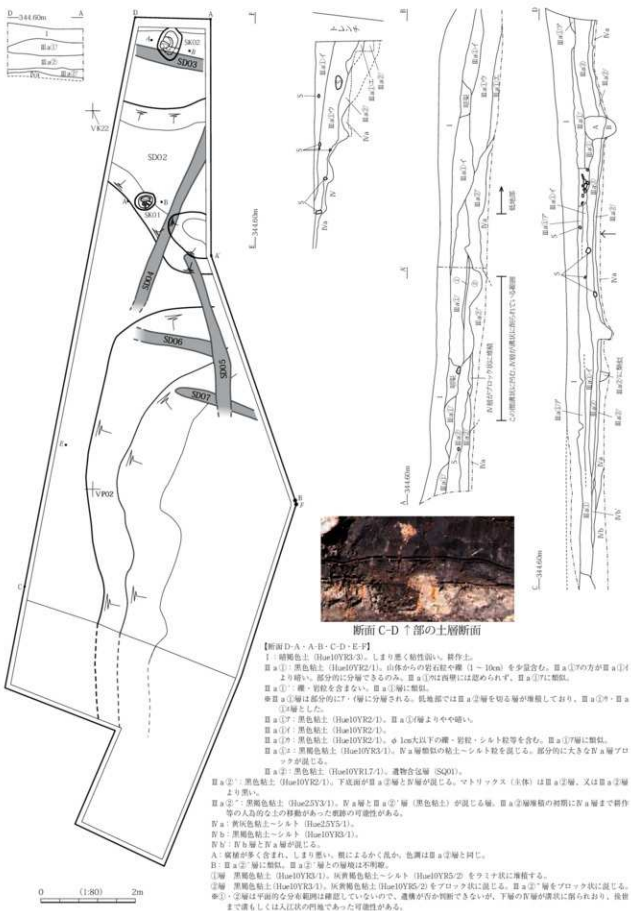
3区のⅣ層上面で検出した。SK01は40cm×50cm、深さ40cmの円形の土坑である。底面に拳大の礫が4点出土しており、柱穴の可能性がある。SK02は70cm×50cm、深さ40cmの楕円形の土坑である。土器は出土しなかったが、埋土中に10cm大の礫が1点あった。SK01とSK02は一連の掘立柱建物跡の可能性もあるが、SK02の南側に土坑は確認されず、調査区内の土坑のみでは掘立柱建物跡であるかどうか判断できなかった。

SK01からSQ01と同類の土師器甕の破片1点が出土した。SQ01の下層で確認された遺構で、埋土はいずれもⅢ a ②層に類似する。SQ01と同時期もしくは近い時期と判断した。



3区完掘状況 (南より)

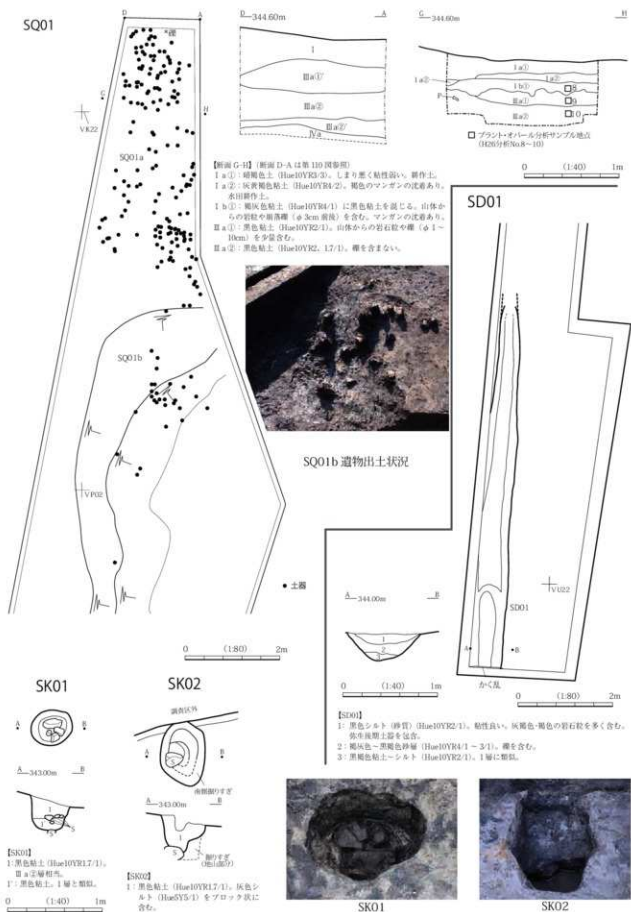




断面 C-D ↑部の土層断面

【断面 D-A・A-B・C-D・E-F】  
 ①：暗褐色土 (Hae10YR3/3)。しまり悪く粘性強い。耕作土。  
 Ⅱa①：黒色粘土 (Hae10YR2/1)。山体からの岩石粒や礫 (1~10cm) を少量含む。Ⅱa①の層がⅡa②より薄い。部分的に分層であるのみ。Ⅱa①②は西側には認められず。Ⅱa①②に類似。  
 Ⅱa①②：礫・岩粒を含まない。Ⅱa①層に類似。  
 ※Ⅱa①②層は部分的に7・9層に分層される。筑地部ではⅡa①層を切る層が埋積しており、Ⅱa①②・Ⅱa①④層とした。  
 Ⅱa①④：黒色粘土 (Hae10YR2/1)。Ⅱa①④層よりやや硬い。  
 Ⅱa①⑤：黒色粘土 (Hae10YR2/1)。  
 Ⅱa①⑥：黒色粘土 (Hae10YR2/1)。φ 1cm以下の礫・岩粒・シルト粒を含む。Ⅱa①⑦層に類似。  
 Ⅱa①⑦：黒褐色粘土 (Hae10YR3/1)。N a層類似の粘土-シルト粒を混じる。部分的に大きなN a層プロックが混じる。  
 Ⅱa①⑧：黒色粘土 (Hae10YR1.7/1)。遺物を含む (SQ01)。  
 Ⅱa①⑨：黒色粘土 (Hae10YR2/1)。下底面がⅡa①層と互層が混じる。マトリックス (主体) はⅡa①層。又はⅡa①⑨層より厚い。  
 Ⅱa①⑩：黒褐色粘土 (Hae2.5Y3/1)。N a層とⅡa①⑨層 (黒色粘土) が混じる層。Ⅱa①⑩層埋積の初期にN a層まで耕作等の人為的な土の移動があった痕跡の可能性ある。  
 N a：黄褐色粘土-シルト (Hae2.5Y5/1)。  
 Ⅱb：黒褐色粘土-シルト (Hae10YR3/1)。  
 Ⅱb①：Ⅱb層とⅡa層が混じる。  
 A：礫が多く含まれ、しまり悪い。礫によるかき出し、色調はⅡa①層と同じ。  
 B：Ⅱa①②層に類似。Ⅱa①②層の層厚は不明。  
 ①層 黒褐色粘土 (Hae10YR3/1)。灰褐色粘土-シルト (Hae10YR5/2) をワミナ状に埋積する。  
 ②層 黒褐色粘土 (Hae10YR3/1)。灰褐色粘土 (Hae10YR5/2) をブロック状に混じる。Ⅱa①②層をブロック状に混じる。  
 ※①・②層は平面的な分布範囲は確認していないので、遺構が否か判断できないが、下層の互層が確認に前倒れしており、後世まで最もしくは入江状の凹地であった可能性ある。

第110図 3区遺構配置図



第111図 遺構図

2 遺物 (第112図、第14表)

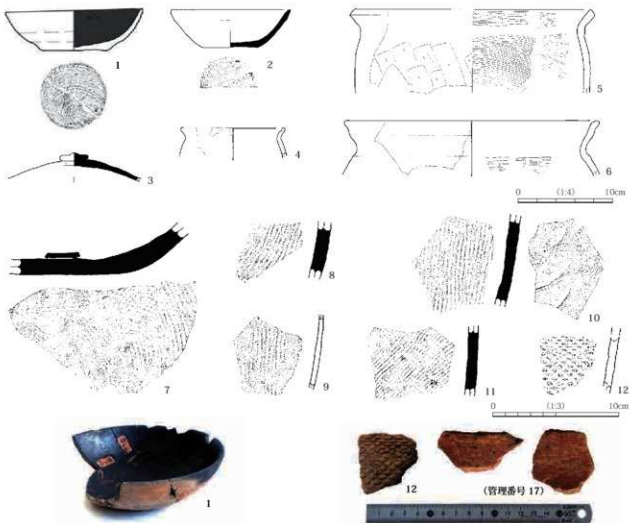
各トレンチの出土遺物は第14表に示した。

1は黒色土器Aの坏で、底部は回転糸切り。完形に近い状態で出土した。2は須恵器坏で、底部は回転糸切りである。3は須恵器坏蓋のツマミ部～身部破片で、天井部回転ヘラケズリが見られる。4は土師器小形甕口縁である。口縁内面端部に肥大部がある。内外面とも回転ヨコナデ。5・6は土師器甕口縁である。7は須恵器甕底部である。外面にタタキ目があり、内面にハケ調整が認められ、須恵器坏蓋の破片が付着する。8・10・11は外面タタキ目の須恵器甕である。10・11は内面に当て具痕が認められる。9はタタキ目とケズリが認められる土師器甕の胴部破片である。12は縄文時代早期の密接施文の楕円型文の深鉢である。

6は1区T20、10は4区P4、12は1区T13で出土し、その他は3区SQ01の遺物である。

第14表 トレンチ出土土器数

地区名	トレンチ名	出土土器
1区	T13	4点 (土師器・須恵器)
	T14	なし
	T20	5点 (黒色土器A・内耳土器)
	T22	なし
2区	T15	1点 (磁器)
	T15Y1	1点 (土師器)
	T15Y2	1点 (土師器)
	T21	1点 (須恵器)
	T23	3点 (弥生土器・土師器)
	T24	なし
3区	T25	なし
	T18	23点 (須恵器・土師器・黒色土器A)
	T19	1点 (須恵器)
	T26	なし
4区	P4	2点 (土師器・須恵器)
	T16	3点 (弥生土器・土師器・須恵器)
	T17	なし



第112図 出土遺物

### 第3節 小 結

遺跡の中心は遺跡範囲変更前の範囲、すなわち現在の集落の部分であると想定される。「ねごや」は、山城に関わる地名として東日本の各地に残されている。『国史大辞典』（吉川弘文館）によると、「戦国時代に山城の麓に置かれた城兵の居住区域ないし集落をいう。」とある。隣接する壁田城跡に関わる遺跡であることは想像に難くない。

今回の調査はねごや遺跡の南端部で、発掘では中世の遺物は内耳鍋と思われる小破片が3点出土したのみで、「ねごや」の地名から想定される中世の遺構は確認されなかった。遺物は少ないが、その大半は平安時代前半期のもので、3区のシルト・粘土層などの水成層から出土している。プラント・オパール分析では水田土壌の存在は確認できなかったが、調査区の東側には低地が広がっており、平安時代の水田跡が存在する可能性がある。

今回の発掘調査の成果から、ねごや遺跡には平安時代の集落跡が残されている可能性を考慮する必要がある。

また、縄文時代早期押型文土器片が出土した。中野市内では押型文土器がまとまって出土する遺跡は、今のところ確認されていない。1点ではあるが貴重な資料である。

#### 引用・参考文献

国史大辞典編集委員会 1990『国史大辞典 11』吉川弘文館

中野市教育委員会 2014『長野県中野市遺跡詳細分布図（改訂版）』



3区調査風景（南より）

## 第6章 科学分析

### 第1節 科学分析の概要

琵琶島遺跡では、C14年代測定、珪藻・花粉分析、炭素・窒素安定同位体比および総炭素量・総窒素量分析、レプリカ法による土器の施文具圧痕の推定を業務委託で実施した。

また、ねごや遺跡では低地部の水田の存否または可能性を探ることを目的としたプラント・オパール分析を行なった。

本章では主に試料採取地点No.を用いて記述している。第15表に併記された委託業者が分析報告書で用いている試料名(分析番号)は、該当する遺構図・遺物図、遺構観察表・遺物観察表に示した。分析報告の詳細は、添付DVDに記録した。なお、鉄製品の応急的保存処理業務委託についても添付DVDに報告書を取録した。

### 第2節 C14年代測定

#### 1 試料採取地点(第113図、第15表)

遺構内26点、遺構外8点の計34点の試料を対象とした。

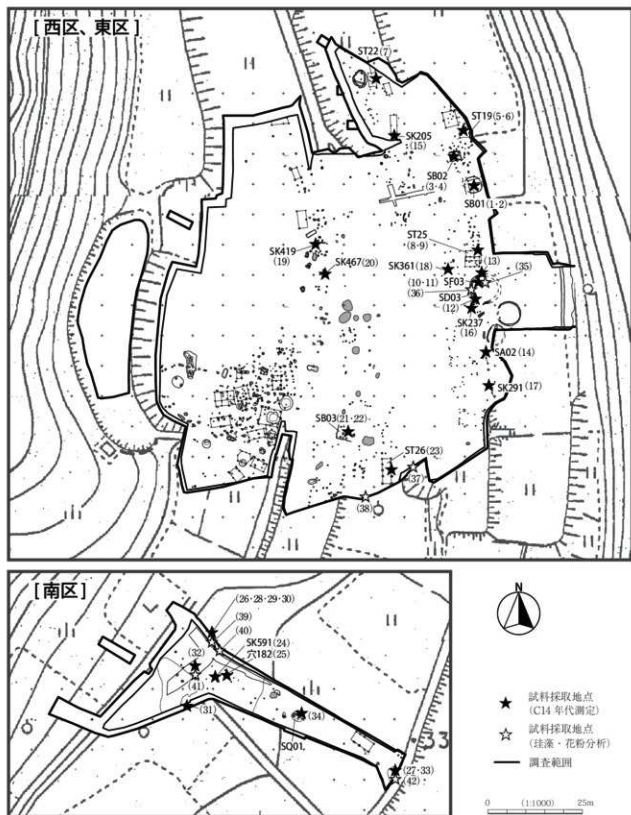
竪穴住居跡SB01の試料採取地点No.(以下同じ)(1)は炉跡の東側、Pit5北東側の床面よりやや上から採取した炭化材、(2)は炉跡内の小Pit2-2埋土内のものである。本跡は市教委の確認調査によって掘削

第15表 科学分析試料採取地点一覧

分析内容	C14年代測定																	
分析年度	1124年度																	
分析機関	舞加遺跡分析研究所																	
試料採取地点	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)	(11)	(12)	(13)	(14)	(15)	(16)	(17)	
試料採取地点	SB01 c	SB01 Pit2-2	S002	S002 Pit4	ST19 Pit2	ST19 Pit6	ST22 Pit3	ST25 Pit4	ST25 Pit4	SF02 炭化物 2-1	SF03 炭化物 3-1	S003 a 人口付近	S003 Pit3 (幸)	SA02 Pit1	SK205	SK207	SK209	
分析試料%	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	
分析内容	C14年代測定																	
分析年度	1124年度															1125年度		1126年度
分析機関	舞加遺跡分析研究所																	
試料採取地点	(18)	(19)	(20)	(21)	(22)	(23)	(24)	(25)	(26)	(27)	(28)	(29)	(30)	(31)	(32)	(33)	(34)	
試料採取地点	SK361	SK419	SK467	S003 (幸)	S003 (幸)	ST26 Pit4	SK391	穴182	北塚 トレンテ	黒102 土器集 中	北塚	北塚	北塚 沢沢地 形	東塚 (東) [B] [C]	北塚 南西 トレンテ [B] [C]	東塚	S001 遺F18-16b	
分析試料%	18	19	20	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	1	
分析内容	珪藻・花粉分析																	
分析年度	1124年度																	
分析機関	パノマサーヴェイ株式会社																	
試料採取地点	(35)	(36)	(37)	(38)	(39)	(40)	(41)	(42)										
試料採取地点	S003 Pit1 (幸)	S003	黒C区 南塚	黒C区 南塚	北塚2	北塚4	北塚-南西 トレンテ1 [B] [C]	東塚 (東) [B] [C]										
分析試料%	1	2, 3	1, 2, 3	4	5~15	16	17~23	24~28										
分析内容	プラント・オパール分析																	
分析年度	1126年度																	
分析機関	パノマサーヴェイ株式会社																	
試料採取地点	(43)	(44)	(45)															
試料採取地点	T14	T15	T18															
分析試料%	1~4	5~7	8~10															

(幸)分析後、S003 Pit1 SK209、Pit3 SK314として報告、S003 Pit2近辺炉跡の掘込みに変更。

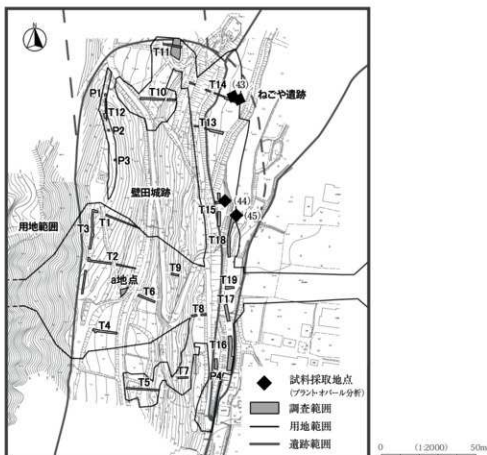
\* プラント・オパール分析はE2や遺構分。



第113図 琵琶島遺跡 科学分析試料採取地点

されており、埋土が完全に残存していたのは北壁際と Pit8 付近の僅かな部分であった。一方、炉跡は南側が掘削されていたものの小 Pit2-2 にまでは及んでいなかった。したがって、(1) は本跡に伴うとは言い難いが、(2) は本跡に伴うと考えられる。

竪穴住居跡 SB02 の (3) は炉跡の周辺に広がる炭化物の集中箇所から採取し、(4) は棟持柱の穴と想定



第114図 ねごや遺跡 プラント・オパール分析試料採取地点

した Pit4 の埋土中部から出土したものである。Pit4 内の炭化物は、本跡廃絶以降に混在したものであろう。

掘立柱建物跡 ST19 の (5) は Pit2 の埋土下部から、(6) は柱痕跡埋土の上部から採取した。(5) が柱痕跡下部の掘方埋土にあったならば本跡に伴う可能性は高くなるが、柱痕跡の埋土か掘方かは不明である。また、(6) は Pit6 柱痕跡上部のため本跡廃絶後に流れ込んだ炭化物と考えられる。

掘立柱建物跡 ST22 の (7) は、Pit3 埋土 1 層から採取している。埋土 2 層が溜まった後、堆積した 1 層とともに流れ込んだ炭化物であろう。

掘立柱建物跡 ST25 の (8)・(9) はいずれも柱穴埋土中から採取しているが、本跡はすべての柱穴で柱痕跡と掘方の分層は困難だった。それは柱の除却に伴い柱穴内の土が動かされたことに起因すると考えられる。よって、(8)、(9) は本跡廃絶以降に混在したものであろう。

掘立柱建物跡 ST26 の (23) は Pit4 の底面近くにあった礎板状の平石上部の埋土中から採取した。埋土内を柱痕跡と掘方で分層することはできなかったため、ST25 の試料と同じ理由で、本跡廃絶以降に混在した可能性がある。

周溝跡 SD03 の (12) は周溝埋土 2 層から採取した。周溝の埋土は周辺土壌が流入して自然堆積したとみられる堆積状況を示している。2 層と 1・3 層との間に明らかな層界面や土質の違いを認めることはできなかった。したがって、本試料は周溝掘削後から埋没までの間に流入したと考えられる。

柵跡 SA02 の (14) は Pit1 の 2 層上面から採取した。2 層は柱穴の掘方埋土であるが、上面がそれに含まれるか否かは微妙である。

遺物集中 SQ01 の (34) は同遺構から出土した麩胴部破片の表面付着炭化物から採集した。胴部に櫛描縦羽状文が施されている等から栗林 1 式に比定できる。同遺構では土器が 1 層上部にまとまるが遺棄され

第16表 C14年代測定結果一覧

試料採取地点No	分析年度	試料名 採取箇所	試料形態	$\delta^{13}\text{C}$ 修正あり Libby Age(年BP)	暦年較正年代( cal)	相対比	遺構の時期	測定番号	
(1)	H24	1 (ARJ No.20) 5001 c 埋土	炭化材	2210 ± 30	1 $\sigma$	339caBC - 343caBC 234caBC - 286caBC 236caBC - 242caBC 236caBC - 205caBC	0.093 0.291 0.090 0.209	弥生中期	IAAA-122112
					2 $\sigma$	289caBC - 199caBC	0.954		
(2)	H24	2 (ARJ No.21) 5001 p&2 c 埋土上面	炭化材	2290 ± 30	1 $\sigma$	398caBC - 364caBC 402caBC - 356caBC 297caBC - 233caBC	0.682 0.731 0.223	弥生中期	IAAA-122113
					2 $\sigma$	387caBC - 357caBC 285caBC - 234caBC	0.298 0.384		
(3)	H24	3 (ARJ No.41) 5002 埋土	炭化材	2250 ± 30	1 $\sigma$	393caBC - 350caBC 306caBC - 209caBC	0.363 0.591	弥生中期	IAAA-122114
					2 $\sigma$	383caBC - 356caBC 296caBC - 234caBC	0.251 0.431		
(4)	H24	4 (ARJ No.70) 5002 p&4 中層	炭化物	2250 ± 30	1 $\sigma$	391caBC - 348caBC 315caBC - 208caBC	0.318 0.636	弥生中期	IAAA-122115
					2 $\sigma$	373caBC - 352caBC 296caBC - 228caBC 221caBC - 211caBC	0.135 0.481 0.060		
(5)	H24	5 (ARJ No.1) 5T19 p&2 下部	炭化材	2230 ± 30	1 $\sigma$	386caBC - 342caBC 325caBC - 304caBC	0.225 0.729	弥生中期	IAAA-122116
					2 $\sigma$	354caBC - 291caBC 231caBC - 197caBC	0.473 0.209		
(6)	H24	6 (ARJ No.2) 5T19 p&6 中央上面(柱敷跡)	炭化物	2180 ± 30	1 $\sigma$	381caBC - 272caBC 283caBC - 173caBC	0.566 0.388	弥生中期	IAAA-122117
					2 $\sigma$	295caBC - 253caBC 249caBC - 247caBC	0.372 0.310		
(7)	H24	7 (ARJ No.7) 5T22 p&3 埋土上面	炭化物	3980 ± 30	1 $\sigma$	237caBC - 240caBC	0.954	弥生中期	IAAA-122118
					2 $\sigma$	353caBC - 294caBC 230caBC - 218caBC 213caBC - 192caBC	0.471 0.063 0.148		
(8)	H24	8 (ARJ No.28) 5T23 p&3 埋土	炭化物	2180 ± 30	1 $\sigma$	361caBC - 271caBC 284caBC - 168caBC	0.546 0.408	弥生中期	IAAA-122119
					2 $\sigma$	336caBC - 314caBC 224caBC - 280caBC 236caBC - 243caBC 236caBC - 205caBC	0.092 0.293 0.085 0.212		
(9)	H24	9 (ARJ No.29) 5T25 p&4 埋土	炭化物	2210 ± 30	1 $\sigma$	367caBC - 200caBC	0.954	弥生中期	IAAA-122120
					2 $\sigma$	782caAD - 789caAD 810caAD - 848caAD 855caAD - 865caAD 926caAD - 936caAD	0.046 0.259 0.329 0.039		
(10)	H24	10 (ARJ No.18) 5003 炭化物2-I	炭化材	1170 ± 30	1 $\sigma$	777caAD - 900caAD 918caAD - 902caAD	0.787 0.167	平安	IAAA-122121
					2 $\sigma$	784caAD - 767caAD 826caAD - 841caAD 862caAD - 900caAD 918caAD - 962caAD	0.015 0.080 0.294 0.294		
(11)	H24	11 (ARJ No.21) 5003 炭化物2-II	炭化材	1150 ± 30	1 $\sigma$	779caAD - 793caAD 803caAD - 905caAD 912caAD - 970caAD	0.050 0.555 0.349	平安	IAAA-122122
					2 $\sigma$	285caBC - 356caBC 286caBC - 234caBC	0.263 0.419		
(12)	H24	12 (ARJ No.52) 5003 d(人0付2) 埋土2層	炭化物	2250 ± 30	1 $\sigma$	292caBC - 349caBC 312caBC - 208caBC	0.329 0.625	弥生中期	IAAA-122123
					2 $\sigma$	782caAD - 790caAD 810caAD - 892caAD	0.035 0.627		
(13)	H24	13 (ARJ No.54) 5003 p&3 埋土底層 (分析後SK514として報告)	炭化物	1170 ± 30	1 $\sigma$	776caAD - 900caAD 918caAD - 951caAD	0.054 0.100	平安	IAAA-122124
					2 $\sigma$	339caBC - 337caBC 321caBC - 317caBC 310caBC - 312caBC	0.193 0.257 0.232		
(14)	H24	14 (ARJ No.27) 5AR2 p&1 2層	炭化物	4540 ± 30	1 $\sigma$	338caBC - 338caBC 330caBC - 328caBC 327caBC - 326caBC 324caBC - 319caBC	0.250 0.019 0.028 0.638	弥生中期	IAAA-122125
					2 $\sigma$	349caBC - 317caBC 298caBC - 165caBC 127caBC - 124caBC	0.240 0.429 0.013		
(15)	H24	15 (ARJ No.5) SK205 埋土	炭化物	2150 ± 30	1 $\sigma$	355caBC - 398caBC 252caBC - 101caBC	0.326 0.628	平安	IAAA-122126
					2 $\sigma$	782caAD - 790caAD 810caAD - 892caAD	0.035 0.627		
(16)	H24	16 (ARJ No.8) SK227 埋土上面 北側	炭化材	1170 ± 30	1 $\sigma$	776caAD - 900caAD 918caAD - 951caAD	0.054 0.100	平安	IAAA-122127
					2 $\sigma$	4942caBC - 4911caBC 4905caBC - 3982caBC	0.394 0.288		
(17)	H24	17 (ARJ No.15) SK201 2層中層	炭化物	5220 ± 30	1 $\sigma$	4220caBC - 4213caBC 4152caBC - 4135caBC 4056caBC - 2963caBC	0.009 0.022 0.924	縄文	IAAA-122128



試料採取 地点No.	分析年度	試料名 採取場所	試料形態	$\alpha$ $^{13}\text{C}$ 補正後の Libby Age(yrBP)	暦年齢正年代(cal)	相対比	遺構の時期	測定番号	
(18)	H24	18 (ARJ No.67) SK61 2層	炭化物	1140 ± 30	1 $\sigma$	885calAD - 903calAD 916calAD - 968calAD	0.165 0.517	平安	IAAA-122129
					2 $\sigma$	783calAD - 788calAD 815calAD - 844calAD 859calAD - 983calAD	0.009 0.052 0.893		
(19)	H24	19 (ARJ No.72) SK419 埋土深底	炭化物	2250 ± 30	1 $\sigma$	386calBC - 356calBC 286calBC - 234calBC	0.276 0.406	弥生中期	IAAA-122130
					2 $\sigma$	393calBC - 346calBC 310calBC - 299calBC	0.345 0.669		
(20)	H24	20 (ARJ No.73) SK67 埋土上面	炭化物	2300 ± 30	1 $\sigma$	491calBC - 374calBC	0.682	弥生中期	IAAA-122131
					2 $\sigma$	496calBC - 357calBC 284calBC - 256calBC 246calBC - 235calBC	0.853 0.081 0.019		
(21)	H25	1 (ARJ No.2) 3003 へそ内 埋土	炭化材	140 ± 30	1 $\sigma$	1679calAD - 1697calAD* 1726calAD - 1765calAD* 1800calAD - 1814calAD* 1836calAD - 1877calAD* 1911calAD - 1930calAD*	0.099 0.202 0.075 0.179 0.128	古世	IAAA-131172
					2 $\sigma$	1669calAD - 1709calAD* 1713calAD - 1781calAD* 1797calAD - 1890calAD* 1919calAD - 1945calAD*	0.160 0.283 0.348 0.163		
(22)	H25	2 (ARJ No.3) SK03 床下	炭化材	140 ± 30	1 $\sigma$	1681calAD - 1698calAD* 1724calAD - 1763calAD* 1802calAD - 1816calAD* 1834calAD - 1876calAD* 1911calAD - 1930calAD*	0.096 0.179 0.073 0.212 0.122	古世	IAAA-131173
					2 $\sigma$	1671calAD - 1779calAD* 1798calAD - 1891calAD* 1909calAD - 1943calAD*	0.435 0.382 0.156		
(23)	H25	3 (ARJ No.4) SK26 pH4 埋土	炭化材	3730 ± 30	1 $\sigma$	2196calBC - 2170calBC 2147calBC - 2128calBC 2089calBC - 2047calBC	0.206 0.148 0.328	弥生中期	IAAA-131174
					2 $\sigma$	2202calBC - 2111calBC 2105calBC - 2036calBC	0.533 0.421		
(24)	H25	4 (ARJ No.7) SK591 埋土上面	炭化材	3730 ± 30	1 $\sigma$	2198calBC - 2166calBC 2151calBC - 2113calBC 2086calBC - 2050calBC	0.262 0.181 0.263	弥生中期	IAAA-131175
					2 $\sigma$	2296calBC - 2033calBC	0.954		
(25)	H25	5 (ARJ No.8) 穴182 埋土	炭化物	3620 ± 30	1 $\sigma$	2029calBC - 1948calBC	0.682	縄文	IAAA-131176
					2 $\sigma$	2119calBC - 2096calBC 2040calBC - 1900calBC	0.044 0.910		
(26)	H25	6 (ARJ No.17) 北塚トレンチ 10-1層	炭化材	9140 ± 30	1 $\sigma$	8422calBC - 8466calBC 8380calBC - 8382calBC 8349calBC - 8287calBC	0.079 0.035 0.567	弥生中期	IAAA-131177
					2 $\sigma$	8453calBC - 8282calBC	0.954		
(27)	H25	7 (ARJ No.18) 田.02 土器墓中埋土	炭化材	2210 ± 30	1 $\sigma$	357calBC - 344calBC 324calBC - 282calBC 257calBC - 244calBC 236calBC - 205calBC	0.087 0.294 0.076 0.223	弥生中期	IAAA-131178
					2 $\sigma$	362calBC - 201calBC	0.954		
(28)	H25	8 (ARJ No.20) 北塚 墓C層上部	炭化物	3860 ± 30	1 $\sigma$	2562calBC - 2535calBC 2493calBC - 2462calBC	0.250 0.432	縄文	IAAA-131179
					2 $\sigma$	2571calBC - 2514calBC 2502calBC - 2435calBC 2421calBC - 2403calBC 2389calBC - 2319calBC	0.345 0.517 0.936 0.026		
(29)	H25	9 (ARJ No.19) 北塚 墓I層上部	炭化物	280 ± 30	1 $\sigma$	1669calAD - 1679calAD** 1939calAD - ...	0.176 0.164	古世	IAAA-131180
					2 $\sigma$	1651calAD - 1684calAD** 1735calAD - 1806calAD** 1933calAD - ... **	0.246 0.510 0.198		
(30)	H25	10 (ARJ No.24) 北塚、段状地形 10層	炭化材	9240 ± 30	1 $\sigma$	8454calBC - 8504calBC 8493calBC - 8415calBC 8403calBC - 8394calBC 8373calBC - 8351calBC	0.206 0.338 0.038 0.101	縄文	IAAA-131181
					2 $\sigma$	8501calBC - 8325calBC	0.954		
(31)	H25	11 (ARJ No.25) 東塚(目BC) 墓C層上部	炭化物	3880 ± 30	1 $\sigma$	2454calBC - 2419calBC 2407calBC - 2376calBC 2351calBC - 2299calBC	0.200 0.186 0.297	縄文	IAAA-131182
					2 $\sigma$	2466calBC - 2286calBC	0.954		
(32)	H25	12 (ARJ No.29) 北塚 - 南西トレンチ(目BC) 10-1層	炭化物	9180 ± 30	1 $\sigma$	8432calBC - 8369calBC 8435calBC - 8385calBC	0.370 0.312	縄文	IAAA-131183
					2 $\sigma$	8531calBC - 8517calBC 8478calBC - 8294calBC	0.022 0.932		
(33)	H25	13 (ARJ No.128) 東塚 墓層	炭化材	Modern			弥生中期	IAAA-131184	
(34)	H26	1 (ARJ No.402) SK01 埋土 即P18-16b	土器外面付 炭化物	2,190 ± 20	1 $\sigma$	394calBC - 291calBC 232calBC - 202calBC	0.472 0.219	弥生中期	IAAA-141385
					2 $\sigma$	361calBC - 192calBC	0.954		

\*Warning! Date may extend out of range / \*Warning! Date probably out of range \*\*Warning! Date may extend out of range

たか廃棄したものか、後者の場合の回数について判断は難しい。

土坑 (SK) の試料はすべて埋土から採取しており、いずれも土坑に直接伴うものではない。

焼土跡 SF03 の (10)・(11) は明確な掘込みがない焼土ブロックの集積から出土した、長さ 40cm 前後、幅 10cm 前後の炭化材から採取した 2 点である。

その他遺構外の試料の採取地点は第 113 図を参照されたい。

## 2 分析結果と所見 (第 16 表)

栗林 1 式の甕表面付着炭化物から年代測定を行なった (34) の 1 の暦年較正年代は 354calBC-291calBC (47.2%)、232calBC-202calBC (21.0%) という値を得た。また、堅穴住居跡に伴う可能性が高い (2) は 398calBC-364calBC (68.2%)、(3) が 285calBC-234calBC (38.4%)、387calBC-357calBC (29.8%) で、2 軒の堅穴住居跡からは栗林 1 式土器が出土している。

この結果と栗林 2 式土器を中心とする南大原遺跡における C14 年代測定値とを比較すると、およそ紀元前 200 年で明確に分かれる (第 115 図)。したがって、石川編年 (石川 2002) における栗林 1 式土器の



(長野県埋蔵文化財センター 2016 : 第 6 章より転載、一部改変)

第 115 図 琵琶島・南大原遺跡の弥生時代中期後半の暦年較正年代

年代は、暦年較正年代で概ね 400calBC ~ 200calBC にあたる (註1)。第 115 図は、1 標準偏差 ( $1\sigma = 68.2\%$ ) の値をグラフで示した。濃い部分がより確率の高い年代値で、薄い部分が確率の低い年代値である。確率が 10% 未満のものは表示していない。

なお、焼土跡 SF03 は検出状況から見て、斜面上部にあった遺構が削平され焼土及び炭化材が再堆積した可能性があるため、(10)、(11) の示す年代が焼土ブロックおよび出土土器を示すかどうかは慎重にならざるを得ない。

また、これ以外の遺構採取試料 (5) ~ (9) および (12) ~ (20) は、遺構の埋没過程で流入した炭化物である。遺構の年代を試料が示す年代以前と考えたいが、遺跡内に滞留していた炭化物が流れ込んだ可能性もあるため、これらの埋土試料をもって遺構年代を判断するわけにはいかない。

今回の年代測定は、弥生時代中期後半と平安時代の遺構・遺物の年代を知るために行なったが、試料に選定した炭化材・物の出土状態に対する配慮や記録を欠いていたため、目的の多くを達することができなかった。今後の調査における反省点としたい。

### 第3節 炭素・窒素安定同位体分析

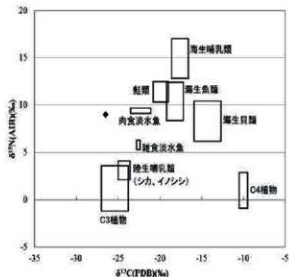
遺物集中 SQ01 から出土した髑髏部破片の表面に付着した炭化物 1 点 (34) を対象にした。その結果は第 17 表および第 116 図のとおりで、「炭素・窒素安定同位体比と C/N 比に基づく検討により、試料が複数の食物の混合物であることが示唆された」との報告を受けた。

1 点の試料で食に関する生活環境の復元を行なうことは、危険かつ困難であることを改めて理解することができた。

第 17 表 炭素・窒素安定同位体比および含有量

試料名	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (MASS)	$\delta^{15}\text{N}$ (‰) (MASS)	C 含有量 (%)	N 含有量 (%)	C/N 重量比	C/N モル比
1 (ABJ No.402)	-26.5	9.01	65.4	1.46	44.9	32.4

\* 第 17 表に結果を示した炭素と窒素の安定同位体比および含有量の測定は、SI サイエンス株式会社の協力を得て行った。



◆は測定試料。散布図上に表示した枠は、食料資源の同位体比の分布範囲を示す。Yoneda et al. 2004 に基づき作成した。

第 116 図 炭素・窒素安定同位体比グラフ (参考)

## 第4節 珪藻・花粉分析、プラント・オパール分析

### 1 試料採取地点と分析結果（第113・114図、第15・18表）

珪藻・花粉分析は、琵琶島遺跡の遺構内2か所3点、遺構外6か所28点の計31点の試料を対象とした。プラント・オパール分析はねごや遺跡（壁田城跡として調査）の3トレンチの土層断面採取土壌10点の試料を対象とした。

琵琶島遺跡の周溝跡SD03の周溝内側にあるPit1(35)埋土、西側周溝(36)の埋土2・3層では珪藻化石は検出されず、東区土層断面(37)Ⅲ層、南区土層断面(39)Ⅱ層・(42)Ⅰ・Ⅱ層で陸生珪藻が検出された。SD03は珪藻化石の産状による湛水状況（堆積環境）の推定を行なうことはできないが、化石が堆積後の続成作用によって完全に分解消失するような陸域における好氣的環境下にあったと考えられ、常に湛水しているような状態ではなかったと推定された。東区(37)Ⅲ層では、陸生珪藻に流水不定性種等が伴い河川ないし沼沢に接する湿った環境が示唆されるとの報告を受けた。南区西側で縄文時代以前に形成されたと考えられる沢状地形(40)・(41)からは、珪藻がほとんど検出されず、淘汰により珪藻が堆積されなかった環境が推定されている。

花粉分析については、(35)からは花粉化石が1個体も検出されず、(36)から木本花粉のコナラ属コナラ亜属、草本花粉のイネ科、アブラナ科、ヨモギ属、キク亜科、タンポポ亜科が1～5個認められる程度であった。東区(37)・(38)Ⅲ層では乾燥を好むヨモギ属が中心で、タンポポ亜科、キク亜科、イネ科の草本花粉が検出された。南区の(39)Ⅱ層では草本花粉のイネ科、タンポポ亜科、イラクサ科の草本花粉とともに、スギ、マツ属複雑管束亜属の多くの花粉を検出した。(42)Ⅲa・b層ではヨモギ属、タンポポ亜科、イネ科の花粉と虫媒植物のトチノキの花粉が検出された。

わずかに検出された花粉化石から、縄文時代以前および縄文～弥生時代は、概ね珪藻の生育しにくい乾燥した草原の環境であり、乾燥を好むヨモギ属の草木が主に分布する環境であった。弥生～古代もヨモギ属を主にイネ科などの草木が主に分布し、やや乾燥から湿った環境であったとする。近現代では、水田が分布し、スギやマツ属複雑管束亜属の造林ないし二次林が分布していた可能性が指摘された。

ねごや遺跡のプラント・オパール分析で、栽培植物のイネ属が、山裾部のⅠ層試料であるT14Ⅰa②層(43)、低地部のT18Ⅰb①層(45)と、低地部のⅢ層試料であるT18Ⅲa①層・Ⅲa②層(45)より検出された。含有量はⅢa②層(分析No.10)で最も高く、単細胞珪酸体が試料1gあたり(以下同じ)1,600個/g、機動細胞珪酸体が1,700個/gであり、このほかの試料は300～500個/gと含量が低いとされる。また、T14(43)およびT18(45)の試料では、栽培種を含むコムギ連の短細胞珪酸体や珪化組織片が産出したと報告された。

### 2 所見

珪藻分析の結果から、SD03は開放していなかったか、大気にさらされて乾燥した環境下にあったものとする。また、東区(37)Ⅲ層は上位段丘上であり河川ないしは沼沢に接する湿った環境は想像しにくく、検討を要する。沢状地形(40)・(41)については、水が流れていたわけではなく、乾燥した谷状の地形であったとする推定は妥当である。

花粉分析の結果から、琵琶島遺跡およびその周辺は、縄文時代以前から、ヨモギ属の草木が主に分布し、弥生時代から古代にかけては、それにイネ科などの草木が加わる、概ね乾燥した草原の環境であったことがわかった。当時の人びとは、林などに視界をさえぎられることなく、堅穴住居や掘立柱建物を速くから見渡すことのできる状況にあったことが想像される。

ねごや遺跡のプラント・オパール分析の結果から、一般にイネの植物珪酸体（機動細胞由来）が試料1gあたり5,000個以上の密度で検出された場合に、そこで稲作が行なわれた可能性が高いと判断されている

(杉山 2000)。これらの基準を参考にすると、今回のイネ属の含量は極めて低く、稲作が行なわれていた可能性を支持することは難しい。しかし、調査区の東側には低地が広がっており、平安時代の水田跡が存在する可能性もある。

第18表 プラント・オパール(植物珪酸体)含量

分類群	T14				T15			T18		
	Ⅰ a2層 (Ⅱ a層)	Ⅱ b1層	Ⅱ b2層	Ⅲ a1層	Ⅱ a2層 (Ⅱ層)	Ⅱ a2層 (Ⅱ層)	Ⅲ c層	Ⅰ b層 (Ⅱ層)	Ⅲ a層 (Ⅱ層)	Ⅲ a層 (Ⅱ層)
	1	2	4	3	5	6	7	8	9	10
イネ科葉部短細胞珪酸体	400	-	-	-	-	-	-	500	400	1,600
イネ属	200	200	200	-	<100	<100	100	300	500	200
クマザサ属	900	300	500	900	<100	200	100	800	600	100
タケ亜科	400	7,000	7,300	16,700	200	1,500	18,100	1,000	1,700	800
ヨシ属	200	1,100	200	900	-	<100	100	400	-	<100
ススキ属	200	300	-	-	-	-	-	<100	-	<100
コムギ連	200	-	-	-	-	-	-	<100	<100	100
イネゴツナギ亜科	200	-	-	-	-	-	-	<100	<100	100
不明	1,900	5,300	3,700	2,800	300	1,200	4,800	4,200	1,400	800
イネ科葉身機動細胞珪酸体	300	-	-	-	-	-	-	400	500	1,700
イネ属	300	<100	200	100	<100	200	-	300	400	300
クマザサ属	500	300	600	1,100	200	500	100	700	300	300
タケ亜科	100	6,200	6,300	13,100	300	1,300	10,700	500	1,400	1,300
ヨシ属	-	-	-	-	-	-	-	<100	-	-
シバ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
不明	1,000	5,400	4,000	4,000	500	2,000	4,200	1,600	2,200	1,900
合計	4,400	14,200	11,800	21,400	600	3,000	23,300	7,400	4,600	3,700
イネ科葉部短細胞珪酸体	2,300	12,000	11,100	18,200	1,000	3,900	15,000	3,500	4,600	5,500
植物珪酸体含量	6,600	26,200	22,900	39,600	1,600	6,900	38,300	10,900	9,200	9,200
珪化組織片	*	-	-	-	-	-	-	*	*	**
イネ属短細胞	*	-	-	-	-	-	-	*	**	**
イネ属短細胞列	*	-	-	-	-	-	-	*	*	**
ススキ属短細胞列	*	-	-	-	-	-	-	*	*	**
コムギ連短細胞	*	-	-	-	-	-	-	*	*	**
その他珪酸体	*	*	*	**	*	*	**	**	**	*

[<100]: 100 個/g未満

珪化組織片の産状 - : 未検出 \* : 検出 \*\* : 多い

## 第5節 レプリカ法による土器の施文具圧痕の推定

### 1 分析試料と分析結果(第117~120図、第19表)

琵琶島遺跡9点、比較参考資料の中野市南大原遺跡2点、佐久市森平遺跡1点の3遺跡計12点の粟林式土器を対象とした。レプリカ法により写し取ったシリコン樹脂の文様を、実体顕微鏡と走査型電子顕微鏡で観察し、土器施文原体の推定を行なった。

観察の結果、琵琶島遺跡の土器9点は、ハンノキ属雄花序の冬芽4点、樹種不明の木材、不明(軸に紐を右・左回転で巻きつけた工具、先端を楕円形に加工した工具)5点、と報告された。不明とされ軸に紐を巻いた工具と推定された4点のうち、3点は丸紐で右巻き、1点は帯状の紐とみられ左巻きであると推定された。また、それぞれ同じ施文具を繰り返して使用した可能性が指摘された。紐および紐が巻きつけられた軸の素材については、植物組織などの痕跡が残存していなかったため、不明である。

南大原遺跡、森平遺跡の試料は、3点ともオオバコ花序(1点は莖片)と報告された。

### 2 所見

分析結果が不明であった試料については、原理的には推定された工具も想定できるが、今後類例を探しながら、施文具を想定した実験をすることによって再度検討を加えていくことが必要である。また、ハンノキ属雄花序の冬芽とされた試料からは、いままで不明であった施文痕跡のなかに植物の花序を用いた施

第19表 琵琶島遺跡ほか出土土器施文部の圧痕レプリカ

分析No.	管理番号	遺跡名	遺構	出土位置・層位	土器型式	時期	器種	圧痕位置	推定した施文具	
1	167	琵琶島	I X02	I X02黒上層	栗林式	弥生時代 中期後半	甕	胴部外面	不明(軸に線を右回転で巻きつけた工具)	
2	231		I X12	I X12黒上層				胴部外面	磨損不明の本材(先端をへら状に加工した工具)	
3	256		I X17	I X17黒上層				甕	胴部外面	ハンノキ属種花序の冬芽
4	267		II J14	II J14Ⅲa層-2				甕	胴部外面	ハンノキ属種花序の冬芽
5	268		II J14	II J14Ⅲa層-2				甕	胴部外面	不明(軸に線を右回転で巻きつけた工具)
6	269		II J14	II J14Ⅲa層				甕	口縁部	ハンノキ属種花序の冬芽
7	273		II J14	II J14Ⅲa層				甕	胴部外面	不明(軸に線を右回転で巻きつけた工具)
8	287		II J20	II J20Ⅲa層				甕	胴部外面	不明(軸に線を左回転で巻きつけた工具)
9	312		ⅢL02	ⅢL02Z				甕	胴部外面	不明(先端を楕円形に加工したへら状の工具)
10	AMH560		南大原	SB04				II Y21	甕	頸部
11	AMH495	SB04		F12	甕	口唇部	オオバコ花序			
12	DMR409	森平	SB07	SB07、08他	甕	口縁部・頸部	オオバコ花序			

文原体が存在することについて、ほぼ見通しがついた。今後、現生標本の比較資料をより多く集める必要があるようである。今後の課題である。

オオバコ文については、長野市松原遺跡の調査で「擬似縄文」と報告され(長野県埋蔵文化財センター2000)、森平遺跡の報告において、オオバコを回転施文した文様と想定した(長野県埋蔵文化財センター2014)。南大原遺跡でも、肉眼観察で類似した文様が認められていた。顕微鏡観察の結果、後者2遺跡例は、オオバコ花序を原体として回転施文した文様と推定された。南大原・森平遺跡の分析結果は、そのことを実証する大きな裏付けとなった。

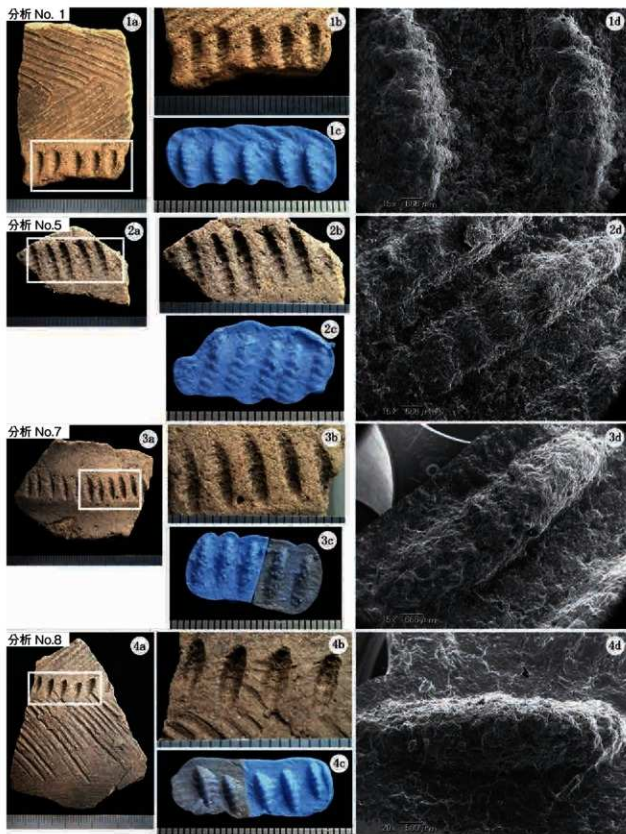
「これまで施文具についてレプリカ法で検討した類例が少なく、現生および遺物での比較対照標本が少なかったため、現段階では施文具を詳細に同定するには至らなかった。」と報告書にもあるように、レプリカ法による土器施文部観察によって土器の施文具を判定していくことは、研究の途に就いたばかりである。

## 註

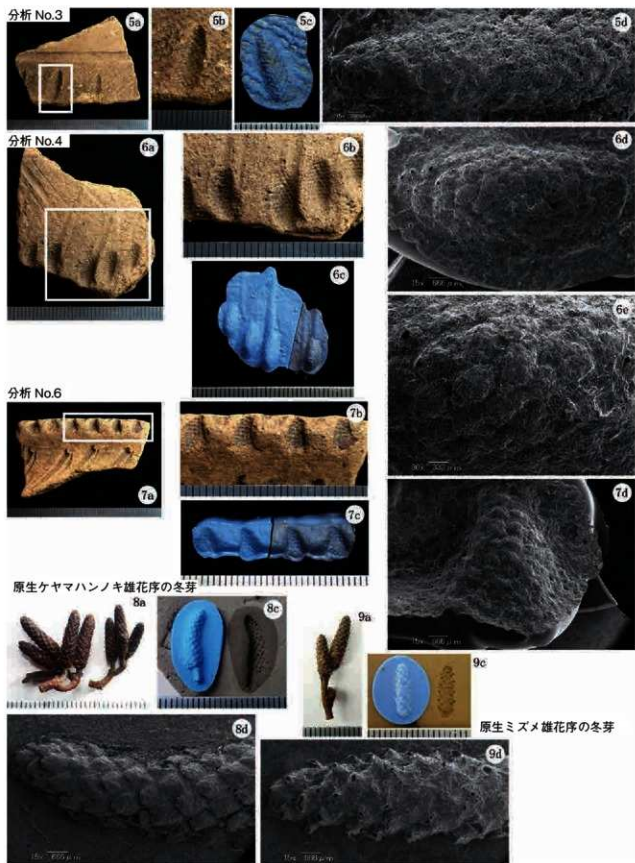
- 1) 国立歴史民俗博物館が想定する弥生時代の時期区分にあてはめると中期前半となる(藤尾慎一郎2003, 2015)。

## 引用・参考文献

- 赤澤 威、米田 穰、吉田邦夫1993「北村縄文人骨の同位体食性分析」『北村遺跡 本文編』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書14: 445-468
- 石川出志2002「栗林式土器の形成過程」『長野県考古学会誌』99・100: 54-80
- 杉山真二2000「植物珪酸体(プラント・オパール)」『考古学と自然科学3 考古学と植物学』辻誠一郎(編著)、同成社: 189-213
- 長野県埋蔵文化財センター2000「松原遺跡 弥生・総論3 弥生中期・土器本文」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書36
- 長野県埋蔵文化財センター2013「中野市千田遺跡」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書98
- 長野県埋蔵文化財センター2014「森平遺跡 寄塚遺跡 今井西原遺跡 今井宮の前遺跡」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書107
- 長野県埋蔵文化財センター2016「南大原遺跡」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書111
- 小林謙一2009「近畿地方以东の地域への拡散」『新弥生時代のはじまり 第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代』西本豊宏編、雄山閣: 55-82
- 藤尾慎一郎2003「弥生時代の開始年代」『歴史を語るサイエンス』: 12-16
- 藤尾慎一郎2015「弥生時代の歴史」講談社
- 吉田邦夫2006「煮炊きして出来た炭化物の同位体分析」『新潟県立歴史博物館研究紀要』7: 51-58



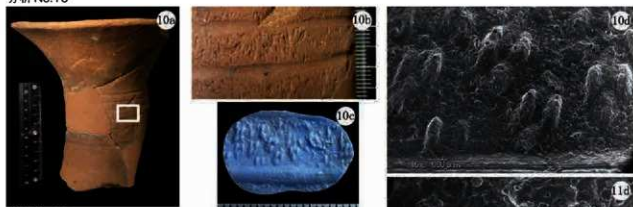
第117図 土器文様とレプリカによる顕微鏡撮影写真(1)



第118図 土器文様とレプリカによる顕微鏡撮影写真(2)



分析 No.10



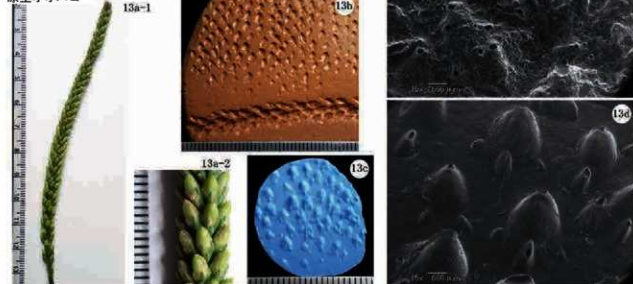
分析 No.11



分析 No.12

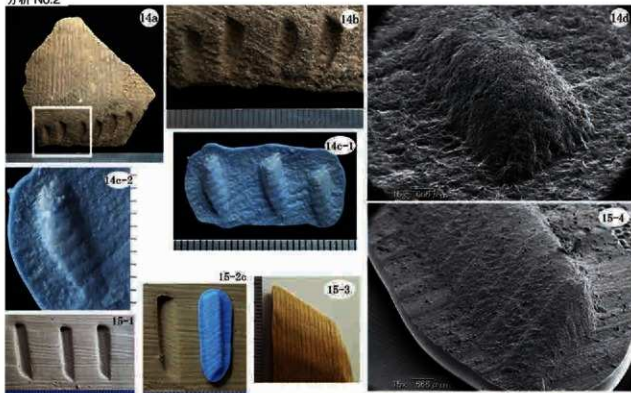


原生オオバコ

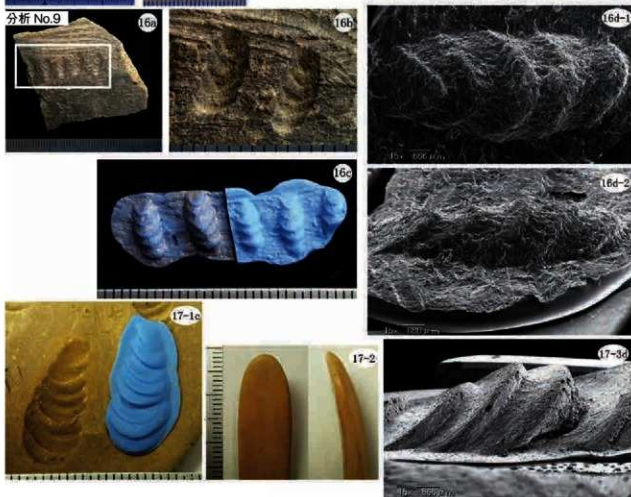


第 119 図 土器文様とレプリカによる顕微鏡撮影写真 (3)

分析 No.2



分析 No.9



第 120 図 土器文様とレプリカによる顕微鏡撮影写真 (4)

## 第7章 総括

### 第1節 琵琶島遺跡調査成果のまとめ

#### 1 琵琶島遺跡調査成果の概要

琵琶島遺跡は、「笠倉」の地名を冠されて、千曲川上流に隣接する有孔石剣が出土した「笠倉遺跡」とともに紹介されることが多かった（八幡 1933、桐原 1968）。その内容は琵琶島遺跡全体の南側にあたる滝脇地籍に関するもののみであった。昭和 24 年の調査では、弥生時代後期の住居跡をはじめとして、中期後半の栗林式土器がまとまってみつまっている（桐原 1968）。平成 22 年の市教委の試掘調査および今回の発掘調査は、これまでの報告・調査とは異なり遺跡全体の北側で行なわれた。

市教委の試掘調査分の資料は、今回の発掘調査で検出した遺構・遺物と併せて報告するが、それ以前の調査資料については追跡できず、資料の所在は不明である。以下、調査成果の概要を紹介する。

縄文時代では、草創期の爪形文系土器～後期前半の堀之内 1 式の土器が出土し、早期～後期前半各時代の土器が出土する土坑も調査した。ただ、それらの土坑が所属する時期については明確にはできなかった。さらに、時期は不明だが形状から落し穴が想定される土坑を 2 基調査し、1 基には遊茂木を刺した痕跡を検出した。石器は、有茎尖頭器、特殊磨石、石匙など、出土土器の時期に相応する特徴的な石器が出土した一方、石鏃、石鏃未成品などの剥片石器、礫器、敲石、磨石などの礫石器は、弥生時代に属する可能性のあるものも含まれており、明確な時期区分はできない。

弥生時代では、堅穴住居跡が 2 軒みつかり、掘立柱建物跡は全時代を通して 25 棟みつまっているが、弥生時代の可能性が高いと考えられるものは、ST05・07・11・13・17～19・24・25 の 9 棟である。そのほか、周溝跡 3 基、柵跡 2 列、遺物集中 1 か所、弥生時代の可能性のある土坑 89 基などを発見した。遺物は、弥生時代中期後半栗林 1 式土器のほぼ単純型式で遺跡が構成され、遺構外出土資料ではあるが栗林式土器成立期から前半期の土器の様相が明らかとなった。そのなかに、甕を中心とした土器の「刻み」文様として、植物の花序を使って施文した文様を指摘することができた。また、再利用土器片の土製品も抽出した。石器類は、磨製石斧、太型蛤刃石斧などのほか、スリキリ具、刃器、台石などの工具類が出土したが、出土量は少ない。

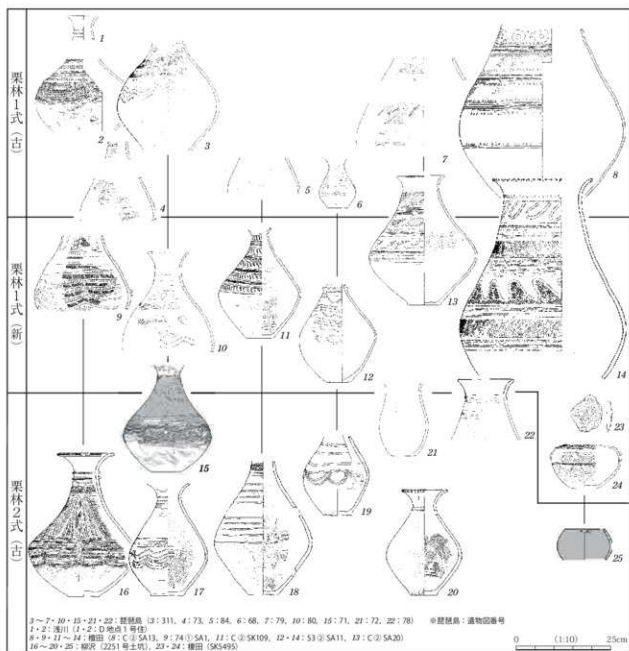
古墳時代には、中期初めの木棺墓で、ロクログンナが副葬され、上部には高塚と埴形壺のみを破碎して供献した痕跡がみられた。ロクログンナの出土は県内初出と考える。また、平安時代以降では、土坑が土層の第 1 検出面を中心に検出され、墨書土器、鉄滓を廃棄した事例も抽出した。

次項以下では、弥生時代中期後半栗林期を中心に、調査成果を提示する。

#### 2 栗林 1 式土器について（第 121～123 図）

琵琶島遺跡の今回の調査地点は、遺構・遺物において栗林 1 式期の単純遺跡としても過言ではないほどのまとまりがある。本遺跡出土資料を報告するにあたり、周辺遺跡での既出資料もまじえ栗林 1 式土器について再整理しておきたい。

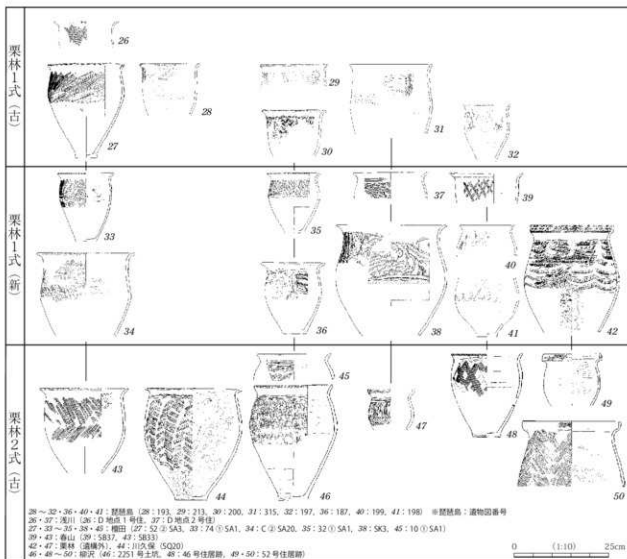
**栗林 1 式**（既出型式案：石川日出志の 1 式（石川 2001）、寺島孝典の栗林古段階（古相・新相）（寺島 1999）、笹澤浩の栗林 1 式古段階（笹澤 1996））



第121図 栗林式土器における壺の変遷(無頸壺・蓋含む)

当該期にあたる時間幅のなかに新旧2時期が存在することは、千野浩(註1)、寺島(寺島1999)の提案がある。1999年に調査された長野市榎田遺跡の竪穴住居跡の重複関係から、その区分に妥当性のあることは、おおそ首肯されることとなった(長野市埋蔵文化財センター2004)。その報告書では、遺構の所属時期を弥生時代中期後半としながらも、寺島福年の「栗林古段階に集落の盛期があり、栗林式の初現期には集落の形成」と総括し(前出:114-115)、笹澤は柳沢遺跡の発掘調査報告書のなかで、榎田遺跡を栗林I式古段階、栗林I式新段階~II式古段階の集落跡と分析する(笹澤2012:231)。

現段階での榎田遺跡および長野盆地の他遺跡の調査資料をもとに、琵琶島遺跡の出土土器を検討すると、栗林1式土器を古い段階(古段階)と新しい段階(新段階)に2区分することが可能であると考えられる。栗林式土器の変遷に関して、従来の研究でも「文様の簡素化」が重視されてきたが(寺島1999)、今回の栗林1式土器の変遷過程のなかでも、壺の[2+4]裝飾帯のなかに空白帯をもつようになり、壺・甕について作りおよび文様の施文がやや雑になるという点を捉えることができた。縄文土器文様の変化で



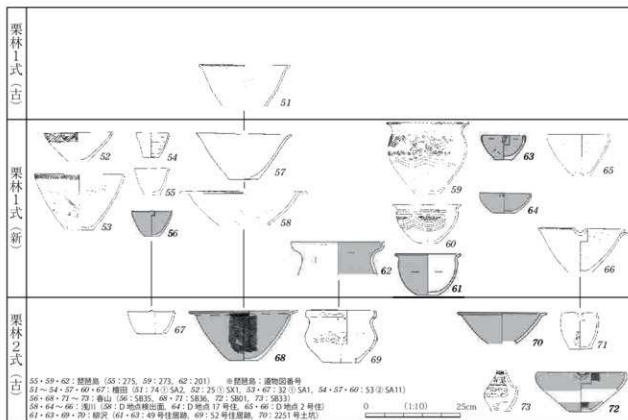
第122図 栗林式土器における甕の変遷

いところの「手ぬぎの方向性」と同様の変化の方向性(小林1994)と捉えて、栗林式土器の変遷をすることも有効であろう。

#### 栗林1式古段階

壺は、前段階に発達した球胴状(たまねぎ状)の形態で狭口(細頸)、口縁の丈は短く、開きは小さい。やや頸部の細長いタイプ(第121図I・2)が残る。榎田遺跡C②SA13出土土器を該期と考えると、新たに大形で広口(太頸)タイプ(第121図8)の萌芽がある。

狭口タイプをみると、前段階まで胴部上半を中心に発達した文様帯は(註2)、横走沈線文aによる重畳区画の密接施文を基本とする。頸部は胴部と一体化し([2+4]装飾帯)、その区分は未発達だが、刻み4類(第83図70)や貼付凸帯(第82図65・66)は、口縁部と胴部を区分するアクセントとなり、栗林式の特徴的な手法として継続される。口縁部は無文で、口唇([1]装飾帯)への縄文施文を基本とする。[2+4]装飾帯は加飾性の多寡により、その高いものと低いもの2者がある。本遺跡出土例(第121図4)や浅川扇状地遺跡群牟礼バイパス(以下「浅川」という)D地点1号住出土土器(第121図2)が前者の好例である。装飾性の低い方は、便宜的に単純な重畳区画の構成をとるものをあげるが、縄文の充填(5)、横走沈線文aや変形工字文モチーフ(6)、山形沈線文aの施文(第84図88)、櫛描直線文a・斜線文など(7)を文様要素とする。横走沈線による重畳区画に縄文を充填し、連弧文aを加えて[2+4]装飾帯を完成



第123図 栗林式土器における鉢の変遷（飯・片口鉢・高坏・注口土器含む）

させる(3)は、その中間的な様相を示す。

広口タイプの壺は通常、横走沈線文aのモチーフを多用する。櫛描直線文aと短斜線文bを交互に配置するタイプ(第81図1)は、浅川D地点17号住出土例として知られ、檀田C②SK109にも類似例(第121図11)がある。栗林1式を2段階に分ける寺島は、それを古段階新相として位置づける。檀田遺跡53②SA3と53②SA11や74①SA1と74①SA2のような遺構の重複関係から、また柳沢遺跡49号住居跡や長野市浅川端遺跡4号住居跡のように伴出遺物の変遷の位置から新相案は肯定されるものと考えたい。

壺は、胴部上半は直立気味、口縁は外反するが頭部の括れは未発達である(第122図26～32)。文様帯は胴部上半に集約され、櫛描で斜線文を施す例として、浅川D地点1号住出土例(26)と檀田遺跡52②SA3出土例(27)がある。本遺跡からは、櫛描横羽状文(28)・(第88図195)、あるいは櫛描波状文a(29・30)、櫛描直線文a(31)を施す例が出土している。また、櫛描格子目文(32)もこの段階の最終末から始まるかもしれない。横羽状文は刻み1類により胴部下半部を区分(27・28・31・32)、あるいは胴部文様帯そのものを上下に分ける効果が見える(第89図210・222)。櫛描波状文aは櫛描垂下文aで横位方向を縦位に分割する(29・30)。口縁屈曲部は無文部を残すが、強いヨコナデをとまなう例(28)や櫛描直線文a・波状文aで胴部文様帯を意識的に描出する例(30)・(第88図194)も登場する。口唇部は平坦なもの(第89図203)を基本に、波状のもの(第89図202)がわずかにみられ、端部は縄文施文のほか、ユビオサエを施す。

鉢は、器種として組成すると考えられるが出土例は少ない。口縁部が鉢形に開くタイプが檀田遺跡74①SA2(第123図51)にある。

#### 栗林1式新段階

壺は、球胴状の形態を継承するが、最大径はより小さくなり、胴部の張りが弱く、その位置は胴下半に下がる。狭口に加え大形で広口のタイプ(第121図13・14)が増加する。

狭口タイプの [2 + 4] 裝飾帯は、重畳区画の密接施文の中に空白帯が現われ、それまで胴部最大径より上半部に集中していた文様は下半部へと広がりみせる (10)。文様は縄文、櫛描直線文、山形沈線文、連弧文がある。檀田遺跡 53 ② SA11 出土例 (12) は、[2 + 4] 裝飾帯に貼付凸帯、横走沈線文 a、一条の連弧文が施される。加飾性の高い裝飾帯は、本遺跡例で胴部上半に間延びした空白帯を形成し、そのなかを窺描き沈線で区画し、櫛描垂下文 a と縁のみに押し列点文を施した懸垂舌状文 (第 87 図 170) が出現する。また、檀田遺跡 74 ① SA1 出土例 (9) があり、櫛描垂下文 a を充填した懸垂舌状文に押し列点文を充填した変形工字文がみられる。以後、懸垂舌状文は栗林式を代表する裝飾帯の主文様モチーフとして用いられていく。

広口タイプには、檀田遺跡 C ② SA20 出土例 (13)、53 ② SA11 出土例 (14) にみるように、重畳区画の密接施文が継承される。また類別は多くないが、無頸壺と蓋がある。双方とも、文様は貼付凸帯、連弧文や変形工字文、縄文や押し列点文による充填等の裝飾例に限られる。無頸壺は、長野市榎田遺跡 SK5495 (24) や檀田遺跡 C ② SA20 に、蓋は榎田遺跡 SK5495 (23) や浅川 D 地点検出面に出土例がみられ、本遺跡にも類似例 (第 91 図 276) がある。

甕は、概ね古段階の形態を継承するものの、頸部の括れが強くなる (第 122 図 33 ~ 40)。胴部上半の文様には、櫛描横羽状文 (第 88 図 192)、櫛描波状文 a (36)、櫛描直線文 a (35・37・38)、櫛描格子目文 (39 ~ 41) のバラエティーがある。胴部文様帯を上下に分けた刻み手法は、羽状文のなかに多く用いられる。羽状文以外では垂下文 a と櫛描直線文 a の組合せが檀田遺跡例 (35・38) にある。羽状文は施文効果として横羽状文 (33・34) が依然主体だが、微量ながら縦羽状文 (第 81 図 7、第 92 図 314) の出現がある。口縁が L 字形に屈曲する受け口状口縁は栗林 2 式の特徴と考えたいが、栗林遺跡第 1 号住居址 (42) に出土例がある。本遺跡 SQ01 出土例 (第 82 図 54) についても伴出した壺と同様、栗林 1 式新段階に位置づけるべきか。栗林 2 式期に登場が想定される受け口状口縁の壺よりも、ひとつ早い段階に甕の口縁に採用されたことになる。

鉢は、器種として確実に組成するようになり、3 種ほどの形式が存在する。口縁部が直口で鉢形に開くもの (第 123 図 52 ~ 56) と口縁部は直口だがやや内湾する椀形 (63・64) を併せて鉢 A、口縁がほぼ直角に屈曲外反するもの (57・58)・(第 91 図 296) を鉢 B、口縁部が屈曲外反するもの (59 ~ 61) を鉢 C とした。本遺跡出土例 (62) (註 3) を該期の所属とすると、受け口状口縁をもつタイプも出現していることになる。

鉢 A の直口で鉢形に開くタイプには、そば猪口形を呈する小形例 (54 ~ 56) が含まれる。口縁部に縄文帯を設けるもの (52・53)・(第 91 図 290)、それに鋸歯状のモチーフを描くもの (52)・(第 91 図 291)、そして無文がある。鉢 A の椀形のタイプは例外なく赤彩され、口縁部に豆粒状貼付文がみられる例 (63)・(第 85 図 95) や 2 孔一対の穿孔のある例がある。浅川 D 地点 17 号住居出土例 (64) に代表されるが、本稿では 17 号住居出土土器を檀田遺跡 E ① SA1 出土例と同様に本段階に位置づけ、屈曲外反するタイプの登場とともに栗林 1 式新段階の器種とする。鉢 B は、本段階に至って出現する新形式であり、口縁の強い折り返しに特徴がある。赤彩を基本とするが、それのない例もあり、浅川 D 地点検出面例や栗林遺跡第 3 号住居址例では、口縁部に縄文と鋸歯沈線文 a を描く。このタイプは、以後、栗林式の特徴的な鉢として継承され、その形状は高坏の坏部と同形異種となる。鉢 C は、形状変異と大きさに大小がある。本遺跡出土資料に、重山形文と連弧文 a で飾る大形の例 (59)、連弧文 a に縄文や押し列点文を充填する裝飾性の高い小形の例 (第 91 図 282) がある。さらに小形の例として、檀田 53 ② SA11 出土例 (60)、柳沢 49 号住居跡出土例 (61) がある。

片口鉢は、鉢形の口縁部に注ぎ口を設ける形態で、本段階に登場する。浅川 D 地点 2 号住居出土例 (第 123 図 66) は口唇に縄文が施され、鉢と同形異種。また、本遺跡 SB02 出土例 (第 81 図 8) では内外面に

赤彩が施される。

甕も該期で登場する。浅川D地点2号住(第123図65)にある。

#### 栗林2式(既出型式案:石川の栗林2式、寺島の栗林中段階、笹澤の栗林I式新段階・II式古段階)

当該型式の最大の特徴は、壺胴部文様帯にみる無文部[0]の形成にあり、石川をはじめ寺島、笹澤とも、新旧2時期に区分することは共通の理解となっている。石川は柳沢遺跡の発掘調査報告書中で、同遺跡の出土土器は「2式古段階が多数を占める」(石川2012:184)と分析している。栗林1式を中心とする琵琶島遺跡出土資料と柳沢遺跡出土資料を比較検討することで、栗林2式古段階を整理できる。

#### 栗林2式古段階

壺では球胴状の形態が消失し、口縁の開きが強くなる。胴部下半へと広がりを見せた文様帯は、胴部最大径より下位にまでおよび([5]装飾帯)、胴部上半と下半の文様帯を分ける幅広の空白帯[0]が形成される。以後、栗林2式の特徴的な構図として継承される。本遺跡出土土器(第121図15)、柳沢遺跡2251号土坑例(17)や46号住居跡例が該当する。胴下半の[5]装飾帯には、従前からの窺描沈線による文様に、縄文や櫛描直線文aの充填手法はみられるが、窺描沈線による文様のみ例(19)が微増する。加飾性の低い重畳区画にも無文の多段化(18)が起り、その顕著な例は柳沢遺跡2251号土坑例(20)のように胴部全体を無文化する。懸垂舌状文をメルクマルとする装飾壺(16)は、前段階にも増して加飾性が強まる。長野市平柴平遺跡5号土坑例は懸垂文の施される文様帯幅が狭く、若干古い様相を示すが、壺への受け口状口縁の出現(寺島1999:68)をもって該期と考えるべきか。大形で広口のタイプは減少し、胴部文様帯の消失化(22)がみられる。寸胴でやや筒形に近いタイプ(21)は、前段階には登場し継承される。無頸壺および蓋は依然稀少で、施文は前段階に比べ簡素化される。柳沢遺跡2251号土坑出土例(25)から判断すると、無文で全面赤彩される例の出現がある。

甕は、胴の張りが進み、頸部の屈曲が目立つようになる。受口状口縁の本器種への採用頻度は増し、口縁の屈曲は強く直立状で(第122図49)、大容量の甕(50)が現れる。文様帯は刻み文様の消失とともに開放され、胴部下半へと広がりを見せ、櫛描による羽状文(43・44)、波状文(45・46)、直線文(47)、格子目文(48)などが前段階から継承される。

鉢は3種の形態を継承。鉢A(第123図67)は、1式から継続してみられる。鉢B(68)は赤彩が中心となり、坏部のみでは高坏との判別が難しい。鉢Cは、赤彩が中心であるが無彩例もあり、柳沢遺跡52号住居跡出土例(69)では、頸部に2孔一対の穿孔を施し文様は窺描沈線のみで描かれる。

片口鉢は、長野市春山B遺跡で木製の漆塗り資料も出土し、SB36出土例(71)は、鉢形というよりピーカーのような形態をとる。また、内外面赤彩されたSB01出土例(第123図72)は、古い文様を残すものの、新段階に入る可能性が高い。

高坏は、当該段階から明確に登場する。完全な資料はなく、柳沢遺跡2251号土坑例(第123図70)が本器種と考えられ、坏部内外面に赤彩が施される。

甕の出土例は稀少であるが、口縁部が直口で鉢形に近く形態で底部に一穴をもつ。柳沢遺跡46号住居跡に底部破片例がある。

注口土器が新たに登場する。文様構成が装飾壺や他の壺と同一である点に特徴がある(第123図73)。

以上のように、琵琶島遺跡の栗林式土器は、概ね栗林1式の範疇に含めることができる。第121図15・22は、2式の初めに入る可能性がある。

編年表では他遺跡の資料のなかに琵琶島遺跡の資料を位置づけることで、段階を確認した。竪穴住居跡の資料(SB01・02)をみると、SB01は古段階の資料が多く、SB02は新段階の要素が多く認められた。C14年代測定でも、SB01がSB02より50～100年古い値が算出されている。また、遺構外出土遺物につ



いても、古段階、新段階に分けたが、東区、南区で出土した土器には時期の偏り、違いはみられなかった。今回の調査範囲では、地点的な段階差はないと考えられる。ただ残念なのは、破片資料が多く、土器の全体像がわからないものが多い点である。今後、同時期の資料が出土した際に、比較資料として本遺跡資料が取り上げてもらえる機会に恵まれればと願う。

### 3 栗林1式期の集落 (第124, PL2)

第3章割付図①～④をみると、遺構が検出された範囲は、上位段丘では南区西端の標高340mあたりが西限となり、東区南端ST26の標高335mあたりが東限となる。山側(西側)に向かってやや傾斜がみられ、ほぼ平坦となるのは標高338mあたりから東側であろう。下位段丘では、東区北端SX08の標高332mあたりから、東区中央SD03が検出された面の標高330mあたりとなるであろう。上位段丘と下位段丘では最大10mの比高があるが、最小では3mほどである。上位と下位の段丘は、人が行き来できないほどの高低差ではなかったと予想できる。

千曲川に近い下位段丘上は、竪穴住居跡が円形と小形で長方形のものが1軒ずつ南北に並び、その北側で3棟、南側で2棟の掘立柱建物跡がみつかり、南側の欄跡も2列で対になっている。南側の掘立柱建物跡と欄跡の間には、周溝跡が3基みつかり、北陸地方との系譜を検討する1要素が加えられた。下位段丘上は集落内の一つの構成単位として、千曲川に沿って南北方向に同種類の遺構が2ないし3基ずつ(掘立柱建物跡は重複する)配置されていたと考えられる(第124図)。

一方、山側の上位段丘では、土坑以外は17棟の掘立柱建物跡で、長軸をほぼ南北か、それに直行する東西方向にして建てられている。弥生時代のものがすべてではないが、竪穴住居跡は存在せず、掘立柱建物跡と土坑のみの構成となる。

遺構の構成をみると、掘立柱建物跡中心の上位段丘と一定の規則性が認められる下位段丘とでは別の構成単位となる。琵琶島遺跡は、上位段丘、下位段丘2つの異なる構成単位の遺構群が結合した形の集落となる可能性が高い。

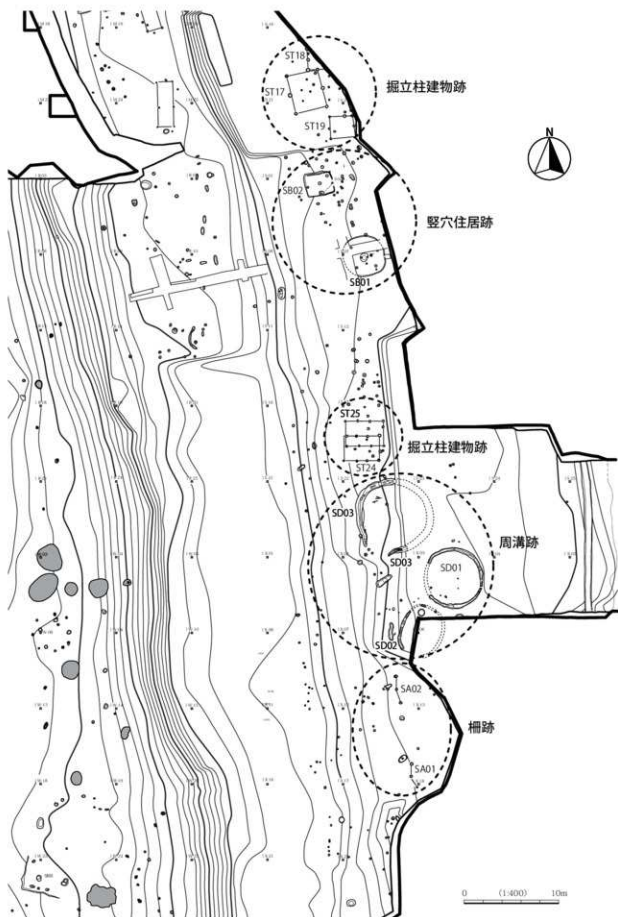
### 4 長野盆地北部・飯山盆地における栗林式期の遺跡 (第7・125図)

ここでは、琵琶島遺跡に関わる長野盆地北部から飯山盆地にかけての弥生時代中期後半(栗林式期)の遺跡について概観し、調査成果理解の一助とする。

長野盆地北部から飯山盆地にかけては、弥生時代中期～後期の集落跡が多数確認されている(註4)。千曲川の自然堤防上やその支流が形成する扇状地、盆地縁辺部の丘陵地帯に広く遺跡が分布している。これらの遺跡は、立地、存続期間、規模においていくつかのまとまりを示しており、遺跡群として捉えられている(第125図)(笹澤2009・2012)(註5)。

琵琶島遺跡の周辺で、栗林式に先行する時期の弥生時代遺跡は、中野市川久保遺跡(替佐遺跡群)で前期～中期前半の条痕文土器1片が出土した以外は(長野県埋蔵文化財センター2013)、確認されていない。中期後半(栗林式期)になると遺跡数は大きく増加し、千曲川下流域から主な集落遺跡を上流に向かってあげてみると、飯山市上野遺跡、小泉遺跡、北原遺跡(旭町遺跡群)、中野市柳沢遺跡、川久保遺跡、七瀬遺跡、南大原遺跡、栗林遺跡、安源寺遺跡、西条・岩船遺跡群などの集落跡があげられる(註6)。なお、本遺跡で円形・馬蹄形の周溝をもつことから周溝跡とした遺構は、栗林遺跡では平地建物跡として報告されている。

礮床木棺墓は、長野県を中心とした中部高地に特徴的な墓である。本遺跡から千曲川下流3kmの柳沢遺跡では、礮床木棺墓群のなかに県内最大級の礮床木棺墓(1号礮床木棺墓)が発見された(長野県埋蔵文



第124図 下位段丘上の遺構配置

化財センター2012)。当該地域においては、小泉遺跡、上野遺跡、栗林遺跡、南大原遺跡などでも、礎床木植墓・木植墓群が確認されている。

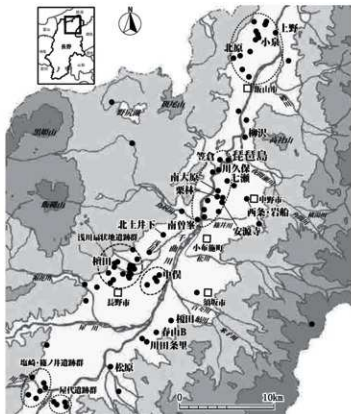
七瀬遺跡、柳沢遺跡、川久保遺跡で、弥生中期後半～後期の水田跡の存在が確認され、そのうち本遺跡から千曲川上流1.5kmの川久保遺跡では、中期後半の水田の存在と、千曲川に面した微高地の縁辺部に焼土坑とともに完形の栗林2式新段階の土器が並べられた土器集中が確認された。稲作に関する祭祀行為とも考えられるが、性格は明確ではない（長野県埋蔵文化財センター2013）。

さらに、遺物面では、南大原遺跡で鉄斧が出土し（註7）、小泉遺跡に流水文が刻まれた板状の炭化木製品がみつまっている。また、石戈、有孔石剣などの特殊な石製品が本遺跡南側に隣接する笠倉遺跡で出土している（石川2012）。

長野盆地北部・飯山盆地に所在する栗林式期集落遺跡の動態について、笹澤は「飯山盆地の上野と小泉などの遺跡群との集団関係は拠点集落と周辺地域の遺跡との関係であり、栗林遺跡とその周辺にも認めることができる。」（笹澤2012:236）と述べ、その周辺地域の遺跡は、安源寺遺跡、川久保遺跡、南大原遺跡、笠倉遺跡などの短期居住型遺跡であるとした。栗林遺跡は、栗林2式新段階に大規模な拠点集落になり、周辺遺跡も同時期に成立する。一方で、栗林1式の遺跡である長野市南曾峯遺跡は短期居住型遺跡であり、栗林1式古段階に出現し栗林2式古段階でなくなる（註8）。その関係から、笹澤は「栗林1式古段階に出現した小規模集団が、この領域内で移住と集住の結果が栗林2式期の拠点集落化した栗林遺跡と新たに出現した周辺遺跡との集団関係であろうし、移住と定住は領域を越える場合もあり得た。」（笹澤：前出）とした。

本遺跡は、この地域の集落遺跡のなかでは、小泉遺跡と時的に重なり、掘立柱建物跡が堅穴住居跡に比べて多い点も共通するが、遺構数が少なく規模はかなり小さい。栗林遺跡では平地建物跡が出土しているが、本遺跡出土の周溝跡とは少し性格が異なりそうである。また、千曲川上流・下流でみつまっている礎床木植墓、水田跡は、本遺跡からは検出されていない。さらに、遺物に関しては、金属製品、特殊な木製品・石製品の出土はない。出土土器は、千曲川上流の南曾峯遺跡と共通する部分が多い。

以上の特徴から、本遺跡は栗林1式から2式古段階の時期に限定して営まれた短期居住型小型遺跡である。掘立柱建物跡の数が堅穴住居跡に比べて卓越しているため、千曲川上流・下流に存在する集落遺跡を行き来し、物資の保管に特化した機能をもたせた集落であった可能性を感じる。そのなかで、周溝跡はその機能に関わる空間であったのかもしれない（浜崎2014）。笹澤説から考えてみると、琵琶島にいた人びとは栗林2式新段階以降、栗林遺跡やその周辺の遺跡へ移動・定住したことになる（第125図）（註9）。笹澤説は魅力的な仮説であり、栗林1式の集落が短期居住型に限られ



第125図 琵琶島遺跡周辺の弥生時代中期後半の遺跡

る事実も見えてきた。今後、各遺跡の詳細な時期区分等の検討を続けるなかで少しでも笹澤説に近づければ、栗林社会がもう少し鮮明に見えてくるのではないだろうか。

## 第2節 今後の課題

琵琶島遺跡をとり巻く弥生時代中期後半栗林式期の遺跡を概観し、今回の調査成果をもう一度見直すなかで、浮かび上がってきた課題を提示し、報告書の記述を終わりたい。

### (1) 栗林式土器の変遷と栗林文化の動態について

琵琶島遺跡出土の栗林式土器は、一部栗林2式古段階にはいる可能性はあるが、ほとんどが栗林1式の範疇に納まる。遺構外出土土器が大半を占め、破片資料も多いが、前節2項で器種ごと類型ごとに内容を確認し、変遷をたどった。長野盆地の他遺跡出土資料との比較を行ない、栗林1式土器の内容を確認、従来から言われていた古段階と新段階の枠組みを設定し、位置づけをした。また、C14年代測定の結果によって栗林2式との境界も見えてきた。今後、さらに1式の内容を精査するとともに、2式以降の土器の内容を確認し、長野盆地に所在する栗林式土器および栗林式期の遺跡を見直す必要がある。そのうえで、栗林文化・社会の動きが提示できればと考える。

### (2) 掘立柱建物跡が堅穴住居跡を圧倒する集落の意味

琵琶島遺跡では、堅穴住居跡2軒に対して、時期が不明な遺構もあるが、掘立柱建物跡の検出数が圧倒している。下位段丘では4倍、上位段丘に限っては堅穴住居跡が検出されていない。長野盆地北部・飯山盆地の栗林式期の遺跡をみると、堅穴住居跡に掘立柱建物跡をともなう遺跡は中野市栗林遺跡、南大原遺跡、飯山市小泉遺跡、上野遺跡などがある。このなかで、小泉遺跡のみ掘立柱建物跡が堅穴住居跡・平地建物跡を圧倒する棟数でみつかっている。小泉遺跡は、本遺跡と同じ栗林1式を中心とする遺跡である。一方、他遺跡はそれより新しい栗林2式を中心とする遺跡である。掘立柱建物跡の機能に関しても明確にできていない今、この構成の差異を時期差とみるべきなのか、遺跡の性格の違いとして捉えるべきなのかは、さらに追究していく必要がある。

### (3) 長野県内にみられる「周溝跡」の性格についての解明

弥生時代（栗林式期）にみられる円形・馬蹄形の周溝をもつ遺構について、本文のなかでは「周溝跡」として報告した。「平地建物跡」として調査は行なったが、建物跡としての条件が満たさず周溝跡に留めた。その結果、性格不明の遺構となり、「周溝をもつ遺構」という実態だけが残った。今後、円形周溝墓、堅穴住居跡等の遺構との比較、今まで平地建物跡として報告されている事例の再検討を行なうことによって、当該遺構の位置づけ、さらには性格づけを行なう必要がある。

### (4) 栗林式土器における植物利用の施文具についての集成

栗林式土器の「刻み」文様としたなかに、ハンノキ属、オオバコなどの植物の花序を施文具として使用した資料を数点抽出した。今までも、松原遺跡等で「擬似縄文」として報告されてはきたが（長野県埋蔵文化財センター2000）、明確な提示はなかった。さらに、オオバコの現生標本によって施文具実験を行ない施文具の推定をした事例はあった（水澤2014）。今回、レプリカを用いた走査型電子顕微鏡観察と想定施文具の施文具実験による比較検討作業により、具体的な施文具を推定することができた。これらの施文具について、千曲川流域をはじめとした栗林式土器および周辺土器型式についても使用状況を調査し、共時的・通時的分布を把握することが必要である。栗林式土器の変化と施文具の変化に因果関係が捉えられれば、当時の弥生人の志向（植物利用等）の変化が理解できるだけでなく、周辺地域との交流状況にもたどり着

くヒントが隠されているかもしれない。

註

- 1) 「1990年の第2回弥生土器を語る会の席上での発表」と、石川の文献(石川2002)にある。
- 2) 例えば、長野市塩崎遺跡群松節地点16・21号木棺墓出土の、胴部上半を沈線と縄文で装飾する細頸(狭口)の壺などの例があげられる(矢口1986)。
- 3) 第3章では、器形の点から「特殊壺」と分類したが、用途としての分類は鉢または壺にすべきかもしれない。
- 4) 各遺跡の概要は、第2章第6・7図、第5表を参照。
- 5) (笹澤2012)によると、栗林期の集落遺跡は2類型に大別でき、土器型式で1ないし2型式にわたる短期居住型遺跡(A型)が大遺跡(A1型)と小型遺跡(A2型)にまとめられ、栗林期全期間にわたる長期居住型遺跡(B型)が広域にわたる一定地域内で移動により居住域を変え結果として大規模集落の形態をとる長期居住移動型(B1型)と一定地域内に多数の居住域を集中させている長期居住定住型(B2型)にまとめられるという。
- 6) 琵琶島遺跡の北にある遺跡では、柳沢遺跡で3km、北原遺跡で11km、小泉遺跡で13.5km、上野遺跡で14.5kmの距離にある。琵琶島遺跡の南にある遺跡では、川久保遺跡で1.5km、南大原遺跡で3.5km、栗林遺跡で4km、南曾峯遺跡で7km、長野盆地中・南部の中侯遺跡で15km、浅川扇状地遺跡群で17km、榎田遺跡で18km、春山B遺跡で20km、川田条里遺跡で21km、松原遺跡で25kmの距離にある。
- 7) 南大原遺跡は、2011～2013年度に県埋文センターが発掘調査を実施し、栗林2式新段階を中心とした集落跡の調査成果をまとめた報告書が、2016年3月刊行予定である。鉄斧の出土とともに、堅穴住居跡床面で複数の火床の検出、鍛冶関連石製工具の可能性のある台石・敲石・砥石の出土から、長野県内では初めて弥生時代の鍛冶関連遺構の可能性を指摘した(長野県埋文センター2016)。
- 8) (笹澤2016:236)では、「1式古段階に出現し新段階で姿を消す。」としている。
- 9) 第125図に示した栗林遺跡を中心にして仮に定めた領域は、半径約4kmを測る。この領域を越えて、千曲川をさらに遡った長野盆地中部の中侯遺跡、逆に千曲川を下った飯山盆地の上野遺跡等への移住・定住はあったのだろうか。

#### 引用・参考文献

- 飯山市教育委員会1995『小泉弥生時代遺跡』飯山市埋文文化財調査報告書第42集
- 石川日出志2002『栗林式土器の形成過程』『長野県考古学会誌』99・100:54-80
- 石川日出志2012『栗林式土器の編年・系譜と青銅器文化の受容』『中野市柳沢遺跡』長野県埋文文化財センター発掘調査報告書100:182-191
- 桐原健1968『下水内郡豊田村笠倉の弥生式遺跡』『高井』6:11-14
- 小林達雄1994『撫糸文系土器の変遷における「手ぬきの方向性」』『縄文土器の研究』小学館:252
- 笹澤浩1996『栗林式土器』『日本土器事典』雄山閣:504
- 笹澤浩2009『中野市柳沢遺跡出土青銅器の意義と今後の展望』『長野県考古学会誌』127:3-22
- 笹澤浩2012『長野盆地北部における栗林期集落遺跡の動態と柳沢遺跡』『中野市柳沢遺跡』長野県埋文文化財センター発掘調査報告書100:228-240
- 寺島孝典1999『長野盆地南部の様相』『99シンポジウム長野県の弥生土器編年発表要旨』長野県考古学会弥生部会:67-75
- 寺島孝典2001『成立期の栗林式土器』『長野県考古学会誌』93・94:5-16
- 寺島孝典2013『栗林式土器の成立と展開—栗林式土器編年の再確認と栗林式土器文化成立から終焉まで—』『一般社団法人日本考古学協会2013年度長野大会 研究発表資料集 文化の十字路 信州』:285-290
- 豊野町誌刊行委員会2001『弥生時代』『豊野町誌 豊野町の資料(一)』:188-211
- 中野市教育委員会2006『長野県中野市遺跡詳細分布図』
- 中野市教育委員会2014『長野県中野市遺跡詳細分布図(改訂版)』
- 長野県史刊行会1981『長野県史 考古資料編 遺跡地名表』
- 長野県埋文文化財センター1994『栗林遺跡・七瀬遺跡』長野県埋文文化財センター発掘調査報告書19
- 長野県埋文文化財センター1999『春山遺跡・春山B遺跡』長野県埋文文化財センター発掘調査報告書45

- 長野県埋蔵文化財センター 2000『松原遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 36
- 長野県埋蔵文化財センター 2012『中野市柳沢遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 100
- 長野県埋蔵文化財センター 2013『中野市川久保・宮沖遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 99
- 長野県埋蔵文化財センター 2016『南大原遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 111
- 長野市教育委員会 1986『浅川扇状地遺跡群—幸礼バイパス B・C・D 地点—』
- 長野市教育委員会・長野市埋蔵文化財センター 1988『浅川扇状地遺跡群 浅川端遺跡』
- 長野市埋蔵文化財センター 2004『浅川扇状地遺跡群 檀田遺跡 (2)』長野市の埋蔵文化財第 105 集
- 馬場伸一郎 2008『弥生中期・栗林式土器編年の再構築と分布論的研究』『国立歴史民俗博物館研究報告』145: 101-174
- 浜崎悟司 2014『弥生時代後期の「周溝状遺構」～稲の屋外積みについて～』『石川県埋蔵文化財情報』32: 27-38
- 水澤教子 2014『擬似縄文が施された土器』『森平遺跡 寄塚遺跡群 今井西原遺跡 今井宮の前遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 107: 171,172,175
- 矢口忠良 (編) 1986『塩崎遺跡群IV』長野市の埋蔵文化財第 18 集
- 八幡一郎 1933『有孔石剣の新資料』『考古学雑誌』23-1: 19



# 遺物観察表

- 1 土器観察表
  - 琵琶島遺跡 縄文時代土器観察表
  - 琵琶島遺跡 弥生時代土器観察表
  - 琵琶島遺跡 古墳時代土器観察表
  - 琵琶島遺跡 平安時代土器観察表
  - ねごや遺跡 弥生・平安時代土器観察表
- 2 石器観察表
  - 琵琶島遺跡 縄文・弥生時代石器観察表
- 3 土製品観察表
  - 琵琶島遺跡 弥生時代土製品観察表
- 4 石製品、ガラス製品観察表
  - 琵琶島遺跡 弥生時代石製品、ガラス製品観察表
- 5 金属製品観察表
  - 琵琶島遺跡 古墳時代鉄製品観察表
  - 琵琶島遺跡 平安時代鉄滓観察表



1 土器観察表  
琵琶島遺跡 縄文時代土器観察表

標本番号	産地	層位	形状	時期	口径φ	底径φ	高さ	容量 %	特徴	外底色調	内底色調	内底溝野	編土	装飾・文様	備考
第60281	PI.12	283	5S283	縄文前期後半	—	—	44.4	—	良好	褐色色 (Hue:376.2)	褐色色 (Hue:376.2)	縦線:ナナ 目少量	編土 母多量	縦線:ナナ 文の狭間横文(中央に縦文の狭間を伴う場合)	
第60282	PI.12	284	5S284	縄文前期後半	—	—	28.0	—	良好	褐色色 (Hue:376.2)	褐色色 (Hue:376.2)	縦線:ナナ 目少量	編土 母少量	縦線:ナナ 文の狭間横文(中央に縦文の狭間を伴う場合)	
第60283	PI.12	285	5S285	縄文前期後半	—	—	79.9	65.0%	良好	にじみ褐色 (Hue:376.2)	にじみ褐色 (Hue:376.2)	口縁部へ黒 い線がナナ 目より 目少	にじみ褐色 目少量	口縁部へ黒 い線がナナ 目より 目少	口縁部へ黒 い線がナナ 目より 目少
第60284	PI.12	276	5S276	縄文中期前半	—	—	13.6	—	良好	にじみ褐色 (Hue:376.4)	にじみ褐色 (Hue:376.4)	縦線:ナナ 目少量	にじみ褐色 目少量	口縁部へ黒 い線がナナ 目より 目少	
第60285	PI.12	279	5S279	縄文中期前半	—	—	33.2	65.0%	良好	にじみ褐色 (Hue:376.4)	にじみ褐色 (Hue:376.4)	縦線:ナナ 目少量	にじみ褐色 目少量	口縁部へ黒 い線がナナ 目より 目少	
第60286	PI.12	280	5S280	縄文中期前半	—	—	11.7	—	良好	にじみ褐色 (Hue:376.4)	にじみ褐色 (Hue:376.4)	縦線:ナナ 目少量	にじみ褐色 目少量	口縁部へ黒 い線がナナ 目より 目少	
第60287	PI.12	277	5S277	縄文中期後半	—	—	9.0	—	良好	褐色 (Hue:376.4)	褐色 (Hue:376.4)	縦線:ナナ 目少量	褐色 目少量	口縁部へ黒 い線がナナ 目より 目少	
第60288	PI.12	278	5S278	縄文中期後半	—	—	19.0	—	良好	褐色 (Hue:376.4)	褐色 (Hue:376.4)	縦線:ナナ 目少量	褐色 目少量	口縁部へ黒 い線がナナ 目より 目少	
第60289	PI.12	281	5S281	縄文中期後半	—	—	8.1	—	良好	褐色 (Hue:376.4)	褐色 (Hue:376.4)	縦線:ナナ 目少量	褐色 目少量	口縁部へ黒 い線がナナ 目より 目少	
第60290	PI.12	272	5S272	縄文中期後半	—	—	9.5	—	良好	褐色 (Hue:376.4)	褐色 (Hue:376.4)	縦線:ナナ 目少量	褐色 目少量	口縁部へ黒 い線がナナ 目より 目少	
第60291	PI.12	242	5S242	縄文中期後半	—	—	41.1	—	良好	にじみ褐色 (Hue:376.4)	にじみ褐色 (Hue:376.4)	縦線:ナナ 目少量	にじみ褐色 目少量	口縁部へ黒 い線がナナ 目より 目少	
第60292	PI.12	243	5S243	縄文中期後半	—	—	36.3	—	良好	褐色 (Hue:376.4)	褐色 (Hue:376.4)	縦線:ナナ 目少量	褐色 目少量	口縁部へ黒 い線がナナ 目より 目少	
第60294	PI.12	188	5S188	縄文前期後半	—	—	9.6	—	良好	褐色 (Hue:376.4)	褐色 (Hue:376.4)	縦線:ナナ 目少量	褐色 目少量	口縁部へ黒 い線がナナ 目より 目少	
第60295	PI.12	149	5S149	縄文前期後半	—	—	23.2	—	良好	褐色 (Hue:376.4)	褐色 (Hue:376.4)	縦線:ナナ 目少量	褐色 目少量	口縁部へ黒 い線がナナ 目より 目少	
第60296	PI.12	20	5S20	縄文前期後半	—	—	14.8	—	良好	褐色 (Hue:376.4)	褐色 (Hue:376.4)	縦線:ナナ 目少量	褐色 目少量	口縁部へ黒 い線がナナ 目より 目少	
第60297	PI.12	161	5S161	縄文中期前半	—	—	8.1	—	良好	褐色 (Hue:376.4)	褐色 (Hue:376.4)	縦線:ナナ 目少量	褐色 目少量	口縁部へ黒 い線がナナ 目より 目少	
第60298	PI.12	17	5S17	縄文中期前半	—	—	9.8	—	良好	褐色 (Hue:376.4)	褐色 (Hue:376.4)	縦線:ナナ 目少量	褐色 目少量	口縁部へ黒 い線がナナ 目より 目少	
第60299	PI.12	361	5S361	縄文前期後半	—	—	9.5	—	良好	褐色 (Hue:376.4)	褐色 (Hue:376.4)	縦線:ナナ 目少量	褐色 目少量	口縁部へ黒 い線がナナ 目より 目少	
第60300	PI.12	87	5S87	縄文前期後半	—	—	32.9	65.0%	良好	褐色 (Hue:376.4)	褐色 (Hue:376.4)	縦線:ナナ 目少量	褐色 目少量	口縁部へ黒 い線がナナ 目より 目少	
第60301	PI.12	21	5S21	縄文前期後半	—	—	28.4	—	良好	褐色 (Hue:376.4)	褐色 (Hue:376.4)	縦線:ナナ 目少量	褐色 目少量	口縁部へ黒 い線がナナ 目より 目少	





種別 番号	種名 P.N.	管理 番号	種名 漢字	種名 ローマ字	種名 漢字	部位	材質	口径φ	長さmm	底径φ	容量 %	吸収	外観色調	内観色調	内装調整	触土	気味・文様	備考
第672008	P.13	115	濃青外 扉付1段扉	濃青外 扉付1段扉	扉部	扉部	縦文表裏面平	—	—	—	48.0	良好	褐色 (Hue:2.0396.4)	褐色 (Hue:2.0396.4)	刷部:コナダ 刷部:コナダ	濃青外・濃青内 扉部:白皮砂 扉部:濃青	刷部:種草工目による気味 扉部:白皮砂 扉部:濃青	刷部:種草工目による気味 扉部:白皮砂 扉部:濃青
第672009	P.13	204	濃青外 扉付1段扉	濃青外 扉付1段扉	扉部	扉部	縦文表裏面平	—	—	—	18.0	良好	濃い褐色 (Hue:1.0378.2)	濃い褐色 (Hue:1.0378.2)	刷部:コナダ	白皮砂・濃青 扉部:濃青	刷部:種草工目による気味 扉部:濃青	刷部:種草工目による気味 扉部:濃青
第672010	P.13	137	濃青外 扉付2段扉 扉付2段扉	濃青外 扉付2段扉 扉付2段扉	扉部	扉部	縦文表裏面平	—	—	—	84.6	良好	濃い褐色 (Hue:1.0378.2)	濃い褐色 (Hue:1.0378.2)	刷部:コナダ 刷部:コナダ	白皮砂・濃青 扉部:濃青	刷部:種草工目による気味 扉部:濃青	刷部:種草工目による気味 扉部:濃青
第672012	P.13	279	濃青外 扉付1段扉	濃青外 扉付1段扉	扉部	扉部	縦文表裏面平	—	—	—	20.7	良好	濃い褐色 (Hue:1.0378.2)	濃い褐色 (Hue:1.0378.2)	刷部:コナダ 刷部:コナダ	白皮砂・濃青 扉部:濃青	刷部:種草工目による気味 扉部:濃青	刷部:種草工目による気味 扉部:濃青
第672013	P.13	116(2)	濃青外 扉付1段扉	濃青外 扉付1段扉	扉部	扉部	縦文表裏面平	—	—	—	17.0	良好	濃い褐色 (Hue:1.0378.2)	濃い褐色 (Hue:1.0378.2)	刷部:コナダ 刷部:コナダ	白皮砂・濃青 扉部:濃青	刷部:種草工目による気味 扉部:濃青	刷部:種草工目による気味 扉部:濃青
第672014	P.13	116(1)	濃青外 扉付1段扉	濃青外 扉付1段扉	扉部	扉部	縦文表裏面平	—	—	—	26.0	良好	濃い褐色 (Hue:1.0378.2)	濃い褐色 (Hue:1.0378.2)	刷部:コナダ	白皮砂 扉部:濃青	刷部:種草工目による気味 扉部:濃青	刷部:種草工目による気味 扉部:濃青
第672015	P.14	114	扉付1段扉 扉付1段扉	扉付1段扉 扉付1段扉	扉部	扉部	縦文表裏面平	33.0	(7.8)	—	205.0	良好	濃い褐色 (Hue:1.0378.2)	濃い褐色 (Hue:1.0378.2)	刷部:コナダ 刷部:コナダ	白皮砂・濃青 扉部:濃青	刷部:種草工目による気味 扉部:濃青	刷部:種草工目による気味 扉部:濃青
第672016	P.14	413	濃青外 扉付1段扉	濃青外 扉付1段扉	扉部	扉部	縦文表裏面平	—	—	—	219.4	良好	濃い褐色 (Hue:1.0378.2)	濃い褐色 (Hue:1.0378.2)	刷部:コナダ	白皮砂・濃青 扉部:濃青	刷部:種草工目による気味 扉部:濃青	刷部:種草工目による気味 扉部:濃青
第672019	P.14	295	濃青外 扉付1段扉	濃青外 扉付1段扉	扉部	扉部	縦文表裏面平	—	—	—	32.2	良好	濃い褐色 (Hue:1.0378.2)	濃い褐色 (Hue:1.0378.2)	刷部:コナダ	白皮砂・濃青 扉部:濃青	刷部:種草工目による気味 扉部:濃青	刷部:種草工目による気味 扉部:濃青
第672020	P.14	304	濃青外 扉付1段扉	濃青外 扉付1段扉	扉部	扉部	縦文表裏面平	—	—	—	9.6	良好	褐色 (Hue:0.031.4)	褐色 (Hue:0.031.4)	刷部:コナダ	濃青	刷部:種草工目による気味 扉部:濃青	刷部:種草工目による気味 扉部:濃青
第672021	P.14	295	濃青外 扉付1段扉	濃青外 扉付1段扉	扉部	扉部	縦文表裏面平	—	—	—	16.0	良好	濃い褐色 (Hue:1.0378.2)	濃い褐色 (Hue:1.0378.2)	刷部:コナダ	白皮砂・濃青 扉部:濃青	刷部:種草工目による気味 扉部:濃青	刷部:種草工目による気味 扉部:濃青
第672022	P.14	284	濃青外 扉付1段扉	濃青外 扉付1段扉	扉部	扉部	縦文表裏面平	—	—	—	17.6	良好	濃い褐色 (Hue:1.0378.2)	濃い褐色 (Hue:1.0378.2)	刷部:コナダ	白皮砂・濃青 扉部:濃青	刷部:種草工目による気味 扉部:濃青	刷部:種草工目による気味 扉部:濃青
第672023	P.14	282	濃青外 扉付2段扉	濃青外 扉付2段扉	扉部	扉部	縦文表裏面平	—	(2.7)	8.7	177.0	20 4×4良好	濃い褐色 (Hue:1.0378.2)	濃い褐色 (Hue:1.0378.2)	刷部:コナダ 刷部:コナダ	濃青	刷部:種草工目による気味 扉部:濃青	刷部:種草工目による気味 扉部:濃青
第672024	P.14	281	濃青外 扉付1段扉	濃青外 扉付1段扉	扉部	扉部	縦文表裏面平	—	(1.9)	19.5	206.3	10 4×4良好	濃い褐色 (Hue:1.0378.2)	濃い褐色 (Hue:1.0378.2)	刷部:コナダ 刷部:コナダ	濃青	刷部:種草工目による気味 扉部:濃青	刷部:種草工目による気味 扉部:濃青
第672025	P.14	07	濃青外 扉付1段扉	濃青外 扉付1段扉	扉部	扉部	縦文表裏面平	—	(3.5)	(10.3)	259.0	良好	濃い褐色 (Hue:1.0378.2)	濃い褐色 (Hue:1.0378.2)	刷部:コナダ 刷部:コナダ	濃青	刷部:種草工目による気味 扉部:濃青	刷部:種草工目による気味 扉部:濃青
第672026	P.14	64	濃青外 扉付1段扉	濃青外 扉付1段扉	扉部	扉部	縦文表裏面平	—	—	—	234.0	良好	濃い褐色 (Hue:1.0378.2)	濃い褐色 (Hue:1.0378.2)	刷部:コナダ 刷部:コナダ	濃青	刷部:種草工目による気味 扉部:濃青	刷部:種草工目による気味 扉部:濃青

※上記内容欄の1は濃青表裏材、2は濃青裏材、3は濃青裏材、4は濃青裏材















掲載 番号	報告 番号	報告 機関名	自治小庁	計画	地位	時期	12月 達成率	12月 達成率	12月 達成率	達成 率(%)	備考
第0502121	121	246	246	1,307地上層	農	継続	85.7	85.7	—	5.6	—
第0502122	122	237	237	1,312地上層	農	継続	85.7	85.7	—	5.7	—
第0502123	123	231	231	1,311地上層	農	継続	85.7	85.7	—	14.3	—
第0502124	124	209	209	1,317地上層	農	継続	85.7	85.7	—	7.8	—
第0502125	125	200	200	1,317地上層	農	継続	85.7	85.7	—	4.3	—
第0502126	126	236	236	1,307地上層	農	継続	85.7	85.7	—	10.3	—
第0502127	127	189	189	1,020	農	継続	85.7	85.7	—	10.8	—
第0502128	128	198	198	1,307地上層	農	継続	85.7	85.7	—	9.3	—
第0502129	129	321	321	1,316地上層	農	継続	85.7	85.7	—	11.9	—
第0502130	130	213	213	1,316地上層	農	継続	85.7	85.7	—	14.3	—
第0502131	131	262	262	1,311地上層	農	継続	85.7	85.7	—	5.6	—
第0502132	132	317	317	1,316地上層	農	継続	85.7	85.7	—	23.3	—
第0502133	133	226	226	1,312地上層	農	継続	85.7	85.7	—	7.5	—
第0602134	134	207	207	1,312地上層	農	継続	85.7	85.7	—	84.9	—
第0602135	135	209	209	1,312地上層、 1,312地上層	農	継続	85.7	85.7	—	13.7	—
第0602136	136	177	177	1,316地上層、 1,316地上層	農	継続	85.7	85.7	—	31.4	—
第0602137	137	176	176	1,302地上層	農	継続	85.7	85.7	—	5.4	—
第0602138	138	183	183	1,312地上層、 1,312地上層	農	継続	85.7	85.7	—	82.4	—
第0602139	139	226	226	1,312地上層	農	継続	85.7	85.7	—	100.7	—
第0602140	140	236	236	1,312地上層	農	継続	85.7	85.7	—	27.1	—
第0602141	141	175	175	1,302地上層	農	継続	85.7	85.7	—	17.3	—

掲載順 番号	掲載 代 番号	種名 学名	標本 産地	採集 年月	採集 地	標高	緯度	経度	標本 採取者	標本 番号	標本 サイズ	標本 長さ	標本 幅	標本 厚	標本 重量	標本 状態	標本 備考	標本 写真
00000101	P.21	149-2	標本内	1954	標本内	1517東上州			標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本
00000102	P.21	200	標本内	1954	標本内	1517東上州			標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本
00000103	P.21	244	標本内	1954	標本内	1517東上州			標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本
00000104	P.21	343	標本内	1954	標本内	1517東上州			標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本
00000105	P.21	410	標本内	1954	標本内	1517東上州			標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本
00000106	P.21	452	標本内	1954	標本内	1517東上州			標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本
00000107	P.21	511	標本内	1954	標本内	1517東上州			標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本
00000108	P.21	579	標本内	1954	標本内	1517東上州			標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本
00000109	P.21	716	標本内	1954	標本内	1517東上州			標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本
00000110	P.21	265	標本内	1954	標本内	1517東上州			標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本
00000111	P.21	219	標本内	1954	標本内	1517東上州			標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本
00000112	P.21	217	標本内	1954	標本内	1517東上州			標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本
00000113	P.21	692	標本内	1954	標本内	1517東上州			標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本
00000114	P.21	244	標本内	1954	標本内	1517東上州			標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本
00000115	P.21	281	標本内	1954	標本内	1517東上州			標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本
00000116	P.21	392	標本内	1954	標本内	1517東上州			標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本
00000117	P.21	207	標本内	1954	標本内	1517東上州			標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本
00000118	P.21	282	標本内	1954	標本内	1517東上州			標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本
00000119	P.21	307	標本内	1954	標本内	1517東上州			標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本
00000120	P.21	400	標本内	1954	標本内	1517東上州			標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本
00000121	P.21	294	標本内	1954	標本内	1517東上州			標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本
00000122	P.21	299	標本内	1954	標本内	1517東上州			標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本	標本





















琵琶島遊跡 平安時代土器観察表

器名 器種	器高 cm	口径 cm	口縁φ cm	底径φ cm	体高 cm	容量 L	重量 g	形状	用途	産地	特徴	備考
第060101 P.29	56	36.25	—	2.6	4.6	—	43.5	30貝持	平安定	口縁部～底径部	土器跡部	白釉施部(器底) 白釉施部(器底)
第060102 P.29	306	36.25	36.25	—	—	—	62.9	28貝持	平安定	口縁部～底径部	器	白釉施部(器底) 白釉施部(器底)
第060103 P.29	367	36.25	36.25	—	—	—	116.0	19貝持	平安定	口縁部～底径部	器	白釉施部(器底) 白釉施部(器底)
第060104 P.29	306	36.25	36.25	—	—	—	69.0	9貝持	平安定	口縁部～底径部	器	白釉施部(器底) 白釉施部(器底)
第060105 P.29	119	37.0	—	—	—	—	73.5	28貝持	平安定	口縁部～底径部	器	白釉施部(器底) 白釉施部(器底)
第060106 P.29	10	26.0	—	—	—	—	89.0	40×19.4	平安定	口縁部～底径部	器	白釉施部(器底) 白釉施部(器底)
第060107 P.29	77	26.0	—	—	—	—	36.0	28貝持	平安定	口縁部～底径部	器	白釉施部(器底) 白釉施部(器底)
第060108 P.29	6	26.0	—	—	—	—	22.0	38貝持	平安定	口縁部～底径部	器	白釉施部(器底) 白釉施部(器底)
第060109 P.29	66	26.0	—	—	—	—	64.0	38貝持	平安定	口縁部～底径部	器	白釉施部(器底) 白釉施部(器底)
第060110 P.29	6	26.0	—	—	—	—	34.0	38貝持	平安定	口縁部～底径部	器	白釉施部(器底) 白釉施部(器底)
第060111 P.29	107	26.0	—	—	—	—	69.5	29貝持	平安定	口縁部～底径部	器	白釉施部(器底) 白釉施部(器底)
第060112 P.29	66	26.0	—	—	—	—	60.0	38貝持	平安定	口縁部～底径部	器	白釉施部(器底) 白釉施部(器底)
第060113 P.29	67	26.0	—	—	—	—	115.0	28貝持	平安定	口縁部～底径部	器	白釉施部(器底) 白釉施部(器底)
第060114 P.29	29	26.0	—	—	—	—	3.3	—貝持	平安定	口縁部～底径部	器	白釉施部(器底) 白釉施部(器底)
第060115 P.29	156	26.0	—	—	—	—	35.1	—貝持	平安定	口縁部～底径部	器	白釉施部(器底) 白釉施部(器底)
第060116 P.29	222	26.0	—	—	—	—	18.0	18×19.6	平安定	口縁部～底径部	器	白釉施部(器底) 白釉施部(器底)
第060117 P.29	125	26.0	—	—	—	—	74.0	19貝持	平安定	口縁部～底径部	器	白釉施部(器底) 白釉施部(器底)
第060118 P.29	255	26.0	—	—	—	—	31.5	19貝持	平安定	口縁部～底径部	器	白釉施部(器底) 白釉施部(器底)
第060119 P.29	272	26.0	—	—	—	—	12.0	—貝持	平安定	口縁部～底径部	器	白釉施部(器底) 白釉施部(器底)
第060120 P.29	1307	26.0	—	—	—	—	178.1	—貝持	平安定	口縁部～底径部	器	白釉施部(器底) 白釉施部(器底)

\*口縁部・底径部・器底部に○は口縁部・底径部、□は器底部

ねごや遺跡 弥生・平安時代土器調査表

調査番号	発掘番号	注記内容	器種	部位	時期	口径 cm	器高 cm	底径 cm	重量 g	保存率 %	構成	外面色調	外装調整・文様	内装調整	粘土	備考
第11281	№143, S001a	黒土器小片	口縁部~底面	平安	14.4	4.2	7.0	170.69	70	良好	こげい・褐色 (Hue:3YR5/6)	同色:同輪コナナブ 底面:同輪赤褐色	外側:同輪コナナブ一層 色地帯一帯以外	赤灰土質 赤灰土質	内面黒色で充ち	
第11282	№43, №46	須恵器片	口縁部~底面	平安	<12.4>	4.0	<6.0>	37.65	30	良好	灰白色 (Hue:5YR7/1)	同色:同輪コナナブ 底面:同輪赤褐色	同色:同輪コナナブ	赤灰少量		
第11283	№57, №129	須恵器蓋	フタ部~身部	平安	—	3.0	—	63.44	29	良好	灰青褐色 (Hue:10Y5.5/2)	同色:同輪コナナブ フタ部	同色:同輪コナナブ	白色砂状土質		
第11284	№126, S001a, 小字	土師器 小字	口縁部~底面	平安	<10.6>	3.3	—	7.59	10	やや不良	黒褐色 (Hue:10YR3/2)	同色:同輪コナナブ	同色:同輪コナナブ 口縁部:同輪コナナブ 口縁部:同輪赤褐色	同色:同輪コナナブ		
第11285	№185, №186, №191, S001a	土師器	口縁部~底面	平安	<25.0>	3.3	—	85.83	10	良好	褐色 (Hue:5YR6/6)	同色:同輪コナナブ フタ部	同色:同輪コナナブ 口縁部:同輪コナナブ 口縁部:同輪赤褐色	同色:同輪コナナブ		
第11286	14129	土師器	口縁部~底面	平安	<26.8>	5.7	—	58.17	19	良好	赤褐色 (Hue:5YR5/6)	同色:同輪コナナブ フタ部	同色:同輪コナナブ 口縁部:同輪コナナブ 口縁部:同輪赤褐色	同色:同輪コナナブ		
第11287	11№173	須恵器	底面	平安	—	—	—	230.4	—	良好	褐色 (Hue:5YR7/3)	同色:同輪コナナブ フタ部	同色:同輪コナナブ 口縁部:同輪コナナブ 底面:同輪赤褐色	同色:同輪コナナブ		
第11288	13№123	須恵器	胴部	平安	—	—	—	31.17	—	良好	灰白色 (Hue:5Y5/0)	同色:同輪コナナブ フタ部	同色:同輪コナナブ 口縁部:同輪コナナブ 底面:同輪赤褐色	同色:同輪コナナブ		
第11289	10№1, №51, №138	土師器	胴部	平安	—	—	—	25.55	—	良好	こげい・褐色 (Hue:3YR7/3)	同色:同輪コナナブ フタ部	同色:同輪コナナブ 口縁部:同輪コナナブ 底面:同輪赤褐色	同色:同輪コナナブ		
第11290	1614 Ⅱa層	須恵器	胴部	平安	—	—	—	84.75	—	良好	灰青褐色 (Hue:10YR3/2)	同色:同輪コナナブ フタ部	同色:同輪コナナブ 口縁部:同輪コナナブ 底面:同輪赤褐色	同色:同輪コナナブ		
第11291	15105 I層	須恵器	胴部	平安	—	—	—	45.64	—	良好	褐色 (Hue:5Y7/1)	同色:同輪コナナブ フタ部	同色:同輪コナナブ 口縁部:同輪コナナブ 底面:同輪赤褐色	同色:同輪コナナブ		
第11292	18113 Z	陶鉢	胴部	縄文早期前半	—	—	—	18.5	—	やや不良	こげい・赤褐色 (Hue:10YR3/3)	同色:同輪コナナブ フタ部	同色:同輪コナナブ 口縁部:同輪コナナブ 底面:同輪赤褐色	同色:同輪コナナブ		
第11293	17116 I層	土師器	口縁部	弥生時代後葉	—	—	—	37.79	—	良好	褐色 (Hue:10YR4/6)	同色:同輪コナナブ フタ部	同色:同輪コナナブ 口縁部:同輪コナナブ 底面:同輪赤褐色	同色:同輪コナナブ	赤影(内・外両面)	

\*口径・器高・底径欄 <>:二層互置 (口縁互置)

## 2 石器観察表

琵琶島遺跡 縄文・弥生時代石器観察表

掲載図番号	掲載順 番号	管理 番号	遺物名	出土地点	注記	器種	石材	長さmm	幅mm	厚さmm	重量g	備考
第69図01	PL14-15	1073	遺物外	Ⅱ-02 溝	未注記	有蓋丸型器	珪質頁岩	(9.0)	13.6	4.3	3.0	
第69図2	PL14-15	1083	遺物外	埋土層 フルイ	SK191 溝層フルイ	石籠	黒曜石	30.8	11.2	4.4	0.8	古墳時代の遺構に属入
第69図3	PL14-15	1082	遺物外	Ⅱ-12 掘出面	Ⅱ-12 溝	石籠木炭灰	安山岩	28.5	19.2	6.3	3.2	
第69図4	PL14-15	1033	遺物外	溝層外	東-2	石籠木炭灰	鉄石英	(36.2)	23.8	7.1	(4.2)	
第69図5	PL14-15	1078	遺物外	Ⅱ-01 掘出面	未注記	石籠	安山岩	25.5	33.0	3.5	3.7	
	PL13	1045	遺物外	Ⅱ-02 カマツ	Ⅱ-02 カマツ	石籠	安山岩	36.7	27.4	7.7	9.0	
第69図6	PL14-15	1052	遺物外	Ⅱ-01 溝層外	Ⅱ-01 溝層外	石籠	安山岩	(64.7)	32.0	15.8	(30.8)	
第69図7	PL15	1068	遺物外	Ⅱ-01 溝層外	Ⅱ-01 溝層外	石籠	安山岩	107.0	84.0	52.0	340.2	
第69図8	PL13	1036	遺物外	Ⅱ-12 掘出面	Ⅱ-12 掘出面	石籠	チーク	30.0	21.5	16.0	10.8	
第69図9	PL13	1052	遺物外	Ⅱ-12 掘出面	Ⅱ-12 掘出面	石籠	安山岩	78.0	43.5	27.4	79.6	
第69図10	PL13	1039	遺物外	掘出面	西	石籠	安山岩	109.0	50.0	59.0	151.7	
第69図11	PL13	1040	遺物外	Ⅱ-01 掘出面	Ⅱ-01 掘出面	石籠	頁岩	(95.0)	75.0	15.2	(129.3)	
第69図12	PL16	1068	遺物外	Ⅱ-01 掘出面	Ⅱ-01 掘出面	石籠	黒石安山岩	162.5	116.0	23.0	533.4	
第69図13	PL13	1053	遺物外	北掘出面	東-北-上 段	磨製石斧	安山岩	(159.0)	47.0	29.0	(340.0)	石柄は近心の番通
第69図14	PL16	1062	遺物外	北掘出面	東-北-下 段	磨製石斧	黒曜岩	(90.5)	(46.8)	8.5	(18.3)	
第69図15	PL14-16	1075	遺物外	掘出面	東-北-上 段	磨製石斧	黒曜岩	(148.0)	61.0	40.0	(692.2)	
第69図16	PL14-16	1008	遺物外	掘出面	東-北-上 段	磨製石斧	黒曜岩	(99.0)	65.0	11.5	(64.8)	磨製は砥石跡は付石
第70図01	PL14-16	1020	遺物外	Ⅱ-02 S-5	SK191 溝	石籠	黒石安山岩	112.5	(66.0)	32.0	(237.1)	
第70図02	PL14-16	1021	遺物外	Ⅱ-02 S-5	SK174 溝	石籠	砂岩	66.0	60.0	16.0	90.3	SK174はST159にS変更 SK174はST158に147の修正
第70図03	PL14-16	1011	遺物外	Ⅱ-02 S-5	SK174 溝	石籠	石英閃緑岩	(106.0)	80.5	38.0	(397.0)	
第70図04	PL14-16	1012	遺物外	Ⅱ-02 S-5	SK174 溝	石籠	砂岩	105.0	79.0	38.0	308.2	SI002西側出土遺物、遺構外にS変更 部分的に磨製し変色
第70図05	PL14-16	1013	遺物外	Ⅱ-02 S-5	SK174 溝	石籠	砂岩	96.0	83.0	38.0	367.7	
第70図06	PL14-16	1013	遺物外	Ⅱ-02 S-5	SK174 溝	石籠	砂岩	123.0	49.0	27.0	240.6	
第70図07	PL14-16	1012	遺物外	Ⅱ-02 S-5	SK174 溝	石籠	砂岩	123.0	48.0	24.5	228.5	
第70図08	PL14-16	1000	遺物外	Ⅱ-02 S-5	SK174 溝	石籠	砂岩	164.0	73.5	53.0	856.4	
第70図09	PL14-16	1009	遺物外	Ⅱ-02 S-5	SK174 溝	石籠	砂岩	112.0	96.5	38.0	398.4	SI002西側出土遺物、遺構外にS変更 部分的に磨製し変色
第70図10	PL14-16	1004	遺物外	Ⅱ-02 S-5	SK174 溝	石籠	砂岩	112.0	83.5	60.5	416.5	SI002西側出土遺物、遺構外にS変更
第70図11	PL14-16	1005	遺物外	Ⅱ-02 S-5	SK174 溝	石籠	砂岩	154.0	66.0	72.5	859.7	
第70図12	PL16	1027	遺物外	Ⅱ-02 S-5	SK174 溝	石籠	砂岩	251.0	218.0	65.0	690.0	SI002西側出土遺物、遺構外にS変更
第70図13	PL16	1028	遺物外	Ⅱ-02 S-5	SK174 溝	石籠	砂岩	252.0	200.0	90.0	630.0	SI002西側出土遺物、遺構外にS変更
第71図26	PL14-16	1089	SP01	Ⅱ-02 S-5	SK174 溝	石籠	砂岩	408.0	325.0	119.0	23100.0	
第71図27	PL14-16	1087	SP01	Ⅱ-02 S-5	SK174 溝	石籠	砂岩	32.0	(16.1)	5.5	(2.2)	中野市試験資料
第71図28	PL14-16	1088	SP01	Ⅱ-02 S-5	SK174 溝	石籠	砂岩	22.6	12.1	4.7	1.0	中野市試験資料
第71図29	PL14-16	1090	SP01	Ⅱ-02 S-5	SK174 溝	石籠	砂岩	(19.1)	12.8	3.4	(0.8)	中野市試験資料
第71図30	PL14-16	1091	SP01	Ⅱ-02 S-5	SK174 溝	石籠	砂岩	25.4	22.8	8.3	5.5	中野市試験資料
第71図31	PL14-16	1112	SP01	Ⅱ-02 S-5	SK174 溝	石籠	砂岩	23.0	29.2	8.9	6.9	中野市試験資料
第71図32	PL14-16	1092	SP01	Ⅱ-02 S-5	SK174 溝	石籠	砂岩	87.5	34.4	16.5	47.7	中野市試験資料
第71図33	PL14-16	1092	SP01	Ⅱ-02 S-5	SK174 溝	石籠	砂岩	51.2	23.7	8.7	16.5	中野市試験資料

\*長さ・幅・重量(括弧)内の数字は改修値



### 3 土製品観察表

#### 琵琶島遺跡 弥生時代土製品観察表

発掘調査 単位	調査 年度	調査 位置	器種	時期	長さcm	幅cm	厚さcm	地質	外面色調	外面調紋	外面調紋 ハケ→シガク ミガキ ナメハケ ヨコシガク	内面調紋	内面調紋	断面調紋	断面調紋	土質	重量kg	備考
第948037	P1.26	436	S801	2010BYCM I S21 IIIA.10	弥生中期後半	3.3	0.6	良好	にぶい、茶褐色 (Hb07.5V105.4)	ハケ→シガク	ナメ	茶褐色 (Hb07.5V105.3)	ナメ	茶褐色 (Hb07.5V105.3)	白色砂粒・茶色 少量	6.0	遺跡破壊前再利用	
第948038	P1.26	437	S801	2010BYCM I S21 IIIA.10	弥生中期後半	3.3	3.7	0.6	良好	茶褐色 (Hb07.5V105.4)	ナメ	茶褐色 (Hb07.5V105.3)	ナメ	茶褐色 (Hb07.5V105.3)	白色砂粒少量	7.0	遺跡破壊前再利用	
第948039	P1.27	276	遺跡外 扉取-2	2010BYCM I S21 IIIA.10	弥生中期後半	5	0.8	良好	黄褐色 (Hb07.5V105.6)	ナメハケ	ヨコシガク	茶褐色 (Hb07.5V106.4)	ナメハケ	茶褐色 (Hb07.5V106.4)	白色砂粒少量、 茶色少量	12.9	鎌倉北条(赤)館 遺跡破壊前再利用	
第948040	P1.27	286	遺跡外 扉取-2	2010BYCM I S21 IIIA.10	弥生中期後半	4.7	0.7	良好	茶褐色 (Hb07.5V105.4)	ナメ	ナメ	茶褐色 (Hb07.5V106.4)	ナメ	茶褐色 (Hb07.5V106.4)	白色砂粒少量、 茶色少量	9.3	鎌倉北条(赤)館、 遺跡破壊前再利用	
第948042	P1.27	291	遺跡外 扉取-2	2010BYCM I S21 IIIA.10	弥生中期後半	3.1	0.6	良好	茶褐色 (Hb07.5V105.4)	ナメ	ナメ	茶褐色 (Hb07.5V106.4)	ナメ	茶褐色 (Hb07.5V106.4)	白色・茶色砂粒 少量、茶色少量	12.3	鎌倉北条(赤)館、 遺跡破壊前再利用	
第948043	P1.27	79	遺跡外 扉取-2	2010BYCM I S21 IIIA.10	弥生中期後半	3.3	3.7	0.6	良好	黄褐色 (Hb07.5V103.1)	ヨコシガク	茶褐色 (Hb07.5V105.4)	ナメハケ	茶褐色 (Hb07.5V105.4)	含有物なし	10.0	鎌倉北条(赤)館、 遺跡破壊前再利用	
第948044	P1.27	144	遺跡外 扉取-2	2010BYCM I S21 IIIA.10	弥生中期後半	3.6	0.7	良好	にぶい、茶褐色 (Hb07.5V105.3)	ナメ	ナメ	茶褐色 (Hb07.5V105.3)	ナメ	茶褐色 (Hb07.5V105.3)	白色砂粒少量、 茶色少量	8.9	遺跡破壊前再利用	
第948045	P1.27	133	遺跡外 扉取-2	2010BYCM I S21 IIIA.10	弥生中期後半	3.7	3.4	0.7	良好	黄褐色 (Hb07.5V105.6)	ナメ	茶褐色 (Hb07.5V106.3)	ナメ	茶褐色 (Hb07.5V106.3)	白色砂粒少量、 茶色少量	9.0	遺跡破壊前再利用	
第948046	P1.27	256	遺跡外 扉取-2	2010BYCM I S21 IIIA.10	不明	0.3	1.1	やや良好	黄褐色 (Hb07.5V103.3)	ナメ	ナメ	茶褐色 (Hb07.5V103.3)	ナメ	茶褐色 (Hb07.5V103.3)	白色・茶色砂粒 少量	7.4	琵琶島遺跡 (Hb07.5V103.3)	

### 4 石製品、ガラス製品観察表

#### 琵琶島遺跡 弥生時代石製品、ガラス製品観察表

発掘調査 番号	掲載 PL	管理 番号	報告 番号	出土地点	器種	材質	長さmm	幅mm	重さg	備考
第948041	P1.27	1085	遺跡外	I S22 IIIA.層	管玉	碧玉(緑色凝灰岩)	19.5	6.7	1.5	厚部穿孔φ2~3mm、旧丸子町島羽山内村遺跡版、土層作吹上遺跡との関連
第948042	P1.27	2001	遺跡外	I X17 黒色土上面	ガラス小玉	ガラス	5.8	4.5	0.2	穿孔φ1~2mm

### 5 金属製品観察表

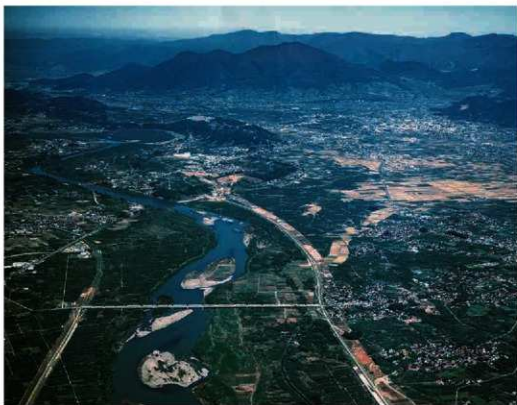
#### 琵琶島遺跡 古墳時代鉄製品観察表

発掘調査 番号	掲載 PL	管理 番号	報告 番号	出土層位	器種	材質	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	備考
第948041	P1.28	3001	SK191	1層下部	ロクロガンナ	鉄	28.5	1.1	0.4	46.8	刃部長:1.4cm、県内初出、龍洞遺物台帳番号82

### 琵琶島遺跡 平安時代鉄器観察表

発掘 番号	管理 番号	報告 番号	出土層位	器種	材質	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	備考	
P1.29	1	3002	SK361	1層	龍洞遺物台帳番号59	鉄	8.5	8.3	6.3	217.1	龍洞遺物台帳番号59
P1.29	2	3003	SK361	1層	龍洞遺物台帳番号60	鉄	8.1	5.0	3.2	121.8	龍洞遺物台帳番号60
P1.29	3	3004	SK361	1層	龍洞遺物台帳番号61	鉄	3.5	3.5	3.0	18.7	楯土付着、龍洞遺物台帳番号61
P1.29	4	3005	SK361	1層	龍洞遺物台帳番号62	鉄	2.5	2.5	2.3	5.0	楯土付着、龍洞遺物台帳番号62
P1.29	5	3006	SK361	1層	龍洞遺物台帳番号63	鉄	3.2	3.5	2.9	25.9	楯土付着、龍洞遺物台帳番号63
P1.29	6	3007	SK361	1層	龍洞遺物台帳番号64	鉄	2.6	3.1	2.1	13.8	楯土付着、龍洞遺物台帳番号64
P1.29	7	3008	SK361	北平分一拵	金床石	石	3.1	2.4	0.9	4.3	龍洞遺物台帳番号65
P1.29	8	3009	SK361	1層	龍洞遺物台帳番号66	鉄	3.0	3.8	1.5	12.2	楯土付着、龍洞遺物台帳番号66

# 写真図版



南方上空より高社山を望む（平成4年撮影）





琵琶島遺跡から高社山を望む



琵琶島遺跡の入口



上位段丘の掘立柱建物跡群



下位段丘に並ぶ遺構群（竪穴住居跡、掘立柱建物跡、溝溝跡、欄跡）



基本層序 (東区中央シ地点南壁)



基本層序 (南区北側ホ地点北壁)



SB01 検出状況



SB01



SB01 跡



SB02 遺物出土状況



SB02



SB02 掘方



ST01



ST02



ST03



ST04



ST05



ST06



ST07



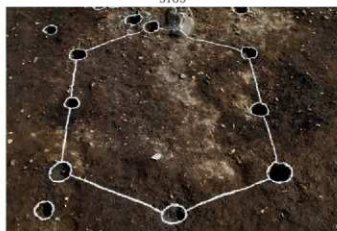
ST08



ST09



ST10



ST11



ST12



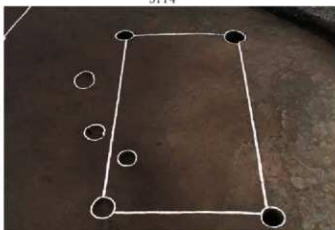
ST13



ST14



ST15



ST16





上空からのST17～19



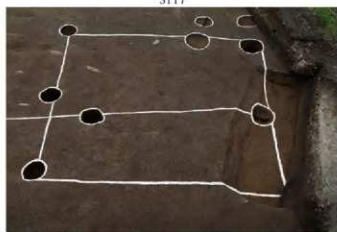
ST17 Pit1 断面



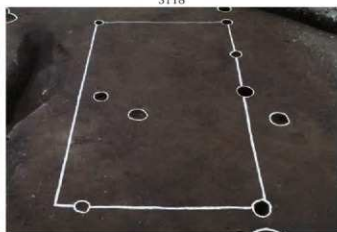
ST17



ST18



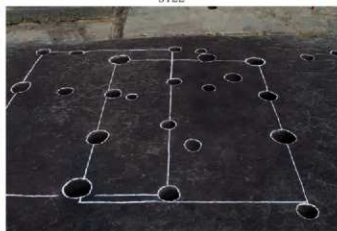
ST19



ST22



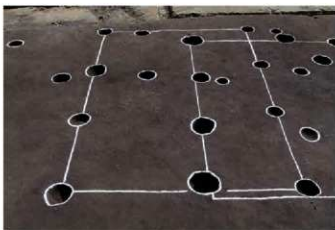
ST23



ST24



ST24 Pit2



ST25



ST24・25



ST26



ST27



SD01・02・03の距離



SD01 検出状況



SD01 断面



SD01 縦断面



SD01



SD02 検出状況



SD02



SD03 検出状況



SD03 先端部断面



SD03



SD04



SD05



SA01 検出状況



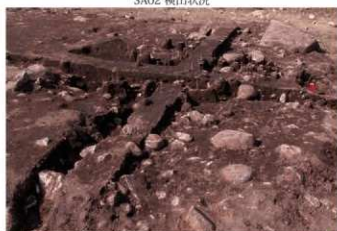
SA01



SA02 検出状況



SA02



SQ01



SK285 遺物出土状況



SK291



SK291 逆茂木痕跡



SK358



SK289 断面



SK314



SK423 遺物出土状況



SK191 遺物出土状況



SK191 ロクロガンナ出土状況 (断面)



SK191



SK205



SK361 鉄滓出土状況 (断面)



SFO1 断面



SFO3 炭出土状況



SX01 検出状況



SX05



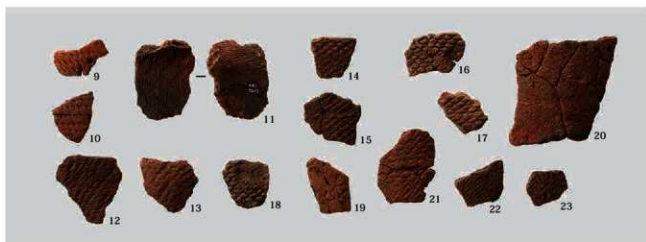
SX08 検出状況



SX08 断面



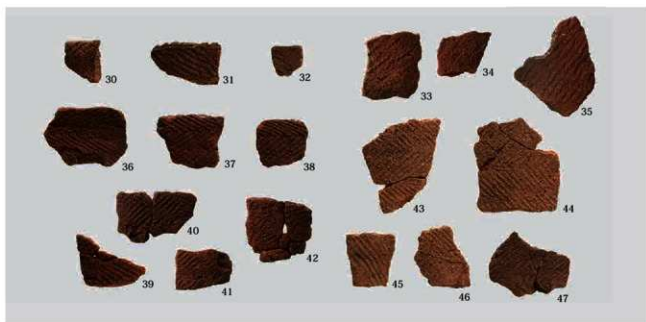
SK 出土土器 (S 与 1/3)



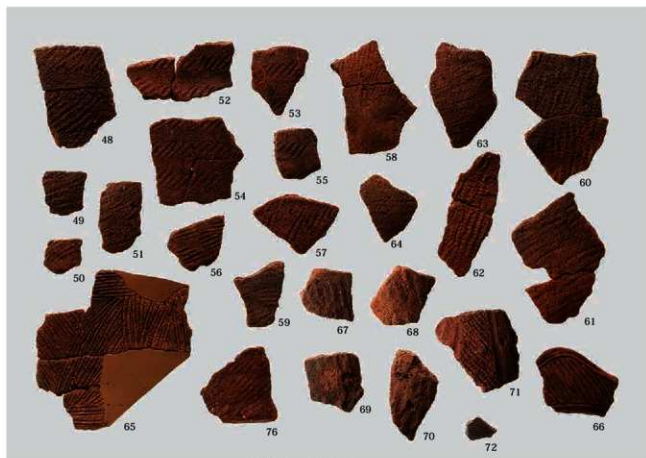
草創期～早期土器 (S 与 1/3)



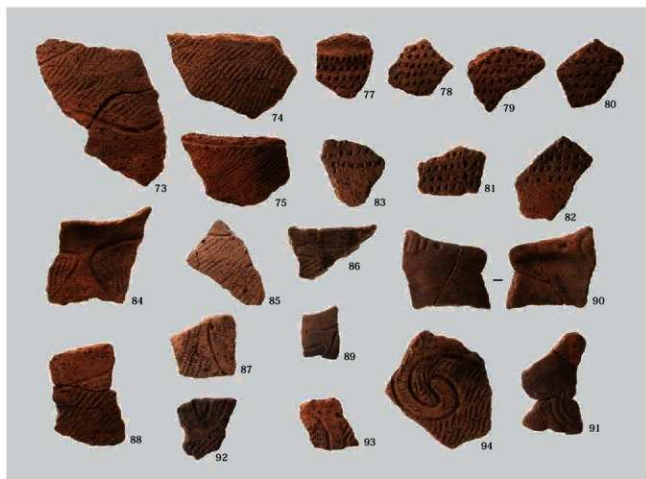
前期前半土器 (S 与 1/3)



前期後半土器 (S 与 1/3)

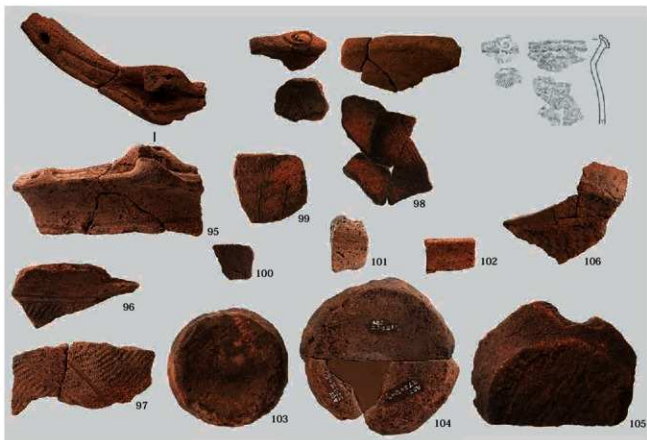


前期後半・中期土器 (S 与 1/3)



後期前半土器 (S 与 1/3)

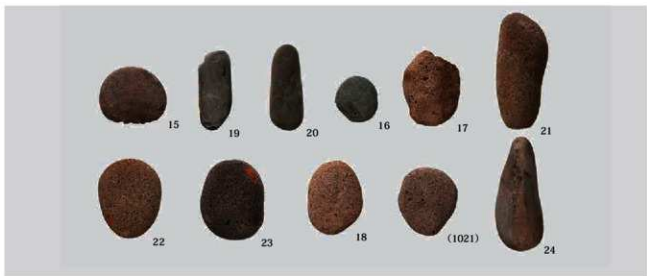




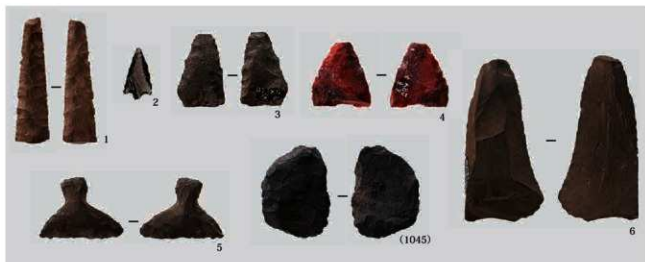
後期前半土器 (S 与 1/3)



縄文時代・弥生時代剥片石器集合



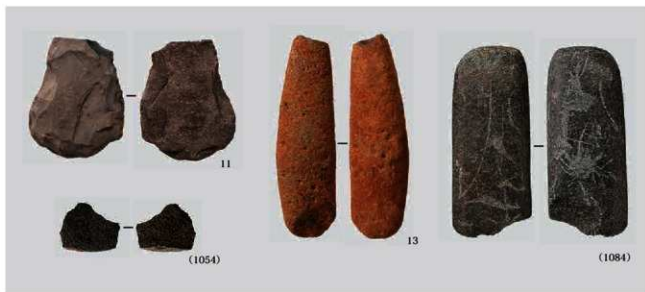
縄文時代・弥生時代礫石器（手持ち具）集合



有茎尖頭器、石鏃、石鏃未成品、石匙、剝片石器 (S 与 2/3)



石核 (S 与 1/2)



打製石斧、磨製石斧、大型蛤刃石斧 (S 与 1/3)



スリキリ具、刃器、礫器、凹石、敲石、磨石、特殊磨石 (S ㉮ 1/4)

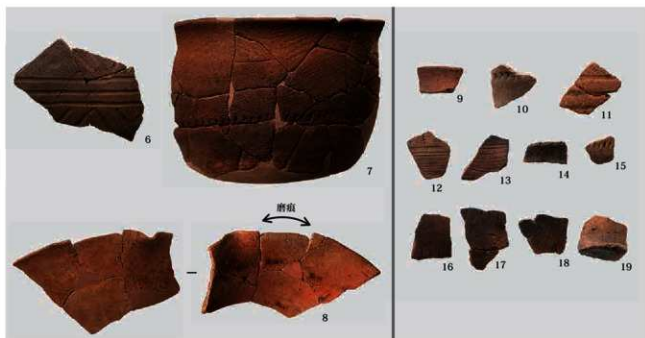


台石 (S ㉮ 1/6)

中野市試掘資料 (SB01 出土石器) (S ㉮ 2/3)



SB01 出上土器 (S 与 1/3)



SB02 出土土器 (S 与 1/4 · 1/3)



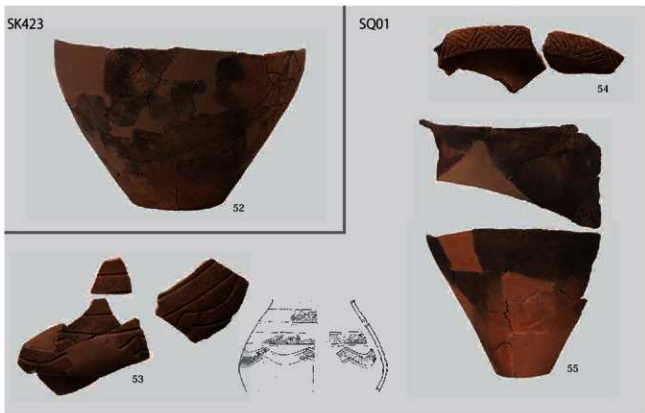
ST 出土土器 (S 与 1/3)



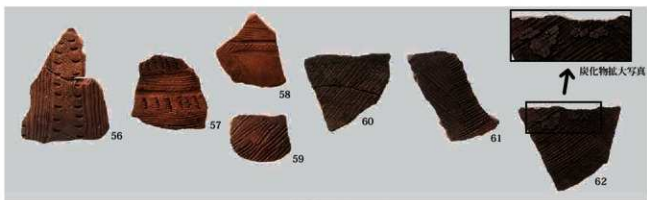
SD 出土土器 (S 与 1/3)



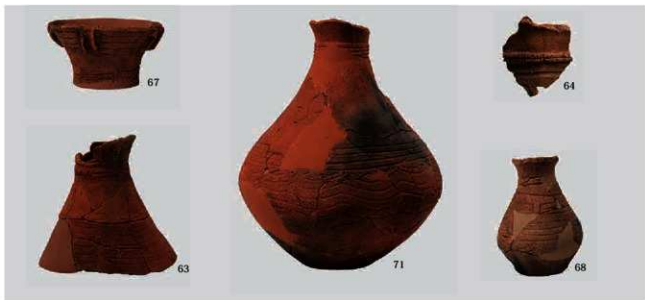
SK 出土土器 (S 与 1/3)



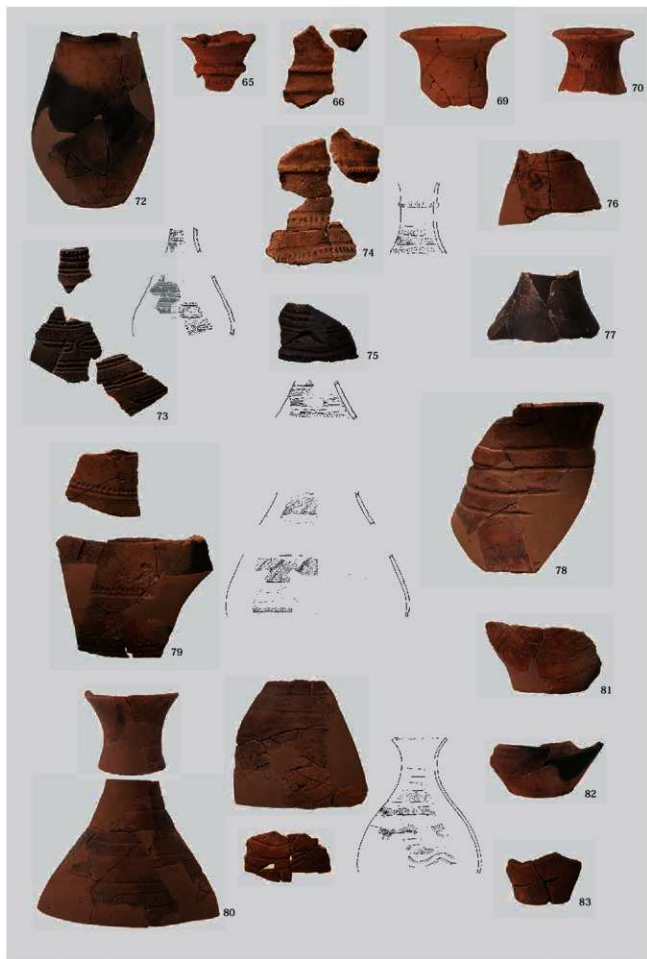
SK423、SQ01 出土土器 (S 与 1/4)



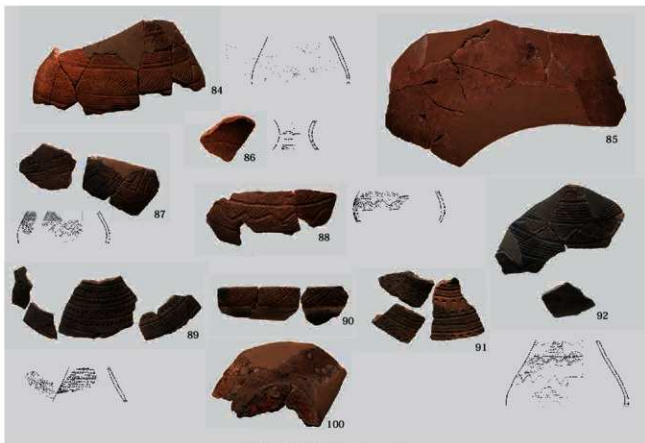
SQ01 出土土器 (S 与 1/3)



遺構外出土壺形土器 (S 与 1/4)



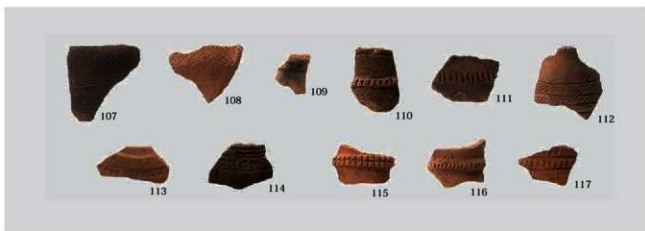
遺構外出土壺形土器 (S 与 1/4)



遺構外出土壺形土器 (S 与 1/4)



遺構外出土壺形土器 (S 与 1/3)



遺構外出土壺形土器 (S 与 1/3)

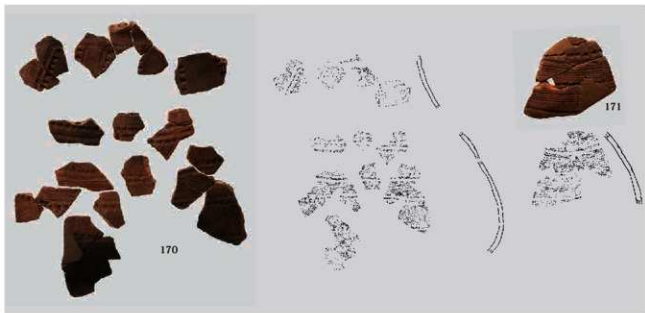


遺構外出土壺形土器 (S 1/3)

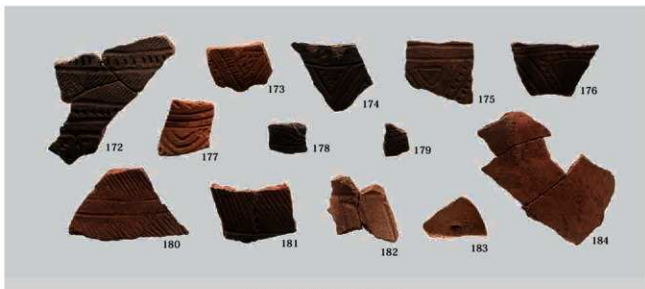


遺構外出土壺形土器 (S 1/3)

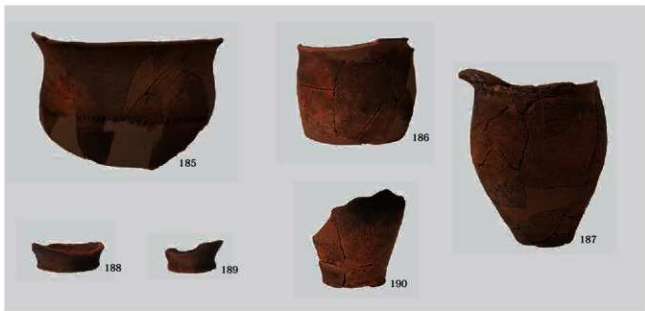




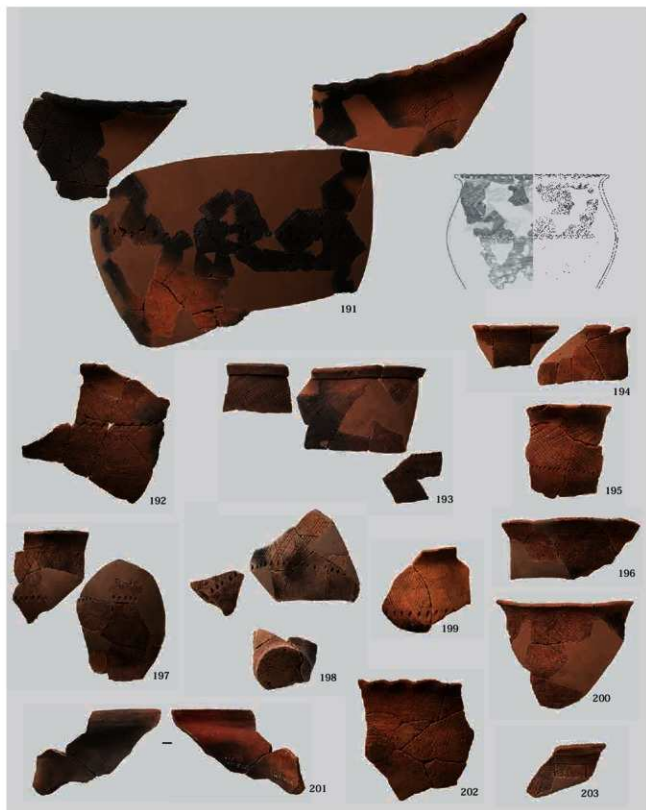
遺構外出土壺形土器 (S 与 1/4)



遺構外出土壺形土器 (S 与 1/3)



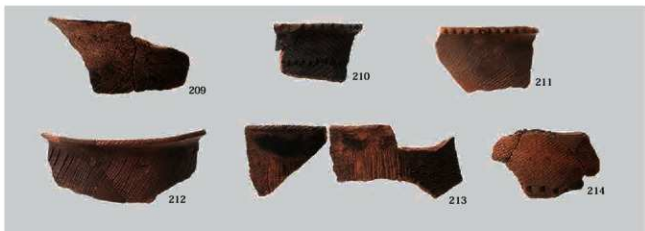
遺構外出土甕形土器 (S 与 1/4)



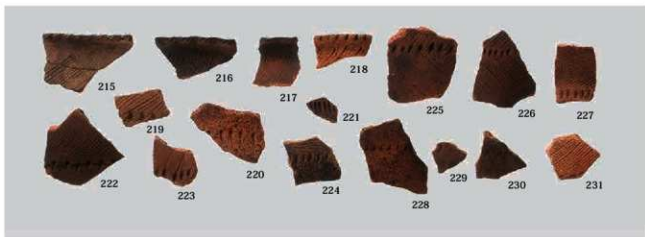
遺構外出土土器形土器 (S ≈ 1/4)



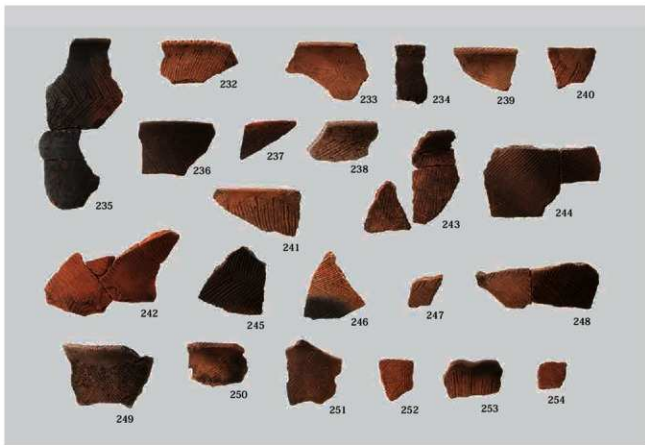
遺構外出土土器底部 (S ≈ 1/3)



遺構外出土甕形土器 (S 与 1/3)



遺構外出土甕形土器 (刻み文様) (S 与 1/3)



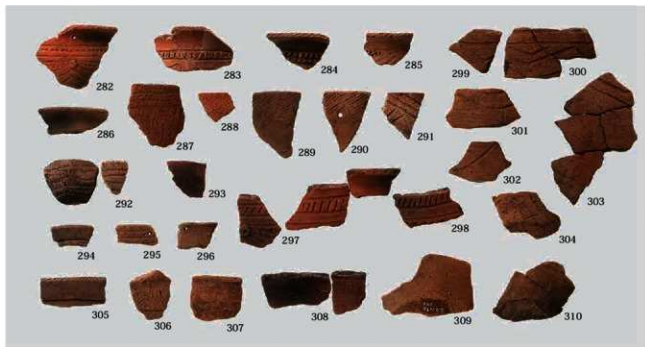
遺構外出土甕形土器 (S 与 1/3)



遺構外出土甕形土器 (S 与 1/3)



遺構外出土鉢形土器、蓋形土器、甕形土器 (S 与 1/4)



遺構外出土鉢形土器 (S 与 1/3)



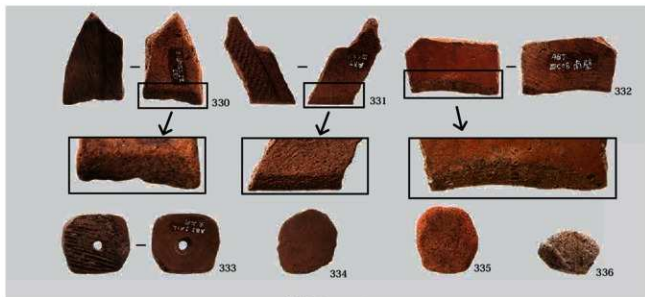
中野市試掘資料 (SB01 出土土器) (S ≈ 1/4)



中野市試掘資料 (SB01 出土土器) (S ≈ 1/3)



中野市試掘資料 (SB01 出土土製品) (S ≈ 1/2)



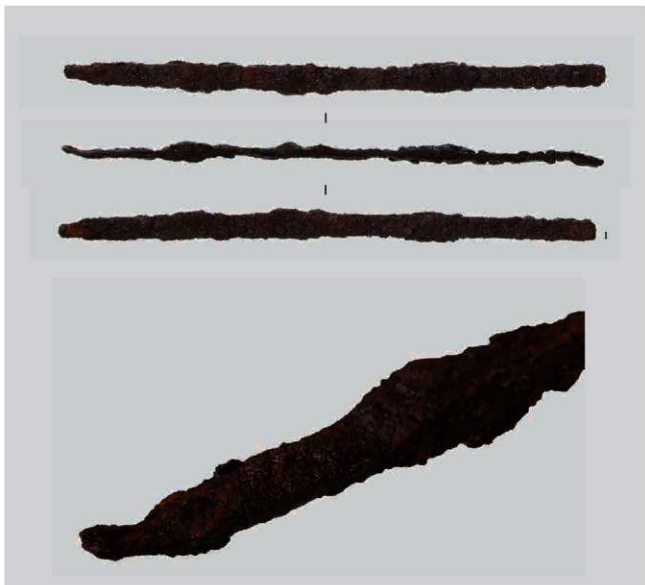
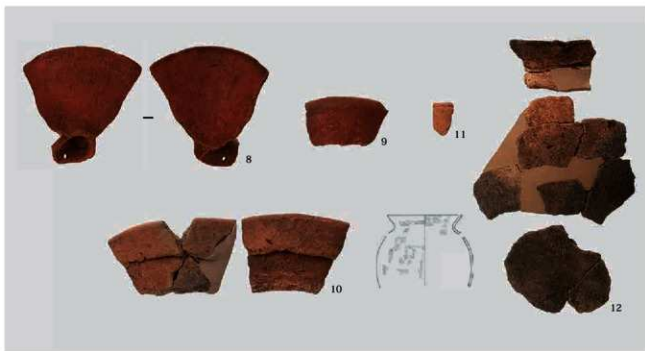
土製品 (S ㉮ 1/2)



管玉、ガラス小玉 (S ㉮ 1/1)

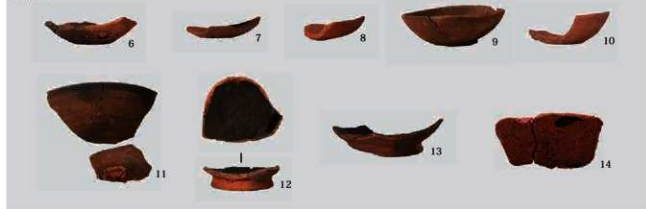


SK191 出土土器 (S ㉮ 1/4)

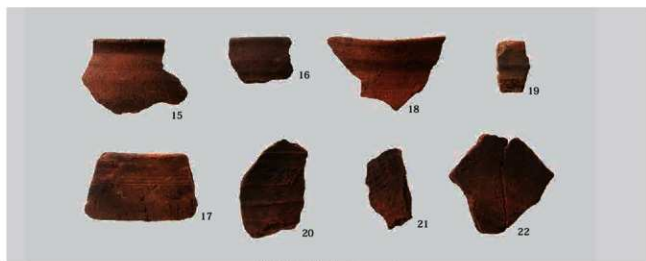
SK191 出土金属器（ロクロガンナ）（上：S $\approx$ 1/2、下：先端拡大）前期遺構外出土土器（S $\approx$ 1/3・1/4）



遺構外



SK・SF・遺構外出土土器 (S ㉮ 1/4、14のみ S ㉮ 1/1)



遺構外出土土器 (S ㉮ 1/3)



SK361 出土鉄滓 (S ㉮ 1/3)





調査範囲南側遠景（北東より）



調査範囲中央遠景（東より）



調査範囲北側遠景（南東より）



T1 西端、北壁断面（南西より）



T1 下部、北壁 7 断面



T2 下部、北壁 1 断面 畑地造成（近現代）の盛土状況



T2 下部、完掘状況（西より）



T3 全景（北より）



T5の掘削作業（西より）



T11 上部、北壁断面（南東より）



T11 下部、北壁断面（南西より）



T8 西側、北壁断面（南東より）



T8 東側、北壁断面（東より）



P4 北壁断面



T13 全景（南東より）



T14 下段東側、北壁断面



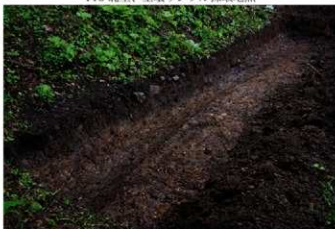
T15 北壁断面 (南西より)



T15 北壁、土壌サンプル採取地点



SD01 北壁断面



SD01 完掘 (南東より)



T17 断面全景 (北東より)



T19 全景 (南東より)



T18 南側、西壁断面 (南より)



T18 北側、西壁黒色粘土 (アップ) (北東より)



T18 北壁断面、科学分析土壌サンプル採取状況



SQ01 (H26年度)、土器出土状況 (南東より)



SQ01 (H27年度)、土器出土状況 (南より)



T21 北側、東壁断面



T21 北側、IV層群 木出土状況 (南より)



3区完掘状況 (南より)



SQ01b 土器出土状況 (南東より)



3区完掘状況 (北より)



## 報告書抄録

ふりがな	びわじまいせき へきだじょうせき ねごやいせき							
書名	琵琶島遺跡 壁田城跡 ねごや遺跡							
副書名	一般県道豊田中野線建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書 一中野市一							
シリーズ名	長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	112							
著作者名	黒岩 隆、町田勝則、鶴田典昭、小林伸子							
編集機関	(一財)長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター							
所在地	〒388-8007 長野県長野市葦ノ井布施高田963-4 TEL 026-293-5926 FAX 026-293-8157							
発行年月日	2016年3月18日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
びわじまいせき 琵琶島遺跡	長野県中野市 あまがきまつ 大字豊津	202118	210	36°46'51"	138°20'28"	2011.7.20～ 12.12 2012.4.9～ 10.31 2013.4.8～ 7.31	11,470㎡ (17,412㎡) * ( ) は 延べ面積	一般県道豊田中野線建設に伴う記録保存調査
へきだじょうせき 壁田城跡	長野県中野市 あまがきまつ 大字壁田	202118	161	36°46'51"	138°20'41"	2014.6.2～ 7.15	800㎡ (内容確認 トレンチ調査)	一般県道豊田中野線建設に伴う記録保存調査
いせき ねごや遺跡	長野県中野市 あまがきまつ 大字壁田	202118	162	36°46'51"	138°20'44"	2015.9.1～ 10.19	2,568㎡	一般県道豊田中野線建設に伴う記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
びわじまいせき 琵琶島遺跡	集落跡	縄文時代 弥生時代 古墳時代 平安時代	竪穴住居跡2軒、掘立柱建物跡25棟、周溝跡4基、溝跡1条、横溝跡2基、遺物集中1か所、土坑576基、焼土跡4基、不明遺構8基		縄文土器、弥生土器、土師器、土製品、石器、石製品、ガラス製品、鉄製品、鉄滓		弥生時代は中期後半栗林式期の集落。古墳時代中期の墓坑より長野県内初の「口クロガンナ」が出土。	
へきだじょうせき 壁田城跡	城跡	中世 近世	なし		なし		中世および近世山城に関わる遺構・遺物の検出なし。	
いせき ねごや遺跡	集落跡	平安時代	溝跡・自然流路7条、土坑2基、遺物集中1か所		縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器、内耳土器			
要約	<p>本書で報告した3遺跡は、千曲川を挟んで、琵琶島遺跡が左岸の奥手山丘陵の裾野に広がる河岸段丘上、壁田城跡が右岸の長丘陵上、ねごや遺跡がその長丘陵の東側山裾部～低地に立地する。</p> <p>琵琶島遺跡は、縄文時代草創期～後期前半、弥生時代中期後半、古墳時代前期～中期、平安時代の遺物が出土し、特に弥生時代中期後半は栗林1式土器のほぼ単純型式の遺跡となる。栗林式土器のなから、植物の花序を施した文様をもつ土器、再利用の磨痕をもつ土器片を抽出した。遺構では、竪穴住居跡2軒のほか、円形・馬蹄形の周溝跡3基を調査し、北陸地方との系譜を検討する1要素がくわえられた。</p> <p>壁田城跡は、トレンチ調査を行なったが、中世および近世の山城に関わる遺構・遺物は検出されなかった。中世山城の平地・段差と考えた平坦面は、近・現代(明治以降)に桑や果樹を栽培するために造成された畑地の平坦面であることが確認された。</p> <p>ねごや遺跡は、平安時代前半期の土器が遺物集中の形で出土した。同時期の土層のプラント・オパール分析の結果、水田の存在は確認できなかったが、今回の調査区外には、水田、集落が存在する可能性は残った。</p>							

平成 28 (2016) 年 3 月 18 日 発 行

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 112

**琵琶島遺跡 壁田城跡 ねごや遺跡**

一般県道豊田中野線建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書

— 中野市 —

発行者 長野県北信建設事務所  
(一財) 長野県文化振興事業団  
長野県埋蔵文化財センター  
〒 388-8007 長野県長野市篠ノ井布施高田 963-4  
Tel 026-293-5926 Fax 026-293-8157  
E-Mail info@naganomaibun.or.jp

印刷者 萬友印刷株式会社  
〒 381-0036 長野県長野市平林 1-34-43  
Tel 026-243-2351 Fax 026-251-0001